

『人工言語学・アルカ』

"Conlinguistics and levian t'arka"

seren arbazard
fiina ridia

目次

序文

序文……5

一章：人工言語の作り方

- 1:人工言語とは……9
- 2:言語の作り方……21
- 3:続・人工言語……39
- 4:人工言語 Q&A……51
- 5:回顧録……74
- 6:習作言語 serix……101

二章：人工言語学

- 1:人工言語学……134
- 2:人工言語のランドマーク……137
- 3:人工言語の術語……140
- 4:言語学的に矛盾しない人工言語の作り方……147
- 5:アルカの認知言語学的考察……161
- 6:人工言語史概説……195

三章：人工言語アルカ

- 1:概説Ⅰ……249
- 2:概説Ⅱ……276
- 3:概説Ⅲ……293
- 4:ねこにつき……310

四章：小説『夢織』

- 1:前書き……311
- 2:本文……312

参考文献・推薦図書

- 参考文献・推薦図書……374

序文

●構成

本書は人工言語学研究会(URL: <http://constructed-language.org/>)が掲載している記事を取りまとめたものである。人工言語学研究会とは人工言語を言語学の範疇として研究することを主旨とした非営利団体である。

本書の内容は大きく4章に分かれる。

1章では人工言語とは何かから説明しつつ、人工言語の作り方について解説する。

2章では言語学では一般に範疇として扱われない人工言語を言語学の範疇として研究することを目的とした人工言語学について概説する。

3章では、アプリアリ自然主義世界を持ったアプリアリ自然主義人工言語の中で世界一深く作り込まれた人工言語アルカについて概説する。

4章では人工言語アルカのみで書かれた初の出版物となる小説『夢織』(melidia)を掲載する。

2章の途中でアルカの知識が必要になる箇所があるため、先に3章を読むか読み飛ばすことをお勧めする。

なお、文体はHPに記載されたものをそのまま継承する。説明調の1章については「ですます調」を用い、それ以外では「だである調」を用いる。

行頭の全角スペースによるインデントの有無もHPの様式に準拠する。

●本書の特長

1:人工言語の作り方について解説された国内初の書籍である。

2:人工言語学という新しい言語学の分野を提唱するものである。

3:人工言語史についてまとめてあり、人工言語の歴史を通覧できる。

4:アプリオリ自然主義世界を持ったアプリオリ自然主義人工言語の中で世界一深く作り込まれた人工言語アルカについて解説してある。すなわち人工言語アルカは出版された書籍を持った人工言語である。

5:人工言語アルカのみを使って書かれた小説『夢織』を収録してある。すなわち人工言語アルカは自身の言語で出版された書籍を持った人工言語である。

●出版企図

本書の内容、とりわけ1,2章は2005年に新生人工言語論という名のもとにウェブ上に公開されたものを改訂したものである。

3章に関しては1991年から作りはじめられた言語を2005年にウェブ上で公開し、様々なHPを経て現在のHP(URL: <http://constructed-language.org/arka/>)に辿り着いたものであり、2011年に本書という形で初めて出版されたものである。

4章に関してはウェブ上で2007年に公開されたものを改訂したものである。

本書を出版した企図は「いっどこで誰が何と発言したか」の証明を行うことである。出版物は国立国会図書館に納本され、ISBNで管理される。奥付には出版した年も記される。

ウェブ上で情報を公開しているだけでは悪意ある人間が盗作をしなおかつ著作権を主張したときに対抗できない。こちら側は自分が著作権者であることを証明しなければならないが、仮にこちらが2005年からやっていると主張しても相手が2004年からやっていると嘯いて偽の証拠をでっち上げればそれまでだ——というのがこの国の著作権管理団体に直に問い合わせた際に得られた結論である。

この国では著作権は著作物を作ったと同時に発生するが、それが現実面守られるかまでは保証されないということである。その気になれば誰かが著作権者であると騙ることも可能であるというのが著作権管理団体の返答であった。またこれに対し国民の権利を守る気がないのかと尋ねたところ、そのような法律はないとの返答であった。

このなんともお粗末な法整備の中、確実に自分の著作権を主張するには出版という方法が最も有効であるという結論に達した。国立国会図書館に納本してISBNを取得すれば、ウェブ上の情報と異なり、国家が背景となって著作権が保護されるためである。

人工言語には公的な機関もなければ学会も存在しない。人工言語史を刻む機関というものがない。ウェブ上でいくら喚こうがアルカのように知名度を獲得しようが、ウェブ上の情報である限りその存在は軽い。読者の記憶には残るかもしれないが、歴史に名を刻むことはできない。

名を刻んでくれる機関がないのであれば、個々の作者が公的に発言をして自分の名を歴史に残すのみである。出版という行為を通じて「いつどこで誰が何と発言したか」という記録が公的に残り、それにより公的に歴史上に自分の功績が刻まれることになる。出版物が持つこの公的な性質は、出版業界が衰えていく中で出版物の最後の有力な力といえよう。

なお、ネットで無料で閲覧できる内容なので有料にする意味などないと考えたが、版元の意向でそれは不可能となった。実際筆者が無料にしたかろうが、出版業界の常識を考えると有料になるのはやむを得ない。それでも専門書にしてはかなり価格帯を下げてある。

●おわりに

筆者が人工言語アルカに携わってから今年でちょうど20年が経った。その節目として本書を出版することにした。

20年の間にアルカに関わった人物は大なり小なり合わせて優に3桁に及ぶ。こちらが把握していないインターネット上の読者を含めればどれだけの人数に上るのか分からない。

20年という長い期間の間、アルカには非常に苦しい思いをさせられてきた。まるで子供のように手にかかる言語であった。

それでもここまで捨てきれずに継続し、言語として一旦の完成を見ることができたのは、様々な協力者のおかげだと考えている。

アルカの制作に区切りがつくとともに、筆者はアルディアという小説の執筆に取りかかることとなった。これは人工世界カルディアにおける最後の20年間の歴史を、文字通り20年かけてリアルタイムに綴った物語である。

一見すると史記であるが、実際のところは筆者が恋人のために綴った恋の物語である。これを書くことが筆者にとってアルカに次ぐ人生の意味や意義であり、目標となっている。

ときに、アルカには大勢の人間が関与しているので、作られた理由やレーゾンデートルをひとつに絞ることはできない。ただアルカの主な制作者である筆者に限って言えば、恋人と自分を繋ぐための特別なものという存在意義があった。

「最初は共通の言語がなかった」「遠距離である」「様々な言語に触れた」という思春期時代を通して、筆者とその恋人は自然言語を用いて愛情を伝えることに違和感を感じた。既製品の言語で気持ちを伝えたところでそれが本当に自分の気持ちを伝えたことになるのだろうかと考えた。

単に日本人同士の日本語での恋愛だったら、このような発想には至らなかっただろう。また、筆者が純粋な日本人だったら、このような疑問を抱かなかつたかもしれない。

ともあれ筆者らは、自分たちで創り上げた言語で気持ちを伝えることが真の意味で自分たちの気持ちを伝え合うことになると考え、そこにアルカの実在意義を見出した。筆者及び恋人に限れば、アルカのレーゾンデートルはそこにある。

さて、言語の創造とはすなわち世界の切り分けである。アルカを作る際に兄と弟を細分化するか、稲と米は細分化するかなどといった世界の切り分けをしなければならなかった。この際に必要となったのが言語の背景となる文化と風土、すなわち世界である。そこで恋人が主にこの人工世界の創造を担当した。

つまり、自分たちの真の気持ちを伝え合うことというのが最大目標であり、そのためには言語が必要なので言語を筆者が担当し、言語を作るのに背景となる世界が必要なので世界を恋人が担当したというわけである。

遠距離で会うことが困難だったからこそ、精神的な絆で深く繋がることに関係の維持に絶対必要であった。このようにして生まれた強い絆のもとで、アルカという言語は長きに渡って、ほかの言語制作者なら行えないほどの作り込みを持った言語として成長してきた。

結局、筆者の視点では、アルカのレーゾンデートルは突き詰めれば、彼女との関係性である。何をにおいても彼女との繋がりが自分の中で最高の価値観であり、ここまで作業を続けることができた。

失ったものは大きかったが、有意義で意味のある人生だった。

20年目の夏、我が最愛の恋人リディアに捧ぐ

一章：人工言語の作り方

1:人工言語とは

1-1:人工言語とは？

●人工言語とは

英語や日本語など、自然とできた言葉のことを、自然言語といいます。

逆に、誰かが意図的に作った言語を人工言語といいます。

「日本語だって日本人が作った言語だから人工言語じゃないの？」という疑問がよくあります。

民族単位で作った言語は通常人工言語にカウントされません。

「水という単語は『ミズ』と読むようにしよう」というような打ち合わせを、日本人はやったわけではありませんよね。

自然と民族が作っていったものは、除外されます。

●どんなものがあるの？

一番有名なのはポーランドの眼科医ザメンホフが作ったエスペラントです。

人工言語は意外と多く存在します。前世紀で既に 1000 以上の人工言語がありました。

筆者が作っている人工言語アルカもその 1 つです。

●人工言語を意味する類義語

人工言語、架空言語、創作言語、計画言語、人工語。これらは少しずつ意味の異なる術語ですが、いずれも人工言語の類義語です。

人工言語は英語では一般的に conlang といいいます。constructed language の略です。類義語が多いのは英語圏も同様で、artificial language, planned language といった呼び方があります。

一方、自然言語のことは natural language を縮めて natlang といいいます。

●人工言語にはどんな種類があるの？

例えば民族間の言語の壁を無くすことを目的とした言語や、小説の世界観をリアルにすることを目的とした言語などがあります。

目的は様々ですが、いくつかに分類できます。以下に代表的なものを挙げます。

1:auxlang (国際補助語) : 共通の母語を持たない人々の間で言語の壁を壊すために作られた言語。エスペラントなど。ただし現実には国際補助語はフランス語や英語や中国語など、時代ごとに有力な国家の言語が担っている

2:artlang (芸術言語) : 小説などで用いられ、異世界や異星人の言葉として作られる言語。トールキンの『指輪物語』などに登場する

3:englang (工学言語) : 言語が機能するかどうかを試すために実験的に作られる言語。哲学的言語(philosophical language)や論理的言語(logical language)といった内訳がある

その他にも秘密の暗号として作られた言語や、C 言語のようなプログラム言語も、人工言語に含まれます。

人工言語の中で数が一番多いのは国際補助語で、一番有名なのも国際補助語です。

ただし現在最も数が増えているのは芸術言語です。ゲームや小説などの雰囲気を出すために作られる頻度が前世紀に比べて増えているためです。

●かつて人工言語ブームがあった！？

あったんです。17 世紀ごろに人工言語のブームがあり、たくさんの人工言語が作られました。

なんとデカルトやライブニッツといった有名な学者たちも人工言語に携わっていたのです。

ちなみに、その頃作られた言語の多くは国際補助語に分類されるものです。当時ヨーロッパでは共通語が求められていたのです。

ところがヨーロッパでフランスが強くなるとフランス語が事実上の国際補助語になったため、人工言語のブームは終わりました。

国際補助語は特定の国家が強い時代には減り、そうでない時代には増える傾向があるということですね。

今は英語の時代ですが、今後英語が徐々に弱くなり代わりに中国語が台頭したとしても、すぐに中国語が国際補助語になるわけではないため、世界の片隅で小さな国際補助語ブームが起こるかもしれません。

●プログラム言語も人工言語？

はい。C言語も BASIC も人工言語の一種です。

人工言語学では人工言語の歴史について説明していますが、ここを読むと実はプログラム言語は人工言語史から生まれたものだと分かります。

人間用も機械用も、元は同じだったんです。

現在、人間用の人工言語とプログラム言語は、だいぶ内容や体裁に差が開いてきました。なお、このサイトでは主に人間用の人工言語について説明しています。

●身の回りの人工言語

このサイトに来ている皆さんは、エスペラントは確実に聞いたことがあると思います。

では、ほかに人工言語はどのようなものがあるのでしょうか。実は意外とゲームなどで使われています。

ただし、あくまでゲームのスパイスなので、作り込みは深くないというのが共通の特徴です。

言うなれば、レトルト人工言語です。

1-2:レトルト人工言語

「小説やゲームやマンガに臨場感を与えるために人工言語や架空言語を作りたい。でも、言語学や語学の知識がないと作れないの？」

——そんなことはありません！専門知識がなくても言語を作ることはできます。ここではその実例を紹介します。

●『Final Fantasy X』アルベト語

これは日本語を改造したものです。「オヤジ」は「トタギ」といいます。ア行→タ行、ヤ行→タ行、ザ行→ガ行にしているだけです。

仮名を規則的に入れ替えているだけで、最も簡単な部類の人工言語です。

単語も文法も文字も音も全部日本語ですから短い時間で作れます。

発音も完全に日本語ですし、労力は最小限で済みます。

●『Tales of Etemia』メルニクス語

メルニクス語はメルディというキャラクターの言葉で、英語を改造したものです。

アルファベットのAからZまでの26文字に、それぞれ仮名1文字を当てています。

たとえばAは「エ」、Bは「ブ」、Yは「ヤ」、Eは「ン」、Sは「ス」。

したがって、Yes（はい）と言うときはヤンスと言います。

単語は全部英語なので、26文字の仮名対応表があれば何でも表現できます。

メルニクス語は独自の文字を持つので、アルベト語より人工言語としては精巧です。

なお、メルニクス語は英語を基にしていますが、アルファベットを仮名に変換しているため、発音は日本語です。

●『ICO』ヨルダ語

ヨルダ語という名称はゲーム中に出てきませんが、他に呼び方が悪いつきませんでした。ゲームではヨルダとクイーンの2人しか使いません。ヨルダ語も日本語が基になっています。

基本的に逆さ読みです。まず、「さよなら」をローマ字に変えて"sayonara"にします。それを逆さ読みにして"aranoyas"とします。

ただ、これで終わらないのがミソです。実際のヨルダ語は逆さにした言葉を更に短くしています。

"aranoyas"の間を削って"am oys"と言っているようです。

どのように間を削るのかが不明である点と、そもそもヨルダ語の出番が非常に少ないため、ヨルダ語は謎が多いです。

このように、日本語や英語などの慣れた言語を使って、簡単にレトルト人工言語を作れます。

ヨルダ語と似てますが、日本語の仮名を逆さ読みにするだけで人工言語を作ることもできます。

たとえば「君」は「ミキ」といった風に。「来い」は「イコ」になり、何となくヨルダ語を彷彿させます。

「デーモン」は「ンモーデ」。ンで始まる単語ができるので、ちょっとエキゾチックな感じが出せます。

●『フォーチュンクエスト』の呪文

主人公の一人に魔法使いの少女ルーミーがいます。彼女が唱える呪文のいくつかは日本語の逆さ読みです。

「ヨメダヤチイゴウモテシタイタイデンロコガンサマルーダ」は敵を止めるストップの呪文です。

逆さ読みをすると意味を持った日本語になります。筆者は中1のとき、暗記しました(笑)

ところで、ネタ元が日本語だとすぐにバレて面白くないというのであれば、ちょっとスパイスを効かせましょう。

メルニクス語と同じやり方でドイツ語のアルファベットに仮名を当てはめれば、ドイツ語を基にした人工言語が作れます。

辞書で単語や例文を引いてアルファベットに仮名を当てはめればいいので、ネタ元はフィンランド語でもノルウェー語でもOKです。

これらの言葉を知っている人はとても少ないので、すぐにネタ元が割れないという長所があります。

さあどうでしょう。言語学を知らなくても人工言語は手軽に作ることができます。要はアイデア次第です。

しかし、ここでこんな批判が聞こえてきそうです。

「結局はどこかの言葉を使って暗号を作っているだけじゃないか。私の小説は異世界ファンタジーなんだ。

日本語が存在しない世界なのに日本語を元にした言語があるのはご都合主義で、それは世界観が台無しだ」

なるほど、一理ありますね。いま紹介したレトルト人工言語は 単語・音・文法・文字、これら全てが借り物です。

これではオリジナリティに欠けるというのは否めません。ではこの中で借り物を止めるとしたらどれでしょう。

一番簡単なのは文字です。メルニクス語がそうですが、独自の文字を作りましょう。

それだけで雰囲気はかなり出ます。この時点で人に見られても判読されなくなりますから、いかにも異世界の言葉です。

文字だけでは不十分ですか？そうしたら単語を適当にでっちあげてみましょう。

「ありがとう」とか「さよなら」とか、そういったよく使う言葉だけオリジナルで作ってしまうのです。

ヨルダ語も「ありがとう」はどうにも逆さ読みができず、「ノノモリ」と聞こえます。これはもしかしたらオリジナルの単語かもしれません。

よく使う単語は小説内で何度も出てきます。しかもそれが独自の文字で書かれたら、それだけで結構雰囲気が出るものです。

一方、音と文法は言語学の知識がないと作るのが難しいです。

特に音に関しては知識だけでなく発音の訓練も必要になってきます。

音も文法もオリジナルにしたいというのであれば、流石に言語学の知識が必要になってきます。

でも、はじめはそこまでしなくても良いじゃないですか。言語を創るのは想像以上に難しい作業です。幅広い知識も必要になります。

まずはいくつかレトルト言語を作ってみましょう。

それで不満足を抱くようであれば、人工言語の更なる深遠を覗いてみればいいのです。

そのときは言語学や語学の知識も多少必要になってくるでしょう。また、エスペラントという伝統的な人工言語にも出会うでしょう。

オリジナリティを求め続けると、どこまで行くのでしょうか。

まず、単語・音・文法・文字のすべてがオリジナルというところに行き着きます。

そして最終的にはその世界の風土や文化までオリジナルで作ることになります。

ただ、それはすぐにできるものではないので、まずはレトルト人工言語を作ってみましょう。

そこで何か物足りないと思えば徐々にステップアップしていけばいいのです。

自分の創りあげる世界にどの程度のオリジナリティを持たせるかは、作者である貴方次第です。

レトルトではダメとか、そういうことはありません。作者がどのレベルで納得できるかです。

1-3:言語と文化

言語は文化や風土から影響を受けます。

例えば、日本語は日本の文化や風土から影響を受けています。

日本人は米を主食にするので、「稲」と「米」という単語を区別します。

また、年功序列の厳しい社会なので、年齢によって兄と弟を区別します。

文化や風土はこのように言語に影響を与えます。

「狼」と"wolf"は生物学的には同じものを指しますが、「狼」は一匹狼のイメージから「孤高」な印象があります。

対して、西洋ではたいていwolfは残酷な動物という印象があり、童話などでは悪者として登場します。

こういう違いも人々の価値観や物の見方が言語に反映された結果です。

人工言語も言語ですから、文化と風土から影響を受けます。

たいていは作った人の文化を継承します。

小説を書いている方で異世界の言葉を作りたい場合は、文化と風土も作っておくと、より異世界の言語らしくなります。

「文法や単語は異世界のものだけど、ところどころ日本の文化や風土を用いている」という違和感を回避することができます。

14:言語の普及

人工言語を作ったら、ぜひともそれを皆に使ってほしいものです。

人工言語の中にはエスペラントのように国際補助語になることを目指したものもあります。

確かに地球上のどこでも同じ言葉が通じればとても便利ですね。

ぜひそうなってほしいものですが、実際に世の中で使用者が多いのは英語と中国語です。

どうしてでしょう？英語や中国語は何か言語的に優れているのでしょうか。そうではありません。

英語が広まったのはかつて大英帝国が強かったこと、20世紀にアメリカが大国だったことによります。

要するに、喧嘩が強くてお金持ちな国の言葉が広まったということです。

人類共通の言葉と聞くと平和をイメージしますが、むしろ力が言語の統一を作っているとは皮肉なものです。

なお、中国語が広まったのは経済力というよりは人海戦術です。

このように、言語の普及は経済力・武力・人口によって決まります。

人工言語はこのどれにも該当しないため、英語のような地位を獲得するのは事実上不可能です。

(それでもエスペラントは万単位の人に広まっているので凄いと思います)

人間はものぐさなので、できれば外国語の勉強などしたくないし、母語だけで暮らしたいのです。

こんなサイトを読んでいる貴方は既に少し人と違う感性を持っているということです。

普通の人は就職や進学や商売といったのつぎにならない事情があって、嫌々お金になる言語をやります。

その結果、英語が広まったわけです。

確かに人工言語を普及させるのは難しいですが、同じ趣味の人たちに広めたり、好奇心の強い人たちに知ってもらうことは可能です。

それは共通語とは到底呼べない規模かもしれませんが、同じ趣味を持つ人と言語を共有できれば十分幸せではないでしょうか。

1-5:人工言語のあゆみ

中世ヨーロッパではラテン語が共通語になっていました。

しかし徐々に各国の国語が強くなってきたため、ラテン語は共通語でなくなっていきました。

共通語がないと困るので、西洋人は共通語を開発することにしました。

しかしどれも鳴かず飛ばずで、流行りませんでした。

そうこうしているうちにフランスが力を付け、フランス語が共通語になりました。こうなったらもう人工言語は要りません。

1866年に、当時の権威だったパリ言語学会は、人工言語に関する論文を受け取らないことを決めました。これにより、人工言語ブームは終了しました。

人工言語のブームはエスペラントができる前だったというのは驚きの事実です。

それでも共通語があれば人々は分かり合えるようになるだろうという夢は消えませんでした。

その結果、エスペラントという国際補助語が作られました。最初の出版は1887年です。

20世紀になると航空技術と通信技術が発達し、世界は狭くなります。

また、アメリカが一番の大国になり、歴史の中心がヨーロッパでなくなります。

20世紀後半では日本を筆頭に、アジア各国が力を付けてきました。

これにより、世界の中心は「アメリカ+ヨーロッパ+アジア」になりました。

エスペラントはヨーロッパ語を元に作られているため、アジアが力を付けるにつれ、人類にとって平等な言語ではないと批判されるようになりました。

ヨーロッパが権威を失い、英語が共通語になったため、エスペラントの人気は陰りました。

フランス語が共通語になったときもそうでしたが、自然言語から共通語が出ると、とたんに人工言語熱は冷める傾向にあります。

21世紀はパソコンとインターネットの普及により、個人が簡単に自作の言語を作って発表することができるようになりました。

英語や中国語という大言語が背景にあること、先進国の多くが戦争状態にないことなどが原因となり、芸術言語が多く作られるようになりました。今は芸術言語の時代といえるでしょう。

むしろ例外もありますが、一般に平和な時代ほど芸術言語が増える傾向にあります。というのも、芸術言語は小説やゲームなどといった娯楽の中で使われることが多いからです。

1-6:人工言語のこれから

20世紀は英語の時代でしたが、それも永遠に続くわけではありません。

では英語に代わって中国語が共通語になるでしょうか？少なくともしばらくはなりません。中国はかつての植民地時代に多くの植民地を作らなかったので、英語やフランス語ほど世界に広まっていなかったためです。

従って英語が陰った場合、しばらく共通語のない時代に戻ると思われます。

そうなれば人工言語の世界にミニブームが起こります。常に栄枯盛衰の繰り返しです。

今度は「ヨーロッパ+アジア」すなわち「ユーラシア」の共通語が求められるでしょう。

(アメリカ人はもともとヨーロッパ人ですから、ヨーロッパに含めています)

しかしユーラシアの共通語というのは前途多難です。アジアとヨーロッパは文化があまりにも異なるからです。

カトリックとプロテスタントから共通の宗教を作るのがエスペラントだとしたら、ユーラシアの共通語を作るのはキリスト教と仏教とイスラム教から共通の宗教を作るようなものです。

エスペラント以上に話がまとまらなさそうなのは明らかですよね。

ユーラシアの共通語を作る場合、アジアとヨーロッパの特徴をそれぞれ採っていくという方法が考えられます。

実際そういう言語は既にあるのですが、色んな言語の特徴を採りすぎたせいで逆に「誰にとっても分かりづらい」という結果になってしまいました。例えば――

「え、亀は日本語から来ていて kame、水は中国語から来ていて shui、火は英語から来ていて fire なのか……。で、娘は fille、世界は Welt、おはようはアツサラーム……って、そんなの覚えられるか！」

――という感じです。語学オタクにとっては面白い言語ですが、ふつうの人の感性では理解しがたいと思います。

かといって、ある地域ばかり集中して選んでしまうと、それはそれで不平等になってしまいます。

例えば筆者の好みで選んでいったらフランス語と日本語をメインにすると思いますが、そうしたら当然ドイツ人やタイ人には面白くないですよ。

やはりこの手の言語は難しく、話がなかなかまとまらないようです。

それを踏まえると、恐らくユーラシアではなく手始めにアジアの共通語を作るほうが現実的でしょう。

漢字をベースに使いやすいように変えていった人工言語を作るという方法が現実的かもしれません。

ただ、日本などは対応できるとして、中東は厳しいでしょうね。漢字圏ではありませんから。従って、アジア東部で括るのが現実的かもしれません。

2:言語の作り方

人工言語の作り方がわかるコーナーです。

2-1:はじめに

ここではレトルト人工言語より詳しく、言語を作る方法を紹介しています。

レトルトに比べて人工言語らしさもアップしています。

ただし、本格的に言語を作るなら、もっと深く広い考察が必要です。

まずは簡単な人工言語の作り方について見ていきましょう。

簡単といっても、ここで挙げる手法は今後の人工言語作りに関与することなので重要です。

一番はじめに、どのような言語を作るのかという目的を定めましょう。

言語は実用するためのものと、研究や遊戯として作るものがあります。

後者の場合はどのようなシステムにしても良いので、作り方の説明は要りません。

好きな文法を当てはめ、現実にはない文法を作り、複雑怪奇な文字を作り、人間がまず使用しないような音素を選んで言語を作る。

それもまた一興でしょう。作り方は自由で良いと思います。

実用を考えない研究用言語の作成は選択肢が多すぎてとりとめがありません。

一方、小説にせよ世界語にせよ、実用するならば以下の作り方が参考になると思います。

そこでここでは実用を前提とした言語の作り方を見ていきます。

●過論理と過合理

実用的な言語を作る場合、過論理（過剰に論理的）と過合理（過剰に合理的）に気を付けてください。

言語作成ははじめは机上の空論です。それゆえ言語のシステムばかりに固執してしまします。

その結果、過剰に論理的だったり合理的だったりするものが生まれてしまいがちです。

たとえばエスペラントでは英語の is に当たる語を *estas* といいます。

これは体系的で論理的ですが、実用的ではありません。頻度のわりに語形が長すぎるからです。

これは論理的すぎて使いづらいというケースです。

また、合理的すぎるのも考えものです。例えばできるだけ少ない文字数で単語を表そうという言語は確かに合理的ですが、一音でも聞き漏らしたら途端に意味が通じなくなる危険性があります。

同様に、できるだけ使う音素を少なくしようという言語もあります。

ニューギニアのロトカス語は母音が5つで子音が6つしかないので、一見覚えやすく合理的に見えます。

ところが音素数が少ないのでひとつひとつの単語がどうしても長くなり、書くのも喋るのも面倒です。

ロトカス語はまだ自然言語として成立しているからいいものの、母音3つの子音3つなどといった過合理は避けたほうが無難です。

このように、過論理や過合理には注意しましょう。

いざ実用する際に色々と不具合が起る可能性があります。

●辞書の引きやすい言語にしよう

次の注意点は辞書です。予め、辞書を引きやすい言語というのを目指しましょう。

言語の最大のツールは辞書ですが、世の中の言語には辞書が引きにくいものとそうでないものがあります。

字が読めないと引けない日本語や中国語。音が分かってもスペルと一致しない英語。どちらも厳しいです。

音を聞いてすぐ引ける辞書。これが簡単です。なので、そういう言語を作りましょう。これだけで作業効率が劇的に変化します。

2-2:音について

●音素

さて、ではこれから言語を作っていきます。

まずは音素を選びましょう。p とか t とか a とか、自分の言語にどんな音を使うのかを選ぶのです。

文字や文法から作る人もいますが、音から作るとやりやすいです。

表音文字（アルファベットなど）を使う場合、音が決まらないと単語が作れません。

表意文字（漢字など）の場合、音が決まらないと文字に名前を付けられず、文字リストの管理が難しくなります。

どの文字を使うにせよ音が必要になります。従ってまずは音素から選びましょう。

音素の選択ですが、まず子音と母音に分けるべきでしょう。

一般的に、子音のほうが母音より多いです。また、音素数は20前後が一般的です。

ロトカス語のように音素が非常に少ない言語は一見学習しやすそうなイメージがありますが、こういう言語は単語が長くになりがちで、実用には不向きです。

なお、中国語のような声調言語の場合、音素数は一般に少なくなります。

ではどの音素を選ぶかですが、人間がよく使う音素を選ぶといいでしょう。

例えば p, t, k という音はよく使われる音です。逆に日本語のラ行とか、入破音といわれる音は頻度が少ないです。

入破音が存在するのに p, t, k がない言語はありません。

実用的な言語を目指すなら、あえて入破音を取って p を捨てるような行為は避けるべきです。

母音は5つが一番多いパターンですから、5が無難でしょう。アイウエオでOKです。細かいことをいうと、同じ「ア」でもアメリカ人の発音する「ア」は日本人と違っています。

なので、最終的にはきちんと自言語の音声学を作って、音声の定義をする必要があります。

●アクセント

アクセントには自由と拘束の2種類があります。

常に最初の音節にアクセントが来るフィンランド語は拘束アクセントです。一方、「箸」と「橋」の違いがある日本語は自由アクセントに分類されます。

拘束と自由のどちらにも利点があります。拘束は覚えやすい——というか覚える必要がない。その反面、同音異義語に弱いです。

自由はその逆です。日本語は橋と箸をアクセントで区別できます。拘束アクセントのフィンランド語にはできない芸当です。

したがって、アクセントはどちらを選んでも良いでしょう。

なお自由アクセントの場合、アクセントを表記することができます。

アクセントを表記すれば読むときは楽で同音異義語も区別できますが、書くときは面倒です。

ちなみにアクセントを文字の上に付ける場合、フランス語の *déjà-vu* (既視感) のように字上符付きのフォントを作らなくてはならず、入力も厄介になります。

●イントネーション

イントネーションについては文中・文末などによっても異なりますが、初期の段階ではあまり細かく決めないでいいです。

アクセントや声調と違い、イントネーションは言語そのもののシステムではなく、言語の運用時に関することが多いためです。

●声調

声調はあってもなくてもいいです。声調の長所は少ない音節数を最大限活かせることです。声調があると少ない音素数で済むため、よく使われる音だけを使えばよくなります。その結果、音素の聞き取りが楽になります。

短所は、音節数が少なくなりがちで外来語の音訳時に苦勞することです。試しに中国語で「コカコーラ」を何とか調べてみてください。

また、声調は音の高低が重要になるので、高低をはっきり付けるために省エネ発話を断念させられます。これも短所の一つです。

●音節構造

音節構造はCV(C=子音、V=母音)だと単純なのですが、音節数が少なくなってしまう。日本語がそうですね。

CV しか音節がないと同音異義語が増えたり語形が長くなったりします。

ただし声調言語の場合、声調を使って同音異義語を区別できるので、音節構造が単純でも構いません。

C が 20 種で V が 5 種だとすると、CV の音節数は単純計算で 100 しかありません。

しかし声調が 4 種あればこれだけでも 400 の音節数を獲得できます。

一方、CVC だと同条件下で $20 \times 5 \times 20$ とすると、計 2000 の音節数を獲得できます。

2000 の音節数が獲得できれば 2000 語を CVC だけで弁別できます。

2000 語あれば基本語としては十分ですので、CVC という音節構造は効率的といえるでしょう。

よって、音節構造は CV だけでなく、CVC くらいは認めておいたほうが無難でしょう。

もちろん CVCV のように CV の繰り返しでも構いません。

2-3:文字

文字には漢字のような表意文字と、アルファベットのような表音文字があります。表音文字と表意文字のどちらも長短があります。

表音文字のほうが言うまでもなく学習が容易です。

また、PCを使った入力も楽です。表意文字だとキーボードのキーが足りないので、どうしても入力ソフトを作るか使うはめになります。日本語でもIMEなどを使いますよね。

表音文字の場合、26字以内なら普通のキーボードで事足ります。

表音文字は辞書を作成する際にも楽ですし、使う際も楽です。

表意文字だと部首や画数など、字の性質ごとに分類しなければならないし、辞書を引くときもその分類に沿って引かなければなりません。

漢和辞典はまず部首索引などを見なければなりません。表音文字の場合、読みさえ知っていればすぐに目的のページへ指を進められます。

ただ、表意文字は覚えてしまえば速読がしやすく、一文字当たりの情報量が多いため、単語が異様な長さになりません。異様な文字密度にはなりません。

また、表意文字は読み手に概念を想起させる力があります。象形文字が好例でしょう。

同時に、表意文字は文字そのものに神秘的な魅力もあります。

文字は表音文字も表意文字も長短を持つので、どちらを採用しても構いません。

ですが、筆者としては表音文字のほうが長所が多いと思います。

決定的な理由は「喋り」です。言語は読むだけではなく、喋るものだからです。

書くときは表意文字の利点が活かされますが、喋る場合は利点が活かされません。

漫画のように言葉に文字が付くわけではありませんからね。

2-4:文法

文法は言語のシステムの中で最も組み立て感が得られるためか、人気のある分野です。

言語制作者の多くは文法システムを作るのが好きなようで、未完成の言語でも文法はそれなりにできていたりします。

●語順

まずはじめに決めるのは語順だと思います。語順はメジャーなものを選んでおけば無難でしょう。

最もメジャーな語順はSOVで、次に多いのはSVOです。このどちらかを選んでおけば問題ありません。

もちろん、VSOだから悪いということではありません。

●類型

文法に関しては皆さん腕をふるいたいところでしょうからあまりうるさいことは言いませんが、いくつか注意点はあります。

まず、類型論的に見て、屈折語や抱合語は避けたほうがいいでしょう。

文中の単語が辞書形でないことが多く、活用形が一々辞書に収録されないからです。

活用形は厄介な問題です。例えばフランス語のJe t'aimeではaimerを引かねばなりません。

これは英語でも同様です。ただし学習者用の辞典には基本語の活用形を載せているものもあります。

また、動詞の活用と名詞の曲用はなるべく避けたほうがいいでしょう。

名詞の性は無くしたほうが効率的です。形容詞と名詞の一致も避けたほうが学習が容易でしょう。

エスペラントは形容詞と名詞が一致しますが、イドではその点が排他されています。

●スペーシング

単語間のスペーシングもあつたほうがいいです。

日本語のようにスペーシングがないと、どこまでが1単語か分かりにくいです。
中国語で4文字くらい並ぶと、何パーツに区切れればいいのか分からないときがあつて困った経験があります。
スペーシングがあれば語の区切りが分かりやすいので、その分辞書が引きやすくなります。
いずれ言語を機械処理する際も作業が楽になるでしょう。

●数

英語みたいに単数が複数かを常に気にする言語と、日本語のように数を気にしない言語があります。

どちらかというと後者のほうが長所が多いと思います。

名詞の単複を分ける場合はきめ細やかな表現ができますが、逆に複雑すぎて扱えないとか毎回数を気にするのが煩雑といった欠点があります。

それに、furniture や advice は数えられるのに不可算名詞なのが不自然だといった問題も出てきます。（これらが不可算名詞なのは集合名詞だからなのですが）

また、every は単数を取るのに all は複数を取るというのも、とても不自然に感じます。

数の表現が細かいとかえって複雑すぎて扱いづらいということがあります。

実際、英語ネイティブも単複どちらか判断できないことがままあります。

もちろん数のカテゴリーを持つことには長所もあります。ひとつ例を見てみましょう。

「古池や蛙飛び込む水の音」

ラフカディオハーンらがこれを英訳したとき、この蛙が1匹か複数か気になったそうです。
この句の場合、単数で訳されるほうが一般的ですが、彼は複数にしました。

"old pond -- frogs jumped in -- sound of water."

筆者はこれを知ったとき驚きました。今までこの蛙がそもそも何匹かなど考えたこともなかったからです。

数がカテゴリ化されている言語では、数の分だけ情報量が多くなります。日本人が気付かない疑問に気付くことがあります。

そういう意味では長所ですね。

また、英語では fire か fires かで、それが数えられない単なる火なのか、数えられる火事としての火なのかを区別できます。

火と火事という別の語を作ったり覚えたりする必要がなく、fire か fires かで区別できるのは便利です。

こういった長所が残されているため、必ずしも数のカテゴリーを外すことを奨励しません。

———しませんが、かといって文法カテゴリー（その言語にとって必須な文法要素のこと）にするほどでもないだろうという考えです。

普段は数の解釈を文脈に依存させ、明示が必要なときに複数マーカーを付ければ良いと思います。

● テンスとアスペクト

テンス（時制）は現在・過去・未来を基本として備えるべきです。

人間は現在を中心に未来と過去を見ているから、この分類は自然です。

他に作るとしたら通時のように一般的な真理を述べるものや、不定時制のように時制が不定で曖昧というのが考えられます。

どちらも面白いですが、あればいいというほどではありません。

時制のない言語というのもあります。yesterday のような時間を表す副詞を時制の代わりとする言語です。合理的です。

アスペクト（相）は完了と未完の対立が一番大事です。大抵の自然言語でもそうなっています。ロシア語に顕著なカテゴリーです。

ですが、完了と開始と経過などをそれぞれ等位に置くのも良いでしょう。

要は完了とそれ以外を差異化できることが重要です。

ほかに作るとしたら将然相（～しそうだ）などがありますが、これはあってもなくてもいいです。

行為の反復などはアスペクトでなく、副詞で表わすほうが合理的かもしれません。

アスペクトは副詞で表わしても構いません。テンスも実はそうです。

いずれにせよ、テンスもアスペクトも動詞と関連付けるのが一般的です。

●品詞

品詞の種類ですが、少なければいいというわけでもなく、多ければいいというわけでもありません。

多いと制御しづらく、学習しづらいです。

少ないと、少ないものを組み合わせるので必然的に文が長くなり、煩雑になります。

筆者は8～10程度が適切ではないかと考えています。

2-5:語彙

語彙というのは、その言語が持つすべての単語の集まりことです。

「単語」という言葉の難しいバージョンだと思っている人がよくいます。

語彙を作るのが人工言語の最大の関門です。

一番面倒くさくて、絶対避けられない部分です。

語彙はアポストリオリ（自然言語から単語などを借りてくる言語）の場合、任意の言語から取るといいでしょう。

世の中に広く流布しているラテン語やギリシャ語や漢字を参考にするのも手です。

この方法だと、楽に語彙を作れます。

●人工文化がある場合の語彙

一方、人工文化を踏まえている場合、2つにパターンが分かれます。

1つは地球上のどこかに人工文化を作る場合です。

例えばフランス辺りに架空の国を作って独自の文化を創造するなどといったケースです。

この場合、周辺諸国（ドイツやフランス）から語彙を取り入れるのが、その文化の歴史から見て当然です。

このようなケースでは、例えば犬を勝手に *oma* とか名付けるのは不自然です。

歴史から考えて、ラテン系の *canis* だのゲルマン系の *Hund* だのといった語形を参考にするのが自然でしょう。

もう1つは異世界を想定する場合です。

この場合はゼロから言語を作るため、語彙もゼロから作ることになります。参考にするものは何もありません。

そこでどうやって語を作ればいいのかという問題が起こります。

●ゼロから語彙を作る方法

方法のひとつとして、その言語の音象徴を設定するというのがあります。音象徴というのは、音に意味を持たせたもののことです。

例えば「ピという音は尖ってる風に聞こえるから、針とか薔薇とか尖ってるものは『ピなんたら』にしよう」——というのが音象徴を使った造語です。

ただ、同じ音象徴を持つ語は意味も音も似てしまうため、聞き取り時に混乱を招きます。尖ってるもの全部に「ピ」の音が付いたら、尖ってるものAと尖ってるものBの区別が難しいですね。

従って、聞き間違いがないように適度に語形をずらす必要があります。

●基本語ができたなら残りの語彙はどう作る？

基本語ができたなら、語彙は合成語で作るのがいいでしょう。

フランス語のように合成語を嫌う言語は辞書が引きにくいです。

フランス語で「じゃがいも」は *pomme de terre* (地のリンゴ) と言います。3語で1つの概念です。*pomme* だけ引いても「リンゴ」としかできません。

これでは辞書が引きづらいですね。

ドイツ語は複合語が多いので、その点では辞書が引きやすいです。

ですが、ドイツ語も分離動詞に関しては辞書が非常に引きづらいです。

umschreiben (書き直す) を文中で使うときは、*Ich schreibe es um.* のようにします。接頭辞の *um* が分離して文末に来ています。

ドイツ語をやったことない人は、絶対 *schreibe* で辞書を引きますよね。こうなると *umschreiben* には到達できません。(最近の辞書は親切なので、アンカーがついていたりしますが)

なので、ドイツ語の分離動詞や英語の句動詞は避けたほうがいいです。そうでないと辞書が引きにくくなります。

そういうわけで、語彙は合成語で作るのがよいと思います。

もともと、この方法にも欠点があります。合成語は語が長大になりがちです。

日本語はいくら長くなっても漢字があるのでたかか知れるのですが、アルファベットは横に長いので、ドイツ語などの長い単語はそれはもう大変なことになります。

2-6: 作り方の流れ

この流れに沿っていけば、迷わずに言語を作ることができます。

なお、ここで紹介している以外のフローでも、問題はありません。

1: 作りたい言語の型を決める

言語の壁を崩したいなら国際補助語、小説に使うなら芸術言語というように、目的に合った言語作りをしましょう。

そのためにはまず、自分の作りたい言語の型を決めましょう。

なお、言語を作るときは頭の中で考えるにせよ紙に書くにせよ日本語を使うと思いますが、それで構いません。

英語で資料を作ると後々広めるときに便利ですが、母語で作成した方がやりやすいです。また、資料はパソコンで作成しましょう。修正も配布も容易です。

2:音、文字、文法など、言語の骨組みを作る

まず最初に音と文字を作り、文法と語彙はその後にすることを強くお勧めします。

なお、音と文字は並行して作業をすることを強くお勧めします。

音も文字もたいてい一回では決まらず、その後何度も変更することになります。

音を完全に決めてから文字を作っても、修正の嵐に巻き込まれて結局音も修正する羽目になります。経験者は語る、です。

完成したものを直すより、作業途中のものを直すほうが労力は少なくすみます。ですので、並行して作業を行うようお願いいたします。

文法と語彙も同様に、徐々に作っていきましょう。まずは文法を説明するのに必要な単語があれば十分です。

文法が固まってきたら、少しずつ単語を増やしていきましょう。そのほうが二度手間三度手間を防げます。

3:最低限の語彙を作る

人称代名詞や基本的な動詞や親族名詞程度は作っておきましょう。

また、文法説明に必要な機能語（前置詞とか接続詞とか）も作っておきましょう。

文字が独自の場合、手書きでメモに書いておきましょう。

そのうち時間ができたら TTEDIT などのソフトを作ってフォントを作りましょう。

フォントができるまでは、アルファベットなどを使って転写しておきましょう。パソコンで作業をすることになると思うので、現実的な手段です。

4:例文を作って単語も増やす

それからしばらくは身の回りのことを自分の言語で喋れる程度にするために、単語を増やします。

はじめのうちはそれこそ目に入った日常的な物の名と基本的な動詞や形容詞だけでいいです。

そうするうちに文法の不備が見つかり、改定する必要があるはずですよ。

逆に文法を直したときに必要となる単語が出てきて、それによってまた単語が増えるということもあります。

5:辞書を作ろう

日常的なことが言えるようになってきたらそれなりの語数を持つことになりますので、辞書を作成します。

それまではワードやメモ帳やエクセルなどに単語を登録していたと思います。

単語が増えてきたらワードだと厳しいので、ここからは辞書ソフトを使ったほうがいいでしょう。

なお、紙の辞書は編集が不便なので薦めません。

自然言語の場合は語義がころころ変わることはありませんが、人工言語の場合、作成過程でころころ変わります。

それに、新語の登録も多いです。紙の辞書とか、正直言ってムリです。筆者も友人も中高時代に大変な目に遭いました。

6:単語の語法を決める

例えば手を las という単語にしたとしましょう。

これで一つ単語を作ったこととなりますが、これだけでは不十分なのです。

las は手首を含むのか、腕まで含むのか。

また、「手伝い」のような意味はあるのか。

そういった名詞の語法を決めなければなりません。

語法は名詞の示す範囲だけではありません。

傘をさすの「さす」は何と云えばいいかといったコロケーションも作らねばなりません。

どんな動詞と一緒に使うか、どんな形容詞と一緒に使うか。そういう情報も語法のうちです。

実はこの語法という点は、文化と同じくらいこれまでの人工言語がサボってきた分野でもあるのです。

だいたい的人工言語の辞書は単語帳っぽくなっていて、語法が乏しく、その語の正確な使い方が分からないのです。

仮に我々が英語を全く知らないとしましょう。

傘を和英で引けば、umbrella アンブレラと出てきます。じゃあ「傘をさす」って何ていうんだろうと思うけれども、コロケーションは載っていない。

もちろん本物の和英辞典にはコロケーションが載っています。ですが大抵の人工言語の辞典には載っていないのです。

仕様がなから今度は「さす」を引くと、stick と出てきました。

ここで「じゃあこの言語では『傘をさす』を stick an umbrella って言うんだな」と結論付けるわけです。

同じ理屈で、「辞書を引く」は pull a dictionary です(笑)

ええ、私たちは英語を知っているので、これが間違いだと知ってるわけです。

でもこれが無名人人工言語でしかもコロケーションが載っていなかったら、恐らく自分の間違いに気が付きませんか。

単語の意味が書いてあっても語法やコロケーションが載っていないかぎり、このような間違いを平気でしてしまいます。

もし人工言語の作者が「君たちの母語の語法やコロケーションに合わせて僕の言語を使っているよ」などと言おうものなら、日本人は本当に *stick an umbrella* のような表現をしかねません。

そうなったら母語の異なる人間の間では、たとえ同じ人工言語を使ったとしても意思疎通が成り立ちません。ゆえに語法やコロケーションはしっかり作らねばなりません。

7:用例を充実させる

辞書にはできるだけ多くの用例を登録しておきましょう。

用例があるとコロケーションと語法を同時に知ることができます。

8:翻訳しよう

ここまで終わったら、今度は翻訳に入ります。

何語のどのジャンルを訳してもいいですが、日記や日常を描いた小説などがとつきやすいでしょう。

あまり突拍子もないSFは滅多に使わない単語を作る羽目になるので相応しくありません。

ワープなどがそうですね。

また、学術論文は高度な専門用語を作らなければならなくなるので、ひとまず避けてください。

翻訳をやっているうちに自然と足りない語に出くわします。そのつど新語を作って辞書に加えていきます。

翻訳は色んなジャンルを色んな作者でやったほうがいいです。同じ作者だと表現が似ていて単語が増えづらいからです。

9:一次創作をしよう

翻訳もできるようになったら、今度は自分で執筆します。それと同時に仲間がいれば会話の練習もします。

小説で会話表現は随分習熟したはずなので、これは実際の運用練習になります。

会話ができるようになり、自分で文章を書けるようになれば、完全に軌道に乗っています。

後は専門分野を訳したり書いたりして、語彙を日々拡充していきます。

このとき、単語のみならず成句も増やしていくと良いでしょう。

10:非言語を作ろう

ここまでくると非言語（ジェスチャーなどのこと）についても細かく決める必要があります。

非言語も完成させて、そこで初めて人工言語はひとまず完成します。

11:できれば言語と並行して文化と風土も設定を細かくしていこう

人工言語を作る前に人工文化と人工風土をある程度設定しておいたほうがいいです。

かといって最初から全て細かく作る必要はありません。

ある程度作ったら人工文化と人工風土は人工言語と平行して補完していきます。

ただ、風土についてははじめから骨子を決めておいたほうが無難です。

後から修正が効きづらく、そのくせ修正すると文化や言語まで修正するはめになり、作業が大変だからです。

ちなみに、人工文化や人工風土を作らないタイプの人工言語では、この作業はカットです。

2-7:言語作成ツール

言語を作成する際の支援ツールがあります。
この中のいくつかは筆者も使っています。

レトロ人工言語のライトユーザーには LangMaker。

自作の言語が世界のどの自然言語に似ているかを判断してくれる Language Identifier。
これはちょっとお遊び感覚ですが、本来は謎言語を判定するためのものですから、このような使用法はお楽しみということ。

自言語の辞書を作るなら PDIC。現在は unicode 版がオススメです。
英辞郎で有名な辞書ツールです。フォントを自由に設定できるので、自言語の文字で辞書を表示することができます。
単語はほぼ無限に登録できます。検索機能もかなり充実しています。用例の全文検索もできるので、英和を作れば和英を作る必要がありません。

自言語の文字を作るには TTEDIT がお勧めです。
true type のフォントが作れます。

自言語の文字が qwerty キーボードでは打ちにくいと思った場合、自作のキーボードレイアウトを作ることができます。
Microsoft Keyboard Layout Creator をお使いください。

3.続・人工言語

人工言語の基礎がわかるコーナーです。

3-1:言語は文化と風土から切り離せない

英語では牛の雄雌に別々の単語を当てますが、これはイギリス人が牧畜をしていた結果です。

言語は文化と切り離せません。また、牧畜という文化はイギリスの風土が作ったものなので、風土とも切り離せません。

つまり、言語は文化と風土から切り離せません。

毎回「文化と風土」というのは冗長なので、合わせて「世界」とします。ここでの世界は言語と対比されるものです。

すなわち言語は背景となる世界からの影響を受けるということです。

なお、「文化と風土」のほうが分かりやすい場面では「世界」とは言い換えません。

さて、多くの人工言語は国際補助語です。となると世界の至る所で自分の言語が通じなければなりません。

従って、文化や風土の違いといったものを国際補助語はなるべく捨象する必要があります。

ですが、実際に言語は文化や風土の影響を受けるため、文化や風土は捨象できるものではありません。

今までの人工言語は文化と風土を考慮してきませんでした。

人工言語学研究会はその点を指摘し、「もっと文化と風土を反映した人工言語も考えよ」と主張しています。

これは大切なことなので、文化と風土が言語を支えるでもう一度ご説明します。

3-2:アプリアリとアポストリアリ

ここで術語の導入です。

アприオリ (a priori)=先験語=既存の言語を参照しない言語→ざっくばらんに言えば、「よそから単語などをパクってない、オリジナル言語」のこと。

アポステリオリ(a posteriori)=後験語=既存の言語を参照する言語→ざっくばらんに言えば、「よそから単語などをパクった言語」のこと。

言語にはアприオリとアポステリオリがあります。

エレベーターとエスカレーターくらい似ていますが、人工言語を語る上で重要な概念なのできちんと覚えてください。priが「前」でpostが「後」と覚えれば簡単です。

実際、片方だけ覚えておけば後は自動で判別できます。prepaid card (プリペイドカード)は「事前に支払ったカード」という意味です。preは「前」という意味で、アприオリのpriと同じです。従ってアприオリが「前」、すなわち「先験語」です。となれば自動的にアポステリオリが後験語になります。

ところでアルカはアприオリで、エスペラントはアポステリオリです。

一般に、アприオリはアポステリオリより労力が必要です。他の言語から単語などを借りてこれないので、楽ができないからです。

アポステリオリ言語だと、最短1日で作れます。アприオリ言語だと、最長死ぬまで終わりません。

ただ、平均的にはどちらにせよ何年もかかります。

一方、文化と風土にもアприオリとアポステリオリがあります。

オリジナル文化やオリジナル風土がアприオリになります。

3-3:人工と自然

日本語のように、元々ある言語を自然言語といいます。

日本文化のように、元々ある文化を自然文化と呼ぶことにします。

日本風土のように、元々ある文化を自然風土と呼ぶことにします。

エスペラントのように、特定の言語（この場合は西洋語）を参照して人工的に作った言語を、アポステリオリ人工言語といいます。

エスペラントのように、特定の文化（この場合は西洋の文化）を参照する文化を、アポステリオリ人工文化と呼ぶことにします。

エスペラントのように、特定の風土（この場合は西洋の風土）を参照する風土を、アポステリオリ人工風土と呼ぶことにします。

アルカのように、オリジナルで人工的に作った言語を、アプリオリ人工言語といいます。

アルカのように、オリジナルで人工的に作った文化を、アプリオリ人工文化と呼びます。

アルカのように、オリジナルで人工的に作った風土を、アプリオリ人工風土と呼びます。

ややこしいので、以下に表で示しました。

	言語	文化	風土
日本語	自然	自然	自然
エスペラント	後驗人工	後驗人工	後驗人工
アルカ	先驗人工	先驗人工	先驗人工

一番少ないのはアルカタイプの言語です。理由は2つあります。

1:今までは「人工言語といえば国際補助語」という常識があったため、国際補助語を目指す場合、文化と風土の違いが民族間の壁になってしまうため、文化と風土を作ろうという発想には通常至らない。

2:文化と風土まで作ると大変な作業量になり、制作が現実的ではない。

なお、言語はアプリオリだが文化と風土は考慮していないというような言語もあります。

ライブニッツのような有名な人が、そういったものを作っていました。

「言語は作れるけど、文化と風土まではちょっとなあ」という場合、そのようなパターンになります。

3-4:文化と風土が言語を支える

ここで改めて、なぜ人工言語には文化と風土が必要といえるのかを見てみましょう。

たとえば日本語で米と稲は別物ですが、英語ではどちらも rice といいます。

同様に姉と妹は区別しますが、英語ではふつうどちらも sister といいます。

rice の例は日本が米を常食とする文化・風土にあり、英語を育てたイギリスが半農半牧の文化・風土にあったことで説明できます。

sister の例は、日本が長幼を重視する厳しい年功序列の文化であるのに対し、イギリスがそうでないことで説明できます。

海に囲まれ、夏に温度が上がり、大量の雨が降る。そういう風土だからこそ日本の米文化があり、rice は細分化されました。

逆に、牧畜を営んでいたからこそイギリスで牛は cow, ox などと細分化されます。

こういった言語例は文化と風土が関わっています。もし文化と風土が無ければ、こういった言語例は説明できません。

文化と風土がなければコメという作物をどこまで細分化すれば良いのか決定できません。

そうした理由があって、言語には文化と風土が必要なのです。

人工言語を作る際、米や妹や牛といった単語は当然作りますよね。

でも、その言語が使われる文化や風土がなければ、単語が意味する範囲を確定できません。

文化がないと妹は妹のままでもいいのか、あるいは姉妹とまとめるべきなのかといった判断ができません。

この点で人工言語は文化と風土を必要とします。

自然言語には自然文化と自然風土が自動的に備え付けられますが、人工言語はそうではありません。

元々存在しないところに言語を作ったのですから、備え付けの文化・風土があるわけではありません。

そこで、人工言語は文化・風土を調達することになります。

3-5:文化と風土を持った人工言語

言語には文化と風土が必要なので、人工言語も作った時点で必然的に文化と風土を持ちます。

なぜ「必然的」なのでしょう。実は文化と風土の取得方法は2通りあります。

1:作者が意図的に設定した→アルカのようなタイプです。

2:作者が設定しなかったので、作者や使用者の住んでいる場所の文化が参考になった→エスペラントのようなタイプです。

エスペラントの場合、作者のザメンホフが西洋人だったため、西洋文化と風土を反映しています。

この件については別項で詳細をお話しします→エスペラントと文化

ところでエスペラントのユーザーはアジアにもいます。

そのため、アジアのユーザーはアジア文化と風土をエスペラントに反映するか、西洋文化に合わせるかしなければなりません。

これでは不公平だということで、国際補助語としてのエスペラントはしばしば批判されることがあります。

このように、意図的に文化と風土を設定した言語と、そうでない言語があることを覚えておいてください。

なお、意図的に文化と風土を設定する言語は、一般的に言って極めて少ないです。

これまでの人工言語はむしろ文化や風土の差をできるだけ漂白するよう努力してきました。というのも、国際補助語が多かったからです。

ただ、言語は文化と風土から切り離せないため、この手法だと必ず歪みが生じます。言語を作る際、言語だけを作るのでは不十分だということは覚えておいてください。

3-6: エスペラントと文化・風土

エスペラントはオリジナルの、つまりアプリアの文化と風土を持ちません。

国際補助語という事情を考えると、文化と風土の差を明瞭にするよりは、漂白したほうが効率がよいからです。

さて、そもそもエスペラント人という民族がどこかに特定の地域に住んでいるわけではないので、エスペラントに風土はありません。

また、エスペラントのネイティブの大集団が特定地域に住んで特殊な生活を営んでいるわけでもないので、文化もありません。

芸術言語の人工言語だと、トルキンの指輪物語のように架空の風土や文化を作ることがありますが、エスペラントはそういうことをしません。

この意味で、エスペラントは固有のアプリアな文化・風土を持ちません。

エスペラントの文化と風土は主に西洋のもので、われわれ日本人とは異なった感覚を持っています。以下に実例を挙げます。

エスペラントでは兄弟に長幼の区別はなく、姉妹はどちらも *fratino* です。

また、代名詞も「彼」と「彼女」を表すもので分かれています。

英語によく似ていますね。いずれも日本語にはない特徴です。

父は *patro* といいます。母は女性を表す *-in-* という接中辞を加えて *patrino* といいます。

一般に「親」を表すときは *patro* を代表させることがあります。男が無標になるのは英語の *man* などと同じ発想です。

もっとも、これは多くの諸言語にもいえることなので傍証としては弱いのですが。

より良い傍証は lupu (狼) です。

これは形容詞になると lupa (狼の) という意味になりますが、同時に「残酷な」という意味も持ちます。

グリム童話などに見られるように、狼のイメージは「残酷」です。

しかし、日本では狼は「大神」に通じることから、必ずしも「残酷」とは限りません。「孤高」などを象徴することがあります。そのことは今日でも「一匹狼」のような単語に残っています。

もし、日本のエスペランティストが lupa と言ったら、それは孤高のつもりかもしれませんが。当然、西洋人は「lupa に孤高の意味はない」と言うでしょう。そう言われてまで私たちはエスペラントを国際補助語と認めることができるでしょうか。このように、あくまで lupa は西洋文化を反映しています。

また、akvo は「水」ですが、同時に「お湯」でもあります。akvo と聞いた日本人が「水」だと思って触れたら、実は「お湯」だったということがありえます。

韓国語의 물 (ムル) は水でもお湯でもあるので、この点に関して韓国人は違和感を感じないでしょう。しかし日本人は感じます。

どの国の人かによって違和感を覚えたり覚えなかったりというのは国際補助語としてはいかなものかという批判があります。

余談ですが、筆者は韓国の山道で車がエンストしたときに、ロードサービスが来るまでの間に皆でどうにかしようと言って、なぜだかエンジンに水を入れることにしました。

筆者は車の近くに置かれた容器に触れていいか迷いました。その容器はヤカンだったので、お湯の可能性があります。でも容器がヤカンしかなくて水を入れているのかもしれませんが。水かお湯か分からないし、実験で触って火傷したくないので尋ねることにしました。これは耳かか聞いたところ相手がそうだとするので、「ああ、触っても大丈夫なんだな」と思いました。「やっぱりヤカンしかないから水を入れたんだ。こんな山道でお湯を沸かせるわけもないし」と思いました。

ところがその直後同乗者がエンジンに水をかけると、物凄い湯気が！……危ないところでした。その山道は慶州近くのお寺へ続く道だったので、どうやら近くの売店でお湯を借りてきたようでした。

帰国後に水はお湯も指すと知り、「語法怖え……」と思いました。

それと同時に、語法がきちんと設定されていない人工言語でまともに意思疎通ができるとは思えないと実感しました。

さて、エスペラントは国際補助語を目指しているので、西洋に傾倒している事実は好ましくありません。

かといってあらゆる文化に対応した言語を作ることはできません。

稲と米を区別すれば日本をひいきすることになるし、区別しなければ西洋をひいきすることになります。どちらにせよ不平等で、国際補助語としては批判されます。

これはとても難しい問題です。

国際補助語なので、各ユーザーがそれぞれの文化を背景に喋って良いということになったら、いったいどうなるでしょう。

日本人は勝手に *akvo* に冷たいイメージを持つし、イギリス人は勝手に *lupa* に残酷さを想起します。これでは誤解が絶えず、意思疎通が成立しませんね。

では逆に、特定の文化を採用したらどうでしょう？例えばエスペラントが西洋文化を公式に採用したらどうなるでしょう。

そうしたら今度は「国際補助語のくせに何で西洋中心なんだよ」という批判を受けることになります。

この矛盾が解決できないので、エスペラントに限らず国際補助語をやっている人たちは、この問題そのものから目を背ける傾向にあります。

前項を読んだ方は、こう思っているのではないでしょうか。

「言語には文化と風土が必要なだから、人工言語には人工文化と人工風土が必要とりたいのか？」

それは違います。別に文化や風土を作らなくても構いません。

3-7:人工文化と人工風土

前項のエスペラントの問題は、単にエスペラントが国際補助語だから起こるものです。

芸術言語などであれば、特定の文化を参照しても不平等だという批判は受けません。

小説で使う言語であって国際補助語にするつもりがないのですから、別に西洋文化を参照しても問題はありませぬ。

もしそれでも批判を受けるとしたら、「小説の舞台が異世界なのに、なんでヨーロッパを真似るんだ」という類のものでしょう。

もし言語作者が文化と風土を設定しなかった場合、自動的に作者や使用者が住んでいる場所や知っている場所の文化や風土が付与されます。

まあ、それはもったもな話ですよ。我々が何も知らずにいきなり人工言語を作らされたら、日本語と英語の影響を強く受けることでしょう。

ですので、人工言語だからといって必ずしも文化と風土まで作る必要はありません。作らなくとも自動的に自然文化や自然風土が付いて回るからです。

ただ、文化と風土を作ることももちろんできます。

人工的に作る場合、言語と同じく文化と風土もアプリアリとアポステリアリに分かれます。

例えば『スレイヤーズ』というライトノベルの舞台は架空の世界で、この作品には人工文化と人工風土が見られます。ですがライトノベルは面白く取っ付きやすいことが特長なので、分かりやすいようアポステリアリになっています。

一方アルカの場合、アルカ専用のオリジナル人工文化と人工風土を作っているため、アプリアリです。

<まとめ>

1:文化と風土には自然と人工がある。

2:人工の場合、さらにアプリアリとアポステリアリに分かれる。

前に、文化と風土をまとめたものを世界と定義しました。

つまり人工世界にアプリアリとアポステリアリがあるということですね。

<具体例>

自然世界→エスペラントの背景となる西洋社会

アポステリアリ人工世界→『スレイヤーズ』の背景となる西洋の風土や、作者の慣れ親しんだ日本の文化

アプリアリ人工世界→アルカの背景となる架空の世界カルディア

<注意>

上記3種のうち、どれが凄いとかが、どれが偉いとかが、そういう話はありません。

ただ、労力の差は明確です。下に行くほど大変です。よく言えば、やりがいはあります。

3-8:芸術言語のあゆみ

17世紀ごろはヨーロッパが世界の中心で、飛行機もネットも利用できない時代だったため、芸術言語といえば遠く離れた国の人の言語をイメージしたものでした。

物書きは行商人などから話を聞き、ときに誇張を交えて異邦人の言葉を書きました。元は架空の言語ではなく、ジャーナルとして出版されていたわけです。

それが徐々に物語性を帯びるようになり、架空の言語として独立することになります。また、舞台も月になるなど、地球を越えることもありました。

17世紀ごろは未発見のオーストラリアが舞台となることもありましたが、人類が地球の隅々まで到達できるようになれば、もはや地球は物語の舞台としてふさわしくなくなります。

交通網や通信技術の発展に伴って世界が狭くなるにつれ、芸術言語の舞台は宇宙や異世界へと広がっていきました。

19世紀にできた『不思議の国のアリス』は異世界が舞台になっています。もともと、人工言語は登場しませんが。

人工言語が登場する異世界物で有名なのは、トールキンの『指輪物語』です。映画『ロードオブザリング』でおなじみですね。

指輪物語にはエルフ語が登場します。これは古ケルト語を元にしたアポストリオリ人工言語です。

繰り返しますが、芸術言語はもともと遠く離れた国のジャーナルを変形していったところに始まり、異邦人の言葉として作られました。やがて未発見の土地がなくなると、今度は舞台が宇宙や異世界になっていきました。

あくまで娯楽性の高い言語ですから共通語を作ろうというような崇高な目的もなく、それゆえ17世紀の人工言語ブームのときも軽く扱われました。この傾向は20世紀まで続きます。

国際補助語はフランス語や英語が共通語になるたび下火になり、共通語がなくなるたびブームになるというサイクルを持ちます。

一方、芸術言語は根幹が娯楽や芸術なので、社会が安定し平和だと生まれやすい傾向にあります。

ただ例外もあります。例えば上記の指輪物語は第二次世界大戦中に書かれています。

3-9:芸術言語のこれから

芸術言語は物語中の架空言語として登場し、物語にオリジナリティやリアリティを添えます。

異世界人が独自の言語で話していたほうが異世界っぽいですが、リアリティを感じます。異世界なのに英語が通じるのはおかしいわけです。

アリスのような児童文学ではご都合主義でもいいわけですが、リアルなファンタジーを考えていくと、どうしてもそこに住む人々の文化や言語が必要になってきます。

とはいえ、ほとんどの読者は細かい設定を気にしません。物語の根幹はストーリーにあるので、話が面白いほうが大事です。

それゆえ 21 世紀になった今でも、芸術言語のほとんどは手軽に作れるアポステリオリ人工言語です。

一方、お話よりも異世界そのものに興味があるという人もいます。

その人たちにとってはエルフ語が古ケルト語から作られているのがとても気になります。

異世界にケルト人がいるはずがないと考えるからです。

それを突き詰めていくと言語も文化も風土もすべてゼロから作るようになります。

全てをゼロから作るという発想自体は難しいものではないので前世紀にもあったと思いますが、なにぶん労力がかかるため、21 世紀になってようやく作られました。

21 世紀になってパソコンとインターネットのブロードバンドが普及したおかげで、個人レベルで世界を作ることができるようになりました。

芸術言語は 21 世紀になってパターンが増えたわけですから、ですので、今後はこのタイプの言語が増加するでしょう。

ただし全てをゼロからというのは微増に留まるでしょう。労力のわりに需要が少ないためです。ほとんどの読者はそこまでこだわらないので、需要がないのです。

4:人工言語 Q&A

人工言語に関するたいいの議論は 400 年前に既になされたものです。同じ議論を何度も繰り返すのは非効率的ですから止めましょう。

このような非合理的な現象が起こる原因はふたつあります。ひとつは議論する側が不勉強であるということ。

もうひとつは先人がマニュアルを作ってこなかったこと。

何遍も議論されたのなら後輩が同じ不毛な議論をせずに済むよう、マニュアルを作っておくべきです。

そこで Q&A 方式でマニュアルを作っておきます。

今後ここにある議論が繰り返されたら、本書を引用し、「そのような議論はとうの昔になされている」と伝えることができます。

1 人工言語に肯定的

1 世界中の人が同じ言葉を覚えれば便利なのは？

便利だと思います。翻訳費用はかからなくなりますし、学校で英語を教える時間を別の教科に使えます。

字幕なしで映画を楽しむこともできます。旅行も簡単にできます。

しかし実際に皆が同じ言葉を覚えるのだとしたら、それは英語や中国語などの強い自然言語です。

言語が広まる条件は経済力と軍事力と人口です。人工言語はそのどれも満たさないため、国際語になることはありません。

人工言語は仮に国際補助語であっても、事実上は限られたコミュニティの中で使われます。ただし人工的に手を加えた自然言語の場合、国際語とまではいかなくともかなり広い範囲で使われることもあります。

例えばエリエゼル・ベン・イエフダーはヘブライ語を話し言葉として現代に復活させ、現代ヘブライ語として生き残っています。

2 英語の一人勝ち是不公平だけど人工言語なら平等では？

国際補助語を作る動機のひとつに、こういった考えがあります。

英語を国際語にしてしまうと、非英語圏の人間にとって不利で、不平等です。

自然言語を国際語にすると必ず不平等が生まれます。ならば人工言語を国際語にすればいい、と考える人がいます。

しかし言語というのは自然・人工を問わず、必ず文化と風土から影響を受けます。

人工言語も特定の文化や風土を背景にしなければ作ることができません。

そうなるとその文化圏に属さない人間にとって不利になり、不平等です。

例えば牡牛と雌牛を単語レベルで区別するのは牧畜文化が背景にあります。

米と稲を区別するのは農耕文化が背景にあります。

全地域がこれらの文化圏に属するわけではないので、どのような人工言語を作ったところで、必ず不平等は生まれます。

ならば言語だけ人工言語にして、あとは各民族の文化や風土に合わせて言語を使えばいい——と考える人がいます。

その場合、相手がどこの文化圏の出身か踏まえた上で話をしないと誤解を招きます。

こちらは稲のつもりで言ったのに米のつもりで受け取られたとか、雌牛のつもりだったのに総称して牛で受け取られたといった誤解が生まれます。

また、狼は日本では孤高などの象徴ですが、西洋では一般的に悪者です。

この象徴も文化から来ており、民族ごとに異なります。

日本人話者が「彼は一匹狼だね」と言ったとき、素直に西洋人は喜んでくれるでしょうか。恐らく No でしょう。

言語だけひとつにまとめて後は個々の文化や風土を反映して良いとしてしまうと、このような誤解を生む恐れがあり、円滑なコミュニケーションは期待できません。

これでは自分の言いたいことがきちんと伝わらないので、結局相手か自分の文化を前提に言語を使用するようになります。

その前提となった文化が西洋のものなら我々には言語の運用が不利になりますし、逆もまた然りです。

従って、人工言語なら平等な国際語が作れるというのは誤りです。

3 英語より人工言語のほうが構造が簡単だから、人工言語のほうが習得しやすい？

違います。

確かに人工言語のほうが構造が簡単で、しばしば覚えやすいです。

英語とエスペラントならエスペラントのほうが一見覚えやすいように感じられます。

ところが実際にやってみるとそうは間屋が御しません。

なぜなら教材が豊富でないからです。みなさん言語の構造ばかりに注目していませんか？ 実際勉強する段階になったら教材を使うのですよ。英語の教材は市場が熾烈なので、どんどん親切で丁寧なものが作り込まれていきます。

一方、人工言語の教材などタカが知れているでしょう。

HTMLの異常に長い文法説明がドンと置いてあるだけのサイトが殆どです。読みづらく、教材とすら言えないレベルです。

よく「学校で英語をやっつていかに英語が複雑かと思って人工言語を作ろうと思った」という作者がいます。

しかし筆者から言わせれば、英語の親切な教材を使っても英語が複雑に感じるような語学力では、人工言語を志したところでどうせ長続きしないでしょう。

実際に、このようなタイプの作者が自言語を投げ出す確率は観測上、非常に高いです。

4 自分で作った言語を広めるにはやはり出版するのがいいですか？

出版物のほうがインターネットより集客能力があるという考えは誤りです。同時に、インターネット上の情報が無条件で出版物に劣るという考えもまた誤りです。その考えは後述する出版幻想に侵されています。出版物のメリットとインターネットのメリットを見定めることが重要です。

なお、出版する場合は自費出版になります。出版業界の事情に明るい筆者に言わせれば、人工言語にお金を出してパトロンになってくれる版元などありえません。人工言語では商売にならないからです。その理由は単純で、人工言語に興味を持つ人間が少ないためです。ただしエスペラントはもはや一外国語と見なされている節があるため、エスペラントの教材などは自費でなくとも出版できる可能性があります。

また、小説の中に当たり障りの無い程度に人工言語を登場させるというのは可能でしょう。しかし、その程度の少ない分量では人工言語の本を出したとは言えないでしょう。かといって『紫苑の書』のように本格的に人工言語を前面に押し出すと売れる見込みが激減するため、自費出版以外は厳しいでしょう。

5 せっかく作ったんだから使いたい！どんな使い道があるの？

国際補助語→限られたコミュニティの中で仲間内の符牒として用いるのが現実的な限界
芸術言語→小説などのコンテンツの中で使用
工学言語→言語学論文中の思考実験などに用いる
プログラム言語→BASIC や C のように、コンピュータに用いる

その他、暗号として日記をつけるのに用いることもできます。これは個人言語に分類されます。

また、言語を作ることはこの世の概念を自分の思う通りに切り分けて命名していく行為なので、創造主としての楽しさや優越感を感じる人もいます。

ただ、楽しいからという理由でやっている人は、往々にして長続きしません。人工言語制作の大半は地味で過酷な辞書作業ですから。

II 人工言語に否定的

1 そんなもの作っても何の役にも立たないのでは？

はい。「せっかく作ったんだから使いたい！どんな使い道があるの？」で述べた以外の役には立たないと思います。

基本的に人工言語は役に立ちません。唯一役に立っているのはプログラム言語です。従って人工言語に興味を持つ人間は非常に限られています。それが現実です。

2 言語を作る暇があるなら英語でもやった方がいいのでは？

そう思います。筆者も日本語が通じる相手には積極的に日本語を使い、アルカは避けます。日本語が通じるなら日本語でいいじゃないかと思っています。面倒くさいし馬鹿馬鹿しいと思います。

アルカのような作り込みを持った人工言語はそれまでに無いタイプだったため、創ることに人工言語史的な意義がありました。

しかし使うということに関しては特に意義がないため、使うのは日本語や英語で十分と考えています。エスペラントも同様です。

人工言語をやるくらいなら英語や中国語をやったほうが得ですし、実際筆者ですらそうしています。

人工言語史の視点と現実の損得勘定を分離並行して考えられる人間でないと、人工言語に手を出すのは難しいでしょう。

3 英語ができないから人工言語をやっているの？

「英語は複雑だからもっと簡単な言語を作ろう」と思う人はたまにいます。
このタイプには2種類あります。

ひとつは教材の豊富な英語ですら挫折するような人間。このタイプは長続きしません。
英語ができないから人工言語に逃げた手合いですが、人工言語をきちんと作るには語学力
が必要なので、遅かれ早かれ息が続かなくなります。

ひとつは語学が得意な人間。生き残る作者に多いタイプです。
彼らは英語はもちろん他の言語もしばしばできます。英語ができないから人工言語をやっ
ているというパターンではありません。

4 どうせ英語と似たようなものしか作れないのでは？

英語の知識しかない日本人が作れば、日本語と英語を混ぜたような言語になるでしょう。
言語作者には語学好きが多く、様々な言語を調べた上で自言語を作ります。
その場合は英語に似たような言語になるとは限りません。

なお、英語に似るのを恐れてあえて英語とずらした仕様にする必要はありません。
例えば I have two sisters という HAVE 言語では、「～になる」という表現より「～をする」
という表現のほうが一般的です。
これは言語学的に分かっているデータで、むしろ揃えないとその言語が言語学的に見て不
自然になります。
言語の特徴はある特徴が定まるとドミノ倒しのようにほかの特徴も決まっていくものなの
で、英語を含んだ何らかの自然言語に似た特徴が出てくるのは当然なのです。

5 人工言語の作者は自分の言語で世界征服がしたいの？

そういう人もいるかもしれませんが、殆どは違うと思われます。
また、仮にそう思ったとしてもどのみち実現しません。
言語が広まる要因は経済力と軍事力と人口で、人工言語はこのどれも満たしません。

作者には大きく分けてふたつのパターンがあります。

ひとつはなるべく自分の言語を広く使ってほしい人。エスペラントのような国際補助語を作る作者にはこの傾向があります。この手の言語にとっては普及率が重要だからです。

もうひとつは限られた範囲で自分の言語を使いたい人。アルカのような芸術言語を作る作者にはこの傾向があります。この手の言語にとっては品質管理が重要なので、むやみにユーザーを増やすのを避ける傾向にあります。

従って、とりわけ後者にはQのように考える者は少ないと言えます。

実際、筆者はアルカが間違っただけで覚えられにくいなら広まらない方がマシだと考えています。

もっとも、そう思えるのは既に優秀なユーザーやネイティブスピーカーを獲得している余裕からかもしれません。

III かじってみたい

1 どんなのがあるの？

国際補助語→エスペラントなど

芸術言語→アルカなど

工学言語→BASIC など

一番手っ取り早く確実なのは、グーグルなどの検索エンジンで「人工言語」と検索し、最初のほうのページを見ていく方法です。

とりあえずエスペラントとアルカは日本語での資料も豊富で教材も読みやすいものがあるため、最初にやるには取っ付き易いです。

グーグルの「人工言語」のサジェストには「アルカ」が来て次に「エスペラント」が来るため、知名度も申し分ありません。

2 語根が少ない言語は習得が容易？

違います。

2011年6月現在、英検三級の語彙数は必要最低語彙数が約1300語で、出題語彙範囲は約2100語です。

三級ですら数千語も覚える必要があり、一見英語の学習は大変に見えます。

もし語根を少なくしたらどうなるでしょう。例えば finger を覚えるのが面倒なので hand(手)+stick(棒)で指を表すというような方法です。

指を handstick(手の棒) と言えば finger は不要になるので、語根の数は減ります。

ちなみに指を「手の棒」のように複合語で表現するのは荒唐無稽な発想ではなく、実際に韓国語의 손가락(指)は「手の先」という意味です。

語根を減らせば一見覚える数は少なくなるような気がしますが。しかし指が hand と stick の組み合わせであることを別途覚える必要があります。

結果的に覚える語数は減っていません。従って、習得が容易とはいえません。

しかも複合語を使うことで一般に単語は長く冗長になります。言語全体が使いづらくなります。

とはいえ、finger よりは handstick のほうが覚えやすいような気がしますよね？

確かに「手の棒で指だ」と言われれば分かりやすい気はします。

しかし人によっては指を「手の先」や「手の枝」と考える場合もあります。

「手の棒」は造語者の恣意的な命名によるものなので、結局その造語者の恣意性に合わせてひとつずつ語根の組み合わせを覚える必要があります。

命名の恣意性がある限り、語根を減らすことが単語の覚えやすさに繋がることにはなりません。

ゆえに語根が少ない言語は習得が容易とはいえません。

それに考えてみましょう。もし語根が少ない言語は習得が容易だったら、自然言語はどれも右へならえしているはずで

3 最小労力で最大限の表現をできる言語は優れている？

違います。

まず「最小労力」の定義が不明です。習得ですか、制作ですか、使用ですか。どの面について言っているのでしょうか。

「最大限の表現」についても同様です。

とはいえそれでは話が進まないで、Qの意図を汲みましょ

う。恐らくQが言いたいのは「語根が少ない。文法が単純。音素数が少ない。でも自然言語並みの表現ができる。それ即ち優れた言語」ということでしょう。

見事に400年前から引き継がれてきた議論です。ひとつずつ問題点を挙げていきましょう。

まず語根の少なさ。語根が少ないほど単語ひとつ当たりの長さが増し、表現が冗長になります。

覚えるときはもしかしたら多少楽かもしれませんが、使うときは明らかに非合理的です。

次に文法の単純さ。これは単純であるに越したことはないでしょう。いたずらにラテン語のような複雑な屈折を設けなくとも言語は十分成立します。

かといってあまり単純にしすぎると、たいていの場合一音当たりの文法的情報量が増します。

例えば過去形がtで現在形がrで未来形がsで、「行く」がgoだとしましょう。この言語ではwent, go, will goがgot, gor, gosになります。

文法が単純になった反面、最後の一音が持つ文法的情報量が英語に比べて多くなっています。この状態で最後の一音を聞き逃したらどうなるでしょう？

英語の場合、ある程度バッファがあるので、聞き逃しに強いです。使うときのことも考えて設計すれば、文法を極限まで合理化するのも考えものだと分かります。

次に音素の少なさ。ロトカス語には子音が6つ、母音が5つしかありません。

音素が少ないので世界中の人にとって発音しやすいと推測されます。

ところが音韻が少ないということは、音の組み合わせが少なくなるということです。つまり、音節数が減るということです。

音節数が減れば、単語の平均長が増します。従って冗長になります。

また、音のバリエーションが少ない言語では、例えばsとzが同じ音として認識されるといった現象が起きます。

これは多くの話者にとって簡単どころかむしろ不可解です。実際、「サ」と「ザ」が同じだと言われても、我々にはピンと来ませんよね。

以上で見たように、習得を最小労力にしようとしても結局使用時に冗長になるなどといった問題が出るため、最小労力で最大限の表現をできる言語は優れているとは言えません。逆に習得を難しくしすぎてあらゆる単語を単純語にした場合、単語の平均長は短くなって運用は一見楽に見えますが、それでは機械語と同じように人間にとって使いづらい言語になってしまいます。

要するに、習得と運用の容易さを両立することはできず、シーソーゲームのようなものだという事です。

なお、ちょうどバランスの取れた位置にあるのが自然言語です。

言語によっては多少片側に傾いているものの、自然言語は概ねバランスが取れており、著しく偏っているということは少なくともありません。

人工言語にもバランスが大切です。最小労力で最大限の表現をできる言語は優れているというのは誤謬ですし、そのような作業は無駄です。そのことは何百年も前に既に実証されています。

4 色々な言語を混ぜれば平等か？

エスペラントは西洋語中心なので、アジア等にとっては不平等だという批判があります。では世界中の色々な言葉から語彙等を流入させた場合、平等な言語になるのでしょうか。平等は平等ですが、それは「誰にとっても等しく覚えづらい言語」にしかありません。

学習者は世界中の様々な言語に詳しくないと、単語を覚えるのが大変です。エスペラントであれば西洋語に通じていれば簡単に単語を覚えることができます。しかし世界中の言語から語彙等を借りてくる場合、誰にとっても覚えづらくなります。

このような国際補助語が広く受け入れられることは、合理性から言っても考えにくいことでしょう。

もし国際補助語を作るのであれば、世界中という広い範囲でなく、西洋や漢字圏などといった文化圏ごとに狙いを定めるほうが合理的です。

5 日本で有名な人工言語は？

エスペラントです。一般人ですら聞いたことがあるほどです。

後はゲームや映画に出てくる人工言語です。

Final Fantasy X のアルペド語は日本語の暗号にすぎませんし検索エンジンでも上位には上がってきませんが、ゲームの知名度に乗っかって有名です。

言語の普及は経済力や軍事力などによるもので、大手企業のゲームは経済力があるため、言語の作り込みや品質に関係なく有名になります。

個人や小集団でどんなに言語を作り込んだところで、そうそう有名にはなれません。アルカは検索エンジンの点で見れば申し分ないのですが、流石に大手企業には勝てません。

ただ、個人や小集団で言語を作り込むのが無駄というわけではありません。きちんとした人工言語を作りたいという人間にはちゃんと努力は伝わります。その結果が現在の検索エンジンにおけるアルカの知名度に繋がっています。

6 参考書はないの？大学では学べないの？

●参考書

- ・ エスペラント

書籍はアマゾンや書店にあります。

オンラインでははじめてのエスペラントなどがあります。

- ・ アルカ

公式サイト：<http://constructed-language.org/arka/>

動画でわかるアルカ：http://constructed-language.org/arka/home_xivveiz.html

はじめてのアルカ：http://constructed-language.org/arka/study_mive1_2.html

幻日辞典：<http://constructed-language.org/klel/>

書籍版『紫苑の書』

『人工言語学・アルカ』（本書）

- ・ その他

稀に書籍を出している言語もありますが、出版幻想で述べたとおり売れておらず、事実上存在がありません。

またオンラインでアルカ並みに豊富な日本語解説を持っているサイトはエスペラントですらありません。

●大学

大学で言語学を専攻しても、人工言語を専攻することは許されません。筆者がソースです。高校時代から人工言語をやるために大学へ入り、大学院まで行きましたがダメでした。

高校時代で既に言語学が人工言語を扱わないという知識はありましたが、当時はネットもなく、無理に大学でやるしかありませんでした。

機械翻訳など一部の分野を除いて、言語学は理系と違って機材や試薬が要りませんから、本代や学会への渡航費が主な出費になります。

従って個人研究が十分可能な分野です。特に人工言語は言語学の範疇外なので個人研究でやらざるをえません。

幸運なことに出費が少ないため、本代さえ捻出できれば独学で人工言語に必要な言語学の知識は得られます。

よって、大学で言語学を専攻する必要はありません。

IV 作ってみたい

1 発音も文法も簡単なのがいいよね！

「最小労力で最大限の表現をできる言語は優れている？」で述べたとおり、発音も文法も簡単なほうが必ずしもいいかというと、そうではありません。

一般に、言語は習得と運用にかかる労力がシーソーになっています。

習得のしやすさに特化すれば使いづらく冗長になり、運用時の労力を下げようとすれば覚えにくくなります。

自然言語同様、習得と運用にかかる労力のバランスを取るのが一番です。

2 単語が多いと大変！作るのも覚えるのも楽できないかな？

覚える単語を減らす方法を筆者は語彙圧縮と呼んでいます。

語彙圧縮にはいくつかの方法があります。

1:アプラウト

母音を規則的に変えて反対語を作る方法です。

例えば sa が「前」だとすると、si は「後ろ」になります。

同じく ha が「上」なら、hi は「下」になります。

この欠点は聞き違いに弱いことです。実際、言語を運用するには頼りないです。

この手法は英語の foot と feet のように数の違いなどに留めたほうがいいでしょう。

語義が真逆になるような単語に適応するのは厳しいです。

なお、母音でなく子音を変化させる方法でも語彙圧縮は可能です。

2:接辞

axma が「論理的」だとして、接頭辞 al-が反対語を作るとします。

この場合、alaxma で「非論理的」になります。

エスペラントは接頭辞 mal-を用い、この語彙圧縮法を採用しています。

この欠点は反対語が冗長になることです。

エスペラントで「左」は maldekstra と言います。left に比べて倍以上長く、冗長です。

また、接頭辞を聞き逃すと逆の意味に取られます。

3:置換規則

例えば k は t、a は i、g は d にそれぞれ対応するというような置換規則を作ります。

kag が「裕福」だとしたら、この規則に従って tid は「貧しい」になります。

この手法は聞き間違いに強く、かつ単語も冗長になりません。

この欠点は置換規則を覚えるのが面倒だという点と、置換後の単語の音が気に入らないことがあるという点です。

3 自然言語をパクったと思われたら嫌だからユニークなのを目指そう！

自然言語から単語や文法などを借用しない言語をアプリオリといいます。反対語はアポストテリオリです。

アプリオリはユニークです。ゼロから考察して組み立てることに意義があります。

言語のバリエーションは有限なので、結果としていずれかの言語に似ます。

しかしゼロから組み立てていけば、どの言語に似ようがアプリオリになります。

「パクったと思われたら嫌だ」という感覚は「楽しやがって」という非難が背景にあるものと思われま

す。確かに作業的に見れば楽はしたのですが、必ずしもアポストテリオリがアプリオリに劣るということはありません。

そもそも言語に優劣はありません。人工言語にも作り込み以外の観点では優劣がありません。

4 自然言語の欠点を克服した完璧な言語を目指そう！

言語には優劣がありません。従って長所や短所もありません。つまり欠点と客観的に決める要因はありません。

欠点だと思うものは主観的なものにすぎません。ゆえに欠点のない完璧な言語は主観上には存在しません。

主観的な完璧さは人によって違います。

従って完璧な言語について議論すると結局は平行線になり、紛争に終わります。

何が良いと思うかは人それぞれです。この手の議論は不毛なので避けましょう。

5 文法も単語も充実してきた！次は何をすればいい？

各単語の語法と用例です。

同時に、小説などのコンテンツです。言語には実用された実績が必要です。

さらにそれが終われば読者獲得のため、読みやすいサイト作りをしてください。

国際補助語の場合はできるだけ広める努力をしましょう。

芸術言語の場合は限られた範囲内で同好の士を見つけましょう。

6 やっぱり言語学に詳しい人でないと作れないものなの？

人工言語は言語のタイプによって制作の難易度が異なります。

最も難しいアルカのような「アプリアリの自然主義人工言語」を作るには、言語学の知識や広い語学の知識が必要です。

その上、ゼロから概念を命名していくので、森羅万象に詳しい必要があります。自分の嫌いなことでも積極的に勉強する我慢ができない人には作れません。

従って、この手の言語に手を出す人は非常に少ないです。また、手を出したとしても続けていくのは至難の業です。

一方、エスペラントのようなアポストリアリであれば既存の自然言語を元に作れるので、言語学の知識がなくてもできなくはありません。

実際エスペラントを創ったザメンホフは眼科医で、言語学者ではありませんでしたから、言語学について詳しくなくても不可能というわけではありません。

ただ、あまりに知識がないと本当にただ自然言語をコピーしただけのものになりますし、最悪コピーさえ巧いかず、言語学的に見て不自然な言語になりえます。

またアプリアリでもウィルキンスの創ったような百科分類的な人工言語であれば、言語学の知識がなくても作れるでしょう。

ただそれが人間にとって使いやすい言語かという疑問が残ります。

まとめると、言語学に精通している必要は必ずしもありませんが、あればそれだけ精巧なものが作れるということになります。

V その他

1 自分は一般人なんだけど、どんな人が人工言語に興味持つの？

以下の条件を満たすほど、人工言語に興味を持つ傾向が高いです。

- 1:語学に興味がある（特にマイナーな言語に興味があり、就職のためというより学問として興味のある者）
- 2:日常生活で複数の言語を耳にする（家庭環境や居住地による影響が大きい）
- 3:若い（10代から20代までが最も興味をもつ年代）
- 4:男性（女性は語学力は高いが、旅行や就職など即物的に役立つ言語に興味が行きやすい）
- 5:自分を特別視している（言語は世界を切り分ける行為。万物に命名する神ともいえる。制作者はエゴが強い傾向にある）

2 世界で最初に人工言語を作ったのは誰？どんな言語？

一般的には、12世紀ビンゲンのヒルデガルトによる *Lingua Ignota*（未知なる言語）とされています。

意外なことに女性で、女子大修道院長でした。語彙数は約1011です。

詳しくは人工言語学の人工言語史概説をご覧ください。

3 人工言語の成功例って何かあるの？

成功か失敗かは、各人工言語が定めた目標を満たしたか否かで客観的に定まるものです。話者が何人超えれば良いとかいう話ではありません。

人工言語は目標を明確に唱えていないものが多くあります。

国際補助語でもどの程度までを目標とするかきちんと定義していないことがあります。

また、同じ言語を使う者たちの間でもグループによって目標が異なったりします。

わかりやすい場所に目標を置いておいてくれればいいのですが、なかなかそういえないのが実情です。

いずれにせよ、自分たちで定めた目標が満たされれば、その時点で成功といえます。

アルカの場合、制作者の間で使用することが目標でしたから、00年代で既に達成していたことになります。

4 そもそも日本語だって英語だって人が作ったものじゃないの？

人工言語は「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された言語」と定義されます。日本語や英語は民族全体が非意図的に形成した言語であるため、人工言語ではありません。

人工言語の定義について詳しくは人工言語学の人工言語の術語をご覧ください。

5 なぜ人工言語界はまとまらないの？

人工言語は自分の規定した枠組みを他人に使わせるものなので、一般的にエゴの強い存在です。

群小人工言語が寄り集まったところで、エゴの集まりにすぎません。言語を作る目的も、どの言語が良いと考えるかの趣向もまちまちです。

結果、各人ががてんでバラバラなことを言い出し、放っておいても内部分裂します。

実際、アメリカにも日本にもヨーロッパにもまとまって有機的に機能している人工言語の集まりはありません。

せいぜい個別言語のスレッド群が集まった掲示板や、リンク集のポータルサイトしかありません。

なお、群小人工言語を集めて大きな発言力にしようという考えは、既に400年前に失敗しています。

6 一番優れた人工言語って何？

●言語に優劣はあるか

故千野栄一などが特に強く主張していましたが、自然言語に優劣はありません。

これは言語学の一般的な自然言語観です。

従って人工言語にも優劣はありません。

ただし人工言語には自然言語と異なる部分があります。それは個人や少集団による創作物であるという点です。

創作物であるからには、どれだけ完成度が高いか、どれだけ作り込まれているかというポイントが評価点になります。

すなわち完成度や作り込みの点で人工言語には優劣があると言えます。

完成度より重要なのは作り込みです。完成度は結果論ですが、作り込みにはその過程の努力も見えます。

例えばアポステリオリの場合是有り物から素材を引っ張ってこれるため、簡単に完成させることができます。その気になれば1日でも可能です。

一方自然主義のアプリオリの場合、何十年という期間をかけてようやくアポステリオリ並みの完成度に到達します。かかった労力が違います。

同じ完成度でも、既製品の建売住宅を買うのがアポステリオリだとしたら、自分で木を切って組み立てて家を建てるのがアプリオリです。

アプリオリはゼロから作るので、細かいところまで自分の好きなようにカスタマイズすることができます。

たとえ同じ完成度であっても、創作物として見たとき、その作り込みの違いは圧倒的です。

そして一般に作り込みの深い創作物は人々からの理解と賞賛を受けやすいのが特徴です。

「え、この家ゼロから自分で作ったの！？　すごい！」とはなるでしょうが、「え、この建売住宅、金出して既製品で全部作ってもらったの、すごい！」とは常識的に考えてあまりならないでしょう。それと同じことです。

ましてゼロから自分で作った家が建売住宅と同レベルの完成度を誇っていれば、人々の驚嘆は更なるものです。

●日本で作られた最大の人工言語は？

最大の定義が不明ですが、辞書の分量・語彙の豊富さ・文法や音韻論の成熟度など、言語の作り込みでいえばアルカです。

グーグルで「人工言語」と引けば、まずグーグルは「アルカ」をサジェストし、次に「エスペラント」をサジェストします。

そして検索結果も上位はアルカ関連のページが殆どを占めます。従って、国産の人工言語では知名度も最大と言えます。

人工言語に優劣があるとしたら、完成度と作り込みの深さが最大の評価点になることでしょう。

さて、表題の質問ですが、後は自解なさってください。

7 なぜ日本の人工言語は世界的に有名でないの？

ひとつは欧米へのコンプレックスが根深いためです。言語学と同じで、国内の研究より英語論文のほうがありがたがられる傾向にあります。

実際中身を見ると大したことが書いてなくとも、英語というだけで何となくカッコイイと勘違いする者がいます。言語学の専門家にすらいるのが実情で、困りものです。

英語というだけで説得力があるとでも思っているのでしょう。英語で食っている筆者には逆にそういうコンプレックスがないので、日本人はもっと日本語を誇れば良いと思っています。

もうひとつは日本人の他人の足を引っ張る国民性です。

アルカが新しい画期的なコンテンツを発表したとき、日本の人工言語作者は口をつぐむかの的を射ない揶揄をしました。

一方、アメリカの掲示板では素直に評価され、厚意で英訳までしてもらえました。この国民性の違いが問題です。

日本の言語作者たちは国産で世界と渡り合おうと考えるどころか、むしろ自分たちの中から世界で通じる言語が出てくると面白くないので、足を引っ張ろうとさえします。

そんなことをしているから、技術はあるのに世界から取り残されるわけです。人工言語だけでなく、日本という国はどの分野でもこうですよ。

最後のひとつは単に日本人が英語ができないからです。

英語で食べている筆者でさえ、ネイティブ並みのライティングなどできません。実は英語業界にいる多くの人間が同様です。

同じことは外国人にも言えます。外国人の書いた本がありますが、読んでみると一応きちんとした日本語になっています。でもそれは編集者が校正をしているからです。

大人になってからでは、何年日本に住んでいようとネイティブにはなれません。ノンネイティブの生原稿を見たらきっと驚きますよ。

その実情を知っているだけに、筆者は逆に自分が自然な英語で本を書くのは無理だと諦めています。

無理なものは無理。非合理的な幻想は捨てることです。それよりも自分の言語を研鑽しましょう。

それと最後にひとつ自分の実体験から、努力は報われるということを述べておきましょう。世の中は案外巧くできています。素直で有能な人物ほど、真面目に努力していればこちらを認め、理解者になってくれるものです。

逆に口だけで何も言わないどころか人の足さえ引っ張るような人間は、こちらが上へ登っていくにつれ、より嫉妬して敵側に回っていきます。

努力することで有能な人間には理解され、無能な人間には遠のかれるわけです。こんなに良いことはないでしょう。

むしろ怖いのは無関心です。陰口すら叩かれなくなったら存在感がないということです。

8 人工言語制作に年齢制限はあるの？

人工言語に興味を持ちやすいのは10~20代が中心です。

また、人工言語制作のほとんどの作業は辞書の執筆です。人工言語の作業は体に堪えるので、バリバリ第一線で執筆できるのはもって30歳まででしょう。ちょうど興味がなくなりだすころに、うまい具合に体も付いていかなくなります。

エスペラントのようなアポステリオリでしたら大した作業量にならないため、何歳からでも作れます。しかしアルカのようにゼロから極限まで作り込むとなると、30歳が限度でしょう。

そういう意味では人工言語制作者はスポーツ選手と同じくらい寿命が短いものです。30を過ぎたらもう引退で、後は昔取った杵柄で食べていくようなイメージです。引退後はゆったり自分の言語を使ったり広めたり後輩を育成したりと、そんなスポーツ選手のような人生が待っています。

一方、学ぶ分には何歳からでも可能ですが、やはり語学に興味を持ったり記憶力が良かったり頭が柔軟だったりするのは若いうちだけなので、30を超えると難しくなってくると思います。

要するに、人工言語制作に年齢制限はありませんが、事実上の年齢制限は存在するというわけです。10歳から志しても第一線で活躍できるのはわずか20年。15歳からなら15年しかありません。

まして22歳ごろを境に日本では就職しますから、学生時代と違って時間も取れなくなります。アルカのような極めるタイプの言語を就労しながらやると、体を壊すペースに拍車がかかります。ソースは筆者です。筆者は格闘技の経験があり、自転車で埼玉から京都まで行くだけの体力がありながら、体を壊しました。通常の間人ならもっと早くにダウンしていることでしょう。

そう考えると事実上自由に活動できるのは22歳くらいまでなのです。10歳からでも12年。15歳からならわずか7年しか動けません。

10歳のころは動けたとしても、アルカのようなゼロから概念を命名する言語は到底作れません。きちんと物事を命名するだけの知識が子供にはないからです。仮にやったとしても、数年後に作りなおしをする羽目になることでしょう。

となると頑張って15歳ごろから始めても、せいぜい22歳までの間にフル回転して作業しなければならないということです。

体を壊す覚悟で就職後も 30 まで頑張るとしても、時間は 8 年ほどしか伸ばせません。よって、勝負は 15~22 歳までの間と、22~30 歳までの間ということになりますでしょうか。これが現実的な人工言語制作者の賞味期限です。

5:回顧録

筆者の人工言語に関する体験談をまとめたものです。

5-1:新語の普及と競合について

人工言語において新語を補充するやり方は、自然言語のやり方と変わりありません。作った単語が広まっていく過程も自然言語と大差ありません。

自然言語ではマスコミや著名人や一般の女子高生など、様々な人が新しい単語を作ります。

人工言語の場合、作者やユーザーが同じように新しい単語を作ります。

いずれにせよ個人が造語したものが広まっていくので、本質的な違いはありません。

新語の補充に関しては造語法をきちんと作っておきましょう。

語根を中心とした派生語か複合語を利用するのが一番理解しやすいです。例えば「本」と「棚」で「本棚」という複合語を作るようなやり方です。

「本」がabで「棚」がcdなのに、「本棚」がabcdではなくxyzになるような造語法は理解されにくいです。

ところで、作った単語が必ずスムーズに広まるとは限りません。新語の案は複数出てくることがあり、しばしば競合します。

例えば2011年3月11日に起こった地震は当時、東北地方太平洋沖地震や東北関東大震災や東日本大震災といったいくつかの名で呼ばれていました。放送局ごとに異なる呼称を使っていたので戸惑った記憶があります。

大抵の場合は競合を経た結果、いずれかの新語が生き残ります。生き残れなかった単語は消えるか別の意味で使われるようになります。

競合は略語にもいえます。例えば「メールアドレス」の略語は「メアド」なのか「メルアド」なのか。

音訳にも競合は起こります。twitterの音訳は「ツイッター」なのか「ツイッター」なのか。

さらに地域ごとに異なる競合結果を得ることもあります。例えばマクドナルドは関東では「マック」ですが、関西では「マクド」といいます。

新語は常に競合の可能性を孕みますが、このことは人工言語でも全く同じです。話者数が少ないうちはいいのですが、エスペラントなどはかなりこうした競合が起きています。

エスペランティストの中でも、学術用語のような高級語を造語するときにはラテン語起源にすると難しくなるので、ドイツ語のごとく合成語を多用してエスペラントの基本語を組み合わせようという動きがあります。

ところが基本語を組み合わせると自ずと語形が長くなり、使用の際に煩雑になるという欠点があるため、反対者が存在します。そしてここに競合の可能性が生まれます。

このように、人工言語もユーザーが増えるほど競合する確率が増え、新語の普及が難しくなります。

そこで必要となるのが言語を管理するシステムです。人工言語の場合は作者が管理するのが多いでしょう。

筆者も自言語を管理しています。ですが勝手な造語をされて困るときがあります。

人工言語は一人で作っている間は自分の裁量で全て決めることができます。

しかし人が増えて運用する段階になると競合などの問題が起き、スムーズな新語の普及は難しくなっていきます。

ユーザーの増加と新語の普及のしやすさは概ね反比例するということです。

5-2:言語には文化と風土を与えましょう

多くの人工言語制作者は言語だけを作り、文化や風土についてはあまり考慮しません。ですが言語は文化や風土から影響を受けます。

例えば日本語では兄と弟は単語レベルで区別されますが、英語ではどちらも brother です。儒教的な考え方が残っている日本では年齢の違いは重要です。

このように言語は文化などから影響を受けるので、言語だけを作るのはとても不自然です。

人工言語制作者に次のような質問を投げかけてみてください。文化と風土をきちんと考慮して言語を作っていれば答えられるはずです。

- 1:貴方の言語で太陽は何色ですか？
- 2:貴方の言語で虹は何色ですか？
- 3:貴方の言語で牛と米を表わす単純語はいくつありますか？
- 4:貴方の言語にオーロラやスコールはありますか？
- 5:貴方の言語で兄弟は男女や長幼で分けますか、それとも分けませんか？
- 6:貴方の言語の調理動詞は焼く系と煮る系のどちらが細かいですか？
- 7:貴方の言語で高貴な色は何色ですか？
- 8:貴方の言語で狼は何を象徴しますか？
- 9:貴方の言語で林檎は赤いものですか？
- 10:貴方の言語でプロトタイプの鳥は何ですか？

大抵の人工言語ではこれらがきちんと定められていません。なぜならわざわざ定めなくとも最初から決まってるからです。そう、それは西洋文化か自国の文化です。

国際補助語の場合、これでは不公平だという批判を受けます。芸術言語の場合、これでは作り込みが甘いと批判を受けます。

これまでの人工言語は形態論、統語論、音韻論、果ては文字論といったレベルをメインに考察していました。言語そのものの構造だけを扱ってきたわけです。言語を取り囲む環境という部分には触れてきませんでした。

正確には触れる段階に達していなかったのでしょう。個人で作る場合、5年10年ほどやってようやく辞書や概説書がまとまればいいほうです。文化まで手が回らないというのが実情でしょう。

自言語がどの文化・風土に依拠するかはきちんと設定しておきましょう。そうでないと話者間の誤解が絶えません。依拠するのは自然文化でも人工文化でも構いません。

ただし国際補助語は特定の文化を選べない立場にあるため、しばしばこの問題自体を見なかつたことにする傾向にあるようです。

5-3: 自国の文化の影響から逃れるには

自国の文化の影響から逃れるには、自分にとって当たり前の物事をひとつひとつ疑ってみることでです。

例えば文字をどの方向から書くかといった細かいことすら、文化や風土を考慮して定める必要があります。

文字の書記法は文化と風土、更には人間の身体の造りから影響を受けています。

日本はかつて巻物を使っていたのでは右から左に文字を書いていた。右手で書くと左手で巻物を捲ることになります。

従って文字は右から左に字が進むのが合理的です。縦書きの巻物文化で左から右という文字は非常に不自然です。

一方、羊皮紙やパピルスを生産する風土では違った書記法が生まれたことでしょう。

このように、一見当たり前に見える物事も、文化や風土や人間の体の構造といった要素を考慮して検討する必要があります。

他にも例を挙げます。時計のまわりはなぜ右回りなのでしょう。それは日時計のまわり方に合わせたからです。

ただそれはあくまで北半球が栄えていたからです。栄えていたのが南半球だったら、今ごろ地球の時計は逆に回っていたことでしょう。

貴方が創る世界で南半球が栄えていたら、時計は逆回りをする必要があるということです。こんな当たり前の物事から疑ってかかってみましょう。

次の例に移ります。なぜ日本人はかつて道の左を歩いていたのでしょうか。それは刀を左に差していたからです。

右通行だと鞘がぶつかって喧嘩の原因になったからです。これには武家社会という文化が影響しています。

通行帯の向きひとつ決めるにも通時的に見なければならぬので、人工文化をゼロから作るのは非常に大変です。

こういう考察は面倒ですが、ひとつひとつ決めないと自国の文化から逃れることはできません。

たとえ自分が無宗教家でも世界の設定としては宗教を作るべきだし、神話も作るべきです。特に神話のような想像の産物はオリジナリティ溢れるものなので、流用は禁物です。天使に羽が生えているのはキリスト教で神が天にいるからです。地にいたら天使は頭にドリルを生やしている可能性があります。安易に天使に羽を付けてはいけません。

もちろん、全てを既存の神話と異なったものにする必要はありません。自分の創る世界にとって自然であれば、いくら既存の神話とかぶっても構いません。

例えば人工言語アルカの存在する世界でも死神は鎌を持っています。魂を穀物に喩え、これを刈り取るという発想から来ています。

日ごろ私たちが何気なく見ているものは、ことごとく文化から影響を受けています。

私たちは懐疑的になることがないまま、文化の影響を看過しています。いつの間にか自国や強国の文化に脳が洗脳されて、疑問を持つことすら忘れてしまっています。

自国の文化の影響から逃れるには、当たり前の物事を見逃さない眼を養いましょう。

54:人工言語は世界共通語になれるか

人工言語は世界共通語になれるでしょうか。今回はそのことについて考えたいと思います。

エスペラントの作者ザメンホフは、ホマラニスモ宣言の5番で「あらゆる人間は個人生活では好きな言葉を話し、好きな宗教を信じる完全かつ明白な権利を有すると認める」と述べました。

彼は世界をエスペラント一色に染めようとしていたのではなく、あくまで国際補助語として使いたいと考えていたようです。

現実的に考えて、世界を一つの言葉で統一するというのは不可能です。でも現在の英語のように、事実上の世界共通語というレベルであれば実現可能です。

では人工言語が英語のような世界共通語になれるかどうかですが、現実的には厳しいと思います。

というのも、言語が広まる要因は経済力と軍事力と人口だからです。

論理的で合理的で優れた言語というのは言語学的に存在しませんし、仮に優れた言語があったとしても、それは広まる要因にはなりません。

また、残念なことですが、言語の壁を崩して平和な世の中を作るといった崇高な理念も、言語が広まる要因にはなりません。

なぜこういうことが起こるのでしょうか。

現在最も強い言語は英語と中国語で、特に英語の力は絶大です。

英語圏の人間にはエスペラントをやるメリットが特にありません。殆どの人は周りの人間が英語を覚えればいいだろうという態度です。

一方、GDPが低い国の人間は生活のために英語を覚えることがあります。観光地などでは特に顕著です。彼らはエスペラントを覚えようとはしません。お金にならないからです。本来言語の壁を崩してもらいたい弱い立場の人間ですら、結局は長いものに巻かれるわけです。

エスペラントは作った時期が良かったこともあり、確かにユーザーは多いです。ただ、世界共通語はおろか国際補助語にもなれていないのが実情です。

この現状を見るに、人工言語を世界共通語にという希望は現実的ではないと言わざるをえません。

5-5:紫は高貴な色か

色は象徴を持ちます。例えば青は「未熟」を表し、紫は「高貴」を表します。

でも色が持つ象徴は言語や文化によって異なります。どこの国でも青が未熟というわけはありません。

従って人工言語で色を作る際は、色ごとに独特の象徴を与える必要があります。
今回は色が表わす象徴について考えてみましょう。

例えばある人工言語に紫を意味する単語があるとしましょう。そして高貴な色に紫を宛てがうとします。

このとき、どうしてこの言語で紫が高貴な色になったのかきちんと説明する必要があります。

日本語の冠位十二階制を参考にするだけだと捻りが足りないですね。
アポステリオリな文化ならそれでも良いですが、アプリオリな文化の場合はオリジナルの根拠が欲しいところです。

もし科学的に波の長短が人間に高貴さを感じさせるのならそれが答えで良いと思います。
つまり、人間の目はなぜか紫の波長に高貴さを感じるというような理屈です。

しかしそういう都合の良いことはありません。せいぜい赤は青より暖かみを覚えるなどといった限定的な部分でしか、人類は色について印象を共有しません。

科学的に高貴だと言い切れないとしたら、ゼロから作るアプリオリな人工文化としては何を参考に紫を高貴とすべきでしょう。

ここで風土的なことを考えます。そもそも紫の染料はどうやって得ていたのでしょうか。

日本ではムラサキという植物の根から作りました。「群れて咲く」から「ムラサキ」です。
もとは色の名前ではなかったのです。

このムラサキという植物の根を乾燥させ、水と灰汁を混ぜた媒染剤を紫根色といいます。
これは当時の日本では非常に高価でした。従って高貴な人しか手に入れることができませんでした。それゆえ日本では紫が高貴を表わす色になりました。

ちなみに昔の人はよっぽど紫がほしかったのか、藍と蘇芳で染めて偽紫を作っていたそうです。

紫に関しては西洋でも似たような事情がありました。

purple という語を辿っていくと、シリアツブリボラ貝という染料に行き着きます。しかしこの貝から採れる染料はほんの少しです。

従って日本と同じく紫は貴重で、そこから高貴な色に落ち着きました。科学的な根拠ではなく、染料としての高価さが原因でした。

ある風土で紫の染料がこういう草や貝しかないとしたら、その文化でも紫は高貴の象徴になりやすいと推測されます。

そして最終的にはそれが言語にも影響を与え、「紫は高貴な色」という表現として具現化されるわけです。

面倒ですが、言語が依存する文化や風土というのはこうしてひとつずつ考察していくものです。

なお、紫は別に人類共通の高貴な色ではありません。紫の染料が容易く手に入る風土においては高貴の象徴にならなかったでしょう。実際、世界には高貴な色が紫でない文化もあります。

例えばカースト制度の初期にはヴァルナという4種の身分がありました。高位のバラモンは白で、4番のシュードラが黒です。この文化圏では白が高貴な色になります。

バラモンが白になった理由は諸説ありますが、アーリア人のほうが先住民より肌が白かったためではないかとも言われています。

ある人工言語で高貴な色を定め、それを支える文化的・風土的根拠も定めたとしましょう。ですがまだ安心はできません。

言語は変化するものなので、歴史的な考察も含めねばならないのです。たとえば紫が高貴な色だとしても、時代を経てそうでなくなる可能性があるということです。

例えば中国では現在、皇帝の色といえば黄色です。もっとも、卑猥な色でもありますが。でも昔、皇帝の色は紫でした。皇帝の家は「紫禁城」と言いますよね。あれは天帝が極北の紫微垣という星に近いところに住んでいると考えたからです。

このように、色の象徴は一度定めても時間が経つにつれ変化することがあります。

もうひとつ例を挙げましょう。

西洋では青が高貴な色に変わる時期がありました。あれは単に紫を取るための貝を採り尽くしたのでその代理という説があります。

この場合、絶滅という理由で高貴な色が変わったわけです。これも歴史による象徴の変化といえます。

このように、一度作っても時間が経つにつれ象徴は変わるものです。

変わるのは色の象徴だけではありません。文化的なあらゆる事項が時とともに変化していきます。

もちろん、それにつられて言語も変化していくことになります。人工言語制作者はこれらの点を全て考慮する必要があります。

5-6:表意文字と表音文字

表意文字を作ったことがあります、非常に大変でした。

具体的には人工言語アルカの幼字のことで、2065字強作りしましたが、覚えるのも作るのも面倒でした。

表意文字は漢字と同じで覚えるのにたくさんの時間が取られます。また、辞書を作るときもどの字から載せていいか迷います。

それに表意文字はフォント作りが難しいのも欠点です。2000字もフォントを作ったらそれだけで何年もかかることでしょう。

ちなみに幼字はパソコンが普及していない時代に使っていた文字なので、一部が外字として作られた以外はフォント化されていません。

ところで、言語には「読み・書き・喋り・聞き」という4つの技能があります。

以下ではこれら4つの観点で表意文字と表音文字を比べてみましょう。

まず読み。

文字数が多いため、アルファベットより漢字のほうが圧倒的に難しいです。

つまり表意のほうが表音より読みづらいです。

ただ一度覚えてしまえば文書を速読しやすいという利点があります。

次に書き。

皆さんも子どもの頃は漢字の書き取りで苦労したと思います。

表意文字は書き取りが難しいです。表音文字だとスペルと音が一致している限りとても簡単です。

ただ、パソコンに打ち込むという点では手書きほど難しくはありません。例えば林檎と手で書くのは難しいし面倒ですが、変換するのは楽です。

漢字はタイプライターやファミコン時代には使いづらかったのですが、現在ではその視認性の良さから却ってアドバンテージがあると思います。

次に喋りと聞きですが、ここでは表意文字はアドバンテージを失います。

特に象形がそうですが、表意文字は字形そのものに意味があるので、目で見ても意味を察することができます。

ですが喋りと聞きの場合はこの利点を失います。表意文字も音声になれば表音文字と変わりません。これは大きなディスアドバンテージです。

表音文字は覚えるのも作るのも簡単です。一方、表意文字は神秘性や面白さがあります。どちらも捨てがたい魅力があるので、最終的な判断は制作者に委ねられます。

5-7:英和式辞書と語法

例えばアルカの辞書を作るとき、幻日辞典のようにアルカを日本語で説明する方法と、幻辞典のようにアルカをアルカで説明する方法があります。

最初は前者で作りましょう。というより、最初から後者で作るのは無理です。まだその言語ができてない状態で英英辞典式のものでは作れません。

幻日辞典の場合、日本語を使ってアルカを説明します。するとここで問題が発生します。手はアルカで las といいます。las の項には「手」という訳語を書くこととなります。

しかし日本語の「手」はときに「腕」にもなるので、語法欄を設けて「las に腕は含まない」などと書く必要があります。

また、日本語の「手」には「助け」という意味があります。las にその意味があるのかどうかも書かなくてはなりません。

幻日辞典の場合、日本語が定義する側の言語になります。アルカは定義される側の言語です。

定義する側と定義される側の語法が一致していない場合、きちんと注釈を書きおきましょう。

ただ最初からそれをやるのは大変です。まずは単語帳のような簡単なところから始めましょう。

徐々に語法なり名詞の指す範囲なりを補強していけばいいのです。

なお、単語の語源と成立年と造語者は忘れないうちに書いておくといいでしょう。

これらはその場で書かないと忘れてしまいがちだからです。

5-8:最小対語

最小対語：hat と cat のように、1 音違えば別の単語になってしまうペアのこと。

最小対語については常に聞き間違えの可能性があります。聞き間違えの確率は音によって異なります。

pal と bal は聞き間違いやすいですが、pal と nal はそれほどでもありません。p と n は調音点と調音法が異なるためです。

母音についても、舌の位置が唇の形が近いもの同士は聞き間違いやすいです。

ときに、音にはソノリティというものがあります。これは聞き取りやすさの度合いを示したものです。

母音のほうが子音よりソノリティが高いです。子音でも l や m のほうが p や s よりソノリティが高いです。

従って pal と nal のほうが、pal と bal より聞き分けやすいといえます。

つまり最小対語を気にする際は、特にソノリティの低い音に注意しましょうということです。

ところで、言語には母音率という概念があります。フィンランド語や日本語は母音の頻度が大きい言語です。

母音率の高い言語はそうでない言語に比べ、子音の聞き分けに弱い傾向があります。実際に、日本人が英語の聞き取りで苦手とするのは母音より子音です。

貴方の作る人工言語が母音率の高い言語であれば、特に子音部分だけが異なる pal と bal のような最小対語に注意しましょう。

ちなみに、最小対語であっても出てくる文脈が全く異なれば、あまり気にしなくても良いです。

sal が「リーダー」という名詞で zal が「奇妙な」という形容詞の場合、まず混同することはありません。

もし sal が「男」で zal が「女」だと、出てくる文脈が同じになる可能性が高いので、混同しやすくなります。

最小対語を見るときは、語義にも注意しましょう。

5-9:人工言語で感情を起こせるか

「人工言語は機械的に作ったものだから、そんなもので感情を起こせるわけがない」という暴論が昔はあったようです。

実際には人工言語だろうが自然言語だろうが慣れてしまえば同じです。

例えば貴方がフリジア語を勉強し、フリジア語の小説を読んで感動したとしましょう。

その後「実は貴方が習ったのはフリジア語ではなく 에스ぺ란토 だったんだよ」と言われたとしても、感動した事実は消えませんがね。

学習者にしてみればそれが自然か人工かなど知った事ではないですし、そもそも知らなければそれまでです。

筆者の場合、最初のうちはアルカを読んでも頭の中で日本語に翻訳していました。それで感情が起こったとしても、どちらかというそれは日本語が作った感情だと思いません。

しかし慣れてくると脳内でいちいち日本語に変換しなくなります。英語と同じです。この時点で起こった感情はアルカで感じた感情といって良いでしょう。

個人的な話になりますが、アルカで喜怒哀楽を感じることに對して不思議だと思ったことがあります。

アルカというのは自分たちがいなければ存在しなかった言語です。ただ音を組み合わせただけだけの存在です。

にも関わらず自分たちはその音の羅列に喜怒哀楽を感じます。自分が生まれてなかったらただの意味不明な音波にすぎないのに、その音波を聞いて泣いたりできるわけです。英語は別に筆者がいなくても存在したわけですが、アルカは違います。一時期、なんだかそのことがとても不思議に思えました。

5-10:ピクトグラム

ピクトグラムとはいわゆる絵文字のことで、表意文字より範囲が広いです。漢字は表意文字ですが、落石注意の標識は表意文字ではなくピクトグラムです。

地球語や LoCoS などはピクトグラムを用いた人工言語です。

LoCoS の場合、基本的に文字は左から右に進みますが、副詞は動詞の「上」に来ます。形容詞は名詞の「下」に来ます。つまり、文字の位置によって品詞が決まります。

この発想は非常に面白いですが、ただ、こういう構成の文が自然言語に無いということを考えると、これは人間の自然な認知に背くと考えられます。文あるいは句をひとつのまとまったゲシュタルトとして認知しづらいのが問題です。

一方この問題を解決しているのが地球語で、重ね文字という方法を使っています。地球語では文字を重ねて新たな単語を作ります。漢字と同じく象形・会意・指示をきちんと表すことが可能です。

漢字と違うのは漢字が「へん」と「つくり」による「組み合わせ文字」であるのに対し、地球語は字を「重ね」ている点です。

この方法には長所もあれば短所もあります。重ねすぎると文字が見づらくなるのです。3重くらいで抑えると使いやすいです。

ちなみに、地球語は単語に使う文字を音声表記にも流用できます。しかも IPA 並みの細かさを表せるので驚きです。

地球語には形声文字が欠けていますが、音声記述においては漢字より遥かに細かいです。

両者に共通しているのは、象形・会意・指示の割合が漢字に比べて大きいことです。

漢字は形声の比率が大きいですか、人工言語だとこれが減少します。

また、地球語では直線と曲線を区別しているので、書体が漢字に比べて限定されます。

書体を変えて丸みを帯びさせた場合、地球語では「字母 37」と「字母 gd」の区別が困難になります。

ところで、ピクトグラムの難しさはちゃんと伝わるかどうかです。人によって同じ図形を見ても解釈は異なります。

神社の地図記号は鳥居なので分かりやすいですが、桑畑の記号などはそれほど分かりやすいとは言えません。

桑の絵を描けば分かりやすくなるでしょうが、それでは細かすぎて文字として成立しないでしょう。

要するにピクトグラムの情報量は多すぎず少なすぎず、バランスが大事ということです。

5-11: エスペラントで「ありがとう」は恥ずかしい？

エスペラントで「ありがとう」は *dankon* といますが、何だか日本人にとっては若干言いづらい言葉ですよ。

また、エスペラントの *indi* は「値する」という意味ですが、中国語の *yin1di4* (陰核) に音が似ています。同じく *mimi* (身振りです) は *mi1mi* (おっぱい) を多少想起させます。もっとも、中国語には声調があるので実際に聞き間違えるほどではないでしょうが、それでも多少は気まずいでしょう。

人工言語の単語が他の言語の卑語と重なってしまうことはよくあります。

一般に卑語は短いです。例えば *アホ*、*バカ*、*カス*、*crap*、*damn*、*brat*、*bitch* のように。

短いということは、それだけ自分が作った言語の単語と重複する確率が高いということです。

本音を言えば他の言語の卑語とかぶる単語は使いたくないですよ。ですが世界には何千もの言語があるので、ひとつも重複しないようにするのは不可能です。

もっとも、ひとつひとつの単語を恐ろしく長くすれば重複を避けられます。例えば「目」を *tadernasefteringajampont* のようにすれば、いずれの言語の卑語とも重複しません。でもこんな言語は実用的ではありません。

どのみち卑語の重複が避けられないのであれば、気にしないのが一番です。

もし気になるのならメジャーな言語を 10 個くらい挙げ、その中から *fuck* や *shit* といった代表的なものを選んで、これらの音を排他していけばいいと思います。

5-12: 高級語は分析的に作るか総合的に作るか

*基本語の反対語をここでは便宜上高級語とします。

基本語は単純語で作ることが多いと思います。犬や猫のように。

高級語になると合成語が増えます。番犬や招き猫のように。

日本語やドイツ語はこうした合成語が大好きです。

ところが言語によっては合成語を嫌う言語もあります。フランス語などがそうです。例えばタンポポは *dent-de-lion* といいます。これは「ライオンの歯」という名詞句をひとつの名詞にしたものです。また、蹴るという動作に関しては *donner un coup de pied* (足の一撃を与える) と表現することがあります。

こうしたフランス語のような言語のことを言語学では「分析的言語」といいます。ちなみに反対語は「総合的言語」です。

基本語は単純語が多いので、自分の言語が分析的かどうか気にする必要はあまりありません。

しかし高級語を作る段階になると、自分の言語が分析的か総合的か選択する必要があります。

なお、筆者は総合的言語のほうが好きです。それは一語一意になっていて辞書が引きやすいからです。

例えば蛾はドイツ語では *Nachtfalter* ですが、フランス語では *papillon de nuit* といいます。*Nachtfalter* は一語なのでこのままの形で辞書に載っていますが、*papillon de nuit* はそうはいきません。

ひとつの概念なのにひとつの単語でできていないため、このままの形では辞書に載らないのです。話者は蛾が *papillon* に載っているか *nuit* に載っているかを判断しなくてはなりません。

これは面倒ですし、コーパス分析をする際にも不便です。

蝶という単語を何回使ったか、日本語やドイツ語で調べるのは簡単です。

ところがフランス語の場合、*papillon* の出現数を調べた後、*papillon de nuit* の出現数を引かねばなりません。

筆者はふだん言語を管理する立場にあるため、調査に手間のかかる分析的言語があまり好きではありません。

とはいえ、もちろん総合的言語にも欠点があります。総合的言語は合成語を好みがちですが、合成語中の形態素間の関係は掴みにくいのです。

例えば「前掛け」の先行要素「前」は体の前側という場所を指しますが、「涎掛け」の「涎」は場所ではなく防ぐ対象を指します。要素間の関係は常識で判断する必要があります。

分析的言語では要素間を前置詞などで繋ぐため、比較的要素間の関係が掴みやすいというメリットがあります。

総合的言語にも分析的言語にもそれぞれのメリットがあるので、好きな方を選んでください。

5-13:人工言語を覚えるのは簡単か

結論からいうと人工言語を覚えるのは意外に難しいです。

確かに文法や音韻論は簡略化することができるかもしれませんが。

しかし個々の単語は覚えねばならないし、単語ごとに語法を覚えねばなりません。

その上、人工言語は教材に乏しいという弱点があります。

CDブックは自作できるかもしれませんが、DVD映画作成は絶望的です。その上小説や歌謡曲まで作るとなると大変すぎます。

英語などの自然言語に比べて圧倒的に教材となる資料が少ないのが難点です。

また、人工言語なので留学先が存在しないこともネックです。

言語そのものの構造が簡単であろうと、学びの環境は劣悪です。

学習環境が悪ければ、学習効率も自ずと悪くなります。

そういうわけで人工言語を覚えるのは意外と難しいものです。

5-14:高級語はどこまで作ればいい？

高級語はどこまで作ればいいのでしょうか。

難解な学術用語や車の細かい部品まで、いちいち名付けなければならないのでしょうか。

いいえ。母語ですら知らない単語を作る必要はありません。

それに、そもそも高級語を全て命名するのは不可能です。人類が長年の歴史で作り上げてきたものを個人や少人数では命名しきれません。

日常生活で目にするものから作っていきましょう。自分の生活圏内を自分の言語で表せれば十分です。

とりあえず目で見ても母語で名前の言えるものについては優先的に命名していきましょう。車の細かい部品は目には入りますが、どうせそんなもの日本語でも何というのか分からないので無視して構いません。

一方、よく分からなくとも製品のラベルに書いてある単語はできるだけ命名したいところです。

こうなると注目すべき分野は化学です。日用品の中に——特に原材料名の中に化学の術語が多く潜んでいるからです。

例えばジュースの缶に書いてあるゲル化剤（増粘多糖類）、果糖ブドウ糖液糖、ビタミンCなどがそうです。

もっとも、会話でゲル化剤はまず登場しないのでこれは無視するとしても、ビタミン程度は作っておいたほうが無難です。

ほかに、よく目にする家電の類も命名しておいたほうがいいでしょう。

例えばパソコンやマウス、スキャナ、プリンタ、テレビなどがそうです。

メモリやハードディスクやインターネットは後から作ればいいし、イントラネット辺りは必要性に駆られた段階で作れば十分です。

高級語はどこまで作ればいいのかという問いに対しては、自分が母語で使う程度の範囲というのがひとつの目安になると思います。

5-15:造語するときは事前調査を

単語はどうやって作ればいいのでしょうか。

アポステリオリの場合、何らかの言語から単語を借りてくるので、あまり造語で悩むことはないでしょう。

エスペラントのように名詞がoで終わるという規則がある場合、そういったルールを適応するだけで自然と造語できます。

例えば梅なら *umeo* でいいわけです。着物はもともとoで終わっているから *kimono* で構いません。

アプリオリの場合、単語はゼロから作らねばなりません。このとき、きちんと名付ける概念を調べてから命名しましょう。

例えば日本語の「有理数」は本来「有比数」と呼ぶべきものです。*rational* という語の訳を間違えた結果、こうなりました。

事前調査をしないと、有理数のことを自分の言語で「ことわりのある数」と訳してしまう恐れがあります。

「帝王切開」なども誤解が元で生まれた訳語です。面白いので一度語源を調べてみてください。

ともあれ、アプリオリで造語をする場合はきちんと事前調査をしてください。

5-16:ゼロから語彙を作るには

まず、語彙とはその言語が持つ全ての単語の集まりを指します。「単語」の格好良い言い方のことではありません。

人工言語の語彙のはじめは空です。空っぽの語彙に単語をたくさん入れていかねばなりません。つまりゼロから単語を作って語彙を膨らませていくわけです。

しかしその方法と労力は言語の種類によって劇的に異なります。

アポステリオリの場合、自然言語から単語を借りることになります。アポステリオリも最初の段階では語彙がゼロですが、機械的に自然言語から単語を借りることができるので、手っ取り早く語彙を作ることができます。

エスペラントがこのタイプの言語に当たります。ザメンホフはラテン語などの西洋語を参考にして、エスペラントに合うように語形を変えました。

もちろん、彼も面倒な作業をしています。例えば名詞はoで終わらねばならないので、それに合うように語形を変えたりといった調整をしなければなりませんでした。

とはいえ、アプリオリに比べれば作業は遥かに楽です。ゼロから語彙を作るといっても、実際の作業は制作というより調整に近いからです。

ただし、手軽=稚拙ということではありません。エスペラントは国際補助語なので、馴染みのある言語を参考にするのはむしろ理に適っています。

一方アプリオリの場合、単語を借りる相手がいないので、本当の意味で語彙をゼロから作る必要があります。

椅子をa、机をb、扉をc……というように機械的に命名していく方法もありますが、人間が使うには不便すぎます。

実際こういうタイプの言語は何百年も前に作られているのですが、人間の言語としては定着しませんでした。

では、人間の言語として自然でしかもゼロから語彙を作るにはどうすれば良いでしょう。アルカの場合、音象徴というものを用いました。音象徴とは音が持つイメージのことです。例えばiのように高く鋭い音は小さいものを連想させやすいです。これは聴覚に直接訴えかけるので、人類共通の感覚です。

日本語でもピーという音の方がプーという音より高い感じがしますよね。

ただし音象徴が言語に100%活かされているかという点、そんなことはありません。実際、「大きい」にもbigにもi音が入っています。

従って小さいもの全てにi音を付けることは言語として不自然といえます。

それにもしそうしてしまったら小さいものは全てi音を持つことになるので、聞き間違いも増えることでしょう。

ゆえに音象徴は全ての単語に適応するのではなく、いくつかの単語や語根として利用すべきといえます。

ここでひとつ例を挙げましょう。アルカでは鋭いものには pi という音象徴を宛てがっています。

鋭いは pil で、針は pind で、注射は yapi です。尖ったものには pi が入ることが多いです。これらの単語は音象徴から来ています。アルカに慣れた人は pi が入っていると「何か鋭いものかもしれない」と察知します。

他に e は水を意味する音象徴で、ki は変化を意味する音象徴です。

音象徴を使って造語力の高い語根を作れば、あとはその組み合わせで単語を作っていくことができます。

アプリオリでゼロから語彙を作るには非常に便利な手法です。

そんな便利な音象徴ですが、果たして自然言語にも見られるのでしょうか。

自然言語にない特徴を人工言語に組み込むのは勇気がいることです。もしかして自分の設計した言語が不自然で使い物にならないかもしれないリスクを生むからです。

しかしご安心を。音象徴は自然言語にも見られる現象です。

例えば p という音は「パン」とか「ポン」というような破裂を想起させます。これについて検証してみましょう。

日本語の「春」は古くは「パル」という発音で、このパの部分の音は木の芽が吹く音を象徴していました。確かに p が破裂を意味していますね。でも日本語を見ただけで十分といえるのでしょうか。

実は春という単語に p 音を含む言語は日本語以外にも見られます。例えば韓国語では봄といい、ポムと読みます。

英語の spring は春だけでなくバネなどの意味がありますが、どちらも語源は同じで、芽が吹いたりバネが弾けたりするところから来ています。これも音象徴です。

また、フランス語で春は printemps といいます。temps は「時」という意味で、prin の部分は英語の spring と同じです。printemps はいわば「芽吹く時」という意味です。

このように、音象徴は自然言語にも見られる特徴ですから、安心してアプリオリ人工言語の中にも組み込めます。

p が破裂を想起させるのはある程度人類共通の感覚です。しかしそういう便利なものはあまり数が多くありません。

そこで音象徴を作る際は、恣意的なものも導入する必要があります。アルカで水を象徴する e などはこのタイプです。

なお、音象徴にはできるだけ汎用性のある意味を持たせましょう。

「水」や「鋭い」や「大きい」のように、様々な単語に発展できる広い意味を与えましょう。

間違っても「公共広告機構」のようなレアすぎる意味を与えないでください。応用が一切きかなくなります。

汎用性のある音象徴が数十から百もあれば、それをもとに基本語をどんどん作っていくことができます。

基本語ができたならそれを組み合わせて高級語を作っていきます。こうすればアプリオリでもゼロから語彙を作れます。

5-17: エスペラントとアルカ

人工言語をやる際は、まずエスペラントとアルカの両方をやってみることをお勧めします。どちらも日本で容易に多くの情報が得られ、万を超える語彙を持ち、単語帳形式でない詳しい辞書があり、取っ付き易いからです。

そして何より、このふたつは互いにまったく異なる性質を持つからです。

エスペラントは国際補助語で、アルカは芸術言語。

国際補助語と芸術言語は人工言語の二大派閥です。両方比べてみると、同じ人工言語であってもいかに性質が異なるかが分かります。

こうした両極端の言語に触れることで、あらゆる種類の人工言語に対して順応しやすくなります。言語の制作者はもちろん、学習者にとっても有益です。

エスペラントとアルカの構造をちょっと比べてみましょう。

文字：エスペラントはアルファベット（既存の文字）で、アルカは幻字（独自の文字）

音韻：エスペラントは母音5・子音23で、アルカは母音5・子音20

音節構造：ともに開閉両方有・子音連続有

語順：ともにSVO。但し修飾はエスペラントは前置、アルカは後置

その他、1字が1音韻に対応している点では同じ。チャ行などの音が1文字になっている点がエスペラントでは特徴的。

——共通点もあれば差異もありといったところでしょうか。

エスペラントは西洋語に似ています。実際西洋語を基にしているのです。

アルカとどちらが学びやすいかですが、エスペラントのほうが学びやすいでしょう。アブリオリであるアルカよりアポステリオリであるエスペラントのほうが単語を覚えるのが簡単です。

エスペラントは文法も英語とほぼ同じなので学びやすいです。文字に関してはアルファベットを採用しているので確実にエスペラントのほうが学びやすいです。

アポステリオリだけあってさすがにエスペラントは学びやすいですね。

もちろん、学びやすさだけが価値を決定するわけではありません。アルカが代わりに持っているものは何でしょう。

それは人工世界です。自然言語の焼き増しではなく、ゼロから創生された言語。それがアルカの特徴です。

人工世界があるおかげでアルカは独特な表現を可能にしています。慣用句は文化や風土や歴史を反映したものが多く、異世界なので語法もオリジナルです。

また、男女の言葉遣いや丁寧語などといった細かい表現にも長けており、文芸の分野で高い威力を発揮します。将に名前の通り芸術言語というわけです。

エスペラントはアルカにとって counterpart、対の片方です。全く異なった性質を持つので、両者学ぶのは制作者にも学習者にも有益なことです。

何よりエスペラントは現在も生き続ける最大規模の人工言語です。人工言語を志す者としては登竜門として学んでおくべきでしょう。

5-18:言語に優劣の差はあるか

故千野栄一は言語に優劣は無いと強く主張していました。

彼は学問的というよりも主観的・感情的に主張していたきらいがあります。

一般的な言語学者と同じく、筆者は言語に優劣はないと考えます。優劣の基準が決められないからです。

合理的か非合理的かということに話を限定したとしましょう。それなら確かに合理的なほうが優れているように見えます。

「見る」という動詞が異様に長い語形だったら大変だし、逆に短すぎても聞き取れないでしょう。バランスの取れた簡潔さが良いわけです。

そういう意味ではバランスの取れた合理的な言語というのは存在するかもしれません。

フランス語には名詞に性がありますが、その煩雑さに見合うだけのメリットはありません。英語と同じく性をなくしてしまっても一向に構わないはずで、確かにその点では非合理的といえ、劣っているといえるかもしれません。

実際、人工言語を作る人は名詞に性を与えないのがふつうです。エスペラントでも名詞の性は捨象されています。

ちなみに自然言語でも同様で、人工性の高いピジンになるほど性は失われます。

ではそれだけで日本語のほうがフランス語より優れているのかということとそんなことはありません。

例えば日本語はネイティブでも使いこなせない漢字という文字を大量に使います。更に用言の複雑な活用や終助詞による複雑なニュアンスの違いといったものがあります。この件に関してはたった 26 字で全てを表現できる英語やフランス語のほうが合理的といえます。

仮に優劣を合理性に求めたところで、言語にはそれぞれこだわるポイントというがあるので、どうしても総合的な優劣は判定できないのです。

部分的には優劣を判じられたとしても、果たして用言の活用と名詞の性ではどちらのほうが比重が大きいのかといったことは誰にも分かりません。

なので結局総合的な優劣は測れないのです。それゆえ、筆者は言語の優劣に否定的です。

ただし、それはあくまで自然言語の話です。千野栄一も人工言語は視野に入れなかったのでしょう。

さて、人工言語ではどうでしょう。優劣はあるのでしょうか。

自然言語の場合、その社会が必要とするだけの語彙がきちんとあります。しかし人工言語の場合は違います。

作り込みが甘い駆け出しの言語とエスペラントを比べたとき、果たして両者の間に優劣の差がないといえるでしょうか。

自然言語には起こらない評価基準が人工言語には生まれます。それは作り込みというやつです。

自然言語のネイティブは単語の語法をよく知っています。私たちが日本語の語法を身に着けているのと同じです。

くたびれると疲れるのはほぼ同じ意味です。ではなぜ「くたびれたスーツ」とは言えるのに「疲れたスーツ」とは言えないのでしょうか。

私たちは後者が言えないということは知っていますが、何故言えないのかまでは分かりません。言えない理由は言語学者しか知りません。不思議ですね。

学者が根詰めて考えないと分からないような語法が言語にはたくさんあり、しかもその理由を知らない一般人が正しく言語を利用できるのです。これが言語の不思議なところなんです。

人工言語にも語法がありますが、自然言語と違って「理由は分からないけど何となくそう育ってきたからそう覚えている」という理屈は通用しません。

人工言語の場合、語法もゼロから作らなくてはなりません。つまり語彙のみならず、語法にも作り込みがあるということです。

語法が決まっていない——すなわち単語という道具の説明書がない——言語は果たして使い物になるでしょうか。よく練られた言語のほうが優れていると判断されることでしょうか。

作り込みは語彙や語法だけではありません。統語論、形態論、音韻論、語用論、更には背景となる文化や風土の作り込み。

これら全てが人工言語の優劣を定める判断基準になります。

筆者は自然言語の優劣には否定的です。総合的な優劣が決められないからです。

しかし人工言語に関しては自然言語と違って作り込みという判断基準が入るため、優劣の存在を認めざるをえません。

この見解は大方の常識と一致するのではないのでしょうか。例えば今日作りはじめたばかりの言語がエスペラントと対等な評価を周囲の人間から得られるとは到底思えません。

5-19:出版幻想

そもそも自費出版した言語がインターネット上の言語より格上であるというのは出版幻想にすぎません。

人工言語に興味を持つ人はとても少ない上に書店の棚は常に版元同士の奪い合いなので、自費出版の本など殆ど置いてもらえないのが実情です。

本を出すよりはインターネットで公開したほうがよほど集客能力があります。

ですから広めるという意味では本のほうがインターネットより格上というのは古臭い考え方で、出版社の威光を過大評価した幻想といえます。

徐々にインターネットのほうが効果的なツールとして受け入れられる時代になるでしょう。時代はそうのように動いていくと思います。

今後電子出版が普及するに従って、ますますその傾向は強まるでしょう。

では本を出す意味はないのかというと、そうではありません。

出版物は国会図書館に納本され、ISBN や JAN コードが付され、いつ誰が何と発言したかが証拠として残ります。

人工言語史を刻むといっても、人工言語機関などというものは存在しないため、いくらインターネット上で発言しても歴史に刻むのは難しいのです。

ところが出版物を出すことでいつ誰が何と言ったかが国家によって保証されるため、内容および奥付が自動的に歴史を刻んでくれるのです。

出版物の持つこの公的な力は未だ衰えておらず、今後もこの効力は保持され続けることでしょう。

出版幻想を理解した上で出版物の効力を理解することは、とても重要なことです。

6:習作言語 serix

ここではアポステリオリの人工言語を実際に習作として作ってみました。

アプリオリをゼロから作り込むには何十年もかかりますが、アポステリオリならわずか1日で作ることができます。もともとこの言語はその主張が本当であることを証明するために作られたものです。

serix は習作としての目的があって作られたものなので、分類上は工学言語でしょう。しかし実際の言語としての性能で分類すれば国際補助語に分類することもできます。すなわち、両面性を帯びているということになります。

6-1:セリツシュの目的設定

「人工言語の作り方を读んだけど、いざ自分で作るとなったらどんな流れになるのか分からない……」

そういう方のために、人工言語をひとつ作ってみました。確かに、実演を交えたほうが分かりやすいかもしれませんね。

上掲の「作り方」より実践的なので、言語学用語の出番は増えます。

一番初めにすることは何か。それは「言語の目的」を決めることです。

今回の言語は人工言語の制作者に対し、「人工言語はこんな感じで作ります」という流れを紹介することが目的です。

はい、これで目的は決まりました。何はともあれ指針を掲げるのは大事なことです。

目的ができれば今度はその目的に合わせて言語のおおまかな性質を決めます。

今回は実演なので、とにかく簡単に作れて、しかも読み手が最小限の労力で学べる言語であることが望ましいです。

そこで、アプリオリではなくアポステリオリを作ることにしました。アポステリオリをネットで作るのは初めてです。

だけどエスペラントや英語など、既にあるものと同じでは実演の意味がありません。少し独特な味付けも加えたいところです。

アポステリオリなので、ベースとなる言語を決めましょう。

いまはグローバル時代なので、西洋語偏重ではなく、アジアや中東諸語を取り入れるというのも手でしょう。

でもたくさんの言語から取り入れると幅広い知識が作り手と読み手の双方に要求されるので、今回の目的には合いません。

エスペラントは広く西洋語を取り入れていますが、逆にもっと狭くいきましよう。

今回は、事実上世界の共通語になっている英語をベースにします。

ただ、英語だけを参考にするとベーシックイングリッシュとの弁別が困難になるので、若干他の言語の性質も参考にします。

ちなみにベーシックイングリッシュとは、チャールズ=オグデンによる簡略化した英語のことです。

まず、英語に近いゲルマン語を参考にします。たとえばドイツ語など。

次に、印欧語の仲間であるロマンス語を参考にします。たとえばフランス語など。

ただ、これではエスペラント色が強くなってしまいます。

そこで、今まで筆者が「アルカは個人的にはこういう言語にしたいんだけど、今までの流れを踏まえるときけないんだよなあ」と諦めていた要素を取り入れることにします。

この隠し味のおかげで簡易英語やエスペラント二号になるのはどうにか避けられそうです。

さて、それではこの言語に名前を決めましょう。

最初の命名、最初の単語はこの言語の名前になりました。

English は「アングル人の（言葉）」という意味です。-ish は性質や属性を表します。

今回はとりあえず、筆者が作った英語ベースの言語なので、serix でいいでしょう。読みはセリッシュ。

一応形態論的に解説しておく、人名 seren と接尾辞-ish の混成です。

6-2:音韻・音声・アクセント

「あれ、なんで serish じゃなくて serix なんだろう。これじゃあセリックスじゃないか」
良いところに気付かれましたね。では、音韻について進みましょう。

音韻を表すには文字が必要ですが、serix はアルファベットを使います。
アポストロリの場合、アルファベットを使うのが一番便利だと思います。
後述しますが、キーボードで打ちやすく、知名度も高いからです。

ところでご存知のとおり、英語はスペルと読みが一致しない単語が多いです。
たとえば母音字。同じ a の文字でも cat と watch では音が異なります。
組み合わせて ea, ee などとすると「エア」や「エー」ではなく「イー」になったりします。

子音のほうがスペルと音が一致します。
もっとも、cace の"c"のようにカ行になったりサ行になったりするものもありますが。
あと、複合子音もあります。sh ではシャ行になりますし、ch はチャ行になります。
gh のようにもはや読まない字もあります。

子音より母音の方が一致しないのは歴史の悪戯が原因です。
印刷技術の躍進に伴って、それまでバラバラだった単語の綴り方が統一されていきました。
——と思いきや、大母音推移という現象が起こってしまいました。
それで英語は母音の綴りと読みが一致しない率が子音より高いのです。

こういう皮肉な歴史まで真似る必要はないので、serix の音韻は簡単なものに定めましょう。
その前に。今後、人工言語はインターネットに頼って公開されると考えられます。エスペラントでさえそれは同じです。

インターネットでということはパソコンを使うわけで、人工言語の入力には一番普及している qwerty キーボードを使います。

qwerty で入力しやすい言語作りというのはインターネットで公開する上では重要な要素だと思います。

フランス語やエスペラントの字上符（アクセント記号など）を表示する方法が分からずに困ることがあるかもしれません。

入力のしやすさを考え、serix は通常の IME 設定、通常の qwerty で簡単に表示できるようにします。

アプリアオリもアポストリアオリも打ちやすさは考慮したほうがいいです——辞書作りで泣きたくなければ。

アポストリアオリは特に学習者の便宜を図るので、できるだけ qwerty 内で抑えると良いと思います。

さて、qwerty 前提で音韻体系を決めます。

パソコンの周辺機器に音韻が左右される世の中になるとは、ザメンホフもラティフォギットも驚きでしょうね。

まず母音。英語の母音の数は学者によって変わります。でも大体は 16～18 程度に分類されています。

研究社の『新英和中辞典』など、辞書の母音数もこの範囲に収まっています。

母音数 18 というのは自然言語にしても多いほうです。

しかも複合母音（アイとかエイとか）まで入れるとかなりの数になります。

これを忠実に写したらキーがいくつあっても足りませんので、適度にまとめましょう。

発音はイギリス式を参考にします。元々英語はこの言葉なので。

母音は主に a,i,u,e,o を使います。

a : ask, father などの「大きな口の長いア」

i : east の「横に口を開くイ」、happy の「弱いイ」、ink の「強いが、あまり口を横にさせないイ」

u : good の「強いが唇の丸めが少ないウ」、actual の「曖昧母音に近いウ」、pool の「唇を丸めたウ」

e : epidemic. 最初のエは「弱めのエ。あまり口を開かない」。終わりのエは「強いエ。口を開く」

o : top の「短いオ」。all の「長いオ」

↑これらの音声（発音）は日本語のアイウエオを明瞭に発音したもので構いません。

曖昧母音（シュワー）は音韻を当てずに、音声現象として処理します。

一番近い母音を適宜当てます。

/i/などは英語では長母音とみなされず、一音韻とみなされますが、キー節約のため、長母音になってもらいます。

たとえば key は kii、food は fuud。

複合母音は二重母音と定義し、音韻と見なしません。音韻節約です。

上の基本母音を組み合わせ、アイは ai、オウは ou などとします。

r 化母音。英音では r 化せずに、単にシュワーで終わります。hair, fire などがそうです。

この r 化しなかったシュワーは a で表します。よって hair は hea、fire は faia。

/j/が入る口蓋化したものは母音の i との組み合わせと捉え、音韻から追い出します。

要するにヤ行は ya でなく、ia とします。キャットを昔キャツトと書いた日本人の感覚に近いものがあります。

また、w は「唇音化したウ」と捉え、音韻から外します。ワは wa でなく ua です。

なぜヤ行とワ行を消したのかということ、理由はキーボードにあります。

母音、実はふたつ残っています。

cat に使われる「エとアの真ん中の音」と、come に使われる「オみたいなア。日本語のアに近い」です。

アルファベット 26 字で表し、字上符ナシ、大文字ナシが一番使いやすいです。

26 音韻以内なら小文字だけで表せますし、シフトキーも押さなくて済みます。便利じゃありませんか。

もし come のアを大文字の O とかにしたら、come は「kOm」になります。

大文字が間に入って、レタリング的に見苦しいですよね……。

cat のアは舌が前寄りなので y をあて、come のアは舌が後ろ寄りなので w を当てるとします。

y を見るとイを思い出す語学好きの方、すみません。でも語学好きならこれにもきっとすぐ慣れるでしょう。

さて、そうすれば come は kwm になります。パツと見、何て読むのか分かりませんが、慣れの問題です。

一度慣れてしまえばあとは美観の問題です。そうなる kOm よりずっと見やすいでしょう。

そういう理由で半子音 w,y は消えてもらいました。

さて、おおむね母音はこんな感じでしょうか。

結論として、母音は a,i,u,e,o,y,w の 7 種。

シュワーは音声現象とする。複合母音は二重母音にする。長音は母音を重ねる。r 化音はシュワー止め。

次に子音です。

子音のほうが話は早い。ローマ字読みで行きましょう。

ジャ行はjで良いとして、シャ行はどうしましょう。

英語の子音をキーボードにあてはめていくと、残るのはc,q,xの3文字です。

ポルトガル語でシャ行がxなので、ちょっとこれはよそから借りてきましょう。

したがってシュの音はxになります。だからserixと書いてセリツシュと読みます。

チャ行とチャ行はどうしましょう。これらは破擦音ですが、音韻節約したいのでふつうに複合子音とみなします。

チュという複合子音はタ行のtとシャ行のxの組み合わせなのでtx。checkはtxek。

ヂュという複合子音はダ行のdとジャ行のjの組み合わせなのでdj。joyはdjoy。

なお、ツア行はtsで、ヅア行はdzで表します。

残るはth音です。θみたいな発音記号の子音です。

これは清濁2音あります。残ったキーはc,qです。

thank youのthはcとし、thisのthはqとします。したがってthisはqis。

l音ですが、語末で「う」になるダークLは音韻として立てません。

longなどのng音ですが、ngと書きます。

英語と違って音を飲み込まず、そのまま「ング」と読みます。

これで子音は終わりです。

結論として、serixの子音はp,b,t,d,k,g,f,v,c,q,s,z,x,j,h,m,n,l,rの19音になりました。

母音が7だったので、累計26音になりました。これでスッキリqwertyが使えます。

ちなみに、大文字を個別の音韻表記にさえばqwertyは倍にキーが増えるようなものです。大文字を本格的に利用すれば、倍の音素数まで表現できます。serixは26以内に収めましたが。

文頭大文字とか固有名詞大文字とか、そんなことに使うより、大文字は音韻表記に使ったほうが合理的だと思います。

尚、serix に大文字はありません。一重に面倒だからです。

☆注意すべき音韻（要するにこの5個だけ覚えれば、あとはローマ字読みでOKです）

x=シャ行

c=think の th

q=this の th

w=come のア

y=cat のア

・アクセント

英語と同じく強弱アクセントです。

エスペラントと違って自由アクセントで、アクセントの位置は英語と同じになります。

アクセントは字上符などで表示しません。書くのと覚えるのが面倒だからです。

たとえば pocket は pokit になりますが、これは po にアクセントがあります。

また、remember は rimemba ですが、これは mem の音節にアクセントがあります。

エスペラントと違った趣向にしたかったこともあって、アクセントは自由にしました。

どうでしょう。文字と音を決めるだけで随分言語の形ができてきましたよね。

アルファベットは表音文字なので、音韻論で綴字法まで一緒に決めました。

これによって英語オリジナルと一味違う雰囲気になりました。

leash（犬の鎖）は liix になるので、ちょっと違う感じですよ。

6-3:語順と修飾

語順は SVO です。

修飾は後ろから行います。

フランス語は基本的に後置修飾ですし、英語でさえ分詞が2語以上になると後置修飾になりますよね。

たとえば a crying girl は前置だけど、a girl crying over there は後置になるなど。

また、関係詞節は先行詞を修飾するので一種の修飾節です。そしてこれも後置修飾です。

そこで serix は後置修飾を持ちます。

したがって冷たい雪(cold snow) は snou kould になります。

形容詞は後ろからです。

なお、英語の足跡を歴史つぽく残したいので、接頭辞や接尾辞の位置は逆転させません。

6-4:名詞と代名詞

名詞に数・性はありません。数がない点で 에스ペラント と異なります。

定冠詞や不定冠詞もありません。

格によって曲用もしません。

名詞に格表示がなくても困らない以上、代名詞も格を持つ必要はありません。

したがって主格・対格による格変化は不要です。

人称は 1,2,3 までとします。

2 人称は親しい相手とそれ以外の 2 つに分かれます。

3 人称は男女で区別します。

私 : mi

君 : do (ドイツ語 du からだが、yu と最小対語にしたくないのでアプラウト)

貴方 : yu

彼 : ha

彼女 : xe

彼は he から、彼女は she から。

人称代名詞は5個なので母音をそれぞれずらしました。それで he は ha、she は xe になっています。

指示代名詞は「これ」と「あれ」の2対体系です。

this,that から取ると互いに音が似てしまうので困ります。

ドイツ語の定冠詞 dieser,jener (この、あの) からだと di,je になりますが、人称代名詞と似てしまうのでアウト。

フランス語の voici,voila (アクサン省略) が「ここ」「あそこ」で、これらは音が好都合。

これ : si

あれ : la

これで代名詞の主格と対格は揃いました。え、複数がない?そうですね。

複数には接尾辞の-(e)s を付けます。開音節 (母音止め) にはsだけ、閉音節 (子音止め) には es を付けます。

筆者たち : mis 君たち : dos 貴方達 : yus 彼ら : has 彼女ら : xes

これら : sis あれら : las

勿論、名詞にも使えます。犬は dog で、複数形は doges。家は haus (<house) で、複数形は houses。

でも英語と違って常に数が単数か複数か表示する必要はありません。

two girls のような場合、複数と分かっているので、two girl のような感じになります。複数形にはしません。

さて、では my,mine,myself はどうしましょう。

所有は-(i)n で表します (独 : mein,dein,sein などから)

但し、-(i)n は代名詞に付けるのではなく、名詞のほうに付けます。

-(i)n は名詞に付き、その名詞が被修飾語であることを示すマーカーです。

-(i)n は後ろが形容詞の場合は付きません。これはまた形容詞のところでやります。

serix は後置修飾です。したがって、「名詞-(i)n+代名詞」の語順になります。

例：kytin mi (筆者の猫) *kyt (cat)

このように、serix に所有格はありません。

-(i)n という接尾辞は「誰々の」という意味が根源にあるのではなく、「～に属する」とか「～の性質の」という意味を持ちます。

語順が英語と逆なので注意してくださいね。my book は serix では book my の語順になるので注意が要ります。

例：my book=bukin mi *buk=本

ちなみにちょこっとアルカと絡めると、この時点で『紫苑の書』が訳せました。

『紫苑の書』=bukin xion

"Xion's Book"や"The Book of Xion"に比べると、随分オリジナルになってきましたね。

「この」「あの」という形容詞（指示詞）は sin, lan とします。

例：buk sin (この本)

なお、mine は enin mi と言います。では enin とは何でしょう。

これは名詞の en に接尾辞の in が付いたものです。

en は entity から来ていて、漠然と「物や存在」を指します。

「私のもの」的な発想です。

一方、myself など、再帰形は自分という意味の名詞 self を付けた合成語で表します。

筆者自身：miself 君自身：doself 貴方自身：yuself 彼自身：haself 彼女自身：xeself
レイン自身：leinself

6-5:動詞と文型

動詞は自動詞と他動詞があります。活用は一切しません。

アポストリオリの場合、複雑な屈折は避けたほうが無難です。

相や時制もいつそのこと動詞の屈折・膠着システムから外したほうが動詞がスリムになると思います。

serix の文型は自動詞文と他動詞文の2種で、英語の5文型には従いません。

第1文型SVが自動詞文です。

補語と目的語の区別はありません。したがって第2, 3文型は同定され、区別を失います。そしてこれが他動詞文です。

補語がないので第4, 5文型はありません。

どちらも他動詞文になります。

自動詞か他動詞かは動詞によって決まっています。

自他両用の動詞もあります。

例

自動詞 : kwm (来る)、gou (行く)、dai (死ぬ)、rwn (走る)、sit (座る)

他動詞 : teik (取る)、laik (好む)、hit (叩く)

両用 : fool (落とす、落ちる)、breik (壊す、壊れる)

なお、天候動詞はありません。It rains のような文はありません。

雨が降るのような自動詞文を使います。

例 : rein fool (雨が降る)

6-6:テンスとアスペクト

serix にテンスはありません。デフォルトで現在時制及び通時制です。

過去と未来は時を表す言葉で表します。

それは前置詞句でも良いですし、副詞でも構いません。また、文脈から過去だと分かる場合もあります。

例：mi iit ypl (筆者はリンゴを食べる) *iit (eat)、ypl (apple)

例：mi iit ypl at foadei (筆者は昨日リンゴを食べた)

*at (時や場所を指す前置詞)、foadei (昨日。<foa+dei。foa<fore (前)。dei<day)

英語は完了形を have+pp で表しますが、serix の相は全て副詞で表します。

たとえば完了は fin (終わり) を副詞として使って表します。

ちなみに fin の副詞形は finli です。

例：mi riid buk (筆者は本を読む) *riid (read)

例：mi riid buk finli (筆者は本を読み終わった) *副詞については後述

「ゲルマンベースなら fin じゃなくて end を取るべきだ」と突っ込まれそうですが、この音が好きなのでこうしました。

副詞はたくさん存在するわけですから、相が副詞に溶け込んでいる serix では相が何種類あるという議論は無意味です。

見方によってたくさんだったり少なかったりするでしょうからね。

まあ、そういう議論が面倒臭いのでこういう簡単な体系にしたという下心もあります。

ただ、テンスとアスペクトはアルカの時相詞と全く異なる形にしてみたかったです。

この体系だとアルカと違って新鮮です。

副詞を示す li は取っても構いません。その際、副詞は動詞の直後に来ます。

6-7:形容詞と副詞

形容詞は曲用しません。性・数の一致はありません。

予告になりますが、比較級や最上級もありませんのでご安心を。

前述のとおり、形容詞は後置修飾です。おさらいします。

例：myn big (大きな男) *myn (man)

「被修飾語には接尾辞の-(i)n を付けるんじゃないかなかったっけ？」

はい。でも、修飾語が形容詞の場合は付けません。-(i)n がなくても被修飾語だということは分かるので。

英語は大抵形容詞に ly を付ければ副詞になります。形態論上の操作で副詞を作っています。serix は形容詞に li を付ければ副詞になります。中には li がなく、副詞専用のものもあります。

副詞を動詞の直後に置かなくてもよいので、副詞と対格を間違えないで済むのが利点です。自言語を作る際に、副詞は形態論で作るとは限らないと頭にあると選択肢が広がります。

副詞の位置は動詞と対格の後ろ、前置詞句等の前です。

自動詞文のときは対格がないので、動詞の後ろ、前置詞句等の前です。

例：do kwmm leitli at foadei (君は昨日遅れて来たね) *leit (late)

例：yu laik ypl verli (あなたはとてもリングが好きですね) *verli (とても。ver+li。<ver (甚だしい<very))

もし対格が節を取ったりして長くなる場合は対格の前に副詞を置きます。

対格が長いと副詞が修飾する動詞との距離が遠くなり、関連が弱まってしまいます。そのような場合、長い対格の前に副詞を入れる。このときは実質、副詞は動詞の直後になります。

ところで助動詞ですが、これは必ずしも立てなければならない品詞ではありません。

たとえば serix では副詞にしてみましょう。

li の付かない固定タイプの副詞で、こういうのは動詞の直後から離さないようにします。

kan (can)、mwst (must)、mei (may)

例：mi suim kan (筆者は泳げます) *suim (swim)

例：do fin mwst uaak (君は仕事を終わらせなければならない) *uaak (work)

6-8:前置詞

serix は後置詞でなく前置詞を持ちます。

他動詞文の場合は対格の後、自動詞文の場合は動詞の後に来ます。

統語を決めたら、頻度の高い前置詞を決めます。

特に時間や場所、終点や方向、与格、具格などは決めておくと、文法解説がしやすくなります。

よく使う前置詞

at (時や場所)、tu (終点、与格)、rom (起点、奪格)、fo (方向)、iq (具格)

bau (～について)、haf (～のために<on behalf of)、dua (～の間中)、cru (～を通して)

*haf は hyf ではありません。あくまで英音参照ですからね。

6-9:接続詞

接続詞は等位、従属などに分けるとはありますが、必ずしも従属があるとは限りません。

また、言語によって同じ接続概念を表す単語が別々の品詞に振り分けられることもあります。

because が接続詞なのは節を後続させるからであって、それ以上でも以下でもありません。後続するのが名詞相当句だったら前置詞（句）になるだけです。たとえば because of のように。

接続詞を作るときはどのような種類の接続概念を作るか、そして今述べたどの接続概念を何詞に振り分けるか。

この点に注意すると良いと思います。

よく使う接続詞

an（～と）、oa（～か）、bwt（しかし）、koz（なぜならば）、if（もし～なら）、eqa（～かどうか）

qou（～だけれども）、qws（したがって、ゆえに）、na（そして<now>）

例：mi laik ypl an banyna（筆者はリンゴとバナナが好きだ）*banyna（banana）

なお、serix は節を取るのが好きなので多くの前置詞は同時に従属節を導く接続詞にもなります。共用です。

たとえば foa（前に）は in front of にも before にもなります。

6-10:態

英語教育のせいで態は重要視されがちですが、誰を視点として述べるかということ態が主に表すのであれば、別にそれは倒置や強調で明確にすればいいだけのことであって、必ずしも態は持たなくても良いと思います。

たとえば受動態は主語と目的語を入れ替えて動詞を変えて表現することが多いですが、どれが主格でどれが対格かハッキリしていれば、動詞を変化させなくても倒置だけで視点人物を表現できます。

それと、筆者は日本語に受動態という区分は必要ないと考えています。

主題を表示する格は能動文と変わりませんし、動詞に助動詞が膠着するだけです。受動文というのはあっても受動態を認める必要はないでしょう。

なお、どの言語でも受動文では動作を受ける人が文頭のほうに来るのが普通ですが、これは合理的です。

誰がされたかということ述べる文なので、その語が最初のほうに来るのは自然です。

serix は主述型の文法体系ではないので、英語と似たような受動文になります。でも「主語+be 動詞+過去分詞+by+動作主」という英語の構文は複雑です。

そこで受身を表す *wm* (<come) を副詞の位置で使って簡単に表します。

wm は必ず動詞の直後に来ます。構文は「主語+動詞+*wm*+動作主」になります。by は要りません。

なお、自動詞文は受動文にできません。

例 : *ypl iit wm yu* (リンゴが貴方に食べられる)

使役文は英語のように使役動詞を使う場合がありますが、serix では別の方法にしてみました。

英語の使役文の欠点は使役者が使役動詞の主語になるため、被使役者を焦点付けられないところです。

要するに被使役態が無い。誰がさせるのかより、誰がさせられるのかのほうが大事な局面だっているわけです。

そこで serix では使役者を表す前置詞 *let* で使役文を表します。これは前置詞なので語順に注意です。動詞ではありません。

例 : *do breik dix* (君は皿を割った) **dix* (dish)

例：do breik dix let xe（彼女は君に皿を割らせた）

「でも、使役文ではふつう使役者が焦点化されるんじゃないの？」
確かに。その場合、前置詞句を前に倒置して強調しましょう。

例：let xe, do breik dix（同上）

なお、倒置は倒置したいものを文頭にあげ、カンマを打つだけです。

このように、前置詞で使役文を表すこともできます。

6-11:比較

一般に名詞や形容詞を変化させて比較を作る方法と、接続詞や前置詞自体に比較の意味を持たせて対象を比べる方法があります。

つまり、比較の意味をどの品詞に負わせるかがポイントです。

比較を統語操作だけで表す言語というのは知りません。統語で表すほど頻繁な構文ではないからでしょう。

serix では形容詞は比較級や最上級を持ちません。

ラテン系の比較も英語の比較も皆さん飽きていることでしょう。

なのでちょっと頭をひねってみます。

優等は moa、劣等は les。最上級の優等は most、劣等は list。

英語と違うのは同等級があることで、同等は az です。

で、serix はこれらが全て「等位接続詞」です。前置詞でもなく、more のような形容詞・副詞でもありません。

等位接続詞なので比較対象Aと比較対象Bの間に入ります。

例：mi moa do et tool（筆者は君より高い）*et（be 動詞<est）、tool（tall）

最上級はふつう I'm the tallest in my class のように使います。比較対象が前置詞句で表されています。

でも serix の most は等位接続詞なので、比較対象の class は前置詞句になりません。

例：mi most clas et tool（筆者はクラスで一番高い）*clas（class）

そもそも比較級と最上級がどちらも比較の項で説明されるのに、比較級と最上級で構文が変わる英語はバランスが悪いです。

serix のほうが整合性があります。

ちなみに英語受験で有名な This lake is deepest here について。

まず、「ここ」「あそこ」は hia, qea です。この文、主語は実は「ここ」になります。

英語では here は副詞なので主語になれませんが、serix の hia は名詞です。

また、最上なのは「ここ」であって、「ここ」と比べられているのは「この湖」自身です。

したがって主語が「ここ」で、比較対象が「この湖」になります。

例：hia most laik sin et diip（この湖はここが一番深い）*laik（lake）、diip（deep）

6-12: 文種

文の種類を否定文・疑問文・感嘆文などと分けるのは英語の話です。

英語ではこれらの文種によって文法がころころ変わります。

日本語や韓国語や中国語みたいに文末に「か?」や「マ?」を付ければいい言語では疑問文は大した問題になりません。

serix は疑問文は文末に?を付けるだけです。

感嘆文は!を付ける。

否定文は副詞の no を動詞の直後に付けます。

例：mi laik no ha（私は彼が好きではない）

なお、受身の wm のほうが no より内側にきます。

例：ha laik wm no mi（彼は私に好かれない）

6-13:疑問詞

5W1H はコミュニケーションの基本です。これを欠く言語はおおよそ考えられません。

ただ、what と who を同一視するケースは考えられます。

また、中国語の weishenme (why)、shenme shihou (when) のように、what との組み合わせで疑問詞を表現する言語もあります。

どんな形式であるにせよ、これらの概念自体を欠く言語はないでしょう。

serix

what,who,where,when,why,how の順に――

hwt,hu,hea,hen,hai,hau

serix では 6H になりました。

疑問詞を使った文は英語と違って倒置が起こりません。

したがって、you say what?や who goes?や when you go?の語順で使います。順に――

do sei hwt? hu gou? hen do gou? *sei (say)

6-14:関係代名詞

serix では関係詞を一切排除してみましょう。

西洋語では関係詞は当然なものになっていますが、中国語などにはありません。

関係詞というのは一般にこういうものです。

「修飾節（関係詞節）と被修飾語（先行詞）の格関係を表す」

たとえば I saw a girl who likes cats.

「猫が好き」という修飾節は「少女」という被修飾語にかかっています。

そして関係詞 who は先行詞の「少女」が関係詞の「猫が好き」の主格であることを表しています。

このように、関係詞は被修飾語が修飾節内で持つ格を示す品詞です。

さてここで疑問ですが、そもそも格関係を表示するなんてこと、ふつうの修飾では行いませんよね。

a big guy だって修飾です。でも格なんて持っていません。

別に修飾の格を表す必要などないのです。じゃあ serix はそうしましょう。

格を表さないということは、関係詞はいらないということになります。

じゃあ関係詞文はどうやって表すのか。

中国語のように「修飾節+的+後行詞（先行詞の逆という意味で）」という文法をそのまま盗用するのは面白くないです。

多分、この手法はご存知な方もいらっしゃると思うので。

serix は英語とも中国語とも日本語とも違うシステムを取ります。

被修飾語マーカ-の-(i)n を覚えておいででしょうか。

「これって何で修飾語マーカ-にしないんだよ」と思われたことでしょう。

確かに所有については kytin mi より kyt min とでもしたほうが簡単そうです。

実は、このときのために被修飾語マーカ-にしておきました。

serix では「先行詞-(i)n+関係詞節」つまり「被修飾語-(i)n+修飾語」で英語の関係詞文を表現します。

したがって、私が好きな猫=the cat I like=kytin mi laik となります。

他の例：I saw a girl who likes cats=mi sii gaalin laik kyt

*sii (see)、gaal (girl)。in は gaal が被修飾語であることを示すマーカ-。

次は難易度の高い文です。

Do you know that boy whose father is a teacher?=do nou boin la faaqa et tiitxa?

*nou (know)、boi (boy)、faaqa (father)、tiitxa (teacher)

☆解説

疑問文は？を付けるだけなので、構文は平叙文と同じ。

boin は boi に被修飾マーカ―を足したもので、la と"faaqa et tiitxa"節という 2 つの修飾を一手に受ける。

6-15:数

10 進法が世界では無標です。何進法を持つかは大体人間の身体に關与します。

5、10、20 はあるのに間の 15 進法が無いのは何ででしょう。

5 進法は片手。10 進法は両手で数えた名残です。

手でも足りなかつたら足を加えるでしょうが、このとき片足だけ加えるのは不自然なので、10 の次は一気に 20 になっています。

自然言語の数え方は大抵近隣諸国や自分の祖語の影響を受けます。

日本語は和式と中国式があります。韓国も同様で、中国式以外に、ハナ・ツル・セツという韓読みがあります。

フランス語の辟易する数え方も実はケルト民族の 20 進法と自文化を折衷した結果です。

80 は quatre-vingts と言いますが、これは 4×20 の意味です。

数え方だけでなく、どのように数を分けるかも言語によって異なります。

この辺りは意外な落とし穴になるので、言語を作る際には重要です。

数には分数文化と小数文化があります。

10 を単位に 10 分の 1、10 分の 1 と 1 桁ずつずらしていくのが小数文化。

1, 0.1, 0.01, 0.001 と進んでいくので小数文化といえます。

一方、半分の半分のそのまた半分というように $1/2$ を繰り返していくのが分数文化です。

西洋は分数文化で日本は小数文化です、一般に。

だから英語には half とか quarter などといった単語があります。

これらは時計の読みにも使われるし、お金の計算にも使われます。

西洋に2の付く紙幣があるのだから日本にもあっていいじゃないか的な名目の経済政策で2千円札が出されましたよね。

あのとき「多分言語学的・文化的に見ても成功しないな」と考えていました。

倍の倍の的な発想は日本人の口には合わないんです、きっと。

双数さえない日本に2関係のものは合わないと思います。

さて、文化漸に突入しそうなので serix に戻ります。

数の付け方は色々あるのでよく考察なさってくださいね。

serix は10進法です。8は仏 huit (ユイット) をもじりました。下記の理由で子音を全部別々にする必要があったので。

zir(0) wn(1) tuu(2) cri(3) foo(4) vai(5) sik(6) zev(7) het(8) nai(9) te(10)

11からは日本語式です。

tewn(11) tetuu(12) tecri(13)...tuute(20)

100はredで、1000はcauです。100をhwnにすると1と間違えやすいのでhundredの後部を取りました。

位取りは3桁ごとに行います。

1000が1回目の位取りになります。つまりcauは1000と同時に1回目の位取りも表します。

例：2000(tuucan) 20,000(tuutecau) 200,000(tuuredcau)

million以降は「n回目の位取りにおける数字nの語頭子音+ion」で表します。ionはmillionから取ってます。

この公式じゃ分かりにくいので説明します。

1,000,000（百万）は千の位に次ぐ2回目の位取りです。

「2回目の位取りにおける数字2の語頭子音」とは、要は「2の語頭子音」のことです。2は tuu で、その語頭子音は t です。したがって、t に ion を足して tion にします。これが百万です。

例：1,000,000(tion) 2,000,000(tuution)

billion は3回目の位取りなので3 (cri) の語頭子音 c を使い、cion とします。cion で10億です。

こうしていけば9回目の位取りまで機械的に作れます。hion、nion とか、凄い数ですね…

ちなみに数は基数も序数も形容詞です。なので後置します。

基数はそのまま使って良いですが、序数は数の終わりに-(i)c を付けます。

例：myn foo（4人の男）、ypl cric（3個目のリンゴ）、myn sikic（6番目の男）

6-16:その他の品詞と構文

品詞は統語で判断します。派生語で品詞性を変えるのは形容詞を副詞にする-li くらいです。動名詞はありません。going と to go はどちらも gou です。

不定詞や分詞はどこにいったの？——ありません。

品詞転換が副詞以外起こらないのでもはや不定詞を定める必要はないですし、修飾語の能受は文脈で判断します。

「じゃあ It 構文や want to do はどう言うの？」

It 構文

例：It is easy for me to study Serish = mi stwdi serix et iizi *stwdy (study)、iizi (easy)

主語を「私がセリッシュを学ぶこと」という節にし、定義の他動詞文にします。

また、serix の動詞の語法は英語と異なります。

want, hope, wish などはまとめて ix (<wish) といい、ix は対格に節を取ります。

したがって「to 不定詞」は不要です。

例：I want to be a teacher = mi ix mi et tuitxa

英語にすると I want I am teacher みたいな感じですかね。

ところで分詞表現はどうやって表すのでしょうか。

a crying girl = gaalin krai

*krai (cry) krai は動詞だが、gaal が gaalin になっている。だから gaal が被修飾語で krai は修飾語になる。

krai は自動詞だから、ここでは現在分詞に相当し、crying の意味になる。

さて、過去分詞はどうでしょう。

a broken cup = kwpin breik wm

*cup (cup) kwpin が kwpin になっているので被修飾語と分かる。となると breik は修飾語。

しかも副詞の wm が breik にあるので受動態になっている。つまり「壊す」でなく「壊された」になる。

要するに関係詞だろうと分詞だろうと -(i)n で表せるということです。

被修飾マーカーは後続する語を修飾語に変える能力があるので、自動的に修飾関係を作れます。

動詞が原型で形が変わらないままでも修飾語（ここでは分詞）になれます。

もし in がなくて gaal krai だったら修飾関係は消え、自動詞文で「少女が泣く」になります。

文法は概ね以上です。英語ベースにしては結構オリジナリティあふれましたね。

エスペラント、アルカ、英語に明らかそっくりなものをちょこちょこ避けつつ、こんな作り方もあるよ的なことを紹介して serix に盛り込んでいった結果でしょうか。

最後に、少し難しい、上の文法を盛り込んだ文を作ってみます。

let ha, mi trai niitli at foadei eqa do moa xe laik kytin litl ha hyv.

*trai (try 試す)、niitli (niit きちんとの副詞形)、litl (little)、hyv (have)

訳：彼は私に昨日、君が彼女より彼が飼っている小さな猫のことを好きかどうかということを試させた。

解説

let ha は使役前置詞句の倒置

eqa は接続詞なので、trai は他動詞だが、目的語が eqa 節まるごと。

at foadei は目的語の前に来るのはおかしいが、目的語が長いので繰り返り上がり。

niitli も目的語が長いので繰り返り上がり。

do moa xe は優等比較接続詞。

kytin は kyt+in で、ha hyv (彼が飼う) という修飾節を呼び込む。

litl は元々形容詞なので、もし ha hyv の修飾句がなければ kyt litl で良い。

6-17:語彙の流用

アポストリオリの場合、語彙は流用が基本です。

流用する場合、流用先の言語の音韻体系とある程度に似た音韻体系を持っていないと厳しいです。

たとえば音韻数が多く音節構造も複雑な英語が流用元で、流用先が中国語のような単純な音節構造の声調人工言語だったらどうでしょう。

殆どの単語はすんなり流用できないはずで。

これは中国語における英語の外来語がいかに原音とかけ離れているかを見れば実感できます。

serix は英語を流用しているので、音韻体系も英語に似せました。

一番始めに定めたように、音韻体系をある程度決めておかないと、流用したときにどの文字に転写するのか迷います。

作者が迷うということは、学習者をもっと迷います。

特に英語はスペルと発音が一致しないので、転写には十分注意が必要です。

また、流用するといってもそのまま取り入れるよりは少しアレンジしたほうがいいです。

一般に機能語は短いほうがいいので、たとえば最上級接続詞は *moust* でなく *most* にしています。

短いほうがいいのはよく使う単語も同じです。基本語は CVC か、それに何か加えたくらいでいいと思います。

数もよく使うので短いほうがいいでしょう。 *cri* などは母音を短くしました。

あと、数のように使う文脈が同じものは語形を似せないことが大切です。

1 も 3 も数字なので、使う文脈は同じですよ。1 が *ta* で 3 が *da* だと聞き間違いが起きます。

流用した語の語形がどれだけオリジナルとかけ離れるかは重要です。

あまり似せるとオリジナリティがなさすぎだし、元が分からないほど変えてしまうとアポストロフィの意味がありません。

バランスが大事です。

また、どの程度まで語彙を流用するか。これも大きな問題です。

基本語だけ流用するのか。逆に基本語はオリジナルで、高級語だけ流用するのか。

或いは語の流用に規則性を持たせ、全ての語を機械的に流用するのか。

全て一長一短ですので、自言語の目的に沿わせて選択していきましょう。

serix は機能語などの超基本語は単なる流用に留めず、流用したあと語を短縮しています。

基本語は *breik, laik* などを見れば分かるように、そのままの形を留めています。

音節構造についてですが、*serix* は英語が可能な子音連続はそのまま可能としています。

自言語の可能な音節数を計算する場合、アポステリオリは語の流用を考え、流用元と合わせたほうが無難です。

一方、アプリオリは語を借りないので、自分の好きなような可能な音節の組み合わせをしましょう。

基本的に音節というものは母音を中核とします。その周りに子音があります。原子核の周りを電子が周っているイメージです。

たとえば CVC や CCVCC などの音節が考えられるわけですが、この C には何が入ってもいいというわけではありません。

一般にソノリティ（音の聞こえ）の高いものが中心に来ます。CCVCC を山の形にイメージしてください。

母音のソノリティが一番高く、山のとっぺんです。裾野、つまり外側の子音に行くほどソノリティが低くなる。

これが音節のソノリティによる仕組みです。

ソノリティは一般に閉鎖音が最も弱く、側面音や鼻音は強く、母音が最も強いです。しかも母音の中でもアが一番強いとされています。

大きく叫べると「アー！」っとするのはソノリティから見れば理に合っています。

側面音や鼻音は子音の中ではソノリティが高いので母音に近い性質を持ちます。

音節はふつう母音を作りますが、little のように側面音や鼻音が音節を作ることがあるのはそのせいです。

[plei]という発音があるのは、ソノリティが $p < l$ だからです。[lpei]なんてないですよ。ただ、言語には例外が付き物です。

英語には *spain* や *spirit* などの単語が存在しますが、実はソノリティをみると $s > p$ です。

こういう変な子音連続は偶にあります。アルカでもルフエルという固有名詞は *lfer* です。側面音のほうが摩擦音よりソノリティが高いので、ふつうはありえません。

じゃあこのソノリティの法則って使えないのかっていうとそうでもありません。
エスプリって言葉、哲学とかで聞きますよね。あれはフランス語の *esprit* から来ています。
また、*spain* はスペインでは *espana*（字上符省略）です。

なぜ *e* が付いているのでしょうか。あれは *sp* という子音連続を避けた結果です。
e を付けることによって *sp* ではなく、*es* と *p* に分けたのです。
ソノリティが山形の音節を描くのが一般的という感覚が活かされています。
ちなみにこの感覚はラテン人にはなかったのか、ラテン語ではこの語に *sp-* を使います。*e* が付きません。

また、調音するのが難しいという理由で却下される子音連続もあります。
dkmatbr とか発音できますか？*CCCVCCC* なんですが、筆者には無理です。多分多くの人類にも無理でしょう。

アプリオリの場合、上記の点に注意して子音連続や音節構造を考えていってください。
その上で自分のオリジナルの語を当てはめていきます。

6-18:合成語

オランウータンは「人+森」で「森の人」です。「森+人」ではありません。

serix では修飾要素は右に来ます。その単語の最終的な意味や品詞性は左側の要素が決めます。

でも英語は右側決定ですよ。エスペラントもアルカもそうです。

日本語は中国語と混ざっているので単語によってまちまちです。

「首切り」は目的語+動詞の *SOV* 語順で、右側決定です。

でも「斬首」になると動詞+目的語の *SVO* 語順で、左側決定になります。

インドネシア語は *SVO* で、左側決定です。

アルカも英語もエスペラントも右側なので、趣向を変えて serix は左側決定で行きましょう。

6-19:中級語と高級語

アポストロリで語彙を流用したとして、医学用語などの高級語はどの道ラテン語などから逃れられません。

今の地球の科学は主に西洋人が築いたので、学術語はラテン語やギリシャ語で作られています。

日本人は漢字でどうにか西洋語を翻訳してきました。「神経」とか、名訳揃いです。

ただ、それはあくまで中国語の字なんですよね……。日本のものではなかった。

あと、最近はグローバル化の影響で、物凄い勢いで外来語が入ってきています。

特にコンピュータ用語とかは凄まじい勢いでした。

これらを一々訳している時間はないので、そのままカタカナ語になっています。

日本人は病名などをどうにか漢字に翻訳しましたが、それでもラテン語を訳しただけのものが多いです。

結局根本的にはラテン語から来ているとあって差し支えないでしょう。

アポストロリが何語を取り入れようと、科学用語を規定するにはラテン語は避けられないと思います。

ただ、筆者が思うに肺塵病みたいな IME でも変換できないような病名を作る必要なんて私達にはないんですよ。

とりあえずそんな究極的な語を作るよりも、身の回りのものを表せないことには、

というわけで、基本語と中級語を作ることに専念すべきです。

中級語の作り方ですが、基本語を応用する場合と、あくまで流用しつつける場合があります。

後者は楽です。でもオリジナリティは少ないです。

前者はオリジナリティはあるけど、少し難しいです。

serix は敢えて前者で行くことにします。後者だともはやつまらないので。

たとえば冷蔵庫は refrigerator だと難しいので、icebox にします。英語でも実際 icebox と言われているみたいですね。

serix のスペルにすると冷蔵庫は aisboks なんですが、ここでうっかりミスしないこと。合成語は左側決定なので、boksais が正解です。

こういう感じで中級語は基本語の組み合わせでいきたいと思います。

また、ラテン語の高級語もできるだけ基本語で行こうと思います。

retrogress なんて英検にでも出てきそうな単語ですが、ラテン語に分解すれば「後ろ+行く」に過ぎません。

意味も「後退する」ですね。これ、goubyk で十分でしょう。*byk (<back) 左側決定を忘れずに……。

6-20:展望と作者感想

さて、これで「人工言語の作り方」で説明した項目は全て定まりました。
音と文字があり、文法と語彙ができました。

あと、実際増やしていくのは語彙ですよ。

機能語も少ししかないし、内容語は基本語も文法説明に使う程度しかありませんから。

アポストロリだし qwerty で打てるし、楽々増やしていけると思います。

辞書は PDIC を筆者は使っているのですが、楽々対応できるでしょう。

というか始めはワードやエクセルに入れてもいいくらいではないでしょうか。

最悪紙でも良いです。言語の作り始めなので、それで十分でしょう。

serix は作り方を実演することが目的なので、これ以上の役割はありません。

これでお役御免です。後はどう遊んでいくかという使い道が残るのみです。

serix の作成過程について説明していませんでした。

今日 2006 年 10 月 11 日に、人工言語の作り方の実演として企画され、同日完成・公開しました（記事 1～20）。その後に修正されたのは数行です。

続いて 2011 年の夏に出版化するために誤字等の修正が施されました。

真面目な話、言語の作り方の説明を交えながらでなければ、もう少しタイムアタックできそうです。

言語の骨子を作ってリストアップするだけなら 10 時間未満でいけるかもしれません。

1 日で作るのは性急です。推奨はしません。

筆者は「簡単なアポストロリオリなら 1 日もあれば作れるだろう」述べたことがあるので、有言実行に移した次第です。

根詰めれば 1 日でも言語を作れるということが実証されたことで、読者を奮起できるのではないかと思います。

そういう意味ではこの怒涛の 1 日も無価値ではなかったことでしょう。

6-21:serix を使った訳例

"Alice's Adventures in Wonderland" CHAPTER I: DOWN THE RABBIT-HOLE

『不思議の国のアリス』の冒頭より。

[English]

Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank and of having nothing to do: once or twice she had peeped into the book her sister was reading,

but it had no pictures or conversations in it,

"and what is the use of a book," thought Alice, "without pictures or conversations?"

[serix]

yliis be ip taia wm bau xe sit nia sista at sloup an hyv noenin du wm.
wntaim oa tuutaim, xe piip bukin sista riid ip bwt si hyv no piktxa oa took.
"na paaposin buk et hwt?," cink ylis, "noiq piktxa oa took?"

注

be<become ip<keep (継続の副詞) nia<near sloup<slope (bank は多義語なので斜面
や坂や土手はこちらを使う)

noen=no+en=nothing 数+taim (回数) piip<peep piktxa<picture took<talk &
conversation

paapos<purpose noiq=no+iq

ついでにアルカと対照してみますか。

私が作ったから serix はアルカっぽいと言われると心外です。

[arka]

alis nar ani tinka a skines amox eeta kont so yuu ka hyal.

ras ko az ta, lu ziinat lei l'ecta iskor.

tal tu lei til yuu leis ul xook in, ento lu lok

"lala tuube lei et fiina ne a. tuube si leis ul xook e!"

構文も語法も serix や英語と違いますね。

アルカのほうが serix と違って語法が確立しているので、少なくとも筆者には書きやすいで
す。

アリスのスペリングが三者三様なのは面白いですね。

二章：人工言語学

1:人工言語学

●人工言語学の定義

人工言語は言語学の範疇ではない。これには通時的な理由と共時的な理由がある。

前者は1866年にパリ言語学会が人工言語に関する論文を受け取らないと決めたというものである。

後者は人工言語が制作者の恣意によって好きな形に作ることができるため、自然言語の研究と同じような分析を行うことができないというものである。例えば、類型論において最も一般的な基本語順はSOVであるが、人工言語は恣意的に作れるため、いくらでもこの研究結果を覆すことができる。類型論のみならず対照言語学などほかのあらゆる言語学の部門において、自然言語の研究を通じて言語学が明らかにしてきた成果を覆すことができる。これでは研究にならないということで、人工言語は忌避される傾向にある。

人工言語学とは、そんな渦中にある中であえて人工言語を言語学の範疇として研究する言語学の一分野である。主旨は「人工言語で言語学をすること」である。

人工言語学は2011年に人工言語学研究会によって提唱された学問である。ただし実際には研究会が発足される前に、2000年代から実質同じ概念が提唱されていた。研究会の代表が大学・大学院時代に人工言語で言語学を研究していたためである。

●人工言語学の範疇

- ・言語学的考察に耐える品質の人工言語

言語学の対象として人工言語を扱う以上、研究対象となる人工言語は言語学の成果を著しく覆すようなものであってはならない。あくまで言語学から見て不自然でない人工言語

を取り扱う必要がある。人工言語が持つ「何とでも作れる」という恣意性を極力排他した、言語学の知識を十分に活用して作られた人工言語のみが研究対象となり得る。

従って、自然言語からの参照の度合いが高いアポステリオリ言語や、言語学に十分即した上で作られたアプリオリ言語が筆疇となる。

また、これらの条件を満たす言語であっても、その言語が発展途上であるとか作られたばかりであるとか情報量があまりに少ないといった状況にある場合は、研究対象として耐えられない。

人工言語学では「人工言語で言語学をする」という主旨を満たすため、言語学的考察、特に対照言語学的分析に耐えうる品質の人工言語を対象とする。

言語学的考察に耐えうる人工言語とは、具体的には以下の条件を満たすものである。

- 1:当該人工言語が言語学的に見てあまりに不自然な造りをしていないこと。詳しくは言語学に矛盾しない人工言語の作り方を参照
- 2:当該人工言語の日本語資料が論文執筆に十分な程度存在し、かつ日本国内で容易に利用できること。具体的には1万語を超える単語帳形式でない辞書に加え、文法や音韻論に関する詳細な教材が、書籍かオンラインで利用できること
- 3:少なくとも10年以上使用された実績があり、対照に用いるだけの信頼性を有すること

本研究学会発足時点で上記の条件を満たしていた人工言語はアルカとエスペラントしか存在しなかったため、人工言語学ではこれらを自然言語と対照可能な人工言語と見なす。

・ノコギリの押し引きに見る言語学の非独立性

言語学者の中には人工言語を研究筆疇としないだけでなく、他の分野の学問と提携して言語現象を解き明かそうとさえしない者がいる。これは問題である。というのも、実際のところ言語現象は必ずしも言語学だけでは説明することができないためである。言語現象を説明するには言語学だけでは不十分で、言語学以外の分野を使わないと説明できないことが多々あるということである。

つまり言語学は言語現象を解明することに関しては独立した学問ではないのである。にもかかわらず言語学者の中には言語学だけで言語現象を解明しようとする者がいる。これは現実に即していない。

事実は事実と認めた上で対処しなければならない。人工言語学は言語学の非独立性を認めた上で、諸学問と連携しつつ言語現象を解明していくというスタンスを取る。

言語学の非独立性は例えばノコギリの押し引きなどに見ることができる。

日本語には「ノコギリを引く」というコロケーションがある。しかし「ノコギリを押し」というコロケーションはない。これはなぜだろうか。この言語現象は実は言語学だけでは解明できない。

ご存知の方も多いただろうが、日本ではノコギリは引くときに力を入れるようになっている。一方、欧米では押すときに力を入れるようになっている。いわゆる引きノコと押しノコの違いである。

引きノコは比較的柔らかい杉などの材質を切るのに用いる。このため、日本やトルコなどで採用されている。

なぜ日本語には「ノコギリを押し」というコロケーションがないのかというと、それは日本では引きノコを使うからである。そして引きノコを使うのは、杉などを切る機会が多いためである。

杉が多いという植生は日本の風土によるものであり、杉をよく使うというのは日本の文化によるものである。つまり、文化や風土という視点を入れないとこのコロケーションについては解明できないのである。

このように、言語現象は必ずしも言語学だけで解明できるとは限らない。風土や文化など、言語学以外の見方を踏まえて考察せねば解明できないことがある。

以上から、言語現象を説明するには言語学以外の視点も取り入れる必要があるということが分かった。言語学は言語現象の解明に関して独立した存在ではないのである。

また、当然それは人工言語学にもいえることである。人工言語学は言語学の一分野だが、考察を行う際は言語学だけでなく諸学問と合わせて研究していくことになる。

2:人工言語のランドマーク

ここでは人工言語史を動かしてきた出来事と、人工言語史に名を刻んできた者たちについて通時的に列挙する。これらの偉人が行った偉業が人工言語史を動かし、形成してきた。

このリストでは人工言語の歴史を揺り動かしたランドマークだけに言及するため、雑多な出来事や二番煎じの作品については掲載するに足らないと判断した。

西暦	出来事
12世紀	ビンゲンのヒルデガルト、Lingua Ignota（『未知なる言語』）
13世紀	ライモンドウス＝ルルス、Ars Magna（『偉大なる術』）
1638	フランシス＝ゴドウィン、The Man in the Moone（『月世界の人』）
1647	フランシス＝ロドウィック、A Common Writing（『共通の文字』）
1661	ジョージ＝ダルガーノ、Ars signorum（『記号術』）
1668	ジョン＝ウィルキンズ、An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language（『真正の文字と哲学的言語に向けての試論』）
1677	ドニ＝ド＝ヴェラス、『セヴァランブ族物語』
1678	ライプニッツ、Lingua Generalis（『一般言語』）
1710	ティソ＝ド＝パト、『ジャック・マセの冒険旅行』
1797	ド＝メミユ(Joseph de Maimieux)、pasigraphie（パシグラフィー）で一躍時代の寵児に
1827	フランソワ＝スードル、ソルレソル（ソレソ）。1855年のパリ万博で1万フランの賞金を獲得
1855	ソトス＝オチャンド、『普遍言語の計画案』
1866	パリ言語学会、言語の起源と普遍言語にかかわる論文を受理しない方針を明らかに
1879	シユライヤー、ヴォラピュク。有名になった初の国際補助語
1887	ザメンホフ、エスペラント。世界最大の人工言語
1890	「ヘブライ語委員会」が設立され、ベン・イエフダーが代表に就任
1901	クチュラとレオー、「国際的補助言語を採択するための委員会」を発足

1907	クチュラとレオー、『新しい国際語』
1907	Uniono por la Linguo Internaciona Ido, Ido (イド)
1919	イギリスの委任統治当局、ヘブライ語をパレスチナにおける公用語の一つと宣言 現代ヘブライ語を人工言語とみなすなら、世界で最も成功した人工言語と定義で きる
1930	オグデン、Basic English (ベーシック・イングリッシュ)
1951	International Auxiliary Language Association, Interlingua (インターリングア)
1954	トールキン、『指輪物語』。芸術言語が徐々に花開いていく
1955	ジェームズ＝クック＝ブラウン、Loglan (ログラン)。サビア＝ウォーフの仮説 の調査のために設計されたという点で斬新であった
1975	ジェームス＝ノウルソン(James Knowlson)、Universal Language Schemes in England and France 1600-1800 を出版
1984	マリナ＝ヤグエロ(Marina Yaguello)、Les Fous du langage, des langues imaginaires et leurs inventeurs を出版
1991	セレン＝アルバザード他、arka (アルカ)。2011年に、アプリオリ自然主義世界 を持ったアプリオリ自然主義人工言語の中で世界一深く作り込まれた人工言語 として同言語を完成させる
1995	Microsoft、Windows 95 を発売。人工言語の作業が紙から PC ヘシフト開始
1995	ウンベルト＝エーコ(Umberto Eco)、The Search for the Perfect Language を出版
00年代	インターネット・ブロードバンドの普及。人工言語の公開が容易に
2004	ネリエール、globish (グロービッシュ)。一応国際補助語に分類しておく
2005	セレン＝アルバザード、ウェブサイト「新生人工言語論」を立ち上げ。人工言語 の作り方や人工言語そのものの解説を国内で初めて行い、啓蒙する
2009	アリカ＝オクレント、In the Land of Invented Languages を出版
2010	マーク＝ローゼンフェルダー、The Language Construction Kit を出版。言語学の初 歩から説明しつつ人工言語の作り方を指南。ただし言語の背景となる文化や風土 の作り込みについてはあまり言及がなく、自身が作った言語も地球と異なる舞台 なのに地球の言語を基にしたアポストリオリ言語であるという矛盾を抱え、造詣 が甘い

2011	セレン＝アルバザード、人工言語学研究会を発足。人工言語学という新しい学問が生まれる
2011	セレン＝アルバザード、『紫苑の書』を出版。異世界で言語をゼロから学んでいくというリアリティを追求した世界初のファンタジー小説で、芸術言語の歴史上大きなランドマークとなった
2011	セレン＝アルバザード、『人工言語学・アルカ』（本書）を出版。人工言語学が提唱され、アルカが出版された人工言語になり、全文アルカの小説『夢織』が収録され出版された。ここまで本格的にゼロから作り込まれた人工言語が登場し、出版されたのは世界初の快挙である

3:人工言語の術語

●人工言語の定義

『言語学大辞典第6巻』の「自然言語と人工言語」の定義によれば、自然言語は「人間の各集団の間に自然発生的に形成されたもの」とあり、人工言語は「自然言語のもつ曖昧性(ambiguity)をとり除き、ある分野に限定して、その分野での必要と使用目的に合うように人工的に設計した言語」とある。

この定義に従うと国際補助語や芸術言語のみならず数学用に作られた言語やプログラム言語も人工言語に含まれることになる。具体的にはエスペラントやアルカだけでなくBASICやC言語も人工言語に勘定される。

しかしこの定義には疑問の余地がある。人工言語は自然言語のもつ曖昧性を取り除いたものとあるが、この定義だと自然主義人工言語を人工言語に含めることができない。また、特に必要性や目的意識のない人工言語も除外されてしまう。自然言語を「人間の各集団の間に自然発生的に形成されたもの」と定義するのに異論はないが、人工言語については「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された言語」と定義するほうが網羅的であろう。この定義だと自然主義人工言語や、特に必要性や目的意識のない人工言語も含めることができる。

●人工言語の類義語

人工言語の類義語は複数存在する。以下に例を挙げる。

- 1:人工語
- 2:計画言語
- 3:架空言語
- 4:創作言語

1は『言語学大辞典』などが採用している。やや古いイメージがあり、2011年現在ではあまり使われない。そもそも言語学では一般に自然語という術語は使わず自然言語という術語を使う。従ってその対語は人工語でなく人工言語が適切であろう。

2は人工言語が計画的に作られる側面を強調している。ただし「言語案でしかなく実際には使われない」という暗示を感じてこの術語を避ける者もある。

3や4は芸術言語に分類される言語の制作者が用いることがある。また、単に人工言語という術語を知らずに人工言語に相当するものがないかとインターネット検索をする人間が、3や4を暫定的に打ち込むことがある。これは人工言語に関するホームページのアクセス解析を通じて得た情報である。

●英語における人工言語の類義語

1:constructed language

2:conlang

3:artificial language

4:planned language

最も一般的な英訳は1とその略語の2である。なお、人工言語の制作者は conlanger と呼ばれる。

3は直訳すると最も人工言語に近いが、欧米圏では1や2の方が一般的である。4は計画言語に当たる。

●自然言語

人工言語と異なり、自然言語は類義語が豊富でない。自然言語ではほぼ統一されている。英訳は natural language (natlang)である。

●人工言語の範疇

人工言語を「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された言語」と定義した場合、その条件に適合するものは全て範疇となる。

ここでいう言語は典型的には人間のコミュニケーションに用いられる音声を伴ったものであるが、手話のように音声を伴わないものやプログラム言語のように人間のコミュニケーションに用いないものも含んだ広義の意味で定義される。

人工言語と自然言語は対極の位置にあるが、その中間的存在がある。それはピジンやクレオールである。

ピジンとは例えば商港の英語話者と中国語話者の間などで発生する。中国語話者が意思疎通を図るために英語を簡略化し、商業用として実用する。それがピジンイングリッシュである。ピジンイングリッシュは英語を簡略化したものなので自然言語である。しかし元の英語に比べると人工言語に近い性質を持っている。

ピジンイングリッシュは通常、文法が複雑な構造を持たないように変えられる。こうしたことは英語母語話者間では起こらないことで、かなり人為的に言語が変えられているといえる。この点においてピジンは人工言語に近いといえる。

しかし商人らは人工言語を作ろうと思って意図的に言語を簡略化したのではない。ピジンイングリッシュは商業上の必要性から自然に発生したものである。ゆえに人工言語ではない。よってピジンは人工言語と自然言語の中間に位置するといえる。

なお、その土地の子供たちがピジンを母語として習得すると、ピジンはクレオールと呼ばれるようになる。本質的にピジンと同じであるため、クレオールも人工言語と自然言語の中間に位置する。

このように、人工言語と自然言語の間にはピジンやクレオールが存在する。これらは自然言語よりは人工的であるが、人工言語の範疇には含まれない。

なお、暗号については人工言語に含める立場と含めない立場があるが、上で定義した要件を満たすため、本研究会は暗号を人工言語に含める。

仮に日本語の文字を特定の置換規則によって変換しただけのものであろうと、その置換規則自体が意図的かつ人工的である。

●人工言語の分類

a priori language, a priori conlang : アプリオリ言語、先験語。既存の言語から語彙や文法や音韻論といったあらゆる言語的要素を流用しない言語のこと。アポステリオリに比べて制作に労力がかかる。アルカなど。

a posteriori language, a posteriori conlang : アポステリオリ言語、後験語。既存の言語から語彙や文法や音韻論といった言語的要素を一部ないし全部流用する言語のこと。エスペラントなど。

international auxiliary language, auxiliary language (auxlang) : 国際補助語。エスペラントなど。

artistic language (artlang) : 芸術言語。アルカなど。以下の内訳がある。

--personal language, hermetic language : 個人言語。主に自分にしか分からない秘密の暗号などとして用いられる言語。ピンゲンのヒルデガルトによる Lingua Ignota (未知なる言語) など。

--fictional language : 架空言語 : 広義には人工言語の類義語で、狭義には芸術言語の内訳である。トールキンの中つ国の言語など。

--alternative language (altlang) : 代替言語。もし歴史が異なっていたら言語がどう変化していたかを考察したもの。本質的にアポステリオリ言語である。

--jokelang : 冗談言語。その名のとおり余興として作られる言語。しばしば言語学的に見て不自然な性質を持つ。

engineered language (engelang) : 工学言語。実験的に作られる言語。以下の内訳がある。

--philosophical language : 哲学的言語。フランシス＝ロドウィックの『共通の文字』など。

--taxonomic language : 分類学的言語。哲学的言語とほぼ同義。概念を図書分類法のように分岐させていく側面を強調している。ジョン＝ウィルキンス『真性の文字と哲学的言語にむけての試論』など。

--experimental language : 実験的言語。ある構造を持った言語が機能するかどうか確かめるために試験的に作られる言語を指す。

--ideal language : 理想言語。普遍言語とともに主に 16-18 世紀にヨーロッパで起こった人工言語の論争の中で用いられる術語。

--logical language(loglang) : 論理的言語。工学言語の持つ論理的な側面を強調した術語。人工言語史的には下記の programming language の端緒となった。

--programming language : プログラミング言語、プログラム言語。コンピュータを扱う際に用いられる言語。BASIC, C, FORTRAN など。

naturalistic language, naturalistic constructed language, naturalistic conlang : 自然主義人工言語。自然言語との混同に注意。自然言語と見紛うような人工言語のこと。しばしば制作者に言語学や語学の知識が要求され、制作に労力がかかる。

--naturalistic artlang : 自然主義芸術言語。芸術言語のうち、自然言語に似せたもの。アルカなど。

●ドゥリンチェコによる分類

『言語学大辞典』の「人工語」によれば、ドゥリンチェコは人工言語を次のように分類した。

先験語——哲学的言語

後験語——図式派 : エスペラントなど

自然派 : インテルリングワなど

同辞典によると先験語すなわち哲学的言語とは「人間がもっている論理は人類全てに共通であるからこれを基盤として言語を構築すれば コミュニケーションの手段として機能を発揮するという発想から生まれてきた言語案」である。先験語は 16-18 世紀を中心に、ベーコン、デカルト、ライプニッツらによって考察されてきた。なお、本論では先験語と哲学的言語は同義ではない。これはあくまで辞典による分類である。

対して後験語は先験語に少し遅れて発達し、19 世紀にザメンホフによるエスペラントの台頭で一世を風靡した。図式派とは自然言語の持つ不規則性や例外を排したものである。対して自然派とは自然言語の持つ不規則性や例外を多少認めたものである。

ドゥリンチェコの分類は全ての人工言語を分類しきれないという欠点を持っているが、先験語と後験語に人工言語を大別した点は有益である。人工言語を先験語と後験語に分けた上で自然言語と対比すると、人工言語と自然言語はデジタルな違いではなくその間に異物の存在を許すアナログなものであることが分かる。

後験語は自然言語を基盤とした言語で、図式派も自然派もそれは共通する。図式派は言語の持つ不規則性や例外を認めないが、自然派はそれらを認める。従って上記の図で最も自然言語から遠いのは先験語であり、最も自然言語に近いのは自然派である。

同じ人工言語でも後験語のほうが先験語より自然言語に近い。更に同じ後験語でも自然派のほうが図式派より自然言語に近い。ゆえに人工言語と自然言語の間にはより人工言語らしいものより自然言語らしいものがあるといえる。ただし先験語でも自然主義人工言語の場合は自然言語に近い性質を持っている。

●人工世界

人工世界は constructed world (conworld)と呼ばれるもので、「特定の個人ないし集団によって意図的に形成された世界」と定義できる。

内訳には人工文化(constructed culture, conculture)、人工風土(constructed climate, conclimate)がある。

人工世界にもアプリアリとアポストリアリがある。例えば人工言語アルカが使われる人工世界カルディアは前者の好例である。

●人工言語は必ず世界を背景に持つ

言語は文化や風土から影響を受ける。例えば日本語で稲と米は単語レベルで区別されるが、英語ではどちらも rice である。これは日本人が米を主食とするからであるが、その原因は日本の風土にある。

このように言語は文化や風土から影響を受けるため、人工言語を作る際は背景となる世界についても考察する必要がある。

既存の世界を流用した場合、その人工言語はアポステリオリ人工世界を持つ。ゼロから世界を構築した場合、その人工言語はアプリオリ人工世界を持つ。

なお、既存の世界をそのまま用いた場合は人工世界とは言わない。現実世界である。例えばフランスを舞台にした人工言語を作った場合、その人工言語は人工世界を持たない。

従って人工言語は人工世界と現実世界のいずれかを背景を持つといえる。

●最も制作が難しい人工言語

以上の分類から、最も労力を必要とし制作者に広範な知識が要求されるものは、アプリオリ人工世界を持ったアプリオリ自然主義人工言語である。

この類型は言語と世界をゼロから作らねばならず、かつ既存の言語や世界から要素を流用することが許されない。この類型の好例は人工言語アルカと人工世界カルディアである。

アプリオリ人工世界を持ったアプリオリ自然主義人工言語はその制作の難しさから人類が成しえてこなかったものであり、人工言語アルカが史上初のものである。

厳密に言えばアプリオリ人工世界を持ったアプリオリ自然主義人工言語をたった1語でも作れば同じ類型を作ったことにはなる。そこで問題となるのはその規模すなわち作り込みの深さである。

アルカの場合は2011年現在で単語帳形式でない辞書があり、語彙は15000語を超える。教材も豊富で、文法も細部に到るまで作り込まれている。音韻論はもちろんのこと、音声学も定められており、発声法や息の使い方についてまで言及されている。我が国のインターネット検索における知名度も申し分ない。また、制作開始は1991年で、少なからず作業歴がある。

4:言語学的に矛盾しない人工言語の作り方

●本稿の目的と読者対象

本稿では言語学的に矛盾しない——あるいは控えめにいっても不自然でない——人工言語の作り方について論ずる。

この作り方が必要になるのはアプリアリの人工言語のみである。アポストリアリには必要ない。借入元の言語が自然言語だからである。例えばエスペラントに本稿は必要ない。アプリアリの中にはリアリティを追求しない言語と、リアリティを追求する言語がある。このうち前者にこの理論は必要ない。例えばクリンゴン語に本稿は必要ない。

本稿を必要とするのは、現実と見紛うような架空の世界で使われる「まるで本当に存在するかのよう感じられる自然言語」を作りたい研究者だけである。

以下はこのタイプの人工言語制作についての説明であるため、人工言語の作り方で述べた人工言語制作の手順とは必ずしも一致しないという点に注意したい。

●人工言語に必要なのは肩書きではなく努力と書籍代

さて貴方が上記の目的を持ったものと仮定して、まず最低限必要なのは言語学の知識である。最低限大学の学部レベル、できれば大学院レベルが望ましい。

言語学はたいてい文学部の国文学科とか英文学科といった学科で扱われる。このままだと文学部に所属することが必要に思えるが、実はその必要はない。言語学は工学などと異なり、高価な実験機材を必要としないからである。音声認識など一部の分野は機材が高価だが、人工言語を作るのに必要な知識を得るには書籍代を捻出できれば十分である。

従って必要なのは自己の努力と書籍代のみである。すなわち、言語学は独学でどうにかなる。更に言えば、大学の文学部で言語学を専攻する必要もない。筆者の大学院時代の専攻は言語学だったが、その筆者があえて不必要と断ずる。ではそれはなぜか。それは言語学が人工言語を範疇としないためである。この理由については後述する。

筆者は高校時代に言語学を独学で学び、言語学では人工言語を扱わないということを知った。それでもネットも普及していなかった当時は大学で言語学をやるのが最も人工言語に近づく方法であった。それで仕方無しに大学で言語学を履修したが、学部の授業は言語学を知らない人間のためのものなので、既に高校で独学していた自分に得るものはなく、学部時代から大学院の授業に混じっていた。先輩方のご厚意で、言語学関連の同好会にも所属させていただいた。だがそれでも人工言語をやることは許されなかった。

だから大学では少しでも人工言語に役立つ分野を研究をしていた。人工言語をやっていることについては変人扱いというか、どちらかというとならざらされていたように思う。なお、大学の授業はアルカに関しては無利益だったが、それ以外のことは大変勉強になった。人工言語という面で見れば、大学に所属する必要はないというのが自分の経験から言えることである。だからこそ、貴方が言語学の素人であろうが、文学部卒でなかろうが、理系であろうが、高卒であろうが、人工言語を作るという目的においては肩書きなど不要で、自助努力と書籍代さえあればどうにかなると言える。

ちなみに、大学自体は非常に校風が自分に合っていて好きだった。いい思い出もたくさんあり、同級生も先輩方も先生方も温かい方々だった。

書籍代を何度も強調したのは、専門書には平気で数万円もするものがあるからである。筆者は親が借金王だったため、大学院の費用等はむろんバイト代で捻出したし、その上で専門書を買わねばならなかったから、大変苦労した。バイトをして本代を稼いでの繰り返しだったので、取得単位も最低限度ギリギリで卒業したし、周りがするような合コンも一度もしたことがない。彼女とデートをしてもジュンク堂に入り浸るだけとか、たこ焼きをひとり1パック買わずに半分こするなどといった惨めな思いをさせてしまっていた。

塾講師だけでは足りず、夏休みには住み込みで農業をして本代を稼いだこともあった。片方の指2本で20kgの箱を持ち上げてトラックに積んでいく作業(つまり一回あたり両手で40kg)や、40℃を越える炎天下での水なしの作業などが印象深い。全ての農家がそうではないと思うが、たまたま行ったところがバイトを冷遇するところだったのが不運であった。その家族は水を飲みながら作業をするが、こちらには炎天下でも水を渡さない。玄関も使わず、窓から出入りさせる。トイレも使用させない。夕飯は米と茄子。その家族の親戚が車で事故を起こして筆者が頭から流血して顔面が文字通り血だらけになっても気付か

い振りをするなどなど。ちなみにその血は夕立で天を仰いで落とした。そんな環境でも言語学やアルカのことを常に頭の中で考えていた。

思えば大学時代に別件で倒れて救急車で搬送されたときも、微かに見える救急車の機材に書いてあるドイツ語の語源を考えたりする人間だったので、どのような状態であっても言語学とアルカからは頭が離れなかったのだろう。金さえあればこんな苦勞はしないで済んだものと思った。

このように、筆者は本代にはずいぶん苦勞させられたから、どうしても意識してしまう。社会人になって金の心配がなくなってからは楽になったのが嬉しかった。今や投機の利鞘を大震災の復興支援投資に当てるなどといった活動もできるほどになった。

だが経済的な安定と引き換えに、今度はそれまでの無理が祟って体が悲鳴を上げてきたのが残念である。埼玉から京都までロードレーサーですらない自転車で行くだけの体力はあっても、人工言語の作業を長年続けるのは体に堪えた。

話を戻そう。いずれにせよ、もし貴方が学生でなく社会人であれば、書籍代は気にする必要はない。必要なのは努力のみである。

●最低限守るのは言語の普遍性

最低限守るべきことは言語類型論における普遍性である。言語には次のような絶対的普遍性というものがある。

・文字を持たない言語はあるが、音声を持たない言語はない（手話は特定の団体によって人工的に作られたものなのでここには含めない。また、滅んだ言語で文献にしか残っていないものでも、使われていた当時は音声を使用していた）

- ・あらゆる言語は二重分節を持つ
- ・あらゆる言語は名詞と動詞を持つ
- ・摩擦音が1つ以上存在すれば、そこには必ず[s]がある
- ・ある言語の語順がVSOであれば、形容詞は名詞の後に来る

これらは問答無用で貴方の言語に取り入れなければならない。普遍性は我々にとって制約ではなく非常に便利なものである。たいていの作者はリアルに作り込もうと思ったときに、言語学の理論によすがを求める。このとき普遍性は大変便利に感じられる。

●言語学概説を学習したら、まずは言語類型論を

しかし残念ながら、言語学が発見した普遍性は非常に少ない。ほとんどが強い傾向か弱い傾向でしかない。それでもそういった傾向は優先的に取り入れたほうがリアリティが出る。例えば世界の語順は松本(2006)によると SOV が最も多く、OSV が最も少ない。SOV と SVO だけで実に 84.3%ものシェアを占める。リアリティを追求するならば、貴方は SOV か SVO を選択するのが最も無難である。OSV にしたからといってリアルでないわけではない。しかし SOV や SVO のほうが「圧倒的に有り得やすい」のだから、それは「いかにも現実味を帯びて感じられる」ということに繋がり、その分だけリアルに感じられる。ただし繰り返すが、別に OSV にしようがそれは貴方の選択だ。

こういった傾向は言語類型論の分野で知ることができる。まず言語学全般を学んだ後に学習すべきは言語類型論である。貴方はいずれ語順だけでなく、膠着語や屈折語といった形態や、対格言語か能格言語といった設定についても決めねばならない。そのときに言語類型論は必要となる。

さらに進んでいけば、ある言語が 100%膠着語に分類されるようなことはまず起こらないなどといった壁にもぶつかり、言語の分類が容易でないこと、換言すれば言語の制作も容易でないことを知ることになる。

●次に必要なのは音声学

音声学と音韻論は優先的に学ぶべきである。言語は音でできている。貴方の言語がどの音韻を持つのか定める必要がある。このとき、IPA 的に見て絶対に発音不可能な音声を選択してはならない。

たまに火星語を話せるという馬鹿がテレビに出てくるが、人間の発声器官は非常にデリケートで、人間に非常に近い構造の猿ですら人間の言語を模倣できない（直立歩行ができな

いというだけのことで)。まったく違う環境の星で人間と同じ形態の生物は生きていけないので、火星なり金星なりがいるとするなら、それらは人間とはかなり異なった形態を持つ。すなわち仮に彼らに発声器官があったとしても、相当人間のものとは異なっている。従って逆に人間が彼らの音声を真似することはできない。ゆえにその詐欺師が火星語を喋れるということは調音音声学的に見てありえない。

こういうことは常識でも分かることだが、IPAの繊細さに触れるとなお分かることである。貴方はIPAが提示する限られたテーブルの中から音声を選び、自分の言語が持つ音素を選んでいかねばならない。

先に類型論をやらせたのには理由がある。例えば[z]があるのに[s]がない言語は存在しない。これは類型論が明らかにしている。ところがこういったことを知らないと、言語学的にありえない音素の選び方をする恐れがある。

音素を選ぶ際は自分の好みや慣れだけで選んではならない。印欧語やシナチベット語族など、様々な語族の言語を調査し、共時的だけでなく通時的にも音素の変遷を調査した上で、自分の言語の音素を定める必要がある。

筆者は大学時代に図書館に入り浸って『言語学大辞典』の一卷から五巻の補遺まで通読し、別巻の世界文字辞典にも目を通した。また、術語編については使用頻度が高いとして購入した。それくらい入念な調査が必要である。

ちなみに、筆者が地球の文字で最も洗練されていると思うのは、学習効率や画数の問題はあれど漢字である。

●文法は二の次。考察は広域範囲で

貴方は恐らくとっとと文法づくりという楽しい作業をしたいのかもしれない。しかしそれはだいたい後の話である。類型論をよく学んだ後に文法を定めると、いかに類型論を知らなかった頃に自分が描いていた青写真が荒唐無稽だったかが分かるはずである。

文法は変化するものであり、ひとつの文法的要素はほかの文法的要素に影響を与える。例えば語順がVSOであれば、形容詞は常に名詞に後置される。間違っても貴方の勝手な好みで無茶苦茶に作ってはならない。類型論を踏まえた上で、さらに周辺民族の言語からの影響や歴史的变化も考慮して定める必要がある。

例えば日本語の文法は日本語だけのものではない。環太平洋の諸語と合わせて広域で考察されるべきものである。ということは、貴方が作りたい国の言語もその周辺地域と合わせて広域で考察する必要がある。このあたりの事情は松本(2007)が参考になるだろう。

気が逸って文法を作りたい気持ちは分かる。そして言語を作ろうと思えば初期の段階で人称代名詞を組むことになるだろう。だがこの人称代名詞のような単純なものでさえ、後述するスル言語かナル言語かによって異なるシステムを持つため、安易に決めることはできない。例えば日本語のようなナル言語においては一人称代名詞が一般に豊富で、英語のようなスル言語においては一般に豊富でない。人称代名詞ひとつ組むにもほかの様々な文法要素と合わせて考える必要がある。よって、やはり組む前に勉強するという原則が活きてくる。

なお、人称代名詞については松本(2010)が極めて詳しい。参考文献に挙げる数々の良著もそうだが、筆者がアルカを作成する前に出版してほしかったものである。良著が出揃っていれば、アルカ史が経た紆余曲折もいくらか短く済んだはずである。

ときに貴方は恐らく日本人だろうから、対格言語に慣れているはずだ。日本語も英語も対格言語なので、貴方の言語は自然と対格言語になりやすいだろう。しかし世界には能格言語というものもある。つまり能格言語という選択肢もあるわけだが、これも適当に好みや「面白いから」で決めてはならない。

さらに言えば、能格言語と対格言語は完全に分離した存在ではない。時代を経て能格言語から対格言語へ変わることもすらある。例えば英語は対格言語であるが、近藤(2006)によればその元となった印欧語は能格言語であったというのが言語学者の間で広く支持されているという。

また、言語が対格か能格かというのはほかの文法要素にも影響を与える。例えば近藤(2006)は能格の起源を具格に求めている。能格言語という特徴が文法的には一見関係ない具格と関連しているというのは興味深いことである。というのも、このことは能格言語か対格言語かという類型を選択する際にほかの文法要素も合わせて考えなければならないことを意味するからである。

なお、近藤は能格の起源を具格に求めているが、一般に言語学者の間では属格起源説が広く支持されている。

●言語らしさ

類型論・音声学・音韻論・文法。これらを検討すると言語の骨子が出来上がってくる。当然それらを組む過程で基本語や機能語の類は創られていくだろう。その際にはまた別途形態論を学ぶ必要がある。

その作業が終わると簡単なことが表現できる程度になってくる。この時点で気付くのは、同じ現象を表現するのに複数の言い方が存在するということである。例えば「彼は私にリンゴを与えた」という文と「彼からリンゴをもらった」ないし「彼がリンゴをくれた」という文は意味的には等しい。しかし最初の文はいかにも翻訳調であって自然には感じられない。なんとなく日本語らしくないのである。このように、同じ内容を複数の言い方で表現できるようになって初めて感じられるのが、「言語らしさ」の存在である。

各言語には「言語らしさ」というものがある。例えば日本語の「雨が降る」という文は自然だが、「雨る」は非文である。逆に英語の"It rains"は自然であるが、"Rain falls"は典型的な表現ではない。

「雨が降る」は日本語らしいが、「雨る」は日本語らしくない。反対に"It rains"は英語らしいが、"Rain falls"はそれほど英語らしくない。日本語は雨を名詞として使うのが自然で、英語はrainを動詞として使うのが自然である。このように、各言語には「その言語らしさ」というものが存在する。

日本語の表現に近い言語は次の通りである。

韓国語では비가내리다（雨が降りる）ないし비가오다（雨が来る）と表現し、日本語と同じ表現方法である。

中国語では「下雨了（雨が降ってきた）」のように表現され、雨は動詞としては使われない。ただし日韓と異なり、雨が動詞の後ろに回り込んでいる点で文法的に異なる。

フィンランド語ではSataa vettä（雨が降る）、Sataa lunta（雪が降る）のように表現する。sataaは元々は「降る(fall)」を意味する動詞で、本来これ自体に「雨」という意味はない。vettäはvesi（水）の単数分格形である。中国語と同じく動詞が先行している。

日本語などは動詞の部分を変化させることで、自然現象の起こり方をより具体的に示すことができる。例えば霜ならば「降り」、霧ならば「出る」というように。中国語も雨なら下だが、風なら刮が使える。

しかし松瀬(2007)によるとネワール語ではこれらをすべて WAYE (くる) で表現できる。このように、一見日本語と似たタイプの言語の中にも異なった特徴を持つものがある。

一方、英語の表現に近い言語は次の通りである。

フランス語では Il pleut で「雨が降る」。同じくドイツ語では Es regnet。これらは英語同様、主語の省略を容認しない言語である。そのため、形式主語を必要とする。

同じ印欧語でも、主語を省略できる言語がある。例えばイタリア語では piove、スペイン語では llueve、ポルトガル語では chove となる。

ちなみに、両方の表現方法を取る言語もある。英語で「雨が急に降りだした」という場合は rain を動詞としては使わず、"Suddenly rain began to fall" のようにいう。アルカでは "eskat im fis" (今日は雨が降った) のように雨を動詞として使う傾向が強い一方、"esk lunat im fis" のように「雨が来た」と表現することもできる。

ただ、どの言語も雨を名詞として使いたがるか動詞として使いたがるかといった好みがある。もしこの好みを違えた場合、その文は不自然かあるいは非文になる。

多少不自然くらいなら意図は通じるかもしれない。例えば「雨る」なら人によっては理解されるかもしれない。だが依然として「雨る」は自然ではない。すなわち、各言語にはその言語らしく感じさせる表現方法がある。それは「雨が降る」と「雨る」の差に現れている。

この「言語らしさ」については国内外の言語学者により様々な術語を使って言及されており、言語類型論や対照言語学などの諸分野で論じられている。国内では特に池上(1981)に端を発する研究が牽引車となっている。

なお、ここで述べる言語らしさというのは例えば池上(2006)の「外国語と意識的に取り組んだことのある人、あるいは、母語でもそれを客体化して改めて捉え直してみたことのある人ならば、それぞれの言語にはその言語化——つまり、表現の構成の仕方——に関して、何か好みの傾向といったものがあるという経験をするのではないであろうか」で表現され

るような性質のものである。この表現からも分かるとおり、それはたいてい普遍的な法則という類のものより、主に好みや傾向といった類のものである。

●言語らしさを作る傾向

國廣(1982)、中村(2004)、池上(1981, 2007)など一連の研究によれば、言語にはある特徴があれば、それとは異なる特定の特徴を有する傾向があることが分かっている。

池上(1981)において日本語は「なる」型言語（以下ナル言語とする）に分類され、英語は「する」型言語（以下スル言語とする）に分類される。

他方、日本語はコト言語に分類でき、英語はモノ言語に分類できる。ここでコト・モノの好例を挙げよう。(2a)に見られるように、日本語はコト言語に分類することができる。(2b)はいささか不自然である。

(1) Do you like me?

(2a) 私のことが好きですか。

(2b) ?私を好きですか。

面白いことに、一般にスル言語はモノ言語であり、ナル言語はコト言語だという傾向がある。同じくスル言語は have 言語であり、ナル言語は be 言語だという傾向がある。これはつまりある言語がスル言語であれば、その言語はモノ言語かつ have 言語である傾向が強いということを意味する。日英で検証すると以下ようになる。

(3) I have a sister.

(4) 私には妹がある (いる)。

このように、ある特徴が他の特徴の存在を示唆するという現象が言語には見られる。ただしこれはあくまで傾向であって、必ずしも普遍性のあるものではない。しかし諸特徴が互いに傾向を持ってまとまった群を成すという現象はどの言語にも見られ、この群が各言語の言語らしさを形成していると考えられる。

●人工言語の言語らしさ

自然言語は言語らしさを有するが、人工言語はどうだろうか。

アポステリオリの場合、借用した言語の言語らしさをまるまる使用することで言語らしさを獲得できる。

しかしアプリオリの場合はゼロから言語を構築しなければならないため、制作者に知識がないとスル言語なのに be 言語というような、言語学的に見てあまり一般的でないような言語を形成する恐れがある。

言語制作者が言語学の知識を持った上であえて思考実験として不自然な言語らしさを与える分には問題ない。しかし異世界で特定の民族に使われる言語としてそのアプリオリ言語を制作した場合、不自然な言語らしさを持ったその言語は言語学的に見て不自然といえる。創作の観点でいえば、その言語は考察が不十分で稚拙であるといえる。

ただし、もちろん地球の言語にもスル言語なのに本来スル言語が持ちにくい特徴を持ったものがある。あくまで傾向でしかないことに留意したい。

●人工言語が言語学の範疇でない理由

人工言語が言語学の一分野として相手にされない主な理由は2つある。

1つ目は通時的なもので、19世紀にパリ言語学会が「言語起源論と普遍言語に関する論文は受理しない」と定めたためである。暗黙のうちに普遍言語だけでなく人工言語全般が含まれたまま現在に至っている。

2つ目は共時的なもので、言語学が「現存するかあるいは過去に存在した民族が生活の中で培ってきた言語について研究するもの」だからである。従って人工言語は本来的に範疇に含まれない。

しかし本音を言えば理由はこれだけではない。ざっくばらんに言ってしまうと、人工言語が「後出しジャンケン」できる上、ほとんどの人工言語は言語学的知識のない人間が作った稚拙なものだからである。

そして何より、そもそも言語学者は一般的に人工言語に興味がなく、言語学の潮流どころか範疇ですらない人工言語を研究したところで成果にならないためである。これは理論云々以前の問題で、単なる現実である。

「後出しジャンケン」について説明せねばなるまい。

例えば上で述べた「スル言語は have 言語になりやすい」といった研究成果は、自然言語をいくつも検証した上で帰納した傾向である。

また松本(2006)によると、世界の言語の語順は SOV が最も多く、OSV が最も少ない。これも自然言語から帰納して得られた傾向である。言うまでもなく、これらの研究成果は言語学的に意義のあるものである。

ところが人工言語はこれらの成果をいとも簡単に覆することができる。まるで後出しジャンケンのように好きに帰納の結果を変えられる。というのも、いくらでも OSV の言語を増産することができるためである。

人工言語を自然言語の言語学に混ぜてしまうと、言語学がこれまでに発見してきた傾向を尽く覆される恐れがある。そのこともあって、言語学が人工言語を対象に含めるのは好ましくない。

仮に人工言語を言語学の範疇に含めるとするならば、言語学を踏まえた上で作られた精巧なアプリアリ言語や、完全なるアポステリアリ言語に限定せざるをえない。更には、これらの言語ですら自然言語のデータとは切り離して考察されざるをえないだろう。

●言語学的に矛盾しない人工言語

これまでに言語学が帰納してきたものは、その多くが普遍的な法則ではなく傾向である。

しかしそれは十分有用なもので、人工言語を作る際には考慮すべきものである。

言語学的に矛盾しない——あるいは控えめにいっても不自然でない——人工言語の作り方は、こうした考察を踏まえてこそ成しうるものである。

●異言語の影響

上で述べたことと逆説的になるが、真の意味で言語学的に矛盾しないあるいは不自然でない人工言語を創る場合、通時的な論考も交えねばならない。例えばスル言語だからといってスル言語の全ての特徴を安易に持たせてはならない。

日本語はナル言語であり、本来スル言語よりは無生物主語を使わない傾向にある。ところが金田一(1988)によると「戸は開かれたり」「賽は投げられた」のような、無生物を主語とする受動態などが洋語の影響で多く用いられるようになった」とある。

このように、異言語の影響を受けてナル言語でもスル言語の特徴を持つあるいは容認することがある。むしろ逆も然りである。従って人工言語制作においても、歴史的背景を踏まえて通時的に考察する必要がある。上述までの共時的な考察だけでは不十分である。

では歴史的背景を踏まえて人工言語を作るとは具体的にどういうことか。

アルカが使われるアルバザード国は何千年という歴史があり、異民族の脅威に晒されてきた。国内には多くの民族と言語が存在し、それは常にアルカに影響を与えてきた。(注：アルカの前身はアルバレンといい、その前身はさらにリュディア語というが、術語をいたずらに増やさぬよう、本稿ではアルカで統一する)

アルカはもともとスル言語であったが、国内に流入したナル言語を使用する民族と長い間共存したため、徐々にナル言語の性質を帯びていくようになった。現在でも(5a)に見られるように、本質的にはスル言語の性質が強い。

(5a) an til amel (私は妹を持っている→私には妹がある)

(5b) *amel xa an (妹は私がいる場所にいる)：非文でないが、文意が異なる。

他にも一般にスル言語は擬態語が少ない傾向にあるが、これはアルカも同様である。

また、一般にスル言語は間接受身を持たないが、これについてもアルカは同様である。

このように、基本的にアルカはスル言語の性質を強く持っている。

その一方、アルカにはナル言語の特徴も混じっている。以下に例を挙げる。

スル言語の特徴は客観的であり、ナル言語の特徴は主観的である。これと関連して一人称代名詞はナル言語において多様であり、スル言語において一定であるという傾向がある。実際に日本語には「俺」や「私」や「僕」といった一人称が豊富にあるが、英語はI、フランス語はjeのみである。

アルカの場合、この点はナル言語の特徴を持っており、一人称代名詞は多様であり、an, non, men, yuna, noel など多数ある。古くはアルカもスル言語に相応しく一人称はdel ないし an

のみであった。せいぜい女性用に non が加わる程度であった。人称代名詞が多様化したのはナル言語を持った異民族の流入以降である。

また、一般的にスル言語において動詞の焦点は結果にあり、ナル言語において動詞の焦点は行為全体にある。

例えば「説得する」の場合、日本語では「説得したが駄目だった」といえる。しかし英語の persuade は「説得した上で説き伏せた」というニュアンスを持ち、結果に焦点がある。それゆえ "persuade but failed" のような句は不自然である。"tried to persuade but failed" にすると自然な句となる。

アルカで「説得する」は soso というが、これは説き伏せることまでは含意しない。このことからアルカは動詞の焦点が行為全体に置かれることが分かる。すなわちここにもナル言語的性質を見出すことができる。

このように、アルカは共時的な言語学的傾向のみならず、通時的な事情も考察した上で創られている。

アプリオリ言語で言語学的に矛盾しない——あるいは控えめにいっても不自然でない——言語を創るには、共時的だけでなく通時的な論考も交えなければならない。

スル言語とナル言語のような特徴がもたらす傾向は人工言語造りにおいて極めて有用である。だがそれを利用する際は、必ず通時的にも考察し、歴史的変化や異民族との関わりについて考察する必要がある。

●2つの歴史

アルカは人工世界カルディアで使われる一方、作者らによって現実でも使われる。従ってアルカ史は架空と現実の2種がある。本稿では主に前者について述べてきた。補足として後者について少し触れておく。

もともとアルカは様々な自然言語の話者が集まってできた言語であるため、スル言語の特徴もナル言語の特徴も持っていた。ただ年代ごとにスルとナルの力関係は変化していた。おしなべて90年代前半はナル的で、後半はスル的であったと思われる。00年代前半まで

スル的傾向が強く、後半になってナル的要素が増したように思われる。結果として人工世界カルディアにおけるアルカ同様、両方の側面を持った言語になっている。

5:アルカの認知言語学的考察

●客観的把握と主観的把握

認知言語学において、認知主体は事態を把握するものと定義できる。認知の様式は2つに大別することができる。

1つは事態の外側から事態を把握する様式で、池上(2004, 2005)のいうところの客観的把握に相当するものである。

1つは事態の内側から事態を把握する様式で、同じくこちらは主観的把握に相当するものである。

事実上同一の概念を言語学者はそれぞれの術語で表す。例えば客観的把握のことを Langacker(1985)は最適視点配列(optimal viewing arrangement)とし、中村(2004)はDモードとする。同じく主観的把握のことを Langacker は自己中心的視点配列(egocentric viewing arrangement)とし、中村はIモードとする。本稿では最も字面から意味が取りやすいという理由で池上の術語に倣うこととする。

言語学的に矛盾しない人工言語の作り方における「する」型言語(スル言語)は客観的把握に相当し、「なる」型言語(ナル言語)は主観的把握に相当する。左記では取り扱う特徴の数がスル・ナル、モノ・コト、have・be など少なく、主にスルとナルの対比で説明した。しかし本稿では扱う特徴の数が多いため、スル言語・ナル言語ではかえって分かりにくくなってしまう。ゆえに、ここからは術語を客観的把握と主観的把握に統一する。

もちろん各術語はそれぞれ意味合いが異なる。例えば中村(2004 p40)ではIモードを「西田の認識論」、Dモードを「デカルトの認識論」というように、哲学的に分析している。そういう意味でそれぞれ術語のニュアンスは異なるが、本稿では便宜上池上の術語で統一する。

●アルカにおける事態の把握の仕方

先の記事でアルカは客観的把握と主観的把握の両方の特徴を持つことを明らかにした。一般にある言語の認知主体が客観的把握をするならば、主観的把握を交えることは少ない。森山(2009)は次のように述べている。

外界の事態を言語化するには「客観的把握」か「主観的把握」かという2通りの把握のしかたがあり、言語によってどちらを優先するかはそれぞれの言語が持つ類型論的特徴全体を左右する。

客観的把握と主観的把握は法則ではなく傾向なので、客観的把握をする言語であっても主観的把握をする言語の特徴を持つことはありえる。アルカもまたその一例である。

では具体的にアルカはどの程度客観的把握と主観的把握が混ざり合っているのだろうか。それにはまず最初に客観的把握をする言語が持つ諸特徴と主観的把握をする言語が持つ諸特徴のリストが必要である。

中村(2004 p41)を元にアルカの諸特徴を分析したものが下記の表である。中村(2004)、河原(2009)に比べ項目数が増減しており、最初の行もIモード・Dモードでなく本稿で統一した主観的把握・客観的把握にするなど、適宜編集を加えてある。

アルカの列に「客観」とあれば、その行の項目については客観的把握をするということの意味する。逆に「主観」なら主観的把握をするということである。客観>主観の場合、主観も許容されるが客観のほうが自然であることを示し、主観>客観はその逆である。列によっては特殊と示して検証欄で特記したのものもある。

相同性の項目	主観的把握	客観的把握	アルカ
動詞のとらえ方	「なる」的言語	「する」的言語	客観>主観
認知主体のあり方	感受者(有情者)(sentient)	動作主(agent)	客観>主観
状況のとらえ方	「コト」「トコロ」的言語	「モノ」的言語	客観
存在か所有か	BE 言語	HAVE 言語	客観
動詞の焦点	行為中心	結果中心	客観>主観

終わり志向性	なし	あり	客観>主観
名詞のとらえ方	無界性(unboundedness)	有界性(boundedness)	客観>主観
名詞のスキーマー	連続体スキーマー	個体スキーマー	客観>主観
一人称代名詞	多様	一定	主観>客観
敬語	発達ないし文法範疇	敬意表現	主観>客観
代名詞の省略	多い	まれ	客観>主観
非人称主語	なし	あり	客観
題目か主語か	題目優先	主語優先	客観
連体修飾構造	語用論的	文法的	客観
「ここ」の捉え方	場所中心	人中心	特殊
主客合体性	あり	なし	客観
モダリティ表現	エピステミック	デオンティック	客観
与格か間接目的語か	与格(利害の与格)	間接目的語(受け手)	客観
間接受身	あり	なし	客観
(英語の)中間構文	直接経験表現	特性記述表現	客観
動詞 vs 衛星砕付け	動詞砕付け	衛星砕付け	主観
主観述語	あり	なし	客観>主観
擬声語・擬態語	多い	少ない	客観
過去時物語中の現在時制	多い(e.g. 「る」形)	まれ	特殊
直接・間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達	客観

●アルカの認知様式

上のテーブルの結果を分析する。

総項目数：25

客観：12

客観>主観：8

主観>客観：2

特殊：2

主観：1

主観が客観に勝るものは3項で、出現率は12.0%である。このことから、アルカは圧倒的に客観的把握の性質が強いことが明らかとなった。すなわち分類上は英語などの仲間である。

ただ、もう少し深く掘り下げて考えてみたい。客観>主観のように主観が項目に食い込んでくるものも足せばその総数は11/25で、出現率は44.0%にも昇る。特殊の2を除いてカウントすると11/23であるから、約47.8%も主観性が食い込んでくることになる。

確かに客観的把握と主観的把握は傾向でしかない。だが客観的把握をする言語が主観的把握を交える割合は一般に低く、半々の割合で把握を行う言語というのは通常考えづらい。上で見た特徴群は傾向としては比較的強めで、例えば客観的把握に分類される英語や中国語は客観的把握の特徴をほぼ有する。

それに比べるとアルカの把握の仕方はだいぶ客観的把握と主観的把握が入り交じっているようにも見える。主観性が多少なりとも混じってくる項目を含めれば、およそ半分もの割合で主客が入り交じっているのである。これはすなわちアルカには日本語とも英語とも中国語とも異なった独自の把握の仕方があるということの意味する。換言すれば、アルカ独自のアプリオリな認知様式があることを意味する。

本稿のテーマはアルカの認知様式を明らかにすることである。アルカ独自の認知様式を理解することで、上のテーブルでは一貫性がなく感じられたアルカの把握の仕方に法則性が見えてくる。そして、それとともに「アルカらしさ」とは何かを明らかにすることができる。これは幻文読解はもちろんのこと、幻文ライティングにも極めて有用である。

●二重把握

・第三の把握

池上のいう客観的把握と主観的把握に第三の把握を足すと、アルカの本質が見えてくる。

客観的把握は事態の外から事態を把握する様式である。

主観的把握は事態の中から事態を把握する様式である。

そしてアルカは認知主体を主観的認知主体と客観的認知主体の2つに分離し、事態の内外から事態を把握する様式を持つ。この様式を二重把握という。

観念的な話が続いているので、ひとつ例を挙げよう。サッカーの試合をしていて、今ちょうどゴールが決まった瞬間だとする。もし貴方が観客席からシュートの様子を見ていれば、それは客観的把握である。他方貴方がキーパーだとすると、それは主観的把握である。二重把握というのは両方の視点でゴールの様子を見ることに等しい。テレビの放送ではゴールのシーンは様々な角度で繰り返し放送される。客席からの映像もあれば、キーパー目線の映像もある。両方の映像を見るのが二重把握に等しい。

a (アルカ) の前身は ar (アルバレン) である。その前身は ls (レスティル語) である。その前身は ly (リュディア語) である。

アルバザードには a のほかに lt (ルティア語) と n (風霧) がある。風霧は alt (アルティア語) と同義である。

このうち ly, ls, lt は客観的把握をする。どれも l で始まっているので L 型と呼ぶこともできる。

また、n は主観的把握をする。N 型と呼ぶこともできる。

a, ar は二重把握をする。どちらも a で始まっているので A 型と呼ぶこともできる。

sm (セルメル時代) に n が入ってきて、アルバザードは南部を征服され、幻風国 (カレンシア) ができた。これがきっかけとなり、ar に主観的把握が入り込む。

それまでの ar は ly を引き継いで客観的把握であったが、n との融和により主観的把握もするようになった。その結果生まれたのが先の二重把握である。

・論理と感情、客観と主観を分けて考える

はじめでのアルカでアリアはこう述べている。

私たちアルバザード人にとって言葉は――

- 1:論理を組み立て、
- 2:感情を分析する

――ための道具なのよ。内観したり主張したりするのに特化してるの。

アルカは論理と感情という一見相反する要素をどちらも巧く表現できると彼女は述べている。実はこの言葉にアルカの二重把握という特徴が現れている。アルバザード人は客観的把握により論理を組み立て、同時に主観的把握により感情を分析する。

上のテーブルの諸特徴のうち、論理的に捉えたほうが良いと彼らが考えるものには客観的把握を用い、感覚的に捉えたほうが良いと考えるものには主観的把握を用いる。

例えばここにひとりの女性がいるとする。仮に名をリディアとしよう。彼女は娘の前では母親で、夫の前では妻で、上司の前では部下である。彼女は娘の前では自分を *noel* と呼ぶかもしれない。一方で夫の前では *non* といい、上司の前では *meid* というかもしれない。客観的に見れば彼女はリディアという人間でしかありえないが、彼女の目線で見れば相手によって自分は *non* にもなったり *meid* にもなったりする。

このとき彼女は主観的認知主体と客観的認知主体の2つに自己を分けて、事態の内外から事態を見ている。自己の呼称を定めるのは主観的認知主体の役割で、自分から見た相手との関係において一人称代名詞を定めている。アルバザード人は元々乏しい一人称代名詞しか持たなかったが、二重把握を得てからは他者と自己の関係を主観的に見て自己の呼称を選択する視点を獲得した。その結果が *a* の豊富な位相である。

なお、対人的モダリティ等を文末純詞に付与するのも主観的認知主体の役割である。アルカの対人的モダリティは文末に現れ、文全体を外側から包み込む構造をしている。日本語の終助詞「ね」「さ」「よ」などと似ているが、「～てしまう」のように述語に連なることはない点で、出来事を外側から対人的モダリティで包むという特徴がある。

すなわちアルカの対人的モダリティは出来事と分離されている（ただし敬語や呼称などは

除く)。なお、日本語のモダリティについては庵(2001)などが易しい。

- ・出来事については客観的把握をする

アルカでは「今度結婚することになりました」というようなナル言語的な表現はしない。男が女と結婚するという出来事を客観的に見るためである。イベントは一人称代名詞と違って単なる起こった出来事でしかなく、客観的な事柄である。そのため客観的把握を用いる。

従って *ans sil mals im tuo* (私たちは今度結婚になる) は非文であり、*ans mals sil xok im tuo* (私たちは今度互いを娶る) が正しい。このように、出来事に対しては原則として客観的に捉える。

- ・「今行くよ」か "I'm coming" か

自室にいる自分が夕飯の時間に居間に呼ばれるシーンがあるとする。一般に、客観的把握をする言語ではこのとき英語の "I'm coming" のように「来る」を使う。ただし客観的把握をする言語であっても、「来る」の使い方が日本語と同じになるケースがあるので注意が必要である。

例えばスペイン語で呼ばれて「今行くよ」と応えるときは "Voy" という。これは "Yo voy" のことで、英語にすれば "I go" である。「来る」は使っていない。アルカに関しても同様で、客観的把握が根底にあるものの、往来に関してはスペイン語や日本語と同じ言い方をする。

ところでなぜ英語では "I'm coming" のように「来る」を使うのだろうか。客観的把握をする言語において認知主体は事態の外側にいるので、自室にいる自分はもはや認知主体ではない。幽体離脱をしているかのような状態で、自室にいる自分が居間という目的地へ「来る」のを見ている。だからこそ、going でなく coming になるのである。逆に日本語のような主観的把握をする言語では、認知主体は自室にいる自分なので、「いま来るよ」とはいわない。

アルカの場合、往来には主観的把握を使うことが多い。「来る」という言葉をより実感で

きるのが主観的把握だからである。例えばサッカーでゴールを決めた瞬間、観客の視点で見るとキーパーの視点で見ると、どちらがよりボールが「来ている」実感を得られるだろうか。言うまでもなく後者であり、ダイナミズムがある。アルバザード人は往来についてはこのダイナミズムを得るために主観的把握を用いる。従って、居間に呼ばれた場合は an luna van ではなく an ke van となる。

さて、ではダイナミズムを必要としないシーンではどうだろうか。つまりニュースのように客観的に往来を捉える場合である。面白いことに、この場合は客観的把握を用いる。従って an lunat lestez が自然となる。直訳すると「私は居間へ来た」であり、日本語の「私は居間へ行った」とは逆になっている。このように、アルカにおいて往来は日常的には主観的把握を用いるものの、状況次第では客観的把握を用いることもある。場合に応じてどちらも使い分けることができるため、表現が細やかである。

・鏡に映っているのは「私」？それとも「貴方」？

鏡の中の自分に向かって呼びかけるときや独り言を呟く場合、自分を「私」と呼ぶ言語と「貴方」と呼ぶ言語がある。客観的把握をする言語の場合、自己を二人称で呼びかける傾向がある。

例えば英語の場合、自分自身に語りかけるときは通常 you を使う。むろん "What am I doing here?" のような I を使った言い方もあるが、一般に客観的把握をする言語では自己を客観視して二人称で呼びかける傾向がある。

一方日本語では通常自分自身に語りかけるときは「私」や「俺」などの一人称を使う。これは主観的把握の現れである。

ではアルカの場合はどうか。『夢織』で少女アリスは次のような自問自答をしている。

"hai, non rens ax to a nain eyo? "ter, nainan! non inat adel yunen haadis vandor xe mana"? wein alis, ti lo ne xar tuube??"

「でも、警察になんて言えがいいのかな。『聞いて、おまわりさん。骸骨みたいな化け物が女の子を襲ってるのを見ちゃったの!』——って？ ちょっとアリス、あなたそんな話、誰が信じると思う？」

彼女は自問自答の際、自分を「アリス」や「あなた」と客観視して捉えている。このことから、アルカは自己を客観視するタイプの言語であることが伺える。

・主観的把握と客観的把握の使い分け

以上から、アルバザード人の感覚が見えてくる。彼らは感情を絡めたほうが良いと考えるものには主観的把握を用い、そうでない場合は本来のL型を継承して客観的把握を用いるということである。

このようにして見ると、一見ちぐはぐで一貫性のない上のテーブルに一本の線が通る。上のテーブルの「アルカ」の列は原則としてすべて二重把握と書き込むことができる。つまり客観>主観などはその中の内訳である。

なお、結局のところ主観優位か客観優位かと問われれば、アルカは客観優位である。というのも、本来L型であったところにN型の影響を強く受けたからである。元がL型なので、いくら影響を受けようと原則L型優位という状況は変わらない。

●人間にとって自然な二重把握

実は二重把握というのは人間にとって自然な事態の認知様式である。この世の一体誰が主観的判断ないし客観的判断のみで生きているだろうか。「自分としては気に食わないのだが、客観的には認めざるをえない」というような判断を常に人間はしている。

人間が事態を把握する際は常に二重把握をし、主客同時に判断している。にもかかわらず言語だけ主観的把握や客観的把握に偏らせるのは元来おかしな話である。二重把握が人間本来の認知様式であるなら、それをそのまま言語の構造に反映したアルカの認知様式は、人間にとって生理的に自然なシステムでありうる。

ただ、地球の先進国で数百年に渡って典型的な客観的把握をする言語と典型的な主観的把握をする言語とが一国の中で混ざり合って変化していったという好例がないので、二重把握がどれほど自然なのかは実際のところデータが不十分である。

1066年のノルマンコンクエストでも混じったのは英語とフランス語でしかない。太平洋戦

争で負けた日本にアメリカ人が大挙してやってきて、我々日本人がバイリンガルになったかというところでもない。アメリカ人もオーストラリア人も先住民の言語を何百年もバイリンガルとして使用してはこなかった。韓国も中国を事実上宗主国とした時代があったが、それでもアルバザードとカレンシアのような状態ではなかった。

アルバザードとカレンシアのような大規模かつ長期間の言語的な主客の混ざり合いが地球の先進国で見られない以上、詳細な言語データを得るのは現実的に考えて難しい。それゆえアルカの二重把握に関しては、「人間の認知様式に沿うのではないか」、そして「現に問題なくその言語で意思疎通ができていますので少なくとも不自然ではないのではないか」といった弱い推定しかできない。

●アルカの認知言語学的なアプリアリ性

アルカはアプリアリ人工言語である。しかし人がゼロから言語を作れるかということに疑問を投げかける者もいる。作れたとしてもそれは作者の母語の模倣ではないのかと勘繰る者もいる。しかし今回の分析でアルカは日本語にも英語にもない独自の認知様式を持つことが明らかになった。二重把握というアルカ独特の認知様式により、アルカの認知言語学的なアプリアリ性が立証された。

二重把握は「来る」を主客両様式で把握できることから分かる通り、単なる主観的把握と客観的把握の混合ではなく、人間の認知様式のように主客同時に把握するという点に留意したい。

さて、それではこの二重把握という認知様式を踏まえた上で、上記のテーブルの諸特徴を検証してみよう。

●検証

>は左の文が右の文より自然であることを示す。

◆動詞のとらえ方：客観>主観

- ・スルカナルか

la fian pixat gek > gek at pix : 動作主が明確な場合は他動詞が自然。

la vals kea sil ti > ti sil kea mil la vals

ただし主語が le pita のような無生物の場合は ti sil kea mil le pita のほうが優位。従って客観 > 主観と判定できる。

・ 行為連鎖(action chain)について

英 : 原因 → 動作主 → 手段 → 対象

This medicine (原因) will make you (対象) better.

Tom (動作主) broke the wall. (対象)

The hammer (手段) broke the wall (対象) .

幻 : 動作主 → 対象

?? tu pita (原因) kea sil ti (対象) . → ti sil kea mil tu pita.

arxe (動作主) rigat bal (対象) .

?? bolt (手段) rigat bal (対象) . → bal at rig mil(kon) bolt = xe rigat bal kon bolt.

アルカの主語 sol がもともと「～する者」という意味であることから分かるとおり、原則主語に来るのは agent である。ただし受動文のときは sol と目的語 yul が入れ替わるのでこの限りではない。また、動詞が et, em, sil, ses, at, or など定義動詞の場合は経験者が主語に来る。

それ以外の原因や手段などは斜格で示される。

◆ 認知主体のあり方 : 客観 > 主観

・ 出来事は客観的把握で捉える

上述の通り、二重把握をするアルカにおいて、感情とは関係ない単なる客観的な出来事に関しては客観的把握を用いる。

lana twal rsit dajna emil e (目的次第では道は譲れない)。これを直訳すると「アンタの目的はアタシの親切心を采配するよ」であり、完全に客観的把握になっている。このように、動詞の各項のアニマシーが低い場合は無生物主語が自然である。従ってアルカは本来客観的把握の性質が強い。日本語では対照的に、アニマシーの高い主語をわざわざ見立てて「(私は) (あなたの) 目的次第では道を譲れない」と主観的に考える。日本語と比べると違いがよく分かる。

・主語とアニマシーと焦点化

確かに出来事は客観的把握で捉えるが、主語 sol には agent が来るという原則がある。そのため行為連鎖で述べたように、原因や手段は通常来ない。

agent は通常有生であるから、アニマシーの高いものほど主語になりやすい。次の例を見てみよう。to (何) は ti (貴方) よりアニマシーが低い³ため、ak ti lunat tuube sem? > to piot ti a tuube sem? となる。

日：どうしてこんな案になったの？

英：How did you get this idea? / What led you to this idea?

幻：ak ti lunat tuube sem? / ??to piot ti a tuube sem?

このように原則として sol にはアニマシーの高い動作主や経験者が来るが、lana twal rsit dajna emil e では sol に無生物が来ている。これは他の格にアニマシーの高いものがないためである。対格や斜格にアニマシーの高いものがあれば、それは優先的に主語の位置に来る。ema rest lana twal > lana twal rsit ema のように。

ただし、あえて認知主体が特定の無生物を焦点化しているような場合は、無生物であっても主語の位置に来ることができる。もし「アンタの目的」に焦点が当たっている場合、ema rest lana twal < lana twal rsit ema となる。

◆状況のとらえ方：客観

下記に見るように、アルカはコト言語である。

*ti siina vis ant? (私のこと好き?)

ti siina an? (私を好き?)

ただしアルカは英語にはないコトとモノの区別を持っている点でかすかに主観的把握の性質を帯びている。

英語の thing にコトとモノの区別はない。アルカには fam, vis, tul の3語が備わっている。

ちなみにこれらの区別ができたのはアルカであって、f_ar までは全て al ひとつで表していた。明らかに alt の影響である。

◆存在か所有か：客観

下記に見るように、アルカは have 言語である。

*amel xa an (妹は私かいるところにいる) 文意が変わってしまうので不可。

an til amel (私は妹を持っている→私には妹かいる)

◆動詞の焦点/終わり志向性：客観>主観

言語学的に矛盾しない人工言語の作り方で述べたとおり、アルカの動詞は行為の完遂を含意しない。その点で主観的把握をする。

しかしこれには「但し書きがなければ完遂とみなす」という条件が付く。つまり an sosot la と言えば、その後 tal で但し書きが付かない限り、原則として行為の完遂を含意するのである。この点でアルカはやはり客観的把握をするといえる。

実はアルカは動詞の焦点については非常に特殊かつ論理的な構造をしている。客観的把握の性質を持ちながら、同時に日本語より主観的把握らしい性質を持っている。以下に例を挙げる。

主観的把握の日本語では「説得したか聞かなかった」は自然だが、さすがに「殺したが死ななかった」は違和感がある。ところがアルカだと *an setat la tal la en vort* は自然である。

an setat la で終わって但し書きがなければ客観的把握らしく彼は暗黙の了解で死んだことになる。ところが *tal* が付けばどのような内容でも自然と覆すことができるため、「殺したが死ななかった」という主観的把握の日本語ですら違和感を感じる文が自然になる。

この点でアルカの動詞の焦点は「原則客観的把握だが、但し書きが付けば主観的把握の性質を極めて強く持つ」という特殊な性質を持っている。ゆえに結論としては客観>主観である。従って、終わり指向性についても無標では「あり」で、但し書きが付けば「なし」に変わる。

なお、過去形の場合は無標で完遂を含意するが、現在形と未来形では無標で不定となる点に注意したい。*an soso la* では彼が説得されたかよく分からないし、そもそもこれが近未来の表現であって今現在まだ説得行為すら行っていない可能性がある。

◆名詞のとらえ方/名詞のスキーマ：客観>主観

・アルカの名詞は無標の状態で「個物か概念のいずれか」を示す

簡単にいえば、名詞に単複や可算不可算があれば有界性があったり個体スキーマがあると見てよい。以下では煩雑さを避けるため、術語を「有界性」と「無界性」に取りまとめて論ずる。

客観的把握の場合は一般に有界性があり、*ly, ls, lt* などがこれに当たる。英語はいうまでもなく有界性があり、中国語でもコーパスベースの調査では我想要苹果より我想要一个苹果のほうが自然である。従って表意文字であるか表音文字であるかは有界性の有無に関係ない。

ar には *ls* を引き継いで有界性があったが、*alt* の影響で徐々に条件付きで無界性を帯びるようになった。それは「名詞が単数であれば原則として個数を省略する」というものである。しかしこれでは名詞の概念だけを抽出することができない。「りんご」という概念なのか「具体的なひとつのりんご」という個物なのかを区別できない。そこで *ar* ではまだ単数の

名詞にも「ひとつの」という言葉を付ける割合のほうが多かった。

a では更に無界性が進み、「名詞が単数であれば原則として個数を省略する」ことが普通になった。概念と個物の区別はなく、必要であれば ko miik や vei miik のように数を付けて個物を示すようになった。

なお、ly, ls, ar, a では一貫して名詞の形態に単複の違いはない。つまり apple と apples のような対立はない。これは表意文字である幼字を使っていた f, fv の名残りであり、中国語などと同様である。

以上から、アルカの名詞は無標の状態ですべて「個物か概念のいずれか」を示す。有界性とも無界性ともつかないが、原則単数という目安があることから有界性寄りであるといえる。

・猫か猫の肉か

有界性がアルカよりも明瞭な英語では I like cats, but I don't like cat (猫は好きだが猫の肉は好きでない) ということができる。対して an siina ket tal an en siina ket は意味不明な文である。an siina ket tal an en siina yek e ket とせねばならない。この点に関しては無界性寄りである。

・無界性の乏しさはいかほどか

ではアルカには主観的把握の日本語ほどの無界性があるだろうか。つまり主観>客観と判定するほどの無界性があるだろうか。結論からいうと無い。従って客観>主観と判定できる。

日本語で「虫がいる」という場合、虫は一匹とは限らない。ここに名詞の無界性が見られる。一方アルカで veliz xa atu といえば虫は一匹なので、この点で日本語と異なっている。

また、日本語ではりんごを3つ買った場合でも、「りんごを3つほど買った」ということがある。論理的に考えれば不自然だが、日本語の文としては自然である。

この手合いの無界性はアルカにはない。an taut vi miik となる。an taut vi via miik の場合は文字通り本人がいくつ買ったか記憶がなく、3かどうか確かでないときにしか使えない。この点においてアルカの原則である客観的把握の性質が活きている。

加えて、日本語では多用される「など」や「とか」や「でも」はアルカにすると省略されることが多い。wen を付ける場合は文字通りそこで述べた名詞以外の存在に言及したい場合にしか使わない。このこともアルカの名詞の有界性を示している。

なお、日本語の「など」や「とか」はハッキリと言にくいときにぼかす効果がある。例えばバナナは安いので「バナナが食べたい」とは言いやすいが、モモは高いので「できればモモとかが欲しいんだけどなあ」というように「とか」を使うことがある。このとき、「モモとか」だからといってブドウでも良いかということそうではない。あくまで本人としてはモモでなければダメである。

このような奥ゆかしい表現がある日本語は便利であるが、アルカにおいても同様の表現は可能である。単に名詞に曖昧化の接尾辞 te を付ければ良い。non xen lan diaikte aan のように。

・ゼロ匹の猫

一般に有界性のある言語ほど nothing や no apples のようなゼロの表現を持つ傾向にある。アルカはもともと有界性が強いので、an inat yuu ket > an en inat ket となる。

・指示代詞

アルカの小説を読んでいると、最初は lu fian となっていたものがだんだんと fian に変わっていくのを目に思う。

これは指示代詞の省略ではなく、むしろその少女の固有名詞化、簡単にいえば「キャラ化」を意味する。fian となった瞬間、それは「まだ名前が分からないからとりあえず暫定的にこのキャラのことを『少女』と呼んでおくよ」ということを意味する。固有名詞には指示代詞が不要なので、lu は落ちるわけである。

このように見ると、一見アルカの名詞の無標は「個物か概念か固有名詞のいずれか」と直さねばならないように感じられる。しかし固有名詞は個物に含まれるため、規則の変更は必要ない。

◆一人称代名詞：主観>客観

・豊富な位相

alt の影響を受け、位相が発達した。その中で一人称代名詞も多様化した。現在では alt も凌ぐ発達を見せ、12 種もの一人称代名詞を持つに至る。

・自分を名前で呼ぶケースと目上を呼び捨てしてもよいケース

典型的な一人称代名詞がある一方で、本来持っていた客観的の把握も持ち続ける。例えばセレンが目上であるリーザに呼ばれ、彼女のところに行くとする。このとき主観的の把握で表現すると *men ket liiza xanxa*（僕は先生のところに行った）になる。一方、客観的の把握で表現すると *seren lunat liiza*（セレンはリーザのところへ来た）となる。

往来や一人称代名詞など、いくつかの特徴に関してアルカは主観的の把握を優先させるが、客観的に事態を把握しなければならない際は客観的の把握を優先させる。例えば公的な場面であるとか、あるいは戦闘中のような逼迫した場面では客観的の把握が優先される。日本語では自分を名前で呼ぶのは主観的で幼稚なイメージがあるが、アルカで自分を名前で呼ぶのは客観的の把握をする場合であり、むしろ格式張った表現である。

実は現実の古アルカは名前については主観的の把握をしていたきらいがある。というのもメルは自分を *non* ではなくメルと呼び続けており、それは幼さを示していたからである。どうもセレンの好みに合わせて彼女は自分を自分の名で呼ぶようになったのではないかと思われる。

と同時に古アルカは上記のような「客観的の把握をする場合は自分も名前で呼び、目上でも呼び捨て」という習慣があったので、セレンもリーザを呼び捨てにするようなことがあった。つまり古アルカでは自分を名前で呼ぶ場合、メルのように幼さを出す主観的の把握と「セレンがリーザのところへ来た」のような客観的の把握とが未分化であった。従って自分を名前で呼ぶのが幼いのか客観的なのか文脈で判断するしかなかった。

2011 年現在では紫亜が幼いにも関わらず、彼女は自分を *non* や *yuna* というので、どうも自分を呼ぶときに幼さを演出するという意味での主観的の把握は減んでいるようである。な

お、彼女は兄ユルトに遊びの指示をするときに"xianyan luna soa kont yuutxan..."（紫亞にやんがこうするから、ゆーちゃんは～）などと言っていたことがある。これは文法的には客観的把握になるが、xianyan などの単語レベルでいえば主観的把握にも見える。判断のつかないところである。

ちなみにメルに関しては00年代後半でいつの間にか自分を名前で呼ばなくなっていた（日本語では未だに自分をメルということがしばしばある）。新生になった辺りで主観的把握の用法が減んでいるように思える。メルが自分を名前で呼ぶようになった原因がセレンの好みであるとすると、それは日本語の影響である。だが新生アルカはその影響を自然と消してしまっていた。つまりアプリアオリ性を保つための自浄作用が働いていたことが伺える。

再度まとめると、アルカで自分を名前で呼ぶのは幼さの現れではなく、客観的把握の現れであると言える。

アルバザード人は会議などをするときこれを多様する。例えば「12:00時にアリスは大学へ来る。13:00時にシヴァはドラムを部室へ運ぶ」のように、作業工程について話し合うときなどには一人称代名詞を避けて固有名詞を使った客観的把握を好む。

このように状況に応じて主観と客観を使い分けが、比率で言えば主観のほうが多い。従って、主観>客観と判定できる。

◆敬語：主観>客観

一般に主観的把握をする言語では自分の目線で相手を見るため、客観的把握をして鳥瞰図的に人間関係を見るのに比べて上下関係が気になりやすい。その結果、敬語は発達しやすい。主観的把握をする言語の中には敬語が文法範疇として確立している言語もある。日本語、韓国語、ジャワ語、タイ語、クメール語などがそうである。

では客観的把握をする言語に敬語に当たるものがないかということそんなことはない。日本語でいう敬語に相当するものはちゃんとある。ただそれは主観的把握をする言語に比べると文法的に体系化されたものでないことが多く、どちらかという敬意表現と呼ぶべきものであることが多い。

アルカは人間関係など、論理より感情を優先すべきと考えられるものには主観的把握を用

いる傾向があるため、一人称代名詞と同じく、敬語に関しては主観的把握が優勢である。丁寧語は形態論レベルで体系化されており、尊敬語と謙譲語は統語論レベルで体系化されている。

尊敬語：kul（話す）→ mist kul（お話になる）

丁寧語：tisee（～だよ）→ antisee（～ですよ）

謙譲語：kul（話す）→ mir yuus men kul（お話しする、私から話をさせていただく）

単語の中に尊敬語や丁寧語が含まれたものもある。

ku（言う）→ rens（仰る）

skin（座る）→ fiars（お座りになる）

mok（寝る）→ xidia（お休みになる）

ただし右側の単語は本来は女性語や雅語であり、本当の意味で尊敬語にするには mist rens のように mist を付ける必要がある。

このように敬語が発達している一方、客観的把握をする状況では決して敬語を使わない。日本語の場合、山田という社長がいたとして、会議中に平社員が社長本人に向かって「山田は 15:00 時に鈴木工務店に来る」などと発言することはありえない。ところがアルカでは客観的把握をしたほうが良いシーンでは、むしろ客観的に述べないほうが失礼となる。失礼というのはつまり、真面目にやっていないラフな感じを与えるということである。この点でアルカには客観的把握が残っている。ゆえに判定は主観>客観となる。

◆代名詞の省略：客観>主観

代名詞の省略はある。ただし条件がある。英語よりは多いが日本語よりは少ない。

(1) 重文の主語が一致：an ket felka, felat.（私は学校に行って勉強した） / leevat felka, an kuit mar ka sea.（学校を出て、モールでドーナツを食べた）

- (2) 主節と従属節の主語が一致：an kut soa im in la. (私は彼を見たときにそう言った)
- (3) 直前の文の主語と同じ
- (4) 文脈から明らかに判断できる

ただし(4)については日本語より厳しい。日本語ほどハイコンテキストではない。物語や会話などで登場人物が少ないシーンでは特定の代名詞が繰り返される。これが煩雑かつ不恰好に見えるため、(3)(4)を適応することがある。

(1)に関してはあらゆる場面で行われ、"I went to the store and bought some brown sugar"のように、英語でも頻繁に見られる。
 (3)(4)に関しては同じ代名詞が出るのが煩雑ないし不恰好というときに限定的に起こることなので、日本語的な性質は見られるものの、あくまでその頻度は限定的である。
 以上から、客観>主観と判定する。

◆非人称主語：客観

- ・形式主語（虚辞）

tu et rat xel ti ke felka（貴方が学校に行くのはいいことだ）が成立するため、非人称主語は存在する。ゆえに客観と判定される。

- ・自然現象

It snows a lot during winter や We have a lot of snow this winter はどちらも自然である。一方アルカではどうか。

? sae ati di fol xier :saeが動詞に見えづらいので?が付く。saeのような過去形なら?は外れる。

sae luna ati {du} di fol xier.

? ans til sae di fol xier

We have a lot of snow this winter の we は具体的なその場にいる私たちではなく、その国あるいは地域に住んでいる漠然とした人々を指す。総称の they に近い用法で、やや形式的な主語である。

アルカの場合、総称には el を使うので、el til sae di fol xier なら自然となるが、ans では意図が変わってしまう。ans の場合、具体的な「私たち」を意味するので、お国自慢などをしていて相手の地域と比べて「ウチはよく雪が降るよ」と述べる際にしか使わない。

ゆえに、アルカは非人称主語について客観的把握をするが、総称の使い方に注意が必要で、ans や laas ではなく el を適宜使う点に留意したい。

・天気的神

実はアルカの場合、sae や esk などの自然現象文は非人称主語を取るのではない。

カルディアでは kleevel という天気的神がいるため、動詞 esk の本当の意味は「クレーヴェル神が目的語の場所に雨を降らせる」である。そのクレーヴェルが省略されて eskat im fis のようになっているだけである。従って厳密には自然現象文は非人称主語ではない。

◆題目か主語か：客観

この特徴については、いわゆる「僕はウナギだ」文が言えるか言えないかの問題に帰結できる。

アルカは一見 sol に主題を取れる。実際、文法論で便宜上主題を取れると説明することさえある。an et beska や an et har で「僕が注文したのはウナギだ」とか「僕は赤いのを着ているやつだよ」といった意味を表せる。ゆえに主観的把握に見えるが、実はそうではない。というのも、元々これは an et les retat beska や an et les sabes lein har などの略だからである。よって判定は客観である。

そもそもアルカで主語を意味する sol は「する者」という意味であり、原則として主語には agent が来る。題目ではない。

◆連体修飾構造：客観

森山(2007)によると「連体修飾節を用いた連体修飾にしても、of/ノを用いた連体修飾にしても、英語の場合には、空間的、論理的、文法的な意味での本質的關係(intrinsic relationship)が求められるのに対し、日本語の場合にはそのような用法のほかに、その場のコンテクストに支えられた語用論的推論に依存した用法も発達していることが明らかになった」とある。

他方、Langacker(2008)によると"Note that we say the color of the lawn but the brown spot in (*of) my lawn, the difference being that the spot is not supposed to be there"とある。この例をアルカで対照すると以下ようになる。

nim e kist (芝生の色)

boppo lette kaen{?e} kist (芝生の茶色くなっている部分)

日本語の「の」は「AのB」という形で連体修飾を作るが、AとBの關係は語用論的に、言い換えればコンテクストや常識に依存して理解される。

一方、英語ではあくまで空間的・文法的に捉えられ、森山のいう本質的關係で捉えられ、ofではなくinが使われる。「文法的に捉えられる」という意味において、英語の連体修飾構造は語用論的に対して文法的と呼ぶことができる。

アルカの例を見てみると、文法的な表現のほうが適切である。よって判定は客観となる。

◆「ここ」の捉え方：特殊

日：ここはどこですか /?私はどこにいますか /??これはどこですか

英：*Where is here? / Where am I? / *Where is this? (ただし地図を指して聞く場合は可)

幻：?atu et am? / ?an xa am? / tu et am?

?の付かない自然な文を見比べると、アルカは日英いずれのグループにも属さないことが分かる。

an xa am という英語式の客観的把握もできるし、atu et am という日本語式主観的把握もできる。とはいえどちらもアルカとしては不自然である。ゆえに特殊と判定する。

ただ、どちらかというとう et am?自体は日本語に近い表現だろう。その場合は客観<主観

と見てよいかもしれない。

◆主客合体性：客観

この手の話題でよく使われる例文で対照してみよう。

日：国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

英：The train came out of the long tunnel into the snow country.

幻：tu lop lukok fia e sae xi lof fil kaen kaddirai.

アルカは英語と同じ客観で、主客合体性はない。

◆モダリティ表現：客観

モダリティには epistemic, deontic, evidential, dynamic などといった種類がある。

epistemic はいわゆる推論を表すモダリティで、「かもしれない」や「にちがいない」などがこれに当たる。英語では may, must, will などがこれに当たる。

deontic はいわゆる当為を表すモダリティで、「すべきだ」や「しなければならない」などがこれに当たる。英語ではやはり may や must が使われる。

気付いたろうが、may や must は epistemic にも deontic にも使うことができる。語義が広いのだ。ではどちらが本来的かという、deontic のほうである。

「かもしれない」などの推論はあくまで自分が主観的に見て判断していることにすぎない。一方、「しなければならない」は客観的な義務である。英語は客観的の把握をするため、まず deontic なモダリティとしての must がある。その上で「にちがいない」という epistemic な語義が派生される。

さてアルカではどうかというと、これが特殊である。というのも、epistemic と deontic の法副詞がそれぞれ異なる単語を使うからである。

アルカの法副詞は数が多い代わりに多義性がない。ゆえにこれだけでは客観とも主観とも

判定できない。

唯一 sen だけが「できる」という意味から「でありえる(klia)」および「してもよい(flen)」という意味に派生している。

「できる(可能)」は epistemic ではなく dynamic に分類される。そして「できる」は客観的な能力を示すので、「できる」→「でありえる」は客観から主観への渡りを意味する。

また、flen は deontic の一種なので、これは客観から客観への渡りを意味する。

客観から主観ないし客観へ法副詞の意味が広がっているので、アルカのモダリティは客観が根源にあると分かる。

さらに言えばアルカにおいてそもそも epistemic が fal(deontic)などの法副詞と違って klia などの遊離副詞で表される点にも注目したい。法副詞は英語でいう助動詞に相当し、遊離副詞は単なる副詞の一種で、本質的には very や hardly などと変わらない。このことからアルカでは deontic については法副詞という文法範疇で特別視するが、epistemic は単に副詞の中に放り込まれるということが分かる。すなわちアルカにおいて deontic のほうが epistemic より重視されるモダリティであり、それゆえ判定は客観となる。

ところで英語の can は epistemic (でありうる)、deontic (してもよい)、dynamic (できる)の3用法があり、非常に用法が広い。can の原義はこのうち dynamic に当たるので、英語が客観的把握をする言語である以上、モダリティの客観性は dynamic > deontic > epistemic と順序付けられるだろう。従ってアルカの sen(dynamic)が klia(epistemic)や flen(deontic)に広がっていることは、モダリティの客観から主観への広がりを表している。ゆえにアルカのモダリティの根源には客観的把握があるといてよい。

◆与格か間接目的語か間接受身：客観

アルカには英語と同じく利害の与格は存在しない。

英語と同じ印欧語でもラテン語やスペイン語には利害の与格があり、例えばスペイン語では "Me llovió" で「私に雨が降った」すなわち「私は雨に降られた」を意味する。

もしこれと同じことをアルカでいうなら eskat(an)sin となる。迷惑感のモダリティは文末

純詞で出来事を外側から包み込むように示される。

同じくアルカには間接受身は存在しない。間接受身は主に迷惑の受身(私は雨に降られた)や持主受身(私は財布を盗まれた)のふたつに分けることができる。

「私は雨に降られた」に関しては上述の通り、文末純詞を使う。受動態は使わない。an eskat yu は非文ではないものの、迷惑感を出せない。

「私は財布を盗まれた」に関しては an eftat yu on gils sin のように受動態を使うものの、迷惑感結局 sin が担っている。ただもちろん、sin がなくても常識的に迷惑な内容だということは分かる。なお、xe eftat an on gils や xe eftat gils ant や xe eftat gils it an も可能である。それぞれニュアンスが異なる。最後の文の場合、盗まれた財布は自分のものでなく、預かり物の可能性がある。

gils eftat yu it an という受動態の言い方も可能であるが、迷惑感を出していない。ただ常識的に考えて sin を付けなくても迷惑だということは伝わる。むろんここの文末に sin を付けてもよい。

持主受身に関しては幻日 eft も参考にするとよいだろう。

以上から、判定は客観である。日本語的な受動態の使い方は一切見られない。アルカの受動態は能動文の目的語を焦点に当てたいときにしか使わない。

◆ (英語の) 中間構文：客観

そもそもアルカには動詞の自他がなく、すべて他動詞である。主語 sol はほとんどの場合 agent で、目的語 yul はほとんどの場合 object である。極めて明瞭なスル言語である。

従って This book sells well (この本はよく売れる) のような中間構文というものの自体がそもそも存在しない。あえて訳すなら tu lei em atm ati di であるが、不自然である。では el tau tu lei ati di であろうか。否、総称の el より「大勢の購入者」のほうが具体性があるため、主語に上がってくる。結果、lan di tau tu lei が最も自然という予想が立てられる。そして実際のアルカの語感で検証すると、確かにその言い方が最も自然に感じられる。本に焦点を当てるなら tu lei tau yu ati di などとする。

This book sells well と比べると使う単語も構文もがらりと変わっているのが分かる。中間構

文を訳すときは注意がいる。

アルカには中間構文がないが、それに相当する訳文が *lan di tau tu lei* というスル言語的表現であることから、判定は客観となる。

◆動詞 vs. 衛星枠付け：主観

移動を表す動詞表現に関しては、手段や様式による区別を動詞自体で表現することが多い Verb-framed language (動詞枠付け言語) と、動詞に付属する不変化詞 (副詞・前置詞) や接辞で区別することが多い Satellite-framed language (衛星枠付け言語) とが存在する。前者には日本語やロマンス語 (フランス語やスペイン語) が挙げられる。例えば日本語では「入る」「下る」「通る」などが別の動詞として存在し普通に使われる。後者には英語、ドイツ語、ロシア語など多くの印欧語や、中国語などがある。例えば英語では、"go in"、"go down"、"go through" など共通の動詞を用いる言い方が使われる。ドイツ語でもこれに似て接辞をつけた分離動詞が使われる。(wikipedia 動詞枠付け言語と衛星枠付け言語より)

これに関してはアルカは伝統的に動詞枠付け言語である。幼字には漢字以上に一語一意の原則があったためである。客観的把握の代表格である *ly, ls* ですらこの性質を保持している。実際に地球の言語で見ても本来客観的把握に分類されるはずのフランス語やスペイン語も日本語やアルカと同じ分類に入っているため、この特徴に関してはそもそも傾向が持つ拘束力の弱さを感じる。

◆主観述語：客観>主観

日本語では「私は嬉しい」とは言えても「彼は嬉しい」とは言えない。「彼は嬉しそうだ」と言わねば不自然である。これは日本語が主観的把握をするためである。あくまで話者の目から相手を見るので、本当に相手が嬉しいかどうかは分からないということである。これが主観述語である。英語のような客観的把握の場合は神の視点で見るため、主観述語はない。

アルカの場合、*an na nau / lu na nau* はいずれも自然である。ゆえに客観と判定できる。しかし *lu na nau in* もまた自然である。根底には客観的把握があるものの、特に感情や人間関係

が絡む場合は主観的把握をして文末純詞の in, ter, yun などを用いる。その点で主観的把握が混ざっているため、判定は客観>主観となる。

◆擬声語・擬態語：客観

フランス語同様、ほぼゼロである。完全に客観と判定。

歴史的に見ても擬態語は tanta など、数例を除いて存在しなかった。

現実には異民族が集まってアルカができていたので曖昧なオノマトペでは感覚が共有できず、オノマトペ——特に擬態語——は発達しなかった。カルディアにおいても異民族が多かったので発達しなかった。

更に言えば現実ではメルの参加以降、「この音はこの意味を象徴することにしよう」という、いわゆる音象徴が生まれた。音は具体的な音象徴に特化したため、曖昧なオノマトペに使用する機会は更に減ることとなった。

音象徴の例を挙げよう。e は水に関するものを示す。現在でも er, eria, eri, lue など枚挙に暇がない。このように現実のアルカでは音象徴が優位だったため、なおさらオノマトペが冷遇された。

ちなみにカルディアのほうでは音象徴は f, fv の頃に発達しており、これにはエーステ理論という神話学的な理由が背景にある。言語学とは異なる分野なのでここでは割愛する。各自幻日を参照されたい。

なお、擬音語については擬態語と違って豊富である。特に演繹音の存在により、日本語や韓国語以上に体系だった擬音語を獲得している。

なぜ擬音語をここまで体系付けたかという、システムティックでなければ多民族の間で共感しにくいためである。それは現実でもカルディアのアルバザードでも同様の事情である。

◆過去時物語中の現在時制：特殊

現在を 2011 年とし、1991 年に起こった 1 年間の物語を仮定しよう。

英語の場合、認知主体である読者は2011年から客観的に1991年の物語を見る。このため、本文中では過去形が用いられる。

日本語でも原則同じだが、認知主体を物語の中に埋没させて現在形を使うことがある。これは主観的な見方で、臨場感が増す。物語中で「る」を使うのは臨場感以外にも用法があるが、ここで重要なことは日本語が視点を移動させることで主観的に現在形を使うという事実である。

アルカの場合、このどちらにも属さない。歴史の中からこの物語が存在する1991年だけを切り取る。その前後の時間は切り捨てられ、独立した時間を形成する。従って2011年に存在する認知主体は切り捨てられることになる。つまりアルカの特徴は認知主体の切り捨てにある。

時制は物語の進行に合わせて常に現在形で語られる。パソコンで見る動画を想像してみよう。シークバーは動画の現在位置を示す。アルカにおける物語の捉え方は動画と同じであり、シークバーの位置が現在形で語られるわけである。貴方が何年にその動画を見ているかは一切関係ないし、貴方が画面を見ていようか、いまがシークバーは進む。つまり認知主体は切り捨てられて物語は進んでいく。従って、客観的把握にも主観的把握にも属さない特殊な型をしているといえる。

まるでアルカは誰もいない映画館のようである。観客がいようといまいと上映され続ける。

換言すれば、アルカにおいて地の文のデフォルトの時制は現在形ということである。無時制ではない。まるで目の前で今現在物語が進んでいるかのような表現をする。日本語だとデフォルトが過去形になるため、違和感を感じることであろう。

確かにアルカの地の文は現在形がデフォルトだが、その文脈の時点から見て過去の出来事であれば過去形を使うことができる。つまりシークバーの現在地点より前の時点の出来事について言及する場合は、地の文でも過去形を使うことができるということである。

◆直接・間接語法：客観

アルカは間接語法が非常に発達している。この点で英語と同じで、判定は客観である。ただし、主節と従属節の主語が同じになる場合は従属節の主語を省略するか、あるいは nos

に置き換える。nos に置き換える点は若干主節の主語に視点を合わせているように感じられるため、英語ほど客観的把握はしていないといえよう。

なお、時制の一致に関してはアルカは主節との比較で行う。主節と従属節の時点が同じなら主節が過去形であっても従属節は現在形になる。

He said, "I am busy." = lu kut "an tur vokka".

He said that he was busy. = lu kut nos tur vokka.

アルカでは直接話法に比べて圧倒的に間接話法の頻度が高い。

●アルカは現代的な認知様式？

二重把握というのは客観的把握や主観的把握のどちらか一方に偏らせる様式に比べ、人間本来の認知様式に近い。

人間は常に主客両面から事態を把握しており、適宜状況に応じて適切なほうを選ぶ。

これはテレビの映し方に近い。テレビの収録では複数のカメラで同時に撮影をし、視聴者に最も伝わりやすいカメラの映像を適宜流していく。サッカーの試合でゴールが決まればゴール目線で流す。バラエティでオチを言う人がいれば、ゲスト全体を見渡すカメラから彼をクローズアップするカメラに切り替えて映像を流す。テレビの映像は人間の二重把握に近い。そのため視聴者は違和感なくテレビの映像を受け入れることができる。

ともなれば言語だけ客観的把握や主観的把握の一方に偏っているというのは、人間の認知様式からすればむしろ違和感さえ覚える。

また、物語を時間軸から切り取り、ひとつの物語の中では常に現在形を使うという件に関しては、まるで物語を一枚のDVDの中に収め、現在位置をシークバーで示しているかのようである。アルカにおける物語中の現在時制は現実の時間軸とは切り離されたDVDのシークバーに相当する。

テレビといいDVDの動画といい、どうもアルカの二重把握や物語中の現在時制などの例を見ると、アルカという言葉が現代人の認知様式を写し取っているかのように感じられる。

●遅れた認知言語学的考察

アルカの言語らしさを初めて意識したのは筆者が中学生の頃であった。次いで強く意識したのは高校時代であった。そして本稿を書こうと思ったのは制アルカを作っていた大学時代前半である。ところが2011年になるまで認知言語学的考察をまとめた記事にはせず、断片的な考察しか行ってこなかった。

アルカの場合、作者らが言語学に触れる前に言語制作があったので、紆余曲折を経てしまった。それで後発の制作者には二度手間をさせないよう、先に言語学を学ぶことを勧めている。

ところで、昔から不思議なことがある。子どもが自然と言語を覚えるように、特に示し合わせたわけでもないのにアルカユーザーの間で「これはアルカらしいしっくりくる文だ」という語感を共有してきたという事実である。

最初は当然この原因が分からなかった。しかし現実として語感を共有している以上、何らかの規則があるに違いないと考えた。言語学的な考察をすればきっとその規則が見えてくるだろうと考えていた。

その規則が何かは分からなかったが、皆規則を体得していたので、いずれまとめた考察をしようしようと思いながら2011年まで後回しにしてしまった。

今回二重把握という認知様式が見えたことで、「だからか!」と思ったことがいくつかあった。それが例えば下記である。

●言語相対論の再評価および雑感

・認知主義と生成主義

筆者は人工言語を作るという目的で言語学を始めた。言語学をやる人間としては異例の入り方である。アルカに役立つか否かという視点で常に言語学の理論を評価してきた。

また思春期に多くの民族と触れ合ったことで、いかに異民族の物の捉え方が違うかを痛切してきた。

そんな筆者にとって最も共感できた言語理論がいわゆる「サピア・ウォーフの仮説」である。ウォーフの言説は Whorf(1964)などに見ることができる。

サピア・ウォーフの仮説は一般に言語決定論と言語相対論に分かれる。流石に筆者も決定論には賛成しないが、それでもかなり決定論寄りの相対論を支持している。

また、言語学の派閥でいえば筆者は明らかなる認知主義者である。とりわけピンカーとチョムスキーについては懐疑的である。

中でもピンカー(1995)のサピア・ウォーフの仮説に対する論拠のない非難には同意しかねる。もし彼が様々な民族と議論しながらゼロからひとつの言語と世界を構築していれば——あるいは少なくとも彼にもっと異言語と異文化への造詣があれば——言語が人間に与える影響の大きさを実感できただろう。この件についてのピンカーへの批判はヴィエルジュビツカ(2009)が的を射ている。なお、同書は言語と文化の関連性を知る上でも読んでおきたい一冊である。

ときに、筆者もはじめから生成主義に反対していたわけではない。もともと理系だった筆者にはむしろ最初はサピア・ウォーフの仮説より生成主義のほうが肌に合うように感じられた——少なくとも字面からは。だが実際に読んでみるとその理論が実験とあまりにかけ離れていることに気づき、現実に即していない理論と評価するに至った。

・その「わからん」は「理解できない」なのか「共感できない」なのか

今回の二重把握を知って「なるほど、だからか」と思ったことがある。

日本でテレビを見ていると、人々が議論をしている様子をよく見る。政治関連の談義であつたりと内容は様々であるが、「理解できない」とか「分からない」といった台詞がよく聞こえてくる。「理解はするが共感はしない」という言い方をする人はあまり見かけない。これはなぜだろうか。

日本語は主観的把握をする。客観的把握の傾向にはない。論理は客観的把握に向いており、感情は主観的把握に向いている。ということは日本語は論理を表現するときも主観的把握で表現する傾向がある。その証拠が「分かりました」である。この言葉は「理解しました」

と「了承しました」のどちらも意味する。論理と感情が分化できていない。

客観的把握をするフランス語では"Est-ce que vous comprenez?" (理解しましたか?) と "d'accord?" (わかったかい?) は別々の単語を使うのが自然である。もともと、客観的把握をするフランス語でも entendre (理解する) から Entendu (了解です) という表現を作るので一丸にはいえないが、アルカの loki (理解する) に xiyu (了解する) や yuta (受け入れる) や okna (共感する) の意味はない。コーパスを確認しても「わかったよ」というときは"loki"ではなく"xiyu"と答えている。ただしアルカでも相手に従うことが前提である環境では、理解したというだけで「了承した」を事実上含意することはある。

英仏がきちんとできているというわけではないが、どうも日本語は特に論理的な理解と感情的な理解を分離できていない印象を受ける。日本人は「わかった」と言ってしまったら相手の要求を呑んだことになってしまうと思って、そう易々と「わかった」とは言わないのかもしれない。その結果、議論が膠着してくると「わからん」とか「まったく理解できん」といった台詞が飛び交うようになるのだと思われる。

恐らく一度「わかった」と言ってしまったら言質を取られると思っているのではないか。あくまで「理解した」という意味の「わかった」でしかなかったとしても、「アンタあのとき分かったって言ったじゃないか！」と詰め寄られる危険性がある。

アルカだと an lokik ti (貴方を理解した) と言っても共感したことは含意しないので、言質を取ったような言い方を後からされることはない。

・アルバザード人曰く、「理解はするが共感はしない」

この件に関してアルバザード人はどうか。現実の古アルカもそうであったが、アルバザード人の典型的な言い方は「あなるほど、君の言いたいことは分かった。でも俺はそう思わない」である。これは論理と感情を完全に切り分けた表現である。

日本人はあまりこういう言い方をしない。実際にこういう言い方をしたら殺伐とした雰囲気になる恐れすらある。

ところがアルバザード人はこの言い方を非常によくする。これは二重把握の賜物であろう。日中韓英仏などはいずれも主客いずれかに偏っており、主客を並行して考える習慣に慣れていない。「理解はするが共感はしない」という言い方を日常的にするという習慣が二重

把握によるものだとしたら、言語が思考に与える影響は軽視できないのではないか。

アルバザードという国は元タルティアの魔法兵团やメティオの魔獣兵团やアルティアの武士といった脅威に晒されてきた。そんなアルバザードが世界最強の国家になれたのは、常に合理的に考え、出る杭は打たずに伸ばし、偉人は貶さず褒め、勤善懲悪をし、伝統にこだわらず良いものは素直に取り入れてきたからである。そういう国民性を獲得しなければ、地続きで平坦な土地の多いこの国はここまで強さを保てず、最悪生き残れなかっただろう。

アルバザード人の交渉の仕方は非常にサクサクしている。「僕はここまで妥協する。君はどこまで妥協する？その妥協点に賛同できないなら戦争ですね。ところで僕の戦力はこれこれです。君の戦力はこれこれです。死者の推定数はこれこれです。さあどうしますか」という態度で、完全に合理性しか考えていない。

その一方、「以上の議論から戦争という結論が出ました。さてここに温情をかけます。戦力から言って僕らの勝利は確実です。しかしお互い死者は出したくないでしょう、可哀想ですからね。そこで多少譲歩をするので、その上でもう一度戦争をするか考えてください」というような言い方をする。

彼らにとってはまず最初に論理がありきで、それに付加するように感情面を出す。完全に論理と感情を切り分けており、日本ではあまり一般的ではない物の見方である。この習慣がない人からすれば「機械的で冷たいな」と感じるかもしれない。逆に「合理的で論理的で賢い人達で、そりゃ発展するわけだ」と思うかもしれない。

・言語が影響を与えるのはせいぜい思考の習慣に限られる

主観と客観で同時に事態を把握するというアルバザード人の習慣が独特であることは常々感じていた。日本人にはもちろん、アメリカ人にもフランス人にもあまり見られないためである。

だが今回の考察でこれが二重把握によるものだと知って、今まで強く評価していた言語相対論を再評価するに至った。

ただ、だからといって言語決定論を支持するほどではない。言語が思考の習慣に影響を与えることに疑いの余地はないが、思考を決定付けるほどの力はなからう。

例えば筆者はアルカをやる前から主客を分離して考えていたので、もともと二重把握をする習慣が個人的にあったのだろう。日本人としては珍しいほうだと思うが、もし言語決定論が正しければ筆者が主客を分離して考えるようになるのはアルカを学んだ後になるはずである。

・役割語と言語相対論

また、言語相対論は金水(2003, 2007)が唱える役割語についても関連性があると思われる。いわゆるキャラ語尾を豊富に持つ日韓とそうでない英仏を比べてみよう。後者の話者は前者の話者が感じているキャラ性を同じように感じることができるだろうか。否。少なくともキャラ語尾が伝えるキャラ性に関しては確実に抜け落ちてしまっている。この問題は豊富な一人称代名詞を持つ言語からそうでない言語に翻訳をした場合にも起こることである。例を挙げよう。「わたくし、磯鷲早矢と申しますの」と「拙者、緋村剣心でござる」を英語に訳せばどちらも"I am Haya"や"I am Kenshin"のような言い方にしかない。

日本語には「わたくし〜ですわ」というお嬢様キャラを想起させる言葉がある。一人称や終助詞の使い方によって話し手の個性を察するという思考の習慣が日本人にはある。

もちろん終助詞がなかったり一人称がひとつしかない言語であっても、別の品詞や言い回しで相手の個性を判断することはできるだろう。しかし依然として一人称や終助詞で相手の個性を察するという思考の習慣は生じない。その意味で言語が思考に影響を与えていることは確実であり、かようにして言語相対論と役割語は関連性があるように感じられる。

アルカは日本語と同じく人称代名詞などが豊富で、キャラ性を出すのが得意である。従って、アルバザード人はそういった要素で相手の人間性を推し量る思考の習慣を培っているといえる。

6:人工言語史概説

●序文

本論はノウルソン(1993)、エーコ(1995)、ヤグエーロ(1990)を中心に、人工言語学研究会独自の調査を加えて、最古の人工言語から現代に至るまでの人工言語史を概説したものである。

●人工言語における5つの要素

人工言語は言語の一種であるから音韻・文法・語彙・文字・非言語を持っている。ただ自然言語に文字を欠くものがあるように、人工言語にもこれらの要素が全て揃っていると限らない。これらの要素を全て持っていれば申し分ないが、実際には一部を欠くことがある。

現在使われている自然言語のうち「音韻はないが文法はある」などといったものは考えられないが、人工言語の場合どの要素が欠けてもよい。

例えば話すことを一切考慮せず、文字と語彙と文法しか決めない言語も考えられる。このような言語は決して絵空事ではない。文字と語彙と文法だけを決め、単語に音価を当てない。音価がなければ音韻を定める必要もない。

では読むときはどう読めばいいのか。読み手のそれぞれの母語で読めばよい。この手の人工言語は4世紀も前から存在していた。そしてそれは必ず表意文字か語義を表す数字を持っていた。音韻がない以上、表音文字にはできないためである。

●暗号としての人工言語

まず最も原初的な人工言語とは何であろうか。それは意外にも5つの要素を全て持った自然言語に極めて近い後驗的なものである。最初の人工言語とは暗号のことである。

暗号としての人工言語は古代エジプトやローマにも見つけることができる。最古の暗号は古代エジプトの石碑に刻まれたヒエログリフとされており、これは紀元前1900年ほど前

のことである。この暗号を人工言語に含めると、人工言語の起源は少なくとも約4000年ほど前まで遡ることができる。

一方、人類最初の文字はメソポタミア地方チグリス＝ユーフラテス下流のもので、これは5000年ほど前に遡る。意外にも暗号としての人工言語は早くから存在していたことになる。

人工言語はその産声を上げたときから長い間もっぱら暗号として機能していた。およそこの頃は「人工言語＝暗号」であったといっても差し支えない。

暗号としての人工言語は資料が残されているわけだから少なくとも文字を持っていたことになる。同時にその文字自体が語彙を形成するので語彙も持っていた。古代人がそれを声に出して読んでいたかどうかは分からないが、もし読んでいたなら音韻も備えていたことになる。

●人工文字から見る人工言語事情

・東洋の人工文字事情

ヒエログリフにおいて最も意識されることはそれが文字であるという点である。原初の人工言語が暗号と同義であるならば、文字が人工言語の黎明に大きく関与していることになる。そして実際他の例を見ていくと、人工言語において文字がいかに重要な役割を持っていたのかを知ることができる。自然言語において文字を持たない言語が多く存在するため、文字は言語にとって必要条件ではないという低い地位に押しやられている。しかし人工言語では文字が大きな役割を持ち、時には国家まで動かしてきた。

例えば15世紀に李氏朝鮮第四代国王世宗（セジョン）が作った朝鮮文字ハングルは人工文字であり、現在朝鮮半島で実用されている。だがこの人工文字が実用されるまでには相当な歴史的背景があった。

文字を話題にするのなら更に時代を遡ることができる。紀元前221年には秦の始皇帝が中国を統一し、度量衡とともに漢字を矢継ぎ早に統一した。統一から外れた文字は排斥された。ただしハングルと違ってこれは既存の文字をまとめたという性質が色濃いため、人工文字については人工言語の範疇に入れるのは難しい。しかし国家の手によって人為的に文字が操作された歴史としては取り上げるべき出来事である。

ハングルにせよ始皇帝の漢字統一業にせよ、古代エジプトやローマの例とは異なり暗号でない点が注目に値する。朝鮮では百姓が、中国では人民が使うために作られたものであるという点で、これらは暗号とは一線を画す。

古い人工言語における文字の役割は大きく、特に政治的背景と相まって形成されてきた。なお、このことは音韻や文法を制定するよりも文字を制定するほうが簡単だということにも繋がる。

ハングルは確かに人工文字だが、それは朝鮮語を表すためのものでしかない。世宗は朝鮮語の音韻や文法まで作ろうとはしなかった。朝鮮語そのものを変えることは彼の目的でなかったし、何よりやろうとしても当時は技術が足りなかった。音韻、更には音声を百姓の間に制定しようとするのは政治的以前に印刷技術や録音技術の乏しい時代では極めて難しいためである。文法を制定するのは音に比べれば容易であるが、それよりも文字のほうが人の手を加えるのに適した素材であった。

できるできないの話を別としても、音韻や文法に比べて文字のほうが手を加える必要性があった。暗号として使われる文字は字形を変えたほうが見破られにくいので手を加える必要性が大きい。

また、暗号を欲しがらなかった朝鮮にも文字に手を加える必要性があった。ハングルが作られたのは例えば漢字の読めない民衆が不当な扱いを受けた際に裁判を申し立てられないなどといった窮状を鑑みた結果である。その他にもハングルが作られた理由はあるが、いずれにせよ朝鮮が欲したのは暗号ではなく理解しやすい実用的な文字であった。そしてそれを得るためには漢字というシステムから脱却する必要があった。なお、このような大きな政治的な動きがスムーズに運ぶことは稀で、実際当時はこの改革に対する反論があった。1442年、世宗配下の漢学者崔萬理がこのような反意を上奏した。

「民百姓が犯罪の容疑をうけたとき、かれらが自分の無罪を主張できないという理由で誣告をうけるという王のおことばは、納得できません。」金(1984 p111)

ハングルの歴史はこの後、更なる憂き目を見ていくこととなる。いずれにせよこのように古い人工言語にとって人工文字あるいは人為的に選ばれた文字が持つ役割は大きく、し

ばしばそこには政治的・経済的・社会的な背景が関与していた。主に趣味で作られる芸術言語などと違い、のっぴきならない理由がそこにはあった。

東洋は歴史的に見れば概ね中国が中心に位置していた。文明は中国（あるいはインド）から主に伝播されるものであった。この結果、中国の国字である漢字と東洋（特に東アジア）の人工文字は大きな関わりを持った。漢字とは似ても似つかない字形のハングルであるが、これでも水面下では漢字との大きな関与があった。

そもそもハングルができたのは国字を持つという朝鮮民族のアイデンティティの問題や上述のような民衆の社会的問題に対処するためである。そしてそれに対する反論も主に当時の宗主国である中国の怒りを恐れたことに起因する。従って中国及びその国字である漢字と独立してハングルの語ることはできない。

つまり人工言語において文字は強い社会的背景を持ち、その背景と切り離せない関係にあるということである。ただしエスペラント以降の人工言語の文字はこのかぎりではない。

文字の持つ背景は社会的なものだけではない。宗教などの文化や民族意識を背景とすることもある。そのような論争はかつて日本にもあった。日本はハングルのような国字を新たに作るようなことはなく仮名文字で和語を表していたが、その日本にも文字論争があった。神代文字である。

神代文字は日本古来の漢字に依存しない固有の文字とされ、室町時代には少なくとも神道の間で広まっていた。神代文字を巡っての議論は平行線を辿った。結果、この議論は時代を下って持ち越された。明治になると神道が主唱する神代文字は偽造であると国語学者の山田孝雄は述べた。

神代文字は現代では一般に言語学の対象よりもむしろ哲学思想の対象としてみなされがちである。この論争の重要な点は、日本は古来から漢字ではない固有の文字を持っていたという主張にある。神代文字自体が重要なのではない。固有の文字を持つことが中国の精神的支配からの脱却であり、日本民族のアイデンティティの確保でもあり、何より神道の思想に沿った。そのことが重要である。この神代文字のように、宗教や思想を背景とした文字が存在する。

また神代文字にはハングルに似たものがある。阿比留（あひる）文字という。ハングルを真似て作ったのではないかとされているが、逆にハングルがこれを真似て作られたと

主張する者もいる。神代文字は近代現代においてもはや神道よりも日韓の国家関係や民族意識を反映している。

神代文字が人工文字だとしたら、人工言語における文字は文化・宗教・哲学思想のみならず、民族意識や果ては国家関係までを背景とするといえる。

以上から、人工言語における文字は単なる言語を表現するための道具ではなく、その後ろにある様々な背景を暗示するものであるということが分かる。

・西洋の人工文字事情

今度は目を西洋に向けてみる。西洋を支配してきた文字はアルファベットである。表意文字である漢字が政治的・社会的・経済的・思想的・宗教的な影響を東洋に与え、人工文字へ至らしめたのと同じく、表音文字であるアルファベットは西洋の人工文字に影響を与えた。表音か表意かという違いが西洋の人工文字の運命を大きく左右することになる。ではまず自然言語に使われる表音文字アルファベットとはどのようなものであるか。

そもそもアルファベットはフェニキア文字に遡ることができる。これは原初は表音文字でなく表意文字であった。象形文字の一種で、牛の頭や家などを指していた。それがやがて表音文字として使われるようになり、長い年月を経て現在のアルファベットに至る。フェニキア文字には子音しかなく、母音を加えたのはギリシャ人である。現在最も広範に使われるラテンアルファベットの祖は音韻と照らし合わせると、このギリシャ文字であると考えるのが妥当であろう。もっとも、そこにはギリシャ語とラテン語の音韻体系の違いによる齟齬が含まれてはいるが。

アルファベットは西洋の各国語を表記するのに用いられてきた。しかし言語は変化するものである。そして変化は文語より先に口語に訪れる。発音が変わろうと綴字は暫く残存する。英語の *daughter* における *gh* は黙字だが、かつては読まれていた。その名残は今日のドイツ語に残されている。

ただ言語である以上、綴字も変化する。変化が緩慢なだけであって、変わらないわけではない。現在の英語は視覚方言によるスペルが増えており、実際の発音に近付けたスペルが使われている。

ほかにも例えば technique はフランス語の影響が薄まるに従って technic に座を奪われつつある。またインターネットのチャットでは you はしばしば u と書かれる。

このように文字は音を追いかけるように変化していくので、音と文字が一致する期間は無いかあるいは短い。

綴りと読みが一致しないのは不便である。従って表音文字圏では正書法というものが常に意識される。漢字の書体とは違い、原音に合わせてどう正しく表記するかというのが問題になる。そこには美観もさることながらまず整合性・合理性が重視される。正書法が確立すると暫くの間は音と文字が概ね一致する。

英語に比べてドイツ語の表記が音に忠実なのは、ドイツ語の正書法のほうが遅れて確立したためである。更にフィンランド語の文字と音がドイツ語より一致するのは、フィンランド語のほうが正書法の確立が遅かったためである。どこの国でも近代化に伴い正書法が確立していったというのは、表音文字圏における正書法の重要性の高さを示す傍証である。

正書法というのはつまるところ音と文字のタイムラグから生まれるものである。音の変化に文字の変化が付いていかないことが読みと書きの差を生み、ひいては正書法という概念を生む。このタイムラグはいかなる表音言語でも避けることができない。それは自然言語であろうと人工言語であろうと同様である。ザメンホフは1900年に「国際語思想の本質と将来」の中でこう述べている。

「大部分の言語の正書法は、学習者にとってじつにやっかいだ。…人工語は、あらゆる文字に、明瞭で厳密に規定され常に同一の発音を与えている。そのおかげで、人工語には、正書法問題はまったく存在しない。」水野(1997 pp50-51)

ザメンホフはこのように述べているが、言語である以上エスペラントも音と文字のタイムラグを避けることはできない。エスペラントと近代になって正書法を確立させた言語は本質的に同じである。両者は正書法の制定とともにタイムラグを持ち始める。そして長い年月をかけて音と文字の差異が開いていく。エスペラントも自然言語同様、時代が下れば正書法を見直す時期が来る。それを食い止めるには音を一切変化させないことが必要条件だが、言語の変化を一切食い止めるというのは不可能である。

さて、このような表音文字アルファベットの支配下にあった西洋で、人工言語における文字はどのような性質や意味や背景を持っていたのであろうか。

東洋では漢字を基軸とした文字が作られた。仮名文字は漢字を元に作った文字である。ハングルは漢字を社会的背景として作られた先験文字である。

ちなみに、人工文字にも先験と後験がある。仮名文字は世宗のように誰かが意図的に作ったものではないため、後験文字ではなく自然文字である。後験文字と自然文字を混同しないよう注意がいる。

東洋の人工文字の事情は既に見たとおりであるが、西洋ではどうであっただろうか。

西洋における人工文字はアルファベットの支配下にいただけのことがあり、見事にアルファベットの影響を受けている。

まず、各国語のそれぞれのアルファベットはアルファベットのヴァリエントであり、いずれも自然文字である。

一方、アルファベットを元にした後験文字は例えばキリル文字である。キリル文字はロシア語などのスラブ諸語を表記するための文字であり、ギリシャアルファベットを参考にした文字である。キリル文字はグラゴル文字を考案したキュロス・メトディオス兄弟に因んだ名である。キリル文字は人工文字の一種で、後験文字である。ハングルと異なるのは先験文字でないという点である。

アルファベットは非常に簡単な造りをしているため、加工がしやすい。しかも表音文字なので文字の数も少ない。従ってヴァリエントを容易に作ることができる。その結果アルファベットの後験文字は多く存在する。表音性を保ったままアルファベットの形だけ変えればそれだけで暗号が出来上がるので、表音文字は暗号用に加工しやすい素材でもある。

例えばレオナルド＝ダ＝ヴィンチは鏡文字を用いて文章を書いた。鏡文字は仮名文字と違って自然とできていったものでなく、ユニークなアイディアの持ち主の思いつきによる暗号や遊戯である。この場合、元となっているのは明らかにアルファベットであるため、アルファベットの後験文字といえる。

・中東の人工文字事情

今度は中東に目を向けて見る。中東はアジアともヨーロッパともつかない文化の交差点である。西洋と東洋の要素を兼ねそろえつつ、しかも独自の文化を持っている中東は文字に関しても面白い歴史を与えてくれる。文化の交差点であるということはそれだけ自己の文化が他者の文化に侵食されているということである。海に囲まれた日本とは明らかに異なった環境である。

例えばトルコはトルコ語を使うが、その表記には伝統的にアラビア文字を使用していた。ところが20世紀前半にケマル＝アタチュルクが台頭すると、彼は教育改革を推進した。その中には言語の改革も含まれており、それまで1000年ほど使われてきたアラビア文字を廃止した。そして代わりにアルファベット表記を採用した。

ここで重要なのが、アタチュルクはアルファベットをそのまま利用したのではなく、ラテンアルファベットを元にトルコ語のアルファベットを作ったということである。つまりは後驗文字の作成である。東洋西洋の要素を持ちながら自己の文化を混ぜ合わせるオリエンタルな手法である。

トルコ語のアルファベットは母音が8で子音が21の合計29文字で、ラテンアルファベットと同一ではない。例えばトルコ語のアルファベットにはğ(yumuşak g)などのラテンアルファベットにはない文字が存在する。

アタチュルクは世宗と異なり、単に読み書きを簡単にしようとしたのではなかった。ハングルとトルコ文字を後驗・先驗のみの違いに帰着させるのならそれは早計であろう。トルコ語のアルファベットと同時に推進されたのはアラビア語やペルシャ語由来の外来語を排斥することであった。文字とともに語彙も確立したわけである。そしてそれはトルコ人の精神面における独立を意味した。トルコ語のアルファベットという人工文字の裏には民族及び国家のアイデンティティが隠れていたのである。

・人工文字における表音文字と表意文字

ところで、表音文字と表意文字では概して表意文字のほうが人工言語に与える背景が広範で深淵なようである。言い換えれば人工文字に与える影響が大きい。それはハングルの血の歴史や神代文字の民族意識を見ても頷けることだが、なぜ表意文字のほうが人工文字に大きな影響を与えると示唆されるのであろうか。こう書くと西洋の血の歴史を気が滅入るほどご指摘いただきそうだが、それは無論踏まえての上である。

背景が広範で深淵という仮説の原因は民族性の違いでもないし、東西文化の違いでもない。表意文字は表音文字に比べて文字の象徴性が強い。また、文字数が多く字形が複雑で習得が難しい。これらが大きく関わっている。

ハングルが起った理由を思い出してほしい。そもそも漢字が難しくなかったらハングルの必要性は無かった。中国が20程度からなる表音文字を用いていて、朝鮮語と似たような音韻体系を持っていたら、ハングルは決して生まれなかった。表意文字の持つ難しさがハングルを生んだともいえる。

一方、神代文字については民族意識の問題があった。表意文字である漢字は表音文字のアルファベットよりも象徴性が強いので、「自分達は固有の文字を持たない」という劣等感を日本人に強く植え付けた。その劣等感への反動が神代文字を生んだ要素のひとつであることは否めない。このように、表意文字はその習得の難しさと象徴性の強さにより、表音文字に比べて、人工言語の文字に大きな影響を与えると考えられる。

表意文字は絵文字の性質を持っているので、ピクトグラムと重複する点がある。ピクトグラムという点で見ればアルファベット圏の西洋も、ピクトグラムの持つ象徴性の強さに翻弄されてきた。

そもそもアルファベットにも象徴性は認められている。たとえばxは相手が入れないようにドアに打ち付けた木の板の象形である。そこから意味が未知に転じた。数学で変数をxとするのはここから来ている。

また、紋章などをはじめとした象徴的なピクトグラムが西洋には多数ある。中でも最も象徴的なのは十字である。十字は人工文字ではないものの、極めて象徴的な意味を持つ。具体的にいえば、十字は包括的にキリスト教を象徴する。十字の象徴はキリストと彼が磔を被った十字架との間におけるメトニミー(より厳密に言えばトポニミー)から作られた。そのため漢字でいえば象形ではなくむしろ指示といったほうが正しい。

この十字という象徴文字は西洋に多大な影響を与えてきた。西洋人の精神の中に十字はあまりに象徴的に刷り込まれており、十字軍やナチスドイツの鍵十字(ハーケンクロイツ)などを例に出すまでもなく、十字を背景とするものは多い。

このように、表音文字圏である西洋でも一部のピクトグラムがその象徴性によって東洋と同じように広範な背景を持つことは認められる。そしてこのことは表意文字の象徴性が広範な背景を文字自身に与えることの傍証でもある。

表音文字圏にある西洋人にとって表意文字やピクトグラムは日常的に自分達の言語を表すためのものではなかった。それゆえ西洋人が表意文字やピクトグラムを見るときは、その象徴性が特に取りざたされた。神話や聖書の解釈を見るとしばしば西洋の象徴性への執着が見られる。この執着は、16,7世紀の真正文字より前に遡ることができる長きに渡るものである。西洋人は日常的に表音文字を使うため、表意性への渴望がこの執着を生んだとも考えられる。表意文字の持つ象徴性に神秘主義を重ねた一部の真正文字の探求者はまさにこの好例である。

一方、漢字の影響を強く受けた東洋にとって表意文字は日常的で生活臭のするものである。何かを象徴するという神秘的な意味合いは薄れ、単に市場に置いてある桃といった即物的な日常品などを表すものという側面が大きい。東洋では表意文字が生活に密着している分、表意文字を過度に象徴的に捉えないのが特徴である。

表音文字圏にいる西洋のほうが表意文字に対する慣れがないため、過度な期待や意味を表意文字に持ちやすく神秘主義に陥りやすい。16世紀、表意文字ブームがにわかに起こったとき——たとえそのブームが普遍文字を求めたものであったとしても——しばしば表意文字の象徴性が取りざたされたのはその裏付けである。

まとめよう。人工言語の黎明期は暗号と文字の歴史である。原初の人工言語は暗号であった。暗号には文字が使われた。人工言語に使われる文字は自然言語の文字に影響を受けてきた。東洋では表意文字である漢字の影響を受け、ハングルのような先験文字が生まれた。西洋では表音文字であるアルファベットの影響を受け、キリル文字のような後験文字が生まれた。どちらも自然文字の背景を背負うことに変わりはなく、人工言語における文字は自然言語の文字から影響を受けてきた。

表意文字の難解さと象徴性の強さにより、表意文字を基にした人工文字のほうが表音文字を基にした人工文字に比べて広範かつ深淵な背景を有する。表意文字が大きな背景を抱えるというのは人工文字だけでなく自然文字やピクトグラムにもいえることである。西洋でも十字などは非常に大きな象徴性を持ち、歴史的な事件を何度も背景にしてきた。ただし

表音文字は背景を持たないというのは全くの誤解で、トルコ語のアルファベットのよう
に社会情勢や民族意識を背景としたものもあった。

●黎明期

原初の人工言語は暗号で、約4000年前に遡ることができる。暗号としての用途は国家規
模から個人の日記に至るまで、広く使われてきた。また、暗号ではなく言語改革として人
工文字が作られることもあった。その場合しばしば文字は歴史的背景を背負うこととなっ
た。神代文字のように現代でも民族意識を背景に論じられ続けているものもある。そうい
った事情を考慮すると、文字という要素は人工言語において最も長く論じられてきたもの
といえる。

・ビンゲンのヒルデガルトによる *Lingua Ignota* (未知なる言語)

では文字以外に視点を向けてみるとどうなるか。そもそも人工言語は自然言語と同じく
言語の一種であるから、音韻や語彙や文法を持ったものが本来的である。そういう視点で
人工言語を見ると、自然言語を暗号化したものでない最古の人工言語は12世紀に見ること
ができる。もっとも、これは現存している文献から見た史観にすぎないため、人類の歴史
ではそれより前に人工言語が作られていた可能性もある。

最古の人工言語と目されているのはビンゲンのヒルデガルトによる *Lingua Ignota* (未知
なる言語) である。ヒルデガルトは女子大修道院長であった。

Lingua Ignota の文字はアルファベットを元にした23字からなる後驗的な表音文字である。
彼女は *Lingua Ignota* の語彙集を残しており、そこには1011の単語が記されていた。注釈
にはラテン語などが使われ、説明が施されていた。語彙は驚くべきことに先驗語であつた
が、修道院長でもあつたことから神学的な語が多い。

名詞は神や天使などを頂点にした階級性を持った順序で並べられ、徐々に親族語彙など
の人間を表す語に下っていく。例えば神は *Aigonz* であり、辞書のヒエラルキーの頂点に位
置する。キリスト教徒であつた彼女の発案であるため、この神は勿論一神教の神——キリ
スト教の神——を表している。神の次に来るのは天使を意味する *Aieganz* である。 *Aigonz*
に近い語形を持っており、アプラウト(母音交替)しているだけの違いという点が興味深い。

この造語の仕組みは彼女の出自であるピンゲンが今のドイツに当たることから、もっともらしく感じられる。

一方、母は Maiz といい、義理の母は Nilzmaiz である。この点を鑑みるに複合概念は合成語で表すことができた。また合成語は右側の要素が合成語全体の性質を決定している。

ただ、文法についてはラテン語を意識した屈折を持っている。ラテン語の使用は彼女の社会的階級や出自、そして実際の語彙集における注釈からも濃厚に示される。こういったことから *Lingua Ignota* は人工言語学の類型論においてラテン語と今日でいうドイツ語を参照言語とした後驗語であるといえる。

宗教改革もルネサンスも起きていないこの時代においてキリスト教は世界観そのものであった。その点でヒルデガルトが階級的な名詞の序列を定めたことや、ラテン語やゲルマン語からアイデアを得たのは不可避である。ただ語彙が先験性を帯びているため、エスペラントと同じ感覚で後驗語に篩うことはできない。従って語彙については先験語だが文法その他については後驗語であったと定義するのがより正確である。

なお、*Lingua Ignota* の語彙は 1011 と言われることが多いが、これは誤りである。この数は彼女の残した語彙集に収められた語の数であり、彼女が作った例文にはこれに含まれない単語がある。従って *Lingua Ignota* の語彙は 1011 よりも大きい。

ところで *Lingua Ignota* の用途は何か。色々な議論がなされているが、筆者は個人言語ではないかと考える。

ときに、なぜ最古とされる人工言語を作ったのが彼女だったのであろうか。別に彼女でなければ作れなかった理由はないが、彼女の学問的に恵まれた環境がそれを可能にしたものと思われる。修道院長という高い立場とそれに由来する深く広い知識というのは一般人にはないものだった。

もちろん彼女以外に識者は存在したし、有閑なものの中にはいただろう。彼らが個人言語として人工言語を作らなかった確証はどこにもない。それは西洋だけでなく地球の至るところでもいえることである。しかし現存する人工言語で最も古いのが *Lingua Ignota* であるという事実は変わらない。となると、恵まれた環境だけでなく、本人の資質も関与していたのであろう。

・ライモンドゥス＝ルルスの "*Ars magna*"

個人言語については今見たとおりだが、他の種類の人工言語はどのような黎明を迎えたのであろうか。哲学的言語の兆しについては少なくとも13世紀に見ることができる。ではまず、このころの哲学的言語は何を背景にしていたか考えてみよう。

その背景とは何よりもキリスト教の普及である。上述のキリル文字の語源となったキュリロス・メトディオス兄弟も9世紀に宣教師としてロシアに赴いた。キリルというのは彼のロシア名である。この時代の人工言語の普及はキリスト教の普及に裏打ちされたものである。勿論キリスト教は実際には自然言語を用いて普及されたが、キリスト教の普及の過程に人工言語が絡んでいたことは興味深い。

具体的にこの時代に作られたキリスト教の普及を目的とする人工言語について考察してみる。13世紀の修道士ライモンドゥス＝ルルス为例に挙げよう。この時代は十字軍におけるキリスト教徒とイスラム教徒の対立という歴史的背景を持つ。彼が生まれた1235年ごろはヨーロッパ側がエルサレムを支配していた希少な時期である。15世紀まで続いた名目上の十字軍を度外視すると、事実上の十字軍遠征はこのころ終わる。事実上の十字軍が終わるこの時代に生まれた彼の生誕地はちょうど宗教のサラダボールであり、キリスト・イスラム・ユダヤが混在していた。従って、彼が非キリスト圏の言語や文化に通じていたことは容易に想像できる。

彼はキリスト教の修道士であったため、非キリスト教徒をどう改宗させようかと考えた。多くの宣教師と異なり、彼は"Ars magna"という哲学的言語を作った。この言語の目的は異教徒の改宗である。彼の言語は我々がエスペラントなどからイメージするものとは異なっており、数学的な結合を用いた方法だった。

9個の文字を幾何学的に組み合わせ、例えば「善は偉大である」というような命題を表わすことができた。幾何は星型のもの、階段状のもの、円状のものなどがある。有名なものは円状のもので、これは3つの同心円から成る。使われる文字は9字で、BCDEFGHIKである（最後はJではなくK）。この3枚の円盤を回転させることによって任意の3文字の組み合わせを作る。更にこの3文字のどこかにTを挿入し、4字で1組を作る。この組み合わせから適宜命題や問題を得るという仕組みである。

我々の慣れ親しんだ自然言語の方法からは想像しにくいもので、数学的な要素が濃い哲学的言語である。この機械的な方法だと善と貪欲を組み合わせることもできる。善と貪欲は受け入れられない組み合わせであるのに算出されてしまう。従ってどの要素とどの要素

が結び付けられるかといったことを使い手が知っていなければならないという点が問題視される。しかしそれは思想上の問題であって、言語上は大きな問題でない。日本語でも「丸い四角」「貪欲は善である」などという表現が可能であるが、そのことを以って言語上の問題とはされない。

ヒルデガルトと違い、ルルスは改宗のための哲学的言語を目指した。更にその手法は語学的なものではなく極めて数学的な方法で、内容も神学的・哲学的なものであった。ではこの手法の効果であるが、残念ながら極めてゼロに近かった。その上ルルスは14世紀初頭にアフリカで布教中、イスラム教徒の投石により殉死している。こうして原始的な哲学的言語は失敗に終わるが、彼の思想はこの後も受け継がれることになる。

● 普遍言語論争

・ 中世後期から近世にかけての西洋の言語事情が普遍言語論争に到った過程

さてルルスが殉死した14世紀前半は十字軍国家がイスラム教徒に殲滅されたころでもある。西洋人は西アジアから撤退。同時にドミニコ会らによりアラビア語の文献が流入する。続いて15世紀に東ローマ帝国がオスマン帝国に滅ぼされたのを期にギリシャ語の文献が西欧に流入する。まとめると、13～15世紀の間にアラビア語の文献とギリシャ語の文献が西欧に流入したことになる。このことは自然言語における語の翻訳や借用を含意する。

このような歴史的背景にあつて言語はどのように変化していたか。当時東欧がギリシャ語圏であるのに対し、西欧はラテン語圏であった。

ラテン語は19世紀まで学位論文の言語でもあり、現代でも専門用語に多く取り入れられている。その地位と格式の高さは歴史的には浮き沈みしつつも、決して無くなりはしなかった。ただ保持されてきたのは文語としての、あるいは学問の言葉としてのラテン語であり、口語ではない。

12世紀にはラテン語は西洋の共通語としての地位を復活させた。ただしそれは旧ローマ帝国時代とは異なり、学問や教育の上という限定付きである。口語としてのラテン語は崩れ、土着語を生む土壌となった。

12世紀にはカタロニア語が生まれ、南仏ではプロヴァンス語が生まれる。プロヴァンス語はフランス・イタリア・スペインの一部で共通語の様相を呈する。しかしその後フラン

スではカペー王朝のフランス語によって退けられる。それでも南仏では 19 世紀までプロヴァンス語は日常語であった。

また 13～14 世紀に近代イタリア語が成立する。これはいわばラテン語の嫡男であり、口語としてのラテン語がとうに廃れていたことが見て取れる。

一方そのころスペインのほうではカスティリヤ語、ガリシア語などが既にあり、14 世紀中葉ではポルトガル語が成立する。

このようにしてラテン語の崩壊によりロマンス語などの土着語が西欧を占めていく。(当然土着語についてはゲルマン語も忘れてはならない)

また文化面において西洋は主に 14 世紀から 16 世紀にかけてルネサンスを迎えた。復活という語源にふさわしく、それは抑圧され失われた人間性の復古であった。それとともにローマ・ギリシャの古典の復興が起こる。

結果、大量の古典単語が西洋語に返り咲くこととなった。島国のイギリスではルネサンスは遅れて 16 世紀ごろに始まり、そこで英語は古典単語を吸収した。この流れに反対が起こり、古典単語を英語から排斥しようとするチークらの運動が起こったが、それでもなお古典単語は学識の象徴から動かなかった。

ラテン語が英語に関わったのはルネサンスだけではない。そもそもキリスト教典の伝来とともに angel など 400 語強の語彙が流入し、1066 年のノルマンコンクエストまで古英語に影響を与えてきた。また、中期英語には上述のようにアラブ圏の言葉がラテン語に大量に翻訳されたため、結果的にこのことが英語にも影響を与えることになる。

そしてもうひとつ述べておきたいのが非西洋圏との関わりである。古代ギリシャの世界観にとって世界とは地中海周りとオリエントを意味していた。しかしアレキサンダー大王の東方遠征によって世界観はアジア（インドや中国）にまで拡張される。後にシルクロードによって東西間でやり取りがされるが、その範囲は極めて限定的であった。

時代が下って 11 世紀に始まった十字軍が結果的には東西交易を促進させた。この交易で利益を生んだ結果、経済的余裕の生まれたイタリアでルネサンスが起こった。経済を下敷きに文化が発展してきたわけである。

13世紀ごろモンゴル帝国がイスラム勢を征服したことで西洋は東アジアへ進出。ここで西洋は極東と出会うが、ここで出会った漢字という存在がその後の人工言語の運命を大きく変える。

15世紀にモンゴルが弱まるとオスマン帝国が優勢となる。東西の中間に位置したため、オスマン帝国は交易品に重税をかけるようになった。既に交易品無しには暮らせない精神に陥っていた西洋人はルネサンスで磨いた科学技術を利用し、東洋への海路を開こうとした。海岸国のスペインやポルトガルがいち早くこれに着手できた。危険な航海ではあったが利益が大きく一攫千金が狙えることから航海熱が起こる。更にこの動きにローマ教皇が協賛する。対プロテスタントを目論み、新天地での信者獲得を期待したためでもある。従って商人以外にも宣教師らが同乗した。こうして西洋は大航海時代を迎え、アフリカ、アジア、アメリカなどを発見するに至る。これにより西洋人の世界観は広がっていった。

社会・言語・文化・経済、これらの観点から中世を雑観した。では、こうした時代背景は人工言語にどのような影響を与えたか。それは一言でいえば共通語の需要の増加である。ラテン語は西欧の共通語であるとともに知識の象徴でもあった。つまり共通語と知識の象徴という2面性を持っていた。

17世紀でもラテン語は今でいう英語のような高い地位を占めており、習うべき言語とされていた。識者は外国人同士であってもラテン語によって辛うじて意思疎通を図ることができた。つまり不完全ではあるものの共通語としての機能は死滅したわけではなかった。

しかしラテン語は問題が山積みであった。まずラテン語自体の習得の難しさ。これは特にラテン語そのものよりもその教育に批判が向けられた。だがいずれにせよラテン語が学びにくいという点で批判を受けていたのは変わらない。

そして共通性の問題。ラテン語は西欧とりわけロマンス語の中では共通語の意識が強く持たれるが、東欧やアラブ圏ましてアジアに至ってはまるで通用しない。

西洋人の世界観が広がるにつれ、ラテン語は共通語としての性質を弱められていった。そしてルネサンス以前に起こっていたラテン語の崩壊とそれに端を発する土着語の普及。これらの複合的な要因によってラテン語は共通語としての地位を貶められ、そのことが同時に別なる共通語の需要を高めた。

特に人工言語史的に見て重要なファクターは土着語の普及と台頭であろう。上述の13世紀のルルスは俗語と呼ばれていた土着語で学術書を書いたし、同世代のダンテは『俗語論』を著している。その後も続々と土着語で文献が作られていく。

このころの著作は写本によって広まっていたが、15世紀にドイツのグーテンベルクが活版印刷を実用化したことにより事態は激変する。グーテンベルクは土着語が急激な勢いで広まるための要因を作った。また16世紀前半に同じドイツのルターが宗教改革を行い、聖書をドイツ語に訳したことも土着語の急激な頒布を示唆している。

文章が各々の土着語で書かれることの弊害は何より翻訳の手間を必要とすることである。ラテン語で書かれていればどの国の人間にも難しい反面、どの国の人間にも読める。しかし土着語は違う。母語で書くのは簡単でも読者がそれを読めるとは限らない。それを翻訳するのは大きな手間であった。これが共通語が求められた原因のひとつである。

以上のような要因で西洋では共通語の必要性が高まってきた。これらの要因が重なったからこそ16,7世紀に普遍言語論争が起こったといえる。普遍言語論争を語る際にこれら社会・経済・文化などの要因は外すことができない。

この時代の人たちははじめからエスペラントのような人工言語を作ろうと意図していたわけではない。はじめは共通の書字を作ることが目的であった。それは真正文字や普遍文字などとも呼ばれたもので、概ね万人に通ずる共通の文字を意味していた。

本論では代表として主に普遍文字という言葉を使う。こう聞くとオリジナルの文字を作ろうとしたように聞こえるが、必ずしもそうではない。むしろオリジナルの文字を作ったロドウィックやウィルキンズは例外的で、アルファベットや数字を使ったもののほうが多い。

普遍文字は誰にでも読めるというのが前提で、主に2種類に分かれる。1つは字は同じだけれどもその読みは各国語で読むというもの。もう1つは共通の字に固有の読みを与えるものである。

前者はとりわけヒエログリフや漢字から影響を受けている。死滅してしまったヒエログリフに比べ、当時ライブで使われていた漢字は西洋人にとっては開眼的なものであった。上述の西洋と東アジアとの交流により漢字の使用状況が西洋に伝えられた。中国人や日本人は互いの言葉が異なるにもかかわらず漢字という共通の文字で意思疎通をしているとい

う報告が西洋に広まった。これはセンセーショナルであった。実際、ベーコンは漢字を激賞したことがある。(ルルス→ベーコン→ライプニッツらの繋がりは哲学的に重要)

漢字を知った西洋人の一部はまさにこれこそ普遍文字であると考えた。しかし研究を重ねるにあたり、徐々に漢字にも問題が見つかった。ヒエログリフも同様で、他の字についてもあれもだめこれもだめという結論に落ち着いていった。

更には既存の自然文字だけでなく、速記に使われる文字なども試された。速記文字は本来は速記という目的で使われたが、なにせ読める人間に限られているので同時に秘密文字の性質も持っていたし、意図的に秘密文字の性質を帯びさせられることもあった。そしてその秘密文字が逆説的にも普遍文字の材料として分析された。これらの文字は字形だけに終始するイメージがあるがそうとは言い切れず、きちんと読み方が定められた文字もあった。

このころは普遍文字ができれば人類にとって非常に有益であるという論調が盛んで、次々と言語案が提案された。人工言語最大のブームである。この論争は特にこの16,7世紀に栄え、ベーコン、デカルト、ライプニッツ、パスカル、メルセンヌなど、高名な識者が大なり小なり関わりを持っている。

ところで普遍文字の探求は目的の上でおおまかに2派に分けることができる。ひとつはウィルキンズやライプニッツのように普遍文字を哲学的に分析した派閥である。彼らにとって普遍文字ひいては普遍言語は哲学上の問題であった。後にドゥリンチェコがライプニッツを哲学的言語に分類したのはその思想背景によるものである。

もう一派は普遍文字を神学上・宗教上の問題と分析した派閥である。この宗教というのは勿論キリスト教のことであるが、なぜ宗教が普遍言語に絡むのだろうか。

聖書の『創世記』では神がアダムに生き物の命名をさせ、そのアダムの名付けがそのままそのものの名前になったというくだりがある。つまりアダムは唯一の言語を持っていた。ところが大洪水のあと、人間は天に届くバベルの塔を作る。それに怒った神が塔を崩壊させ、罰として人間の言語をばらばらにしてしまう。

聖書のこの話は言語の単一紀元説を表している。単一だったアダムの言語が罰によってばらばらにされ、言語のカオスが生まれたのだとする説である。そして当時の一部の人間はこれを信じていた。

教徒の中にはアダムの言語を取り戻そうと考えるものがあった。この思想は16,7世紀の普遍言語論争以前から存在していた。2世紀ごろの神学者オリゲネスは既にバベル以前の言語がヘブライ語であったろうことを示唆していた。これらの神秘主義者はアダムの言語を発見すべく古典語の探求にいそしんだ。研究された言語は主にヘブライ語である。

無論その研究は現代言語学の成果とは比肩できるものではないが、かなり長きに渡って研究されてきたことは確かである。この神秘主義は普遍言語論争にあつて更に動きを高めた。アダムの言語の発見だけでは飽き足らず、アダムの言語への回帰を目指した。つまりアダムの言語の普及によって世界をバベル以前の秩序に引き戻そうとしたわけである。

この時代にアダムの言語への回帰意識が高まった理由は何であろうか。ちょうど普遍言語論争の時代であつたというのも一因であるが、プロテスタントの出現も大きく関与している。プロテスタントは教会が聖書の解釈に介入することを厭つたため、彼らの間では聖書を直に読もうという意識が高まっていた。教会が認めているラテン語訳でさえ彼らは拒絶している。それゆえの祖語ヘブライ語への回帰、アダムの言語への回帰である。これ以上この思想を細分化していくと話が言語から遠ざかりすぎるためここで打ち切るが、このように神秘主義によるアダムの言語としての普遍文字や普遍言語というものが存在していた。

以上で見たように、この時代の普遍言語論争には大きく分けて哲学的な派閥と神学的な派閥があつたといえる。ただ両者は明確に区別されるとはかぎらない。グレーゾーンにいる制作者をどちらに分類するかは難しい。例えばウィルキンズはウェブスターに神学派と混同され、激しく彼を非難したことがある。

普遍言語論争に至った背景は十分に理解できたと思う。では次は具体的にどのような人工言語案が作られたのかを見ていこう。

・フランシス＝ロドウィックの『共通の文字』

フランシス＝ロドウィック。17世紀に人工言語を作成。主な資料は『共通の文字』A Common Writing(1647)など。

ロドウィックで最も取り上げるべきことは語根が名詞からではなく行為から作られるという点である。例えばto drinkを表す語根記号が根底にあり、その字に付加記号を付けることによって名詞や形容詞などを派生させる。多くの言語が名詞ありきであるのに対し、

ロドウィックは動詞ありきである。例えば「飲む」をδで表すとし、動作主をーのような記号で表す。従ってδは「飲む」であり、δーは「飲む人(drinker)」となる。ー以外の記号も存在し、それをδに付けることによって今度は「酔っ払い」や「居酒屋」などを派生することができる。酔っ払いは「δ+性質記号」、居酒屋は「δ+場所記号」で示される。

彼の文字は先験要素も持った後験文字である。飲むという記号がδのような形をしていることや、loveの語根がLのような形をしていることから後験性が見て取れる。また付加記号もヘブライ語などを参考にしているようである。

ロドウィックは行為ありきの言語を作ったが、行為化できないものはどう表せばよいのだろうか。例えば副詞、前置詞、接続詞、感動詞などである。これらについては語根に付加記号を付けて表すという方法で整合性を持たせている。ただし固有名詞は自然言語で書くことになっている。

一方、他の名詞はどうか。神のような語は行為から作れそうにない。これについてはto exist(to be)から派生しているようである。このおかげで覚えなければならない語根数は非常に圧縮されている。

欠点は少し文字を間違えただけで一瞬にして意味が変わってしまう点である。基本的に五線譜の上に文字を書いていくのでかなり書くのに気を使う。ならびに背景となる五線譜が文字を横切って走っていくため、美観を損ね、同時に認識を悪くしている。また、語根が少なかりと結局漢字を覚えるのと似たような苦勞を強いられる点も難儀である。動詞から名詞を作る際の意味が恣意的で、ロドウィック式の思考を一々覚えねばならない点も難点である。

彼は文法を英語から借りている。辞書については英語と普遍文字の対訳辞書を作ろうとしたが、結局実現されなかった。ロドウィックの人工言語は英語を参照言語にした後験語であるといえる。上述のとおり、文字はLがloveに近いようなことからアルファベットを基にした字であることは分かる。だが変形が激しく参照元が分かりづらいため、先験性を多少帯びている。

さて、ロドウィックの人工言語を見てまず気付くことは何か。それは徹底した語彙圧縮を行っている点である。覚えなければならない事項を減らすという姿勢はこのころの哲学的言語によく見られるものである。

ロドウィックがこうしたのは覚えづらいという批判に対してというのも確かにある。だが実際はそれだけではなく、彼が言語を考案した背景に記憶術があったことが関与している。普遍文字はその汎用性だけでなく、記憶術の応用としての作例でもあった。

言語を作る際は覚えなければならない事項の数が気になる。多ければ多いほど学習者の負担が増え、広まりにくいと考えられるからである。そこで制作者はどうか事項の数を減らそうとする。ところがその方法は非常に限られている。

例えば何種類もある花の名を覚える際、それらが系統だった名前をしていれば覚えやすい。だがパンジーやアジサイやバラなどといった何ら規則を見出せない名前は覚えにくい。そこで制作者は花なら花で分類していく。例えば花は植物の下位概念で、パンジーの上位概念である。このように分類を用いることによって単語が整理されるため覚えやすくなる。

その結果、極端な話をすればアジサイはパンジャーでバラはパンジョーといった風になる。これだと一見覚えるべき事項は減るかもしれないが、かえって混同して覚えにくく使い勝手は悪い。だがこの時代の作者は基本的にこういった百科事典的分類に頼っていた。

もともとこの手の分類はアリストテレスの範疇論に由来している。だが洗練語の走りとなった哲学的言語の思想の源流となるアリストテレスの範疇は、普遍言語を作るには頼りないものであった。アリストテレスは実体・量・時間・場所・位置・性質・状態・関係・能動・受動という10のカテゴリーを範疇として挙げた。これは認識ではなく存在から見たカテゴリーである。また能動や受動というのは何かの分類とは考えにくく、むしろ文法上の概念であろう。このカテゴリーの未熟さは哲学ではカントのような批判者を生み、人工言語学ではウィルキンズのような批判者を生んだ。

ウィルキンズはアリストテレスのカテゴリーと比べると遥かに細かいカテゴリーを唱え、また実際にそのカテゴリーを作成した。彼は自然物や空間を細かに分類し、それらに普遍文字を付与した。万物を分類し、その概念に音と文字を充てることによって人工言語を作る。この哲学的言語の手法は多くの人工言語制作者に影響を与えた。17世紀に確立した人工言語作成の手法であるが、その後現代にも引き継がれている。趣味で言語を作る者も普

及を目指して作る者も、先験語を作ろうと思いついたときはまずは万物を分類するという手法に行き着く。

ところが万物の分類を前提とする哲学的言語には欠点があった。ここでは2点挙げよう。ひとつ目は万物を分類するのは極めて難しく、またそれを覚えて実用するのも難しいという点である。抽象的概念を分類するのは難しいし、まだ科学的に分類がなされていない植物を何類に分類すればいいかわからないという問題もある。更に科学が発達した現在で万物を分類するのはおよそ不可能である。科学の概念や産物は個人による分類が追いつかない速度で作られるし、新発見自体が新たな分類項目を生むことも考えられる。それゆえ万物を分類することは極めて難しいと考えられる。よしんばできたとしてもその分類は恐ろしいほど細かいだろうから規則を覚えきれない。

よく口上に挙げられる「理性によって一意的に単語を生成できる」というのは誤謬である。最初はそのように意図して作ってもいずれは恣意的に作らざるをえない局面に遭遇し、結局学習者はその恣意性をひとつずつ覚えねばならない。そこで規則を設ければ今度はその規則を覚える労力が生じる。実際自然言語を覚えるのと手法が異なるだけで労力は大差ない。その人工言語を実用するには常に重い辞書を持って歩かなければならないことになるし、実際ウィルキンズに当てられた批判もまさにこれであった。ちなみにウィルキンズの分類はアリストテレスのものよりは細かかったものの、万物を表すのに十分なだけ細かかったわけではないことを付け加えておく。

ふたつ目の欠点は、簡単にいえば万物の概念の分類の仕方が人によってまちまちだという点である。概念Aの外延は人によって異なる。言い換えれば、概念はそれぞれ内包が個別に定義されるものではない。この考えが直接言語に関わる形で現われたのは19世紀、ソシュールの時代である。

以上は哲学的あるいは科学的な欠点であるが、人工言語としての実用面で見るとこれらの言語にはどのような欠点があるだろうか。例えば同じ分類に組み込まれた同属概念は互いに似た文字になりがちで、誤解を受けやすい。また、分類が系統だっているため、それを表した普遍文字もまた系統だちすぎていて、少しでも字形が狂えば意味が取れなくなってしまう危険性を孕んでいる。以下に見ていく人工言語の多くも同様の欠陥を持つ。

・ジョージ＝ダルガーノの『記号術』 *Ars signorum*(1661)

ダルガーノはスコットランド出身だが、大半をオックスフォードで過ごす。ウィルキンズと関連があり、創作物も基本的に類似している。ダルガーノがウィルキンズに剽窃の疑いをかけたことで関係が悪化。多くの識者はウィルキンズ寄りだがライプニッツなどはダルガーノ寄りの考えであった。

ダルガーノは話し言葉としても使える言語を設計しようとした。そこで音声学的な分析を用いて人間の発声に最も適した音を探した。その考えに基づいた結果、発音しやすくするため、単語に母音を挿入している。この母音に概念を分類する機能はない。発音しやすさを取った結果、分類記号としては認識しづらくなっている。

彼もまた分類に頼って言語を構築した。分類は階層式になっており、そのうち17のカテゴリーを基本的な類と呼んでいる。例えば「存在物」「実体」「人工物」などが挙がっている。基本的な17個の類は横並びになっていない。存在物が出発点で、その下位に「具体的に合成され完全なもの」と「抽象的で単純で不完全なもの」がくる。このうち前者は基本的な類である。従って基本的な類同士が階層構造を持っている。これはウィルキンズの類も同様である。

なお、基本的な類には17種の大文字が付いており、例えば頂点の「存在物」はAである。使われる大文字はA, I, E, H, U, B, D, P, S, K, G, T, Y, O, N, F, Mである。

17類の下には更に中間的な類がある。この類は小文字で表す。例えばP（感覚のある）の下位にはo（主要な感情）がある。更にその下には種がある。例えばoの下位には喜びや怒りなどがある。ではこれらの種はどう名付けるのかというと、基本的な類のPと中間的な類のoにそれぞれの種差を表す子音を付けて表す。例えば喜びはpobで怒りはpodである。

この問題点は種差を表す子音が何であるか予測できず、一々覚えねばならないということである。希望というのも同じ種に存在しているのだが、これが「po～」であることは分かっても次の1字が予想できない。ちなみに希望はpofである。しかし一体誰がこのfを事前に推測できるだろうか。

また言語の運用時には同属概念が最小対語になるため、聞き間違いの恐れが常につきまとう。ただこの問題を解決する方法もあり、pobなどの哲学的記号をラテン語に訳して読めるよう、ラテン語の対訳を著書に付している。

ダルガーノも記憶術の流れを汲んでいるため、語彙の圧縮を行っている。例えばRはエスペラントの接頭辞 mal-と同じく対義語を作る。このRのような語彙の圧縮に使う字がいくつか用意されているものの、ダルガーノの分類は運用するには覚束ないものであり、覚えるにも恣意的要素が多すぎて覚えづらい。また彼の分類はこのように CVC で終わるものばかりではない。CVC から成る音節数はかなりのものだが、分類に基づいているので可能な音節の全てを使うことはできない。分類によって命名をすると下位概念に行くほど分類が細かくなり、命名が長大になりがちである。

abhorre (<L abhorreo 斥込む、嫌悪する、ぞっとする。英語では abhor に残る) を見てみると、ダルガーノはこのラテン語を prebesu sumpren, trof と訳している。なるほど p から始まるので感覚であることが分かる。e が来るので内感であることも分かる。確かにこれは主要な感情ではないので o ではなかろう。そして r が e の前に来ているので反意を表すということも分かる。少なくともはじめの 3 字以内で「感覚に関し、内的なもので、反意」という情報が分かる。しかしその後更に情報が付加されて prebesu となるため、都合かなりの情報が付加されることになる。単語を発しながらその感覚そのものについて辞書的に説明しているようなものである。これを覚えて同属の単語と区別して使うのは面倒かつ難解である。それに、そもそも効率的に覚えるには彼と同じ命名観を持たねばならない。理性で判断して皆が皆同じ命名に至れば問題ないが、そのようなことは現実にはありえない。

なお、彼の辞書は事実上未完という形で閉じている。彼が命名しなかった概念については使用者側が新たに作らねばならない。しかも音素に法則性はない。e は P の下では内感を意味するが、N (物理的な) の下にある k (陸生の) の下では「ひづめの裂けた」という意味になる。同じ音素が何を表すかは相対的に決まり、法則はない。従って未定の単語を命名すると、人ごとに一致をみない。

ダルガーノの分類が覚えにくいことは間違いないが、彼の分類はライブニッツらと比べると人間的である。このような命名法だと馬や騾馬は何と命名すればいいのか分からない。あまり細かく種差を分けていくと馬ひとつ表すのに物凄く膨大な記号数が必要になる。そこで恣意的というよりは彼のセンスに基づいた命名がなされている。例えば馬も騾馬もひづめの完全な動物に属するが、これらの違いは馬が「勇敢」、騾馬が「欠如した性」の違いで表される。馬について「勇敢」という哲学的分類には沿わない主観的な命名をしてい

る。ここに彼の、ひいてはスコットランドあるいはイングランドの文化や価値観が見え隠れしている。

ダルガーノの分類は哲学的に未熟であったがゆえにかえって命名に関しては後驗性の強いものになっており、今日の人工言語に繋がるどころがある。彼のこうした命名方法は長所もある。彼は同じものであっても観点が違えば命名も異なってよいとしているため、馬を「勇敢」以外の種差で表しても良いことになる。このことを応用すれば例えば文化によって異なる「神」の存在も文化に応じて表現しわけることができる。例えば一神教の神であるとか多神教の神であるといった具合に。もっとも当時のキリスト教圏に生きたダルガーノ本人が神についてそのような多解釈を認めたかどうかは疑問であるが、それでもこの異なる解釈で同じものを表現できるというシステムは現代のピクトグラムを用いた人工言語に通じるものがある。

ダルガーノの統語論は語順が重要な役を果たす孤立語的な言語であり、当時の哲学的言語の抛り所であったラテン文法の屈折を捨象している。ちなみにその語順はSVOである。また品詞性についてはロドウィックと真逆で、ほぼ完全に名詞しか持たない（他には代名詞が認められる程度）。他の品詞は名詞から派生させ、前置詞も名詞として分類枠の中に収めている。

・ジョン＝ウィルキンズの『真正の文字と哲学的言語に向けての試論』 An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language(1668)

ウィルキンズはロイヤルソサイエティ初代書記長である。もとはダルガーノに呼応し、分類表を作ることにについて助力を申し出たが、ダルガーノは自分のほうがより簡単なものを作れると言って拒絶している。これを契機にウィルキンズは自己の言語を可能にする分類表に着手した。

その方法は要するに百科事典的であり、言語を作るというよりは百科事典の項目やシソーラスを作るようなものであった。このような計画においては人手が必要なため、彼はロイヤルソサイエティでの権限を利用し、同僚や友人に協力を依頼した。例えば植物の分類表はジョン＝レイに任せ、動物の分類表についてはフランシス＝ウィラビーに任せるとい

った具合である。その他、航海術などの分類も委託した。まるで現代において百科事典を分野ごとに作らせるような手法である。

ウィルキンズの人工言語において特筆すべき点は、彼に味方する学会由来の大きなコミュニティが存在したということである。他の研究者が主に個人で作業をしている間に彼は助力を得て作業をしていた。ロイヤルソサイエティでの地位がそれを実現した。人工言語の普及や研究に関しては言語そのものの出来よりも社会や経済面での環境のほうが重要だという好例である。

ダルガーノが剽窃を疑ったことから分かります、基本的に2人の考察は類似している。彼もまた概念を分類した表を作っている。その表はやはり未完のまま閉じている。そして長大で覚えにくく、恣意的であることを逃れられない。また、たとえ科学的な分類を行ったとはいえ、当時の科学力なので現代から見れば疑問を感じる分類も存在する。更に当時の文化や社会を反映した分類になっている。例えば「教会の」という概念は公的な関係に分類されている。キリスト教を反映してか、創造主というカテゴリーが堂々と存在している。ならびに「ヨーロッパの」に対するカテゴリーは「異邦の」であることから、社会・文化・風土が背景になっていることが分かる。しかしそれでも当時の彼らは自分たちの分類が客観的なものだと考えていたのである。

ウィルキンズの分類において金属や石が「植物性」の下位概念の「不完全」に属するのも興味深い。ただ、これを以って金属を植物として見なしているとはいえない。「植物の」は「感覚のある」の対の類になっている。だからむしろ「感覚がないもの」——現代でいう無生物や無機物——のように見なすのが自然であろう。

「植物性の」は vegetative で、「感覚のある」は sensitive である。vegetative は現代医学では「植物人間」などでも使われる単語で、これは alive but showing no sign of brain activity(OALD 7th Edition)の意味も持っている。時代は異なるものの、vegetative には元来日本語の植物と異なる語義イメージがあり、植物のように静的で無生物的なものというニュアンスがある。ウィルキンズの vegetative も恐らく「活気のない」とか「感覚のない」などといった含意を含んだ上での「植物性の」であろう。従って石や金属がこの類に属することはおかしいことではないと考えられる。

「ヨーロッパの」や「創造主」などのカテゴリーを見ても分かることだが、ウィルキンズの種類は非キリスト文化をはじめから考慮していない。ウィルキンズは各民族が母語で普遍文字を読めるようにするというスローガンを掲げていたが、分類表を見る限り文化の差異についてまでは考慮していなかったようである。

例えば感情はどの類に属するだろうか。emotional という類がないため、spiritual の下位であろうと推測される。「精神的な」の類は「神」と「理解・意思・嗜好や興味に関する精神」に分かれる。そして「嗜好や興味」は「愛着や感情と称された行為のことであり、単純と複雑に更に分けられるもの」と定義されている。愛や悲しみなどの感情はこの「単純」に含まれている。名詞が基本なので sad ではなく sadness などの形で含まれている。結論として感情は spiritual の中に取り込まれている。

そして興味深いことに精神活動は感情だけでなく神の所業も含めている。ウィルキンズによれば創造も絶滅もここに加わる。しかも神の所業という超越的な行為は生き物に収束するとある。人間の感情と神の所業を同じ精神活動に振り分けている点と、更に創造や絶滅や生き物が神の所業であるという2点からキリスト教的な思想が伺える。

その反面、異教や異文化の神話などは考慮されていない。このように、キリスト教の世界の切り方をしているため、ウィルキンズは異文化の世界の切り方には対応していないといえる。

ウィルキンズはダルガーノと違って大きな助力を得ていたため、分類が非常に細かい。基本的な類だけで40個あり、ここで既にダルガーノの類より多い。シソーラスとしては優れているかもしれないが、言語として実用するにはかなり分厚い辞書を持ち歩いて高速で引く技術を要するので実践的とはいえない。ダルガーノとの基本的な違いはその種類の多さにある。40個の類から251個の種を作り、更にその種差から2030個の種を作る。

ウィルキンズはダルガーノと違い、完全に先験的な文字を作った。横棒や縦棒に飾りを付けて細かな意味を表していくものである。一見するとアラビア文字のように見えるが、後驗性はない。

分類の基本的な構造は3段階で、類・種差・種である。類は子音+母音で示される。種差は子音で表される。最下位の種は母音で表される。子音はBDGPTCZSNの9種で、母音は7種に二重母音2種を加えたものである。

例えば「行為」という分類の下にある「肉体的」という分類はウィルキンズの扱いは「類」として扱われ、Caの音価が与えられる。またこれを表す文字は水平線の下に小文字のcを付けたようなものである。「肉体的」が類であり、その下の分類には「感覚の」「理性の」などがある。更にその下の分類には飢えや乾きなどがある。

ところで「感覚の」は *sensuous* ではなく *sensitive* になっている。*sensitive* はふつう「敏感な」の意味である。1392年にはこの意味で英語に流入しているのを見おかしだが、15世紀以前にスコラ哲学で *anima sensitiva* のような例で使われ、「感覚に関係する」という意味で使われていたようである。よって17世紀のウィルキンズは哲学的分類としてあえて *sensitive* を使ったと考えられる。

類はCVから成り、種差には子音が付され、種には母音が付される。従って類・種差・種を通るとCVCVのような音節ができあがる。分類表の同じ階層が必ずしも類になるとは限らないので注意がいる。

分類表では「関係」の下位概念は2つに分岐し「私的」と「公的」に分かれている。そして私的は財産などに細分化され、公的は司法的などに細分化される。「関係」「私的」「財産」の間には3段階の区分があるが、これを以って安易に類・種差・種と認定することはできない。「関係」は「私的」「公的」に分岐しているにもかかわらず、この区別は事実上無視され、「財産」も「司法」も同じ区分で扱われる。しかもウィルキンズの分類によればこの段階で初めて類になっている。例えば「財産」はCyという類であり、「司法」はSeという類であるとされる。

品詞についてであるが、ダルガーノ同様ウィルキンズも分類表を利用したため、どうしても発想がモノに行きがちである。即ち名詞が基本となる。上述の *sadness* などが好例である。そしてダルガーノと同じく関係や行為まで名詞と捉えて分類表に含めてしまう。文法的には繫辞＋形容詞で動詞を表す。点・丸・線などの小さな記号で法や時制などを示すとともに代名詞、冠詞、感動詞、前置詞、接続詞を表す。数、格、性、比較級はそういった記号ではなく種差として表す。

文法的にいえばダルガーノのものより英語の要素を明白に引きずっているといえる。冠詞、数、格、性、比較級などを見るに、西洋語の性質をそのまま残している。統語についても英語が参照言語である。よって文法的には後驗性が強い。

語彙については分類を用いている上、その音価が機械的に付けられているため、彼の言語は先験語である。だがやはり彼にもダルガーノと同じく命名に文化や風土や物の見方が見え隠れしている。

例えば声+狼で「遠吠え」や「叫び」を表す。狼がいない地域のことは考えていない。実際ウィルキンズが挙げている動物は西洋でよく見られるものである。ダチョウなどはありえない。

一方、息子をオスの子供、娘をメスの子供というように捉える点では先験的である。これは語彙圧縮や文字の規則化の一例であるが、ウィルキンズ自身は哲学的観点を強調している。

ウィルキンズで最も特筆すべきはその分類の細かさとそれを可能にしたコミュニティ及びそれを表記する先験文字であろう。記号の組み合わせとはいえ、その文字の種類は莫大な数に及び、我々が漢字を覚えるのと大差ない学習を利用者に強いるものである。普及させるには注目の多い言語であるが、その分類の細かさや文字種の多さには目を見張るものがある。

・ライプニッツ。1678年に一般言語（Lingua Generalis）を作成

デカルトやライプニッツはウィルキンズやダルガーノと一線を画す。分類（あるいは分析や分解）という手法を用いる点では両陣営とも共通しているものの、ウィルキンズらが既に現存しているものを観察して考察して分類しているというトップダウン方式を用いるのに対し、ライプニッツは最終的には演繹的な算出をするというボトムアップ方式を取っている。俗にウィルキンズが分類魔だとするならば、ライプニッツは計算魔であった。

算出することの利点は、現在は存在しないが将来的には現われるかもしれないものを演繹のシステムに基づいて導出できる点である。その意味でライプニッツのシステムはむしろ未来に向けて開いているといえる。一方、ウィルキンズらの分類は未完のまま閉じてしまっている。あるいはせいぜい学習者が自ら残りの単語を命名しなければならないという意味でしか開いていない。

ライプニッツは自然言語のヴァリエーションを肯定的に捉えており、アダムの言語に対して否定的であったし、ウィルキンズらの普遍言語についても同様であった。ただ彼が後世数学で有名になったことから推測されるとおり、彼には数学的な性向があった。そのことは命題が真であるための条件を割り算で表現したりしていたことから伺える。

また、彼は自らの普遍言語について計算の重要性を確信していた。彼によると計算で算出するのは命題であって数の意味ではない。記号論理学への兆しがこのあたりからも顕著に見え隠れしている。そして彼は記号計算を最終的なアダム言語と捉えるようになった。

以上から、ライプニッツの人工言語はウィルキンズらのものとはかなり異なっているといえる。それは未来の歴史を見ても分かることである。ライプニッツの記号論理学や普遍言語はその数学的性質からコンピュータ技術などに応用された。特に『二進法算術の解説』で考案した二進法の表記法はコンピュータに使われる0と1のブール代数にはほぼ相当する。

読者の中にはプログラム言語を人工言語に含めることに違和感を覚えるものもあるかもしれない。しかしこれが人工言語の一種であることはこうした人工言語史を辿っていけば明らかになることである。

一方、ウィルキンズらの分類はそのシソーラスとしての価値を認められ、その精神は今日の百科事典に応用されている。大別すればライプニッツが理数系の人工言語への分かれ道を作っていたのに対し、ウィルキンズらは人文系の人工言語を進んでいったともいえる。世間では人工言語など何にもならないと思われる節があるが、百科事典やプログラム言語は実はこの普遍言語論争に由来するものである。

さてそのライプニッツの数学的な哲学的言語であるが、いったいどのようなものであったのだろうか。彼はまず概念の分類を行い、項目にそれぞれ数字を当てていく。そして数字を子音に置き換えるという方法を取る。つまり、まず概念を数字で表した後に音素を当てるという方法である。ここで使われる数字は10進数で、百の位、万の位などといった位の概念は母音で表す。1から9まで順にb, c, d, f, g, h, l, m, nが当てられる。位については一、十、百、千、万の順でa, e, i, o, uを当てる。従って12,345はbacedifoguと書き換えられる。位は母音が表しているのをこれをgufodicebaと置換しても構わない。

もともとライプニッツはウィルキンズのように話せて実用できる言葉を目指しており、普遍的な百科事典にも興味を示していた。実際ラテン語を簡単にしたような言語案も練っ

ていた。ところが計算によって自由に命題を算出できる演繹システムを試みてからはもっぱら数学的な言語に没頭していった。

ウィルキンズのような百科全書的な人工言語がある一方で、ライプニッツのようなコンピュータ的な人工言語が存在した。これらはどちらも哲学的言語である。これらの区別だけでも厄介なのに、アダム言語という神秘主義が加わる。しかもこの時代の全員がアダム言語を夢想したわけではない。普遍言語論争は非常に混沌としていた。

●芸術言語

ところで当時の人工言語はウィルキンズらのような哲学的言語しか存在しなかったのだろうか。否。例えば個人言語は速記文字の開発などの形で行われていた。まして当時は剽窃が多かったため、暗号は必要善であった。

他方この頃、西洋人の世界観の広がり新たな人工言語を生んだ。芸術言語である。異邦人の言語に関する興味は古くから存在していたものの、それが爆発的な流行になったのは西洋人の世界観が広がってからのことである。アジア、アフリカ、アメリカなどが発見されるにつれて異邦人の言語や文化が西洋に知られるようになる。旅行者や行商や宣教師から伝え聞いたり、自分自身で見聞したことを基に小説を書く。この中で述べられる異国はしばしば誇張されたり人伝ゆえに空想的なものであった。小説で述べられる言語はしばしば現実のものとは異なっていた。

この風潮が広まるにつれて、ジャーナルとしての言語ではなくはじめから空想世界の言語というものが考案されるようになった。当時まだ発見されていなかったのはオーストラリアであったから、ここはよく舞台に使われた。また、月やその他の惑星もよく舞台に使われた。知的生命体がいると一部の人々に考えられていたためである。

これらの架空言語や架空世界は西洋人の期待や夢から生まれたものであるため、通常は理想言語や理想世界と同一視された。トマス＝モアに代表されるようなユートピア思想の一環である。これに当時の普遍言語論争が併行していたため、理想言語は概して簡単な文法を持ちすぐに習得できる言語と捉えられていた。このユートピア思想は19世紀末のプルワー＝リットンごろの反ユートピア思想まで優勢であった。

なお、オーストラリアはアリストテレスやプトレマイオスのころに想像された「南の大陸」でもあった。これは大航海時代の1600年台初頭に発見された。従って例えばフォウニーの『アウストラル大陸発見』(1676)のときは厳密に言えば未発見ではない。

地理上の発見以前から未知の大陸オーストラリアについての想像は多く行われ、実際に発見されてからもすぐに情報が詳しく伝わるわけではないのでやはり摩訶不思議な世界として考えられていた。

ちなみにこれは月も同様で、当時は鳥の渡りの原因が知られておらず、鳥は月に渡るものと考えられていた。そういうわけで月はオーストラリアと同じく未知の世界で、架空言語の格好の舞台であった。他の惑星についても概ね同様である。

著書『ユートピア』で有名なトマス＝モアは理想化された世界の中に理想的な言語をも置いた。理想の世界の言語、言い換えれば想像や架空の中の言語に足を踏み入れた彼は前衛的な存在であった。ただ彼の創作した架空言語は後驗語で、基になった言語はギリシャ語などの西洋語であった。

ゴドウィンの『月世界の人』(1638)は小説の中で人工言語を展開している。当時は普遍言語論争の渦中であったため、芸術言語とはいえ彼もまた哲学的言語を構想していた。そのためこれを完全な芸術言語と述べることはできないが、大まかに分類するのなら芸術言語であろう。

ゴドウィンが中国語から影響を受けていたのは明らかで、実際作中で主人公は中国に赴いている。ここで中国語は音楽的な言語という定義を受けている。そして月世界はというと、ここではたったひとつの普遍言語が使われていた。アダムの言語を彷彿させるユートピアな設定である。月世界の言語は音楽的であり、ここに中国語の影響が見られる。音声においてゴドウィンの言語が中国語を参照していることは明らかである。しかも主人公は2ヶ月で月の言語を習得している。このことは普遍言語の特徴である「覚えやすさ」を当然のこととして受け入れていることを示唆する。

シラノ＝ド＝ベルジュラックもまた月世界の言語を小説で展開している。ゴドウィンと異なるのは唯一の共通語があるというのではなく、社会的地位という位相で言語が二分さ

れているという点である。上流階級はやはり中国語を意識した音楽的な言語を話し、下層階級は身振りの多い言語を用いている。

身振り言語をどう見るかというのはこのころ人によって異なっていた。例えば『セヴァランプ族物語』(1677)の著者ドニ＝ド＝ヴェラスは身振り言語について否定的である。

そのヴェラスのセヴァランプ語であるが、これは意外にもエスペラントの走りともいえる言語である。というのも、自然言語から論理的であると考えられた要素を寄せ集めている後験語だからである。ただ論理的すぎてしばしば格変化などの文法システムはむしろ自然言語より細分化されている。かといってそれを一々覚える必要はなく、規則に基づいて推測することもできる。

エスペラントと異なるのは自然を強く意識し、その性質を言語システムに取り入れている点である。存在を有生・無生ならびにオス・メスに分け、その区別は動詞にまで及んでいる。つまり主語が有生であるか無生であるかによって動詞が異なった屈折をするということである。従って「石が憎む」というような恐らく考えられない文においても「憎む」は一々無生用の変化をするということである。憎むのように有生しかできなさそうなものであってもこの屈折は及ぶので、動詞の活用形の総数は悪戯に増える。

なお、音については母音が10で子音が30である。そこに多重母音加わる。更に音調などを表す6個の記号が使われた。これらの音素は筆記文字で表された。

身振り言語について肯定的ではないヴェラスとは対照的に、ガブリエル＝フォワニイはむしろ言葉は抽象的なことや難解な議論といったものを表すだけのものとされ、他は身振りで代替するとしていた。それは南方大陸すなわち今日のオーストラリアの言語について執筆した際に明らかになっている。

フォワニイは普遍言語の影響を受けており、概念については分析を元に命名をしていた。例えば母音は火、空、塩などの単純な要素を与えられた。子音は明るい、熱いなどの意味を与えられた。分析に基づいた文字の組み合わせで単語を表現していた。勿論この過程で発音しづらい単語が算出されることはいうまでもなく、フォワニイの言語は実用的とはいえなかった。

語彙については完全に先験語である。また彼は文字も作っており、アルファベットと字形の異なった筆記文字を作っている。

ティソ=ド=パトは彼らに後続して『ジャック・マセの冒険旅行』(1710)で人工言語を展開した。コンセプトは規則性と簡潔性である。

音は母音が7種で子音が13種である。文字はアルファベットを使用する。文法はラテン語よりは簡単だが、複合完了や分詞がある点でやはり西洋語が参照言語になっている。

パトで特筆すべき点はヴェラス同様自然言語を参照し、それを易しくしたことにある。動機は異なるものの、この点でやはりエスペラントの着想に近い。

一般に、芸術言語の作者は普遍言語の作者ほど厳密に概念を分類しようとはしない。普遍的な完全言語を作るという目的の下では科学的な手法のほかにもミスや漏れのない正確さや厳密さが重要視される。また記憶術に関連して徹底的な語彙圧縮を行い、習得の容易さを訴える。

しかし芸術言語にはそういった事情がないので、「簡便なラテン語」などといった着想に行き着く傾向にあった。それが原因で、中にはエスペラントに似たものが生まれた。ただし彼らが求めたのは創造性や工夫であり、面白味である。

●収束する普遍言語論争

ところで16, 7世紀の普遍言語論争時代には様々な人工言語が作られたが、実際それらは役を果たしたのだろうか。比較的 successfulしたのはウィルキンズであろう。彼は存命中からそれなりの大きさのコミュニティを形成していたし、ダルガーノらに比べてより精巧な分類表を作るに至っている。更に自身の死後もその仕事が継承されている。分類や分析を素地とした哲学的言語として隆盛を極めたのはウィルキンズであろう。

しかしそのウィルキンズの文字でさえ書きにくい、読みづらい、覚えづらい、間違えやすいといった批判が相次ぎ、共通語として日の目を見ることはなかった。

こうした大きな目論見が敗れた結果、悲観的になった社会の人工言語への関心は薄れていった。更に17世紀の終わりごろにはフランス語が台頭していたため、個々の土着語による混乱をなくすという目標が減ってしまった。もともと普遍言語論争が起こったのはラテン語に代わる共通語を求めてのことであった。フランス語の台頭により、そもそもの目標が失われてしまったのである。それゆえ人工言語に対する意識自体が薄まっていった。そ

のため18世紀は前世紀と比べると人工言語熱は冷めており、事実上普遍言語論争はほぼ幕を閉じていた。あとは散発的な炎が灯っては消えただけである。

18世紀中葉のデュードネ＝ティエポーは普遍言語がいかにも有益かを説き、300ほどの根一語を選ぶことで己の言語の語彙の分類表が作れると述べた。しかしこれは単なる17世紀の焼き増しにすぎない。

17世紀の焼き増しはこのころ非常に多く行われた。ドロルメルは分類に基づく哲学的言語を作ったが、これはウィルキンズ風の分類方式にライブニッツ風の計算方式を組み合わせたにすぎない。ただ、このような掛け合わせを用いたところは面白い。また、ウィルキンズの難しい普遍文字の代わりにアルファベットを使った点も興味深い。単にアルファベットを採用しているのではなく、発音に使わない文字は捨象した。こういったことはヒルデガルトのころから行われていたことであるものの、掛け合わせや改良アルファベットという点を考慮すれば、単なる焼き増しというよりは過去の言語の改良版といえるだろう。

18世紀も終わりに近付くと哲学的言語の挫折を社会は認知していたため、作者側の断念も相次いだ。コンドルセはライブニッツの手法を参照していたが、未完のまま挫折した。こういった中でド＝メミュユの成功は異例の事態であった。

18世紀の終わりに『パシグラフィー』と名を変えた要するに普遍文字計画が出版されると、これは一躍時代の寵児になった。それはやはりウィルキンズのような複雑な文字であった。基本的に12文字しかないのだが、その組み合わせのせいで複雑になってしまう。また、西洋で既に定着していた句読法はそのまま採用された。普及しているものをそのまま使うのは学習者の負担を減らすので合理的といえよう。

また、語彙のレベルを3段階に分けたのも実践的である。科学的な分類ではなく実用における頻度や難しさのレベル分けである。すなわち機能語のような頻繁に使われるレベル1、日常語のレベル2、学術用語などのレベル3である。

なお、パシグラフィーはもともと書き文字として作られたが、読むためのパシラリーというのも後になって作られている。

パシグラフィーはフランスで特に流行り、ナポレオンに献呈され、芸術学校で実践され、一部で教育も行われた。その点ではこれまでの普遍言語の中では際立った存在といえる。

もつとも、パシグラフィーはウィルキンズを髣髴させるだけあって批判点も類似している。結局パシグラフィーの隆盛は一時的なものでしかなかった。

皮肉なことにメミユコのパシグラフィーにおける分類はウィルキンズのものより粗い。それがひと時の成功を得たのは言語政策の俗化によるところが大きい。宣伝を多くしたことも理由のひとつである。また、それまでの普遍言語が主の祈りなどを翻訳していたのに対し、俗化した文を訳したことも受け皿を広げたことに繋がる。つまり哲学的な完全性や純粋性が失われ、逆に世俗性が高まり、その政策の巧さからパシグラフィーは広まったといえる。

これは人工言語の普及が完全性や合理性では説明付かないことを物語っている。人にとって受け入れられやすいかということが普及に関わっている。この点を意識した人工言語界は徐々に哲学的な性質を脱ぎ去り、社会学的な性質を負うように変化していく。

●19世紀から20世紀にかけての人工言語と国際補助語

・普遍言語論争の終焉

下火にはなったものの、19世紀になっても哲学的言語は死滅したわけではない。往年の力は失っているものの、夢想者は後を絶たない。

ジャック＝ド＝ヴィスムは19世紀初頭に音楽的要素を帯びた言語を作る。アルファベットを21字使って21の音を表す。そしてこれらは五線譜の上に書かれる。21音でどうやって21概念以上を作るのかというと、和音を用いる。Cのような3和音(ドミソ)からなるコードでも21の3乗分の組み合わせが作れるため(重複は除く)、相当数表現できることになる。確かに自然言語で賄っている単語の数くらいは用意に賄えるだろう。

こういった音楽言語は他にもある。むしろフランソワ＝スードルのソレソあるいはソルレソのほうが有名だろう。これは1827年に考案され、1855年のパリ万博で1万フランの賞金を得ている。

ソトス＝オチャンド『普遍言語の計画案』(1855)も17世紀の亡霊で、経験主義で概念を分類し、規則的にアルファベットを配列して造語する。最小対語の問題は無論残ったままである。

17世紀と異なるのは科学が発達しているので、当時の最新の科学観を反映している点である。結局分類に頼った方法は作者の経験かそうでなくば当時の科学に依存するしかないという限界がある。この限界ゆえ、分類法に基づく言語を見ていれば——そして科学史に精通していれば——いつごろ作られた言語であるかが推測できる。これは現代の我々が人工言語を分析する上で便利なタグとして機能するが、この機能は普遍言語を目指した本人からすれば極めて不名誉であつたに違いない。

さて、19,20世紀に入るとライプニッツらから分岐してきた人工言語がそれまで以上にウィルキンズらの人工言語と分離していく。ジョージ＝ブール、フレーゲ、ヴィトゲンシュタイン、カルナップ、そして果ては宇宙人との交信用に作られた信号が如きハンス＝フルーデンタールのリンコス——これらはいずれも多かれ少なかれライプニッツの影響を受け、今日のプログラム言語へと繋がっていくものである。

一方、ウィルキンズらの系譜は20世紀に入ると普遍言語ではなく国際補助語へと姿を変えていく。普遍言語は1866年を境にほぼ死滅させられ、それに代わって台頭してきたのが国際補助語である。

下火ではあつたもののまだ残存していた普遍言語は19世紀初頭に比較文法学によって一時脚光を浴びる。哲学的言語においてもアダムの言語を見つけようとする神学的言語においてもやや盛況になった時期だが、特にアダムの言語への夢がこのころは強かった。というのもこの頃は人工言語ではなく、言語の起源が何であるかを巡って論争が行われていた時期でもあつたからである。

単一起源論者はいうまでもなくアダムの言語に固執し、それを証明しようとした。しかし比較言語学が進歩していく中で、徐々に単一起源論者は劣勢に追い込まれていった。彼らの劣勢が疲弊に変わったころ、事態は学会を巻き込んで大きく変化した。

1866年にパリ言語学会が創立すると、学術的な厳密性を持った議論をすべきであるという主旨がやにわに起こった。そして学会は言語の起源と普遍言語にかかわる論文を受理しない方針を明らかにした。

この事実だけを知っていると、これが言語学が人工言語を研究対象としない理由に見えてしまう。しかしいま述べたような時代背景を知っていればそうでないと分かる。

学会は根拠が薄く無秩序に繰り返される議論を拒絶した。その議論とは言語の起源に関するものである。そして普遍言語は単一起源論者にとって証明の道具として使われていた。

学会にとって言語の起源論を排斥するだけでは足りなかった。その道具として使われる普遍言語についても排斥する必要があった。普遍言語は言語の起源論が排斥された際に連座の刑を被ったにすぎない。従ってパリ言語学会の採択を以て普遍言語が言語学の範疇から外れた根拠とするのは不当である。

その上、パリ言語学会が排斥したのは正確に言えば普遍言語であり、人工言語総体ではない。ゆえに1866年の件は人工言語が言語学の対象から外れる正当な理由にはならない。

だがこの言語学会の表明は絶大な影響力があった。その影響力は今日にすら響いており、言語学で人工言語を扱わない悪しき因習の一因となっている。パリ言語学会の採択がきっかけとなって既に下火だった普遍言語が死滅し、それにとって代わる形で人工言語の潮流は国際補助語に変わっていった。

・国際補助語の台頭

さてこのころは科学技術の発展に伴い、コミュニケーションも交通も高速で行われるようになり、地球が狭くなった。当然、異文化コミュニケーションが重要になり、西洋での共通語のフランス語が世界規模で見ると共通語でなくなってきた。つまりは科学の発展が世界を狭くし、ひいてはバベルの混乱を復活させたわけである。

これに伴い共通語の需要が再び高まった。ところが特定の言語、例えばフランス語を共通語にするのは現実的に難しいユートピア思想にすぎず、イデオロギーとしてもある特定の民族の言語を押し付けるという点で難点がある。

また、学術世界の共通語であるラテン語を共通語として再燃させるのも現実的ではなかった。ラテン語は事実上死語なので中立の立場は取れるものの、ラテン語そのものの曖昧さや複雑さが共通語としては不適格であると考えられた。

そこで学習者にとって中立でしかも学習が容易な言語を考案し、これを国際補助語として使おうという考えが出てきた。この理念により、人工言語の類型は急激に先験語から後験語に流れていく。もっともこれは万人の考えではなく、フランス語を国際語として採択しようという現実的な案のほうが遙かに実践的であったことを加えておく。

このような国際補助語の観点でクチュラとレオーは『新しい国際語』(1907)において、数々の案出された言語案を検討している。両者は1901年に「国際的補助言語を採択するための委員会」を発足している。こうした委員会ができたということは、当時の社会において国際補助語の必要性があったということである。

・ヴォラピュク

シュライヤーは1879年にヴォラピュクを考案した。ヴォラピュクはドイツ・フランスで広まり、1889年にはヨーロッパ、アメリカ、オーストラリアにまで手を伸ばすようになった。

ヴォラピュクは28字のアルファベットを使用し、1字が1音に対応している。アクセントは最後の音節に来る。すなわち拘束アクセントである。シュライヤーはヴォラピュクの普及を狙った結果、大きなシエアを持つ中国語がrを発音しないと考え、ヴォラピュクからr音を除いた。中国しか視野に入れていない点でまだ世界観が全世界にまで広がってはいないといえる。

ヴォラピュクの参照言語は既に力を付けていた英語である。しかし語彙についてはドイツ語を使っていることが多い。単語は参照言語の単語をかなり切り詰めているため、元の形を推測するのは難しい。語形が短いのは合理的なのだが、その代わり覚えにくいという欠点を持つ。何を参考にしたのか分かりにくい点で後驗性は若干弱まっている。

形態論としては屈折語の性質を有するが、膠着も豊富である。人工言語らしく規則性は強い。例えば形容詞は例外なく-ikを持つ。gudは-ikが付いていないので「良い」ではなく「善」である。「良い」にするにはgudikとせねばならない。

エスペラントのmal-のような劣等を指すlu-はvat(水)と組み合わせると汚水ではなく尿になる。この辺りの作者による恣意性はダルガーノやウィルキンズ(特にダルガーノ)の造語法を髣髴させる。

普遍言語が滅んだ後しばらく人工言語は下火であったが、国際補助語の需要が増した時流に乗れたこともあって、ヴォラピュクは当時かなりの高評価を得ていた。

・エスペラント

一方、ザメンホフは1887年にエスペラントについての手引書をロシア語で出版した。ヴォラピュクに少し遅れて作られたこの言語は国際補助語として最も普及した人工言語である。

エスペラントは5母音、23子音の音素体系を持つ。アクセントは最後から2番目の音節に来る。文字はラテンアルファベットに字上符を付けたもので、28字である。固有名詞を除いてq, w, x, yを欠く。

語彙はロマンス語からの流入が最も多く、次いでゲルマン語からの流入が多い。基本語順はSVOである。典型的には膠着語である。規則性が高い図式派の代表である。文法上の性は持たないか数を持つ点でやはり西洋語的である。英語と異なり名詞が複数形だと形容詞も複数形になる。これはややこしいということで現在でも批判を浴びている。

実際エスペラントはかなりの批判要素がある。発表後はとにかく叩き台になり、批判を受けると同時に他の国際補助語を生む土壌にもなっていった。

・国際補助語の群雄割拠と凋落

19, 20世紀は国際補助語の時代であった。エスペラントを筆頭に国際補助語が支持者を獲得していった。だがそれ以上にエスペラントは派生言語を生んだ。エスペラントを参照言語とした人工言語が数多く作られた。このことはエスペラントが国際補助語の人工言語の中で異例な度合いで普及したことを反映している。

ただ、歴史的に見て人工言語と普及の関係は言語自体の合理性などといったシステムではなく、むしろ社会的な要素にある。なるほどエスペラントより合理的で論理的な言語はいくつもあろう。そして実際枚挙に暇がないほどそういった類のものは考案された。だがそのどれもがエスペラントの普及率を上回らなかったことが、人工言語の普及が社会的な要素にかかっているということを示している。

比較的普及した人工言語を挙げろといわれればまずエスペラントが来るが、それに次いでヴォラピュク、インテルリングア、イドなどを挙げることができる。インテルリングアはベアノの考案した言語で、自然派に位置するものである。

ヴォラピュクからはバルタ、エスペラントなどが派生している。インテルリングアからはラティヌルス、パンリングアなどが派生している。

一方、エスペラントからは更に数え切れないほど派生しており、改良エスペラント(1894)、ペリオ、モンドリングオ、イド、ネオ、エスペランテュイシヨ(1955)などがある。エスペラントから派生した人工言語は世紀を跨いで長きに渡って作られている。

エスペラントから派生したイドにはドゥータリング(1908)、ラティン=イド、ムンディアル、インタル、コスモリングオ(1956)などの派生言語があり、こちらも少なくとも半世紀ほど派生が続いている。

19世紀終わりごろから20世紀はまさにヴォラピュクやエスペラントなどを祖とした国際補助語の系譜の歴史に他ならない。

またここで観察されたことは普遍言語論争のときと同じく、人工言語の普及は言語のシステムより社会的・経済的要因によるものだけということである。

普遍言語にせよ国際補助語にせよ、本来は言語の壁を取り除くことが共通の目的であった。そのアプローチとして哲学的手段や自然言語を参考にする手段などがあつた。

またそこには言語の壁を取り除くよりも人類の祖語たるアダムの言語への回帰を目的とするものもあつた。しかしこれもひとつの共通語を得るという結果においてはやはり同じである。

結局のところ、普遍言語や国際補助語はいずれのアプローチであろうと共通の言語を目指してきたといえる。しかし実際には普及は小規模でしか実現せず、最も普及したエスペラントも国際補助語の地位を築けないでいる。更にウィルキンズやライプニッツやザメンホフに対する改良案がたびたび出されてきた。普及せぬまま言語の数ばかり増えていったというのが実情である。

自然言語が減少する一方で人工言語はむしろ増えているのは興味深い。バベルの再建を目指す行為がむしろ新たなバベルの崩壊を招いたというのは皮肉なものである。

かつてバベルの塔を崩壊させたのは神であつた。人工言語の制作者はその言語の命名における創造主としての神であるが、バベルの塔を再び崩壊させるという点においてもまた神である。

17世紀ごろ人工言語は社会に歓迎されていた。社会は普遍言語を期待した。しかしいずれも実用的なものではなく、言語案ばかりが乱立した。普遍言語ができるどころか却ってカオスが生まれた。

19,20 世紀における国際補助語の乱立もまた、その主旨に反してカオスを生んだ。もし今また 21 世紀にカオスを再現するというのなら、それは 20 世紀に起こったエスペラントの焼き増し運動よりも痛烈な歴史の皮肉になるだろう。

現在の地球は 17 世紀や 20 世紀とは事情が異なる。社会は普遍言語に熱を入れておらず、土着語がほぼ対等な力で乱立しているわけでもない。18 世紀のヨーロッパにおけるフランス語が普遍言語の熱を醒ましたのと同様、20 世紀後半から 21 世紀初頭における英語が国際補助語の熱を醒まししている。

今の地球では人工言語でなく自然言語の英語に共通語の地位を求めるのが妥当であろう。実際、社会もそれを反映して国際補助語に目を向けていない。そのため、人工言語の意義やあり方は確実に変わってきている。

英語によって事実上国際補助語熱は冷めた。しかし、だからといって人工言語史が止まったわけではない。国際補助語は人工言語のひとつの類型でしかない。これまで見てきたように人工言語には色々な類型があり歴史がある。前世紀に国際補助語が経験した挫折を人工言語総体の挫折と見なすのは早計である。国際補助語の凋落は人工言語史のひとつの里程碑にすぎない。通時的に見れば人工言語は次の時代に突入したと考えるのが妥当である。

●21 世紀の人工言語

・人工言語の分布の仕方

地球のグローバル化に伴い、それまでほとんど西洋に封印されていた人工言語は世界各地に広がっていった。日本にも 20 世紀にはエスペラントが持ち込まれている。

ときに世界 3 大宗教と人工言語の分布の仕方を比べると明らかな違いがある。アラブ圏にいけばイスラム教徒が多く、西欧ではキリスト教徒が多い。地域ごとに比率が異なる。しかし人工言語はそうでない。概ねどこへ行こうかエスペラントのシェアが最も高い。

人工言語の割合はむしろコンピュータの OS に近い。ウィンドウズが大概最大のシェアを占めるように、エスペラントが群を抜いている。

日本でもそれは同じで、エスペラントが最も多くのシェアを占める。書店で購入できる書籍を比べてみてもインターネットの日本語サイトの件数を比べてみてもそれは明らかである。

・パソコンとインターネットの出現が人工言語史を動かした

グローバル化に伴い西洋から人工言語が伝来し、日本では人工言語といえばエスペラントという公式が生まれるに至った。これは今日でも変わらないが、制作者の側では21世紀に入って大きな変化が訪れた。

20世紀末にパソコンが普及したことにより、インターネットも徐々に普及していく。21世紀にかけてインターネットの加入者は爆発的に増え、常時接続が普及し、大容量ブロードバンドが普及した。

人工言語が最も社会に歓迎されたのは17世紀の普遍言語時代であるが、この時代でも人工言語で儲けたり飯を食うのは極めて難しかった。いわんや現代は英語が国際語として機能している。インターネットによって世界は更に狭くなり、英語はデジタルを通して更に普及している。

こういった社会的背景でこれからの人工言語はどうなっていくのだろうか。まず最初に国際補助語は英語のような共通語があるかぎりには凋落したままでであると予想される。だからといって仮に英語が凋落してもエスペラントのような国際補助語が共通語になるかというところではない。19,20世紀の歴史がそれを証明している。

これまでの人工言語史を見るに、今後生き残るのは個人言語や芸術言語であろう。

現代のインターネット社会は言語の制作と発表を容易にした。ザメンホフがそうであったように、今までは人工言語を発表するにはしばしば多額の費用をかけて自費出版するしかなかった。人工言語では金儲けができないので、資金に恵まれた者しか発表することができなかった。

その上当時は紙で言語を作っていたが、今はパソコンがある。パソコンとインターネットによって、個人でも簡単に言語を作って発表できるようになった。

よく人工言語史は17,8世紀の焼き増しにすぎないと言われるが、それは違う。パソコンとインターネットによって人工言語を取り囲む環境は劇的に変わった。これにより、17,8

世紀ではできなかったことができるようになった。人工言語は21世紀に入って新たな局面を迎えたのである。

・アルカ

パソコンとインターネットの登場によって人工言語史は新たな局面を迎えた。そこに登場したのがアルカである。この言語は1991年から作られ、パソコンとインターネットの普及をリアルタイムで経験している。

これまでの人工言語、特に先験語は非常に作り込みが甘かった。文法も音韻論も辞書も単語の語法も用例も言語と文化の関連性も、そのすべてにおいて情報が少なく、粗雑な代物であった。

エスペラントのような後験語は既に存在する言語から文法だろうが単語だろうがありとあらゆる要素を引っ張ってくるができる。一方、純粋な先験語はすべてをゼロから作らねばならない。パソコンとインターネットがなかった時代には純粋な先験語を作り込むことができなかった。

パソコンとインターネットがない時代には、紙ベースでの作業を強いられた。これは非常に効率が悪い。単語を修正するたびに修正液で消した汚い跡が残るし、修正液は同じ箇所は何度もかけることができない。鉛筆で書いて消しゴムで消す方法も、紙の劣化を考えると何回もできない。ボールペンで二重線を引いて余白に修正した内容を書く方法だと、いずれ紙面が足りなくなる。

また、単語を変更したときの処理も非常に面倒である。例えば `gat` という語を `zap` という語に変えた場合、`g` を `z` に移動するわけだから辞書の紙面上は相当な距離があり、変更箇所まで矢印を引くわけにはいかない。仕方がないので `zap` のところに手書きで `gat` の内容を丸写しして、`gat` については手で消すしかなかった。

それが嫌なら単語カードを作って単語ひとつに一枚のカードを宛てがい、それらのカードをリングなどにまとめておくしかなかった。

紙作業の不便なところはこれだけではない。Ctrl+F 検索ができないため、一度書いた記述を探そうと思ったとき、場所を覚えていないとそれこそひとつ探すだけで日が暮れることがある。この検索ができるかどうかというのは作業効率に重大な影響を与える。

パソコンが普及している現在から考えると、アルカのようにアナログを経験した言語は恐ろしく非効率的な作業を強いられていたということが分かる。1990年代もルルスの時代もザメンホフの時代も作業環境は大差ない。

また、先験語では新語を作る際には自分でその概念について調べて命名を行う必要がある。アナログ時代は百科事典が頼りで、グーグルもウィキペディアもなかった。俗語や世俗の文化は紙の辞書には載っていないことが多々あるため、載ってなければそれまでという事態が多々あった。今からでは信じられないほど不便な時代である。

また、言語を公開・流布しようにも、インターネットがないのでどうにもならない。自費出版くらいしか手立てはなかった。かといって自費出版した本など置いてくれる書店はほとんどなく、たとえ出版社がねじ込んでくれたとしても片隅に置かれるだけで、誰にも触れられずに返品されるか埃をかぶるかというのが現実であった。

ところが今はパソコンとインターネットがある。単語の修正も登録も簡単で、公開もインターネットで容易に行える。更にパソコンの画面はフルカラーなので、自費出版する際は予算の都合で4色にできなかつた言語も、容易に色を付けて公開できるようになった。

また、ブロードバンドの普及により、文字だけでなく画像や音声や動画すらも公開できるようになった。これにより自費出版を行うより安くクオリティの高い資料を公開できるようになった。

新語を作る際もインターネットで概念を簡単に調べられるから、インターネット上のユーザーに新語の作成を請求されてもその日のうちに造語することができる。そしてその変更をその日のうちに相手に伝えることができる。これは今でこそ当たり前だが、アナログ時代を経験した者にとっては魔法に等しい。

こうした夢のような環境の変化により、今までは作ることのできなかつた情報量が大きく品質の良い、すなわちゼロから細部まで作り込まれた先験語を作ることができるようになった。

その新しい時流に乗って登場したのがアルカである。今までは自然主義のアプリオリ人工言語をゼロから作ろうと思っても、アナログ環境ではそれに見合う質と量を実現できなかった。しかしパソコンとインターネットがそれを可能にした。

もちろん、パソコンとインターネットが普及したときに作られていた人工言語はアルカだけではない。しかしあらゆる人工言語が自然主義のアプリオリ人工言語に転向していたわけではなかったし、むしろこの類型を作ろうとするのは極めて稀であった。というのも、あらゆる人工言語の類型の中で最も労力がかかり、制作者に広範な知識を要求するためである。従って、そもそもアルカのような類型に挑戦しようとする制作者は少なかった。

その上、アルカには他にもアドバンテージがあった。通常金銭にも名誉にもならない人工言語は協力者が得られず制作者が一人で行うものだが、アルカは幸せなことに協力者に恵まれた。

ユーザーがいるという事実は人工言語にとって大きい。実用してくれることで言語の欠陥に気付くことができ、修正することができる。また、アルカの場合はユーザーがコンテンツを作ってくれたり、ユーザーが別のユーザーを勧誘してくれたりした。

これは通常の人工言語ではあまり見られない光景である。というのも、ほとんどの人工言語は制作者が一人で全ての作業を行っており、分担ができず、かつ使用者も存在せず、作った本人ですら自分の言語をよく喋れないというのが一般的だからである。

アルカのような人工言語は労力の問題で珍しい類型であること、そしてその難しさにも関わらず協力者がいたこと。これらの恵まれた環境のおかげで、パソコンとインターネットが作り出した新たな人工言語史の局面において、アルカは新しい形の人工言語として人類初の快挙を成し遂げた。アルカほどの質と量を持った自然主義のアプリオリ人工言語はそれまで存在しなかったのである。

ましてアルカにはそれを支える自然主義のアプリオリ人工世界カルディアが付随する。言語は世界、すなわち文化と風土の影響から切り離すことができない。従って言語をゼロから作る場合は世界も合わせてゼロから作るという選択肢が存在する。

そこで作られたのが自然主義のアプリオリ人工世界カルディアである。これもまた質と量において人類史上初のものであった。というのも、アナログ時代ではここまで細やかな世界の作り込みはできなかったからである。

アルカとカルディアは既にそれぞれが史上初の作り込みを持った創作物である。その上これらは組み合わせられてひとつの作品になるという特徴を持つ。人工世界カルディアはあくまで人工言語アルカに文化と風土の影響を与えるために存在する。この自然主義のアプリオリ人工言語と人工世界の組み合わせというのもまた史上初のものである。

パソコンとインターネットが普及したことで、人類は言語と世界をゼロから作り込むことができるようになった。そしてそれを初めて豊富な量と高い質で実現したのがアルカとカルディアである。

だが今後はアルカのような人工言語が出てくる可能性が十分にある。環境がそれを許しているからだ。19世紀にヴォラピュクやエスペラントの発想を真似て様々な人工言語が派生したように、アルカの二番煎じが将来的には生まれることになるだろう。

もっとも、アルカのような人工言語は極めて労力がかかるため、後験語のエスペラントほど気楽に作れるものではない。ゆえに二番煎じとはいえ、その数は限られることであろう。

・パソコンとインターネットの功罪

パソコンとインターネットが普及したことで、言語作りと公開は気楽に行えるようになった。しかしそれによって起こった問題もある。

確かに現在は人工言語をインターネット接続費用程度の小額で発表できるようになった。人工言語がインターネットで公開されればそれは他の制作者の資料になるため、他の制作者にとって更に人工言語作成の敷居は下がる。こうして人工言語は17世紀の普遍言語論争時代を凌ぐ勢いで増えることとなった。

だが容易に発表できるということは18世紀のように前時代の焼き増しでしかない粗い言語の増加をも意味する。自費出版では大きく自腹を切るため、通常原稿の隅々まで考察してから出版することになる。

しかしインターネットでは詰めの甘い段階で気軽に言語を公開できる。それは質の低下にも繋がる。単に言語や語学が好きという好事家が容易に言語を作成し発表できるというのは一長一短である。

●未来の人工言語

・加速するインターネット上の人工言語

人工言語の今後についてだが、公開が容易であることと作成のための資料が集めやすくなったことから、インターネットを基盤とした人工言語の氾濫が予想される。

それに伴い、インターネットを基盤とする人工言語を出版された人工言語より無条件で格下に見る向きも現れるだろう。だがそれは稚拙な決め付けである。実際のところインターネットを基盤とする人工言語は玉石混交で、精度の高いものもあれば即興的なものもあるというのが正確な見方である。

・ 出ては消える泡のような人工言語群

言語を作る行為は大変なもので、言語学や語学に留まらず、ウィルキンズのように博学的知識まで必要とする。更に今まで見てきたように、人工言語は当時の科学力を反映している。これからの人工言語は二次曲線を描いて昇華した 20 世紀の科学を反映することになる。

概念の数はウィルキンズの時代で既に人が一生かけても作りきれないほど多かった。現代は科学の発展で爆発的に専門用語が増えている。どうやって現代人が個人や小集団でこれらを命名しきれるというのだろうか。現代の学術用語が利用しているラテン語を機械的に流用するのならまだしも、アプリオリで作る場合は到底英語のような規模の語彙を作りきることはできない。

もつとも、科学技術の単語は必要になった際に作ればよいわけだから語彙の問題は捨て置くことができる。しかしそれでも言語を作ることは容易いことではない。玉石の石のほうは恐らく作者がすぐに飽きて捨ててしまうだろう。

また、人工言語が乱立する一方で学習者の増加はそれほど見込めないだろう。

結局多くの言語が公開から数年も経たぬうちに消えるか更新されない亡霊として残るだろう。そしてその間にもまた新しいものができては消えという連鎖を繰り返すだろう。

・ 国際補助語の亡霊

今後も国際補助語は歴史や現状を顧みず、無謀にも作られるであろう。だが普及は成功せず、学習者も極めて少ないと予想される。

結局は少数の協力者との限られたコミュニティの中でその国際補助語は存続し、時間とともに自然と国際補助語から小集団による個人言語へと変貌していくことだろう。そうでなくば消滅の一途を辿ることになる。

・ポータルサイトと解説サイト

また、インターネットを背景に人工言語が乱立すれば、それらをまとめたリンク集やポータルサイトが出現することだろう。更に、人工言語の作り方や人工言語とは何かを説明したウェブサイトも現われるだろう。

前者は中世・近世において紙で行われていたことをデジタル化しただけのものであるから、発想としては斬新でない。ただ、紙よりインターネットのリンクのほうが遥かに便利であるため、その有効性はかつてのものより高いと考えられる。

・自然言語と人工言語の反比例する増減率

自然言語は徐々に減っていつている。一方、人工言語は制作の敷居が下がったことで増えている。自然言語の総数が減少の一途を辿るのに対し、人工言語が増加の一途を辿るとするのは興味深い。

ただ、増えていく人工言語のほとんどは短期間のうちに更新が途絶えるものと予想される。

・未来技術と人工言語の展望

人工言語作りにおいて最も労力を必要とするのは辞書の制作である。お遊びのようなクオリティならまだしも、自然主義のアプリオリ人工言語と人工世界をしっかりと作るのであれば、辞書の制作は自動化できない。結局は人間がひとつひとつ職人技で検討し、記述していくしかない。

ところが入力に使うキーボードというのは非常に人間の身体に負担を強いる。10年も打ち込みの作業を続けていれば、制作者の身体が持たなくなる。

また、現在のディスプレイは光を放つ VDT である。これも長時間に渡って使用しつづけると身体に負担をかけ、眼精疲労や自律神経の失調などに繋がる。

確かにパソコンとインターネットは便利だが、人間工学的にはまだまだ改良の余地がある。自然主義のアプリオリ人工言語と人工世界はとにかく労力のかかる作業なので、制作者の身体にできるだけ負担をかけない必要がある。でなければ途中で体調を崩して作業ペースが落ちたり制作を打ち切ってしまうためである。

環境改善として考えられるのは、まずキーボードである。できるだけこれを使いたくない。音声で入力できれば最も身体に負担がかからない。ところが現在の音声認識技術は不十分である。

次はディスプレイである。電子ペーパーのような発光しない画面が目優しい。ところがこれもまだ動画を再生できるパソコン用のディスプレイとしては一般向けに発売されていない。

あとはマウスである。マウスを操作しつづけるのも菱形筋などに大きな負担がかかり、背中の凝りを形成する。やがてそれは自律神経叢にも影響を与えるようになる。

だからマウスもできるだけ使いたくない。目線などを利用してマウスのポインタを操作できれば身体の負担が減る。左目のウイंकで左クリック、右目で右クリックなどとすれば非常に楽である。瞬きはむろんウイंकと区別される。

また、同じ姿勢で原稿を書き続けると、姿勢性の腰痛などに見舞われる。公園などを 5 分ほど散歩して 20 分ほどベンチに座って執筆するというのを繰り返すのが身体を壊さない方法だが、現状は無理がある。

ノートパソコンは大きくて重たいし、iPhone のようなスマートフォンは小さすぎて執筆に向かない。また、Windows が入っていないかったりして辞書ソフトが起動しないことがある。更に画面が発光するので目に負担もかかる。

そこで欲しいのが四つ折りにできる電子ペーパー搭載の端末である。普段はポケットに入る大きさだが、四つ折りにしてあるので広げると四倍角になる。5 インチなら 10 インチにまで広げることができる。電子ペーパーなので目にも優しい。

当然最新の OS が入っており、起動も早く、動作も軽快で、辞書ソフトも使える。キーボードはタッチ式になるが、その反応もすこぶる良い。欲を言えば音声をしっかり認識して、喋った文を自動で原稿に起こしてくれると良い。

このような端末が将来的にはいずれできるであろう。そうなればアルカのように手間のかかる人工言語をもっと効率良く作ることができる。

加えて、電子書籍の台頭も望まれる。言語をゼロからしっかり組み立てるには言語学の知識がいるが、きちんとした知識を得ようと考えた場合、インターネット上の情報だけに頼るのは危険すぎる。

そこで書籍を頼ることになるが、書籍は紙に書いてあるので Ctrl+F 検索ができない。必要な記述がどこに書いてあったか覚えていなければならないが、そんなことはできないので、以前見たがどこで読んだか思い出せないということがたびたび起こる。それを調べるには一日がかりの作業になるし、そして時間をかけたわりにはしばしば見つからないということもよくある。

電子書籍が普及して文書がテキストデータ化されれば、このような問題は一瞬にして解決する。人類の進化のためにはとっとと出版社や印刷所や書店や図書館は潰れるか業態を変えるべきで、すぐにでも既存の書籍を含めた電子書籍化をすべきである。

まずは OCR で読み込んだ紙の本のテキストを人力で校正させ、既存の書籍を電子書籍化すべきである。天下りの無駄な人件費に税金を投入するくらいなら、よほどこちらの作業に税金を投入したほうが国益に繋がる。

そしてこれから出す本はすぐにでも電子書籍として販売すべきである。Ctrl+F 検索ができれば、特に文系学問の進化する速度は飛躍的に向上する。

なお、それを読むための端末にもすぐさま電子ペーパーを搭載すべきである。

アルカの場合、人間工学的に優しい環境が整っていなかったため、制作者は体を壊してまで言語を作りきった。自分たちだけのことを考えれば、未来技術ができて手遅れだし、ライバルに抜かれるだけだから旨味がない。それでも人工言語史を止めないためにはその未来を選ぶべきだと考えている。

未来人はこう言うだろう。「アルカは時代に恵まれた。自分もあの頃生まれていれば、彼らよりも早く史上初の快挙を成し遂げることができたかもしれない。彼らが羨ましい」

と。しかしそれはどっちもどっちである。確かにこちらは歴史には名を残したかもしれないが、未来人のような恵まれた機械環境が無かったせいで、身体を壊してしまったのだから。

未来技術を使ってアルカのような言語を作った場合、もっと早く楽に作れるだろう。人工言語の未来はそうなる。パソコンを取り巻く環境が良くなり、今より簡単に早くアルカのようなクオリティを持った言語が作れる。つまり、言語作りの敷居が下がるというわけである。

敷居が下がるとまた粗雑な言語が出てくる可能性が浮上するが、いずれにせよ未来の人工言語界はそのように変化していくことであろう。

●人工言語四傑

結びとして、人工言語史上の四人の傑物が作った言語について論ずる。その言語とは制作者の生まれた順に以下のとおりである。

1:現代ヘブライ語

2:エスペラント

3:中つ国の言葉

4:アルカ

これらを挙げた基準は、人工言語史上の里程標であること、それぞれ類型が異なること、その時代の潮流に乗った新風だったこと、知名度が高く人工言語にしては協賛者が得られたこと、などである。

まず現代ヘブライ語について。これは19,20世紀を生きたエリエゼル＝ベン＝イエフダーによって作られた言語である。いにしへのヘブライ語を彼はほぼ独力で話し言葉として復活させた。

純粋な人工言語というよりは自然言語寄りである。しかしほぼ彼が独力で再建したことから、分類上は後驗語の人工言語に振り分けてよからう。

イエフダーの作業量は膨大で、使命に対する熱意と根性は四傑の中でも最大のものである。紙ベースでの作業だったため、むしろ彼が遺した結果物はアルカほど多くない。しかし紙ベースでの苦勞を知っている筆者としては、彼の尋常ならざる苦勞が分かる。間違いなく彼が四傑の中で人工言語の作業を最も多くこなしているといえる。

エスペラントは既に述べたとおりである。これは西洋語を混ぜた後驗語で、世界最大のシェアを占めるため、四傑に挙げざるをえない。

なぜ「挙げざるをえない」という表現なのかというと、純粹に人工言語の作業をする人間からすれば、彼はやや異色だからである。

意外かもしれないが、人工言語の制作者としては彼はやや異色である。彼が人工言語の実務に費やした時間と労力は、イエフダーに比べれば圧倒的に小さい。彼が行ったのはほとんどが社会的な活動で、つまりは普及活動である。

これは純粹に学問や芸術として人工言語を作っている人間、あるいは言語を作ること自体に興味がある人間からすれば、正直尊敬に値しないことである。

ゆえにザメンホフはどちらかというと四傑の中でも人工言語普及の活動に力を入れた人物という認識であり、言語自体はあまり作り込んでいないと言える。

実際エスペラントは後驗語で、語法も文化も細かく設定されていない。彼が成した作業はイエフダーの血の滲む努力と比べればあまりにも小さい。

中つ国の言葉はトールキンによって作られた言語で、芸術言語に分類される。この点でイエフダーやザメンホフとは異なる。

中つ国は架空の世界なので人工世界であり、その言語は架空の世界の人工言語である。中つ国の言葉と中つ国の関係はアルカとカルディアによく似ている。

ただ問題は、この頃はまだパソコンとインターネットがなかったため、言語にせよ世界にせよゼロから細かく作り込むのは不可能であったという点である。そしてそこがアルカやカルディアとの違いである。

とはいえ、パソコンとインターネットがない時代の言語と世界にしては極めてよく作られており、トールキンもまた四傑に数えられるべき人材である。

そして最後にはパソコンとインターネットの登場により人工言語史が動いた時流に乗って登場したアルカである。これは上述のようにゼロからの作り込みを重んじる自然主義のアプリオリ人工言語と人工世界という特徴を有する。

パソコンとインターネットの登場は、活版印刷と同じくらい歴史を大きく変えた。その変化に最初に乗って新たな種類の言語を最初に成し遂げたという意味で、アルカもまた歴史に残る人工言語である。

三章：人工言語アルカ

1:概説 I

1-1:アルカとは

●新生アルカ

注：本稿では人工世界カルディアにおけるアルカではなく、現実におけるアルカについて解説している。

人工言語アルカは――

1991～2001年の古アルカ

2001～2008年の制アルカ

2008～の新生アルカ

――に分かれる。これら3つは別々の言語ではなく、連続体を成している。

古は表意文字を使用し、多国籍の作り手によるピジンだった。

制は表音文字を使用し、単語を覚えやすくするためのn対語というシステムを持っていた。3つの中で、人工言語らしさの最も強い言語だった。

新生は制の使いにくい部分を排他し、実用と芸術性を向上させた言語で、n対語などが廃止されている。現在は新生を使用する。

新生は制アルカに比べ、n対語や時相詞がなくなっている。

体系性を崩し、運用上の合理性をあげている。機械的でなくなり、より言語らしくなった。その代わりに、学習効率は制アルカより落ちた。だがもちろん自然言語よりは覚えやすい。

制アルカ同様、人工文化と人工風土を背景に持つ。アプリオリ言語である点は踏襲された。

新生アルカでは、「より使いやすく」「より聞きやすく」「より話しやすく」するために、学習の容易さ犠牲にした。

代詞だけに所有格を作ったり、n対語を廃したり、時制や相を表わす専門の品詞の時相詞を廃した。

n対語は完全には消えず、メルテーブルという手法で生き残った。その点で新生アルカは古アルカと制アルカのハイブリッドであるといえる。

●用語解説

*古アルカ（こあるか）

1991～2001年までのアルカ。

ピジン的に作り上げられた。

文字は表意文字を使う。

音素は制アルカより多い。

語順はSOVだったが、後にSVOに変わった。

資料は原則紙で、複成や保存が効きにくいのが難点。

また、資料のほとんどを権利等の問題で自由にできないのが難点。

*制アルカ（せいあるか）

2001～2008年までのアルカ。

音韻は新生と同じで、文字も共通している。

n対語や時相詞のせいで人工言語らしさが強い。

覚えやすいが使いにくい言語だったため廃止された。

*n対語（えぬついで）

単語の最後の母音をアプラウトさせて、規則的な意味変化を与える制アルカの語彙圧縮システム。

例えば fan が女なら、fin は男。

対は2~4 まで存在した。

2:ha (上) , hi (下)

3:bal (天井) , bil (壁) , bol (床)

4:keta (春) , keti (夏) , keto (秋) , kete (冬)

中心形は必ず母音がu になる。例えば「上下」なら hu、「男女」なら fun という具合に。覚えやすいが、聞き間違いや言い間違いが相次ぎ、廃止。

*時相詞 (じそうし)

制アルカの品詞で、時制と相を表すもの。

不定詞とくっついて動詞を作る。

動詞語幹 (不定詞) + 時相詞 = 動詞

——となる。

例 : ke (行く) + at (過去の開始相) → ke-at (行きはじめた)

一文字にかかる情報量が多すぎるのが欠点。

t か k かで、行為が始まったのか終わったのか、意味が反対になってしまう。

聞き間違えたら一巻の終わり、過合理。新生では廃止された。

*アプリオリ・アポステリオリ

アプリオリとは先験という意味で、俗っぽく言えば「何もパクってないもの」のこと。

アприオリな人工言語といえば、「英語やフランス語など、自然言語が元になっていない言語」のこと。

何らかの言語を元に作ったものはアポステリオリという。エスペラントなど。

一般にアプリオリは作業量が大きく、作るのが大変。

*人工文化・人工風土・人工世界

言語と同じく、作られた文化や風土のこと。

人工世界は人工文化と人工風土の総称として用い、制作の都合上、人工言語の対語として
いる。

文化と風土にもアプリオリとアポステリオリがある。

トルキンの指輪物語の世界は西洋をモチーフに作られているので、アポステリオリ。
本作の場合は文化をゼロから構築しているため、アプリオリ。

本作の人工世界のことをカルディアという。

カルディアの人工文化をアンティスという。

カルディアの人工風土をアトラスという。

*メルテーブル（別記）

*主要な固有名詞

下記の固有名詞はいずれもアルカにおいて命名された名である。

seren arbazard（セレン＝アルバザード）：人工言語アルカの主な作者

ridia lutia（リディア＝ルティア）：人工世界カルディアの作者

mel keetoia（メル＝ケートイア）：メル暦などの創造者

liiza lutia（リーザ＝ルティア）：アルカの生みの親

kmiir mete (クミール=メテ) : 制アルカの方向性を決定付けた人物
enna vajo (エンナ=ヴァジョ) : 新生アルカが生まれるきっかけとなった人物
yult lutia (ユルト=ルティア) : ルシアの兄。アルカのネイティブ
luxia arbazard (ルシア=アルバザード) : ユルトの妹。アルカのネイティブ
axet (アシェット) : アルカやカルディアを創った集団の名
lantis (ランティス) : アシェットのメンバー
levian t'arka (人工言語アルカ) : セレンらが創った人工言語
kaldia (カルディア) : リディアらが創った人工世界
atolas (アトラス) : 地球に当たる惑星
arbazard (アルバザード) : アトラスの最強国家。物語の主な舞台。南仏に相当
lutia (ルティア) : 魔法国家。北米に相当
altia (アルティア) , nagi (凧国) : 武士の国。日韓に相当
kalensia (カレンシア) : アルバザード南部の半島にあった旧国。イタリアに相当

1-2: 音と文字

アルカの文字を幻字（げんじ）という。

子音は20種、母音は5種。

なお、アルカの漢字訳は「幻」といい、「幻日辞典」などにも見ることができる。

・幻字表

ƀ	ǀ	ǃ	ǂ	
fej	ǀef	ǃil	ǂjɔl	
n	u	a	ɔ	
nɔɔ	uɔn	ɑɔl	ɔɔɲ	
ɔ	ɸ	d	b	
ɔɸɲ	ɸil	dɲ	bel	
h	y	ɳ	ɲ	
hɳ	yɳn	ɳel	ɲej	
z	s	o	l	
zɔɔ	sɔl	oɔl	lel	
l	c	ɔ	e	ə
ll	cc	ɔɔ	ee	əə

・アルファベット転写

t tes	k ket	x xal	s sol	
n nim	v vin	f fox	m mir	
d dur	g gat	p par	b bel	
h hac	y yun	c cuk	r rus	
z zom	j jok	w wit	l lex	
a aa	i ii	o oo	e ee	u uu

・注意すべき子音

x はシャ行。ポルトガル語や中国語と同様。

y はヤ行。

c はラ行だが、ふるえ音といって、イタリア語などにあるラ行のこと。

j はジャ行。

r はラ行で、英語のラ行と同じ。ただしアルカの場合は中舌を持ち上げ、舌を口蓋や歯茎に付けずに発音する。

・覚え方

幻字は手で書いて覚えるのが効率的。上の幻字表とまったく同じものを書く練習になる。最初は鏡文字の tk など間違えるが、慣れるとアルファベットの b,d のように間違えなくなる。

1-3:音節

英語と同じく、子音で終わる音節（閉音節）がある。

日本語と同じく、母音で終わる音節（開音節）もある。

子音で終わる音節のほうが多い。

【音節】		
最も短い音節	V	a (～に)
最も長い音節	CCVCC	prest (縁起が悪い)
頻度が高い音節	CVC, CVCC	ket (猫), valn (健康)

英語と違って語頭の子音連続はあまり好まないため、strikeのような単語は少ない。

また、英語よりも音節を細かく区切る傾向がある。

CVCCは通常2音節で発音される。

CCの間にシュワーを入れたり、CCの後にシュワーを入れたりする。

例えば fonl は /fon lq/ と発音される。(q はシュワーで、3 のような形の文字)
ただし、急いでいるときは自然と 1 音節になる。

1.4:品詞と語順

品詞は名詞、動詞、形副詞、純詞、格詞、接続詞、感動詞の 7 種である。

アルカでは形容詞と副詞に同じ単語を使うので、形容詞と副詞をまとめて形副詞と呼んでいる。

名詞にかかれば形容詞、動詞にかかれば副詞と呼び分ける。

純詞は文頭に来て文全体を修飾したりする語である。英語の *Unfortunately*、などがアルカでは純詞に当たる。

一方、文末に純詞が来ると日本語の終助詞の「ね」「さ」「よ」「わ」のように、話者の気持ちを表す。

格詞とはおおむね英語の前置詞のことである。

英語では接続詞となる *because* などアルカでは格詞になるので注意。

ある単語が何詞であるかは主に語順で決まる。エスペラントと異なり、「名詞は o で終わる」というような決まりはない。

例えば *miik lis* は「小さいリンゴ」という意味だが、形容詞は名詞の後ろに来るので、*lis* が形容詞ということになる。

語順は SVO である。

"A boy likes a girl" を訳すと、英語と同じ語順で "*alfian(S) siina(V) fian(O)*" になる。

上述のとおり、修飾語句は被修飾語句の後ろに来るが、否定など一部は前に来る。

後置 *miik lis* (小さいリンゴ)

前置 en ke (行かない)

1-5:代詞

代詞は名詞の一種で、代名詞に相当する。

代詞は指示詞に相当する形容詞にもなるので、代名詞から「名」を取ったネーミングがされている。

代詞は 疑問・全体・部分・特定・任意・選択・零・指示 に分かれる。

以下に表を記す。指示は別表とする。

【代詞】								
	疑問	譲歩	全体	部分	特定	任意	選択	零
不定	—	—	il すべて	vei 一部	xe ある	fi 何か	wel どれ	yuu ない
有生	ne 誰	netal 誰かしら	illan	veilan	xelan	filan	wellan	yuulan
無生	to 何	total 何かしら	iltul	veitul	xetul	fitul	weltul	yuutul

覚えるべきは8語。あとは複合語である。

新生アルカは学習効率より運用効率を重視するため、人工言語としては珍しく、代詞が体系的でない。

以下に代詞の説明を記す。

1: 疑問

「誰」「何」にあたる。英語と違って文末は上昇調になることがある。文末に「?」も付く。しかし、必ずしも to を含む文に「?」が付くわけではない。

例えば an en ser la siina to (私は彼が何を好きか知らない) の場合、何を好きか自体は確かに疑問であるが、かといってこの文は疑問文ではない。この場合、文末に「?」はいらない。譲歩は後述。

2: 全体

「全員」「全体」にあたる。特定か任意かの区別がない。

例：「皆、私のことが好き」：il siina non.

3: 部分

「一部の人」「一部の物」にあたる。日本語で「～な人もいる」というのを幻訳すると *vei* や次の *xe* が現れ、日本語と異なる構文になる。

例：「中にはリンゴが嫌いな人もいる」：*vei sin miik.*

なお、この代詞は人数の多寡を表わさない。1ではなく全員でもないことしか表わさない。

4: 特定

「(特定の) 誰か」「(特定の) 何か」にあたる。特定はしているがそれを誰だか具体的に言わない場合に使う。それが誰だか知っていても知らなくても良い。客観的に特定されていれば良い。したがって不定ではない。

例：「ある人がそう言った」：*xe kut soa.*

5: 任意

「誰かしら」「何かしら」にあたる。何でもいい任意を表す。

前述の *xe alx* はある数のこと。決まってはいるが、それがいくつだか知ってても知らなくてもよい。例えばその数が4と決まっていれば、相手や話し手がそれを知らなくても4のまま変わらない。数学などでよく見られる表現である。

一方、*fi alx* は任意の数を表わす。4か5か2かといったことは分からないし決まっていな。変数 *x* のようなものである。

他方、誰であろうと何人であろうとという場合は *netal*、何であろうとどれであろうとは *total* という。

6: 選択

「だれ」「どれ」にあたる。ある集団の成員の中からいずれかの成員を表す。

例：「どの野菜が好きなの?」：*ti siina wel stek?*

7: 零

「誰もそうでない」「何もそうでない」という否定にあたる。数字の0と同じ。

例: 「誰も来なかった」: yuu lunat.

8: 譲歩

netal は誰でもいいので誰かしらという意味で、任意とは異なる。

誰でもいいから助けてくれというときなどの「誰かしら」で、「誰でも」や「誰であろうと」や「なんびとも」などの意味。

total はそれが無生になったもの。

1-6:指示代詞

英語の I, you, this, that、日本語の「僕」「私」や「こそあど」に当たるもの。

「私」などを含むことから、人称代詞も兼ねる。

表には重複があるので、実際に覚えるのは7種。複数はおおむね規則的に作れる。

【単数指示代詞】

	一人称	二人称	三人称	四人称
有生 (近)	an 私	ti あなた	lu 彼	el 何か
有生 (遠)	an 私	ti あなた	la 彼	el 何か
無生 (近)	—	—	tu これ	el 何か
無生 (遠)	—	—	le あれ	el 何か

【複数指示代詞】

	一人称	二人称	三人称	四人称
有生 (近)	ans	tiis	luus	el
有生 (遠)	ans	tiis	laas	el
無生 (近)	—	—	tuus	el
無生 (遠)	—	—	lees	el

●四人称は「完全に会話の領域から外れた「意識されない何か」」であり、英語の総称の you や they にあたる。フランス語の on に一番近い。

●三人称は遠近によって lu, la に分かれる。日本語には「これ」と「あれ」の区別はあっても lu, la の区別はないので、「この人」といえるときは lu、「あの人」といえるとき la と覚える。なお、性差はないので彼でも彼女でもいい。

●日本語は「これ、それ、あれ」の3種に分けるが、アルカは tu (これ) と le (あれ) の違いしかない。英語と同じ。

●動物は人間に近いと思えば lu だが、そうでなければ tu。話者の感覚に基づく。言語学的に言えば、アニマシーが高いものほど lu になりやすい。

1-7:指示形容詞

三人称の tu と le は名詞の前にきて、「この」「あの」の意味を指す形容詞となる。

tu miik (このリンゴ)

le miik (あのリンゴ)

また、名詞が有生の場合、指示形容詞は lu, la を使う。

lu fian (この女の子)

la fian (あの女の子)

1-8:所有代詞

【指示所有代詞】

	一人称	二人称	三人称	四人称
有生 (近)	ant 私のもの	tiil あなたのもの	luut 彼のもの	eles 誰のもの
有生 (遠)	ant 私のもの	tiil あなたのもの	laat 彼のもの	eles 誰のもの
無生 (近)	——	——	tuul これのもの	eles 誰のもの
無生 (遠)	——	——	leet あれのもの	eles 誰のもの

英語の my や mine などにあたるもの。my および mine が ant にあたる。重複を除くと7種のみ。

tu et ant (これは私のだ) mine に相当。

tu et miik ant (これは私のリンゴだ) my に相当。この用法は所有形容詞で別途説明。

tuul や leet はあまり使われないが、例えばこんな場合に使われる。

時計からネジが落ちたとする。tさんが拾って「これ何の部品？」とkさんに聞く。kは時計を指して「そのネジはそれのだよ」というとき、「そのの」がtuulにあたる。英語の its と同じ。

複数形の所有代詞は尻尾に es をつける。例えば「私たちのもの」は antes。「あなたたちのもの」は tiiles。

従って表は省略する。

【非指示所有代詞】

	疑問	譲歩	全体	部分	特定	任意	選択	零
不定			ilet すべての	vitte 一部の	xheet 何かの	fiit 何かしらの	welet どれの	yuute ないものの
有生	neet 誰の	netalet 誰かしらの	illant	veilant	xelant	filant	wellant	yuulant
無生	toot 何の	totalet 何かしらの	iltulet	veitulet	xetulet	fitulet	weltulet	yuutulet

指示以外の代詞に-(e)t を付けると、所有の意味になる。

後置される。

vitte に注意。

例文の中で覚えるのが手っ取り早い。

tu et melk neet? これは誰の時計?

le et vaik totalet a. あれは何かしらかの部品だろ。

tu et rob welet? tu az le? これはどれの蓋? こっち? それともあっち?

1-9:所有形容詞

●「私の」「あなたの」などは所有代詞を形容詞として使って表す。

miik ant (私のリンゴ)

amel tiil (あなたの妹)

leis laat (彼の絵)

●それ以外の名詞の場合、接続詞の e を使って所有を示す。

miik e fian (少女のリンゴ) : 一般名詞

miik e miir (ミールのリンゴ) : 固有名詞

●母音で始まる語の前では、e は t になる。

"t"一文字だけだと文中で浮いてしまうので、'を挟むのが通例になっている。

antis t'arbazard (アルバザードの文化)

1-10:三人称詳細

【三人称単数詳細】

	三人称・好感・主格等	三人称・悪感・主格等	三人称・好感・所有格	三人称・悪感・所有格
有生（近）	luumi(こちらの方)	luube(こいつ)	luumin(こちらの方の)	luuben(こいつの)
有生（遠）	laami(あちらの方)	laabe(あいつ)	laamin(あちらの方の)	laaben(あいつの)
無生（近）	tuumi(こちら)	tuube(こんな)	tuumin(こちらの方の)	tuuben(こんなの)
無生（遠）	leemi(あちら)	leebe(あんな)	leemin(あちらの方の)	leben(あんなの)

【三人称複数詳細】

	三人称・好感・主格等	三人称・悪感・主格等	三人称・好感・所有格	三人称・悪感・所有格
有生（近）	luumis(こちらの方々)	luubes(こいつら)	luumins(こちらの方々の)	luubens(こいつらの)
有生（遠）	laamis(あちらの方々)	laabes(あいつら)	laamins(あちらの方々の)	laabens(あいつらの)
無生（近）	tuumis(こちら)	tuubes(こんな)	tuumins(こちらの方々の)	tuubens(こんなの)
無生（遠）	leemis(あちら)	leebes(あんな)	leemins(あちらの方々の)	leebens(あんなの)

三人称には好感形と悪感形がある。作り方は次のとおり。

1:三人称の母音を伸ばす。lu→luu

2:好感なら mi、悪感なら be を付ける。luu→luube

3:所有格（属格）なら n を付ける。luube→luuben

4:複数形なら s を付ける。luube→luubes、luuben→luubens

*n は属格の-en から来ている。s は複数の se から来ている。

文法的な使い方は普通の三人称と同じ。

luube (こいつ)

luube lotta (この野郎)

tu et luuben da. (これはこいつのだ)

bend luubens (こいつらのエサ)

baz aku lax tuube a? (おめえ、こんなの食いてえんか?)

tuumi leeze et laami tauanen anne. (こちらのお傘はあちらのお客様のものでございます)

*tauan laamin だと「こちらのお傘はあちらの方のお客様であります」という意味不明な文になる。なお、laamin tauan は文法的にありえない。laat tauan と言えないのと同じ。la tauanen が正しいことを考えれば分かる。

「tauan を修飾しておりそれに属格の en が付いている」と考えるので laami になる。laamin は不可。これは la tauanen や laabe tauanen にもいえる。【 { (あの) (客) } { (もの) } 】という構造をしているためである。属格を止めて「あの客の傘」に戻した場合、esn e la tauan になることから laamin でなく laami が正しいと確認できる。

好感形は好意、丁寧、親近感、価格の安さ、偉大さ、量の多さなど、自分にとって高評価のものや好都合なものを意味する。

悪感形は嫌悪、野卑、疎遠さ、価格の高さ、矮小さ、量の少なさなど、自分にとって低評価のものや不都合なものを意味する。

ひとえに丁寧や野卑と捉えると、『紫苑の書』のレインのような大人しい女性を使うことに違和感を感じてしまう。好意や矮小さなど色々な用法があることを念頭に置くこと。

misentant mil sala mist halasat tuumi renal a men. (このようなお言葉をちょうだいして、誠にありがとうございます)

an aaxa laxat leebe ifis! (あんな人生なんて少しも望んじやいなかった!)

leemi gart (あんな大金) tuube gart (こんなちっぽけな額)

なお、女性語は下記の通り変化する。有生にしかない。単複同形となる。

laami, laamis→ansiel

luumi, luumis→lusiel

laamin, laamins→ansiett

luumin, luumins→lusiett

ansiel te velnaren mil mist xiilasat yuna lij siina. xom yuta vil klos lusiett aano (あのお方は幼いころの私を可愛がってくださったのよ。この方が仰るような悪いお方ではありませんわ)

三人称が細分化されていると、ti (あなた) や tiil (あなたの) にも丁寧や野卑があるのかと思うかもしれない。

ti などには位相というものがあり、三人称よりさらに細分化されている。

例えば ti (あなた) に対して、halka (貴方様) や baz (てめえ) などが 10 種類以上もある。

位相は丁寧感や野卑感のみならず、話し手の性格や話し手と相手との関係まで示している。

【三人称漠然詳細】

	三人称・好感・主格等	三人称・悪感・主格等	三人称・好感・所有格	三人称・悪感・所有格
漠然 (近)	lendi(このような)	gaato(こんな)	lendin(このようなもの)	gaaton(こんなもの)
漠然 (遠)	klens(あのような)	vandol(あんな)	klensen(あのようなもの)	vandolen(あんなもの)

soa (そんな) とその属格 soan (そのようなもの) を漠然 (近) という。soa は tu を漠然とさせたものである。

yua (あんな) とその属格 yuan (あのようなもの) を漠然 (遠) という。yua は le を漠然とさせたものである。

上記はそれらの好感形と悪感形である。所有格(属格)は単純に en を付けるだけであるが、

まず使わない。

misentant mil lendi rens (そのようなお言葉、ありがとうございます)

an sin vandol namo laaben (あの野郎のああいう態度が気に入らねえ)

【場所詳細】

	場所・好感	場所・悪感
場所 (近)	flej (こちら)	beke(こんなところ)
場所 (遠)	laaf(あちら)	okel(あんなところ)

atu (ここ) の好感形を flej (こちら)、悪感形を beke (こんなところ) という。

lyu (あそこ) の好感形を laaf (あちら)、悪感形を okel (あんなところ) という。

三人称の好感形・悪感形と合わせて覚えておくと良い。

sant fian nan flej, ret (こちらにおかけくださいませ)

arte, xino noan setat yu leebe vas okel! (ああ、私の可愛い息子が戦争なんかであんなところで死んでしまうなんて!)

1-11:動詞

動詞は主語と目的語の間に来る。

an ke felka (私は学校に行く) では ke (行く) が動詞。

時制 (テンス) や相 (アスペクト) や法 (ムード) は動詞と絡めて表現される。

例えば「行きたい」は希望の副詞 lax を付け、ke lax とする。

個々の事例についてはテンス、アスペクトを参照すること。

1-12:テンス

●時制（テンス）の種類

テンスは過去、現在、未来、通時、無時制の5種。

動詞単体では無時制になる。

無時制は「時制に意識を払わない」という意味で、通常は話者の喋っている時間にあたる。つまり、現在形にあたることが多い。

通時は時間に関係なく一定であるという意味。私は男だという場合、一生通して男なので通時である。

ただし、一生通して男なのは言わなくても分かるので、一々通時を使わず、実際には無時制を使うことが多い。

通時は副詞 lut を動詞の後に置くことで表す。

an lab lut（私はいつも働く）

日本語にするときは「常に」「いつも」などをつけて訳すとよい。

現在は副詞 tur で表す。

たいてい話者が喋るのは現在についてなので、通時同様省略され、無時制になることが多い。

現在の副詞を使うときは現在だとしっかり言いたいときなので、日本語にするときは「今」をつけるとよい。

an ke tur（今行くよ）。

過去は副詞でなく動詞語尾 at をつけて表す。

過去は無標な時制ではないので無時制には回せない。かといって未来よりは遥かに頻度が高い。

そこで副詞でなく、より早く言い表せる動詞語尾を取る。

an fit miik（私はリンゴを与える）→an fitat miik（私はリンゴを与えた）

なお、開音節で終わる動詞には at でなく t がつく。いらぬ母音の連続を避けるためである。

an ku (私は言う) → an kut (私は言った)。

未来は副詞 sil をつける。

an ke sil (私は行くだろう)

●過去の ses

過去形は at のほかに ses でもよい。

ses は副詞で、sil や tur と同じ使い方をする。

an ke ses (私は行った)

ちなみに、日常的に at でなく ses を使うのは、アルカだと軍隊用語の位相になる。

その場合は、日本語にしたときは「自分は～であります！」調で訳するのが自然だろう。

ところで、ses が最も出るのは文末純詞としてである。

過去の副詞としてはそれほど用いない。

では文末純詞の ses とは何か。

例えば日本語では「彼に昨日初めて会ったが、彼は目が青かった」という。

だが、よく考えれば「目が青かった」というのは不自然である。その人は生涯に渡って目が青いからである。

「青かった」というのは、話者が体験した時間が過去であるというのに過ぎず、彼の目が青いことが過去なわけではない。

そしてこの違いを表現するのが ses である。

「彼は目が青い」は la til ins soret である。

la tilat ins soret にすると、前は青かったが今は違うという意味になる。

これはカラコンを着けていたケースを除いて不自然である。

自然に言う場合、la til ins soret ses である。

ここに ses が出てきている。

ses は「la が til すること」にかかる過去ではなく、この文を喋っている「私」から見た過去である。

なお、ses を付けずに la til ins soret としても誤りでも不自然でもない。単に客観的な事実を述べた表現となる。

1-13:アスペクト

将然、開始、経過、完了、継続の5相を持つ。

基本的に時制と同じく副詞で表す。

このうち頻度が高いのは経過と完了と継続で、これらは接尾辞で示す。

将然は「～しそうだ」という準備段階を表し、sat で表す。

開始は kit で表す。

経過はある行為がまだ終わっていない途中の段階で、動詞語尾 or で表す。 開音節では r になる。

完了は動詞語尾 ik で表す。 開音節では k になる。

in (見る) → inik (見た)

継続はある行為の結果がまだ残存していることを指す。

例えば「座る」の skin を継続相にすると「座っている」になる。

継続相は動詞語尾 es で表す。 skines で「座っている」を意味する。

以上を踏まえ、例えば座るという動詞をとると、アスペクトは下記のようなになる。

skin sat 座ろうとしている

skin kit 腰を下ろしはじめる

skinor 腰がだんだん下がっていく

skinik 尻が座面についた

skines 座っている

また、語尾も副詞もつけない素の状態を無相という。

例えば esk で「雨が降る」である。無相は開始・経過・完了をまとめた相である。

なお、ここで述べたのはアスペクトの基本である。

実際にはアルカはアスペクトが7相あり、定動詞と不定動詞の区別もある。

1-14:再帰動詞

アルカには「座らせる」はあっても「座る」という単語はない。

「私は座る」は「私は自分を座らせる」というフランス語のような表現をする。

an skin nos (私は自分を座らせる→私は座る)

ただし、この手の動詞は目的語に自分が来るのが無標であるから、通常 nos は省略される。

従って、通常は an skin という。はっきり再帰だと言いたいときに、nos を付ける。

再帰動詞を取るものは、姿勢動詞が多い。

寝る、座る、立つなどから、あくびをする、笑うなど、さまざまなものが再帰動詞となる。

再帰動詞として使えるかは、各動詞の格組を見て判断する。

意味的に sol (主語) =yul (目的語) になることができれば、その動詞は再帰動詞としての用法を持つ。

なお、格組とは動詞が取る項の組み合わせのこと。例えば fit (与える) という動詞の場合、与える人と与えられる物ともらう人の3項が必要になる。これらの項の組み合わせを格組という。格組は動詞ごとに異なる。

1-15: 繫辞

繫辞は動詞 *et* で表す。*et* の後ろには形容詞や名詞が来る。

an et kai (私は大きい)

non et min (私は女だ)

● 繫辞のテンス

動詞に使う時制の副詞や動詞語尾をそのまま使う。

例えば「今行く」は *ke tur* であり、現在の副詞 *tur* を動詞 *ke* に付けて表す。

そしてこの *tur* を単体で使うと、繫辞の現在形になる。*et* は不要。

an tur lif (私は今は若い)

an at kai (私は大きかった)

la sil sor (彼は背が高くなるだろう)

● 繫辞のアスペクト

et は「～である」という静的な動詞で、アスペクトを持たない。

「～になっている」とか「～になりそうだ」とか「～になった」と言いたいときは、*em* (～になる) を使う。

em sat (～になりそうだ)

em kit (～になりはじめる)

過去形にしたいときは *emat sat* のようにする。

また、完了の *ik*、経過の *or*、継続の *es* を *emik*, *emor*, *emes* の代わりに使うことができる。

tu ik har (赤くなった)

kaam tiil or kaaf (君の頬がだんだん赤くなってきている)

●否定の繋辞

繋辞以外の動詞では、否定は副詞 en を動詞の前につけて示す。例えば en ke で「行かない」。
では繋辞の場合 en et となるのだろうかというそうではなく、繋辞の否定は de である。

an de min (私は女ではない)

頻度が高いので補充法になっている。

過去形のときは det になる。

1-16:自動詞

アルカの動詞はすべて他動詞である。

「いる」でも「死ぬ」でも他動詞で、目的語を取る。

動詞ごとに自他を覚える必要はない。

他動詞しかないということは、「落す」はあっても「落ちる」がないことになる。

ではどうやって「落ちる」を表すか。

繋辞の後に動詞を置くことで、自動詞になる。

an met ti (私は君を落す) の met は他動詞だが、これを自動詞に変えるには下記のようにする。

1:まずこの動詞 met を繋辞の後に持ってくる。

2:次に、主語に落ちる人 ti を持ってくる。

3:すると ti et met となる。そしてこれが「君は落ちる」にあたる。

落ちる経験者が主語の位置に来て、認知しやすい文頭に現れている。

また、他動詞と同じ語形の *met* を使って自動詞を表しているため、自動詞と他動詞で別々の単語を覚える必要はない。

なお、「落ちた」という過去の自動詞はどう表すか。

ti et met という自動詞文において、本動詞は *met* でなく *et* であるから、過去の繫辞 *at* を使う。*met* はいじらない。

ti at met (君は落ちた)

では、「落ちない」はどう言うか。

繫辞 *et* を否定し、*de* にする。

ti de met (君は落ちない)

「落ちなかった」は？

de の過去形の *det* を使う。

ti det met (君は落ちなかった)

2:概説Ⅱ

2-1:形副詞

形副詞は形容詞と副詞の混成である。

両者とも元となる語形が同じなのでこう呼ばれる。

●形容詞

形容詞は名詞の後ろに来る。

ket lis で「小さい猫」。

●副詞

副詞は一般副詞(leimfreyu)と純副詞(levafreyu)に分かれる。

純副詞は法副詞(yunerfreyu)と遊離副詞(dalsfreyu)に分かれる。

一般副詞は「形副詞+el」で作る。

「小さい」が lis なら、「小さく」は lisel。

副詞は通常「主語+動詞+目的語」の後に置くが、そこでないといけないということはない。

an badat elen vienel. 私は机を強く叩いた。

vienel で「強く」。

vien だけだと「強い」。

なお、el は母音で終わる単語の後では l になる。

la klosat axmal (彼は論理的に主張した) *axmael は不可

形容詞にかかる副詞は el が付かない。

×la et vien tinkal → ○la et vien tinka

●遊離副詞

aluut は「必ず」という確率の副詞だが、意味的に副詞であることは明らかなので、わざわざ el を付けない。

el を付けなくてもよい副詞を純副詞といい、中でも場合によって el を付けられるものを遊離副詞という。

確率のほかに kalma (しばしば) のような頻度を表すものも遊離副詞になる。

遊離副詞は動詞の直前か直後に置かれる場合、el を付けない。それ以外の場所に置かれる場合は el を付ける。

aluut や kalma は動詞の直前に置くので、an aluut vast tas (私は必ず試験に受かる) なら el を付ける必要はない。しかし動詞の直前から場所を移せば an vast tas aluutel のように el が必要となる。

なお aluut, an vast tas a! というように、感動詞ないし文頭純詞のように遊離副詞を使う場合は el を付けなくてもよいことがある。

an vast tas aluutel = an aluut vast tas

遊離副詞かどうかは辞書を確認されたい。詳しくは幻日 freyu を参照。

●法副詞

英語の助動詞に当たるもので、可能や希望などを表す。

可能は sen、希望は lax といい、axt sen で「書ける」、axt lax で「書きたい」を意味する。

sen や lax は動詞の直後に来て el を伴わないので、純副詞である。

言語学的には「法」を表すため、純副詞の中でも特に法副詞と呼んでいる。

遊離副詞と違い、法副詞は位置を動かすことができない。

なお、命令の re などは動詞の直前に置かれる。

●よく使う法副詞

lax	～したい	希望
van	～しよう	意思
sen	～できる	可能
vil	～できない	不可能
das	～したらどうか	提案
fal	～すべき	義務
flen	～してもよい	許可
xiit	～しよう	勧誘
sil	～だろう	未来
yu	～される	受動
re	～しろ	命令

アルカでは動詞の未来形を作る sil や受動態を作る yu も文法的には法副詞に含まれる。

●余録

前置形副詞、命令も参照のこと。

2-2:前置形副詞

●前置形容詞

形容詞のいくつかは前置される。

例えば前で見えた指示形容詞がそうである。(厳密にはこの **tu** は形容詞ではなく代詞)

tu miik (このリンゴ)

また、基数も前置される。

ko miik (ひとつのリンゴ)

強調や限定の **ca** も前置される。

kilseles, ca freian (剣士キルセレス)

●前置副詞

命令、依頼、禁止、否定などは動詞の前に置かれる。

re axt (書け)

en luna (来ない)

日本語の「使用しない」のように否定が最後に来る言語では、「使用」と聞いたときに思わず「使用するのか」と思ってしまい、最後で否定されてガクつとすることがある。

そのため、最後を聞くまでウズウズさせられることがある。

アルカではそれをなくすため、否定は前置する。まず否定だということを宣言してから内容を述べる。これのおかげで後からひっくり返ってガクつとくることがない。

否定の形副詞は **en** である。従って、**en miik** (リンゴでないもの) や、**en ke** (行かない) という表現ができる。

命令については命令を参照のこと。

2-3:命令

命令は法副詞 **re** などを動詞の前に置いて作る。

	命令	禁止
常体標準	re	den
常体丁寧	ren	te
敬体標準	mir	fon
敬体丁寧	sant	leu

*sant の女性系は myun。

主語を略して動詞から始めても命令形になる。この点は英語と同じ。

re axt (書け)

fit (与えよ) ku (言え)

re ku (言え)

sant rens (「仰れ」に相当するが、日本語的には「お申し付けください」が妥当な訳)

den ku (言うな)

leu rens (「仰らないでください」に相当。上と同じく ku は丁寧な言い方では rens になる)

2-4:格詞

格詞(かくし)は、名詞と動詞の関係を表す。格詞の後ろには語句も節も取れる。

英語でいう前置詞に当たるが、格詞がすべて前置詞と同じというわけではない。

主格(sol)と対格(yul)の格詞は基本的に省略されるが、倒置や強調があると省略されない。

よく使う格詞を参照すること。

2-5:よく使う格詞

以下によく使う格詞を挙げる。

sol : 主格

動作主格や経験者などを表す。通常は省略されるが、倒置や強調の際には復活する。

yul lu sol an siina (彼のことが私は好きだ)

yul : 対格

主に対象を表す。通常は省略されるが、倒置や強調の際には復活する。

用例は同上

a(l) : 与格、終点格 : 母音で始まる語の前に付くと、al になる。

1:物や行為を受け取る者を表す。

an fitat lei a la (彼に本をあげた)

2:移動の着点を表す。

an lukat al ate (店まで歩いた)

3:時間の終点を表わす。

an axtat lei a dume (私は夜まで本を書いた)

i(t) : 奪格、起点格 : 母音で始まる語の前に付くと、it になる。

a の反対。「～から」。

an taf lei i kib (棚から本を取る)

an lunas it arbazard (私はアルバザードから来ました)

ol : 場合格 : ~の場合に

「もし」に当たる格詞。接続詞でない点に注意。

an ke sil ol la ke van (彼が行くなら私も行こう)

hot (唯一) を付けることによって「～のときに限り～する」という意味を表す。

an ke sil ol hot la ke van (彼が行くときだけ私も行こう=彼が行かないなら私も行かない)

ka : 場所格

場所を表す。言語学的にはふつう処格と呼ばれるもの。

la miksator ka ra (彼は家で歌っていた)

im : 時格

時点を表す。英語の when や at などに当たるが、when と訳すときでも接続詞にならない点に注意。

la inator teik im an ke (私が行ったとき、彼はテレビを見ていた)

kon : 具格/ vit : 不具格

行為に伴う道具を表す/道具を使わなかったことを表す。

kilat kon{vit} diol (のこぎりで切った/のこぎりを使わないで切った)

ok : 随伴格/xed : 不随伴格

行為を行う主体的な仲間を表す/仲間がいないことを表す。

ket ok{xed} la (彼と一緒にいった/彼と一緒にでなくいった)

●格詞の順序

明確な順序はないが、例えば下の例文なら次の並びが一番自然である。

なお、格詞が取るのが語でなく節になって長くなるほど、その格詞は後回しにされる傾向にある。

下の場合、im 格が im toxel だったら、ほかの格より前に来ていた可能性が十分考えられる。

sol (主格 : 通常省略) an inat (動詞) yul (対格 : 通常省略) jan hal (上格) waka kon (具格) flan ok (随伴格) hacn im (時格) xelt ik nok

(私は月が出たとき、丘の上で、友達と一緒に、望遠鏡で、空を見た)

2-6:純詞

純詞（じゅんし）とは文頭・文中・文末に現われ、文全体を修飾するものである。

カンマに当たるツンクという点記号はあってもなくてもよい場合がある。

es ti sof?（何でそうしたの?）

len, la metat melk!（やはりあいつが時計を落としたのか!）

文頭に来るものは文法的で客観的なものが多く、文末に来るものは心情的でモダリティを表わすものが多い。

例えば sin（命題に対して嫌悪感）、siina（命題に対して好感）、kok（確認）、sei（不確定）、na（～な気がする）などはすべて文末純詞である。

la sontat an（彼は私を撫でた）

la sontat an siina（彼は私を撫でてくれた）

また文頭には一般に接続詞と勘違いされやすい son（では）、yan（そして）、tal（しかし）、veil（さもなくば）、man（なぜなら）などが来る。

これらは格詞でも良いが、純詞にしても良い。

格詞にした場合、動詞の時制が主節との対照になるので注意。詳しくは時制の一致を参照のこと。

なお、文中に来る純詞は挿入として扱われる。an, hao, ket（私は、当然のことだが、行った）のように。

●形容詞と副詞と文頭純詞

一部の形容詞は副詞や文頭純詞の用法を持つ。

例えば aal は形容詞としては「特別な」、文頭純詞としては「特に、とりわけ、中でも」、副詞としては「特別に」という意味を持ち、それぞれ文法的な使い方やニュアンスが異なる。

sei aal 特別な日

aal, la et hax. 特に彼は優秀だ。

an ket axoka aalel {alskolel} im fis. 今日は特別に（普段と違って）遊園地へ行った。

aal のような例は他にも kils, koot, ap, leim, len, mon などがある。いずれも文頭純詞と形容詞で少し意味が異なる。

●文末純詞は心を作る

古アルカは話者の位相や心情をよく表す言語であったが、制アルカの機械的なやり方で位相表現が減った。

ところが後期制アルカになるにつれて位相表現が特に文末純詞で発達した。

これを見るに、アルカという言語は根本的に位相表現が好きらしい。

新生もそれを踏襲しており、位相表現が細かい。

女性であるか、若いのか、大人しいか、上流階級か、何信者か、何人か。

こういうのが位相だが、位相の違いを最もよく表すのが代詞と文末純詞である。

また、話者の心理状態を描写するのも文末純詞である。

従って、文末純詞が心を作ると言っても過言ではない。

同じ不確実の文末純詞を取っても一般は sei というところ、大人しい女性は eyo という。

このように、同じモダリティでも位相によって言葉が異なる。

この細かさは日本語以上であり、アルカが文字だけでもいかに位相を表現できるかということを示している。

2-7:平叙・疑問・否定文

これまで平叙文の作り方を説明してきたが、疑問文と否定文はどう作るか。

●疑問文

1:文末に?を置き、イントネーションを尻上がりにする。

2:文末純詞 mia?を置き、イントネーションを尻上がりにする。

例 ti siina miik mia? あなたはリンゴが好きですか?

1より2のほうが丁寧。

女性の場合、通常 mia が mian になる。

●否定文

否定する単語の前に形副詞の en を置く。

前置するので注意。

ti en ke felka. あなたは学校に行かない。

en ti ke felka. あなたでない人が学校に行く。

ti ke en felka. あなたは学校でないところに行く。

●否定疑問文

Don't you like apples?に対し、英語では好きなら yes という。

日本語にすると、好きなら「いいえ」と答え、逆になる。

アルカの否定疑問文の答え方は日本語式がメインである。

「好きじゃないのよね?」と聞かれたら、「好きではない」ことの真偽を聞かれているとアルバザード人は考える。

もし好きなら「好きではない」は偽になるから、「いいえ」、つまり teo と答える。

この現象はアルカに付加疑問がないことと関係している。

しかし、相手が明らかに肯定を期待している場合は否定疑問文に対して英語式に答えることができる。

例えば日本語だと、強引に上司に飲み会に誘われる際、「え、お前来るよな？え、来ないの？来ないの？？」と聞かれたときは、「あ、はい行きます」という答えの容認度が高まる。

否定疑問文「来ないの？」に対し、yesのときに「はい、行きます」と答えている。これは英語式である。なぜかという、相手が肯定を前提としているからだ。

これと同じ現象がアルカにも起きる。

相手が強く肯定を要求しているときは英語式で答えてよい。

だから厳密に言えば ax とか teo だけではどちらなのかわからないのだが、実際の会話では空気を読んでわかることなので、日本語と同じく取り立ててコミュニケーション上の問題にはならない。

2-8:接続詞

- 接続詞は主に語と語の論理的関係を表わす。
- 文や節同士を繋ぐのは接続詞でなく純詞や格詞になることが多い。
- 語句同士を繋げる o や重文を作る oo など、元々接続詞であるものと、saen のように格詞から規則的に作るものがある。

連言と選言、同格の接続詞、括弧の tie~tun、格詞を接続詞に、比較、関係詞の le を参照のこと。

2-9:連言と選言

- 連言と選言

弱連言・強連言・弱選言・強選言がある。弱連言と強連言はアルカの用語。
順に oo,o(記号でも可),az,ul で表わす。

強連言は、名詞と名詞、形副詞と形副詞、動詞と動詞など、同じ階層の語句同士を結ぶ連言である。強連言には o を使う。

an siina aples o miik (私は杏とリンゴが好きだ)

*aples,miik や aples/miik でも可

弱連言は要素同士を異なるレベルで繋ぐ接続詞である。要するに重文を作る。「～し、～する」と訳す。

弱連言には oo を使う。oo はツンク (カンマ) で代用される。

an ket ez, skinat a skil (私は部屋へ行って椅子へ座った)

強選言 az は taz k の形で使い、「t か k のどちらか一方という」意味になる。

aples az miik (アプリコットかリンゴのどちらか)

弱選言 ul は tul k の形で使い、「t か k のどちらか」を表す。

ただ、az と違って t と k の両方とも選んでもいいのが違いである。

aples ul miik (アプリコットかリンゴ、或いはそのどちらでも)

●連言・選言・強選言を論理的に捉える

以下はド・モルガンの定理を参考にするとよい。

○∨で強選言を示す。

tu et har o gek (赤くて丸い) : $p \wedge q$

tu et har ul gek (赤くて丸いか、赤いが丸くないか、赤くないが丸い) : $p \vee q$

tu et har az gek (赤いが丸くないか、赤くないが丸い) : $p \circ \vee q$

tu de har o gek = tu et en har ul en gek (赤く丸いということはない) : $\neg(p \wedge q) = \neg p \vee \neg q$

tu de har ul gek = tu et en har o en gek (赤くも丸くもない) : $\neg(p \vee q) = \neg p \wedge \neg q$

tu de har az gek (赤くて丸いか、赤くも丸くもないのどちらか) : $\neg(p \circ \vee q)$

tu et har o gek (これは赤くて丸い) を否定して tu de ~ にすると、接続詞は上の表に従って ul に変わるので注意。tu de har ul gek (これは赤くも丸くもない)。

もし o のままにして tu de har o gek とするとニュアンスが異なり、「少なくとも赤くて丸いという両方の性質は備えていない。赤いか丸いか片方、あるいはそのどちらでもないかだ」という意味になる。

●「その他」の表現

また、「その他」の選択を示す方法がある。選言に alt を加えるだけである。

aples az miik az alt (アプリコットかリンゴかそれ以外のどれか)

aples ul miik ul alt (アプリコットかリンゴかそれ以外の中からいくつ選んでもいい)

●whether の表現

az を使って「そうであるかどうか」を表すことができる。

tie~tun 節と呼応することが多いが、省略可である。

non en ser nan siina la az (彼のことを好きなのかどうかわからないの)

2-10:同格の接続詞

同格はツンク (カンマ記号) によって示せるが、同格接続詞 del を使って表すこともできる。

del の後には同格内容が続く。

fian del miir = fian, miir (ミールという少女)

なお、主格と同格になる場合は xel、対格と同格になる場合は lex を使う。

これらは接続詞でなく格詞なので注意すること。

tu et rat xel ti ar vav (運動するのは良いことだ) : ti ar vav という節と主語の tu が等しい。
an ser tu lex ti siina la (君が彼女を好きだということは分かっている) : ti siina la と目的語の tu が等しい。

2-11:括弧の tie~tun

語句や節が長くなりすぎてしまう場合は、tie と tun で対象を挟む。
それによって区切れが明白になる。

non retat tie laal tau sab ank fiina non tun a kaan.

(私は、お母さんが私のために可愛い洋服を買うようにしむけるよう、お父さんに頼んだ)

tie, tun は laal から non までをまとめており、retat の長い対格を明瞭に示している。

tie, tun は文意を明瞭にするときに使う。あるいは誤解を防ぐときに使う。普段は使わない。

上の文は冗長で、ふつうは次のように言う。

non retat a kaan yul laal tau sab ank fiina non.

また、tie, tun は数学の()としても使う。

(3+4)は tie vi fok val tun と読む。

2-12:格詞を接続詞に

格詞に接尾辞の en を付けて規則的に接続詞にすることができる。

an inat ket sa galt (私は門の前で猫を見た) の場合、sa は格詞なので inat の格である。ゆえに私が門前にいたことになる。

一方、an inat ket saen galt (私は門の前の猫を見た) の場合、saen は接続詞なので、もはや格詞ではない。

saen は inat の格ではなく、ket と galt を結ぶ接続詞である。そうになると門前にいたのは私ではなく猫になる。

この接続詞は sa (～の前で) と saen (～の前の) を区別するために使われる。

こういった接続詞は他の格詞からも作れる。

例えば kon なら an siina lem konen flezol (私はバイオリンを使った曲が好きだ) のように。

2-13: 接続表現の強さ

日本語の「しかし」と「しかしながら」だと、逆接の強さは後者のほうが主観的に強い。このように接続詞には強度があるが、アルカの場合は3段階の強度を持つ。

「しかしながら」を強逆接とすると、「しかし」は中逆接で、「～けど」は弱逆接のように見える。

そしてアルカでは順に tac, tal, dee と並べる。

3種類用意することで同じ接続詞を連用しなくなり、のっぺりした論文調の文を避けることができる。

なお、アルカで tal などは純詞であって厳密には接続詞ではない。

そこで、接続表現と呼ぶに留める。

接続表現の純詞の表は以下のとおり。

	順接	逆説	原因	譲歩	結果
強	hayu	tac	alman	alfin	soc, alson
中	yan	tal	man	fin	son
弱	see	dee, tet	mil	fien	xom

(注1) 女性は1段下げて使う。つまり、通常は弱を使う。

(注2) *dee* は一般形。女性形は *tet*。

(注3) *soc* は *alson* より強い。

2-14:比較

比較は4種の接続詞を使って行う。

英語と違って形容詞が変化することはない。

数学の>、=、<を扱う感覚で手軽に表現できる。

nod は *more than* に当たり、「より～である」を表わす。数学でいう大なりである。

kalt は *less than* に当たり、「より～でない」を表わす。数学でいう小なりである。

kok は原級に当たり、「同じくらい～である」を表わす。数学でいうとイコールかニアイコールである。

enk は *kok* を否定したもので、「～と違って～だ」を表わす。ノットイコールに当たる。

これらはいずれも接続詞として使う。だから何なのかというと、要するに動詞の後ではなく、比較対象の間に挟まることになる。

an nod la et kai (私は彼より大きい)

an kalt la et kai (私は彼より大きくない)

an kok la et kai (私は彼と同じくらい大きい)

an enk la et kai (私は彼と違って大きい)

I'm taller than him のように、比較対象を後置したい場合はどうすれば良いか。

この場合、これらの接続詞を格詞として取り扱いなおし、*an et kai nod la* とする。

このとき *nod* は接続詞でなく格詞となる。

最上級に当たる表現は形副詞の *alka, aven* を使って表す。意味は *most(-est), least* に相当するが、文法的な使い方が異なる。

kai alka (最も大きい)

kai aven (最も大きくない)

alka, aven は形副詞なので、場面に応じて形容詞だけでなく副詞にもなる。

an siina tu alkal (これが一番好きだ)

3:概説Ⅲ

3-1:関係詞の le

接続詞 le で関係詞に相当する文を作ることができる。

語順は逆なもの、le は中国語の「的」に相当する。

なお、母音で始まる語の前では l'となる。

例えば「私があげたリンゴを見せて」は"sins miik le non fitat"となる。

le が non fitat (私があげた) と miik (リンゴ) を繋いでいる。

le 以降の節の中で欠けている格詞が取る名詞は、le の左側に先行詞として来る。

上の文では、miik は fit の対格であるが、miik が先行詞として前に出ているので、le 以降の節では miik が欠けている。

le は指示詞の le (あれ) と同形なので、区別する必要がある。

指示詞 (あれ) の場合は前置されるが、接続詞の le は句や節の間に挟まれる。従って区別は容易である。

le galt (あの門)

galt le ket xa (猫のいる門)

英語の had had のように、偶然 le が連続することもある。

galt le le gek xa (あの球がある門)

3-2:whose の相当物

主格や対格は動詞にかかるが、属格は名詞にかかる。

I know a place. you can eat X at the place → I know a place at which you can eat X

——において、at は前置詞で、かつ、格を表す。

一方、I know a girl. The father of the girl is a doctor において、関係詞は a girl whose father となる。

at the place と違い、元の文は the father of the girl の形である。この of は同じ前置詞であっても格ではなく、接続詞的に機能している。

機能的には、of は属格に相当する。英語では属格だけ前置詞の中でも接続詞的である。ほかの格は前置詞の中でも格詞的である。

関係詞は「特定の格を失った修飾節」と言うことができる。上の例だと at 格が関係詞節中で消失している。

だが of は格ではなく接続詞として機能している。そのため、アルカは of だけ関係詞を作れない。

つまり、所有に関しては e を使って関係詞を作れない。言い換えれば、whose だけアルカにはない。

of はアルカでは接続詞扱いである。of に当たる関係詞を作るなら、or とか and など、ほかの接続詞についても関係詞を用意しなければならないが、そんな話がありえるだろうか？それはもはや関係詞ではなかろう。

英語では of は格と接続詞の間であるため、whose を持つ。しかしアルカで of に当たる e は純粋な接続詞なので、関係詞は持てない。

では、whose に当たる表現はどうするか。

who に当たる le を使い、さらに til と lex を使う。

I know a girl whose father is a doctor

=an ser fian le TIL kaan LEX vals.

無理に英語にすると、I know a girl who has a father as[that is] doctor. という感じになる。

3-3:代動詞

代名詞の動詞版のこと。

日本語の「する」、英語の do など当たる。エスキモー語などでも使われる。

制アルカではあらゆる代詞が代動詞になったが、実際に使うのは to, so, soa だけで、稀に xe が使われる程度だった。

me などは使われず、副詞として使われた。実情を考慮するに、to, so だけで十分であろう。

ti tot la? (彼に何をしたの?)

so{ar} xe a non (私にあることをしてほしいの)。制では xe-al としていたが、使わなかったため so の組み合わせで代用。

so{ar} me (もう一度して)

3-4:死生動詞

死生動詞とは ar を使った生動詞と、is を使った死動詞からなるものである。

ar は sol が yul の機能を発揮したり、yul に何かしかの力を働きかけたり、yul という行為を行ったり、始めたり、作ったりといったことを意味する動詞である。

意味が広く定義しきれない。最も使う動詞のひとつである。

is はその真逆である。「やめる」とか「消す」などの意味になる。

また、「主語+繫辞+ar{is}」という自動詞用法もあるので注意。

ar ate (店を開ける)

ar tolx (訓練をする)

is pam (明かりを消す)

is rafel (宿題を止める)

pam ik ar (明かりがついた)

teeze es is (風が止んでいる)

3-5:受身

受身は法副詞の *yu* を動詞の直後に置き、能動文の *sol* と *yul* を入れ替えて作る。

英語と違って *be* 動詞は不要で、動作主を *by* で表す必要もない。

純粋に *yu* が入って *sol* と *yul* が入れ替わるだけである。

an tiia ti (私はあなたを愛する)

ti tiia yu an (あなたは私に愛される)

なお、受身にしたときの動作主は省略できる。

la setat yu だと単に「彼は殺された」になる。

また、日本語と違って迷惑感を表すことはない。

受身は純粋に *sol* と *yul* を入れ替えることによって、通常は強く焦点化される *sol* を弱め、逆に *yul* に焦点を当てる表現技法といえる。

3-6:使役

sols (使役) や *vars* (強制) などを動詞として使い、*yul* に使役内容を述べる。

yul にはしばしば節がくるが、これは従属節なので、従属節の時制の扱い方に注意しなければならない。

an solsat la ke (彼を行かせた)

使役を受ける相手は、*ke* の動作主である *la*。

英語と違って動詞ごとに *to* 不定詞と原形不定詞のどちらを取るのか覚えなくてよいので楽である。

3-7:従属節の時制

従属節とはアルカでは格詞節や関係詞節のことで、それ以外は主節となる。

主節と従属節の時間は大概同一である。

もし時間が同じなら、従属節は無時制を取る。

もし時間が異なっていれば、時制の副詞をつける。

la vortat im ti fias (彼が死んだとき、君が生まれた) の場合、死んだのと生まれたのが同じ時間である。

もし君が生まれたのが彼が死んだより前ならば、従属節も過去にし、la vortat im ti fiasat とする。

つまるところ、主節との比較で従属節の時制が決まる。英語とは逆の意味で時制の一致が起こる。

英語と違って大過去に煩雑な完了形を使う必要がない点が若干楽である。

3-8:数

数は10進法で、以下の通り。

0 : yuu

1 : ko

2 : ta

3 : vi

4 : val

5 : lin

6 : kis

7 : nol

8 : ten

9 : los

10 : on

11 : onko

20 : taon

99 : losonlos

100 : gal

1000 : kot

1'0000 : sen

位取りは4桁ごと。日本と同じで兆億万という4桁ごとの位取り。

4桁ごとにアポストロフィーを入れる。

日本語と違うのは一万を「イチマン」と言わず、「マン」という点。つまり kosen でなく sen。

●修飾の仕方

基数は前置し、序数は後置する。

ko miik (ひとつのリンゴ)

miik ko (ひとつめのリンゴ)

●代詞と数

「何個」「ある数の」など、代詞に数の意味を持たせるには、代詞に接尾辞 al をつける。

toal (何個)、xeal (ある数の)。

toal を前置すると「いくつの」。後置すると「何番目の」。

ti kuit toal miik? あなたはいくつリンゴを食べましたか。

ti latat al omi toal? あなたは何番目のドアに入りましたか。

●単数形と複数形

名詞に形容詞 ves をつけると単数形、sein をつけると複数形になる。

fian ves (単数の少女)

fian sein (複数の少女)

ko fian と fian ves は事実上同じである。

通常 ko fian を使うので、fian ves には一人で孤独なという意味が込められることもある。

3-9:イントネーション

ある部分を高く読むのはアクセント。語・句・節・文全体の音の高低を示すのがイントネーション。

両者は別物なので、別々の理屈がある。

節・文は文末イントネーションで、語は文中イントネーションで示す。

3-10:アクセント

アクセントはラテン語や東京弁の外来語のアクセントに似ている。

アクセントの法則はかなり複雑なので、概説では「東京弁を読むように読んでよい」と述べることにした。

例えば *avelant* だったら「アヴェラント」を読むように「ラ」を強く発音する。

カタカナに変えれば大体 OK だが、注意点がある。子音にはアクセントを置かない。

アルシアは東京弁だと「ル」が高いが、スペルは *alsia* である。しかし l にアクセントは置けないので注意。

3-11:メルテーブル

制アルカの n 対語は学習には向いていたが、最後の母音がひとつ変わるだけで逆の意味になるのが欠点であった。母音ひとつ聞き漏らすと意味が逆になってしまうのだ。例えば sor が高いなら ser が低いを意味する。これらは似ているので、誤解が起きやすい。それで n 対は消えた。

だが、「1 語覚えれば 2 語覚えられる」というコンセプト自体は良かった。そこで聞き間違いをなくしつつ、その効果を期待できる方法がメルテーブルである。メルテーブルでは次のような幻字のペアの表を使う。

t k
x s
n m
v b
f p
d g
c l
r l
z j
a i
o e

例えば t は k に対応している。また、x は s に。a は i に。dan という単語があったとする。このとき、上の表を使うと dan は gim に変換できる。仮に dan が「深い」だとすれば、このように規則的に変換されたものを「浅い」と定義できる。そうすれば 1 語覚えてあとは変換テーブルに載せるだけで対語が覚えられる。これがメルテーブルの原理である。アルカでは teelvet という。

●表のアンバランスさ

実はこの表はアンバランスである。h に対応するものはない。h は変換できないのである。また、c,r はどちらも l になる。そして l は r にしかならない。

さらに、この表には載せていないが、語頭の f,v は p,b にならず、そのまま残る。

h を変換しなかったのは音韻的にペアがなく、h 自身の頻度も少なく、出てくる箇所も限られているためである。

c,r は 2 つ足しても l の頻度に勝てず、まして c は本当に少数しか出てこない。

そこで c,r をまとめて l に対応させたわけである。

なお、l は r にしかならず、c にはならない。c の頻度を抑えたままにしておくためである。

f が語頭で不変化するのには唾が飛びやすい p 音を嫌うためである。

といっても唾が飛びやすいのは語頭の有気音の p だけなので、語頭の f 以外は p に変換される。v,b についても同様である。

ちなみにこの現象は単語でも起こっていて、太陽の faal、光の far、白の fir はすべて制アルカまでは p 音で始まっていた。

●メルテーブルの適応範囲

メルテーブルは機械的な処理なので、基本語には向かない。

特にアルカのように元々の素材がある言語には向かない。ゼロからのアプリアリになら有効だが。

そこで、中級以上の単語に適応する。

また、高級な単語についてはメルテーブルを使わず、接頭辞の al をつけて反対語を示す。例えば axma (論理的) の反対はテーブルに乗せると isni になるが、そこまで短くしておく必要もない単語なので、反対語は alaxma でよい。

日本語でも「非論理的」のように「非」をつけているが、それと同じ感覚である。

●年月日

年は salt、月は xelt、2週（半月）は adia、週は soot、日は sel。

暦はメル暦という独自のものを使う。

1 週は 14 日。

1 月は 28 日。

1 年は 13 カ月＋ミュシェットの月（1～2 日間）。

fis et to selal? 今日は何月何日ですか。

fis et ne{to} sel? 今日は何日ですか：日は lantis なので、ne でも OK。

fis et wel adia? 今日は何週の週ですか：週は arxe か som しかないので、wel を使う。

fis et ne{to} xelt? 今日は何月ですか。

fis et ne{to} salt? 今日は何年ですか：ne と聞くと 28 周期で「セレンの年」などのように答える。to と聞くとメル暦で「メル 14 年」などと答える。

●時計

時計は地球のものと同じ刻み方。

時間は miv、分は fei、秒は jin。

miv の部分はアルミ ヴアの 12 神を使って表される。例えば 3 時は miv 3 ではなく poen という。

tur et to melal? 今何時ですか。

tur et ne{to} miv? 今何時ですか：hour の単位だけ尋ねる。

ep, fenzel map?? えっ、もう 10 時!?

aa, fenzel halm aa... ああ、まだ 10 時かあ。

●一日の区分

1日は8つに分けられる。ただし正午と0時は時間でなく時点なので、厳密に言えば6つに分けられることになる。

アナログ時計の円盤にメルセデスのロゴを当ててみると、12時と4時と8時に3等分されるのが分かる。

0時が *alfaaram*

0～4時が *vird*

4～8時が *viix*

8～12時が *faar*

正午が *faaram*

12～16時が *harp*

16～20時が *cuuks* (夕方が少し日本語より長い)

20～24時が *dume*

夜や朝という言い方はしばしば大雑把で、実際には4時間程度で社会的には人の動きが変化するため、この言い方はしばしば便利である。

なお、*flavie* (朝) , *kaltie* (昼) , *lexie* (夕) , *xelie* (夜) という4分割も広く使われる。

3-13:色

色は「基本色」、「日常色」、「伝統色」、「専門色」に分かれる。

●基本色

最も基本とされる 10 色で、積極的に複合語要素になる。

日本語の基本色は 4 色で、白・黒・赤・青である。茶色は含まれないため、茶色にしか見えない赤味噌を「赤」と呼ぶ。

ふつう複合語を作るときは基本色を用いるので、日本語では茶色でも「赤松」、緑でも「青海苔」という。

信号機を青信号というのも、基本色としての青が緑の範囲もカバーするためである。

この事情はアルカも同じで、ふつう複合語では 10 種の基本色を使って命名する。

基本色：fir (白) ,ver (黒) ,har (赤) ,soret (青) ,diia (緑) ,imel (黄) ,lette (茶) ,kaaf (桃) ,dolf (灰) ,lejemme (紫)。

制アルカの歴史をくんで常にこの順序で並ぶ。英語より 1 色少なく、オレンジがない。

●日常色

日常生活をしていると基本色の 10 では到底足りない。

水色や橙といった色も頻繁に使う。

そこで、こういった色を含めたものを日常色という。

日常色も複合語の要素になれるが、基本色ほどではない。

日常色の数はせいぜい 20 程度と思われる。

頻度が高いため、～nim とわずに nim を略すことも多い。

●伝統色(xistina)

アルバザードには1年366日に1色ずつあてがった366色の伝統色がある。
 これは基本的に複合語要素にはならず、日常生活で頻繁に用いられることもない。
 細かい色を表現するときに使うものであって、ふつうのアルバザード人は一部しか知らない。

●専門色

伝統色を拡張してあらゆる色を表したもの。
 地球でいうとマンセル値や色コードやD I Cで示したものに当たる。
 数が多すぎるため、マンセル値と同じくもはや名前ではなく数値で表される。

●色と感情

色はさまざまな概念に応用される。
 どの国の人間でも赤を暖色と感じるように、色には言語を越えた共通の感覚があるからだ。
 そこでアルカは色と絡めて覚えやすくした概念をいくつか持っている。
 注) この表は本来の色の並び方と異なり、暖色→寒色の順序で並んでいる。

	赤	黄	緑	青
温度	hart 暑い	melt 暖かい	diit 涼しい	sort 寒い
心情	hama 怒った	melna 感動した	diina 穏やかな	sorena 冷静な

●虹

余談だが、虹(espafi)はアルカで4色。赤、黄色、緑、青である。
 太陽は白。
 月は色ごとに異なる名前が付いており、プロトタイプとなる色が存在しない。

3-14:敬語

●敬語 3 種

尊敬語(soksvet)、謙讓語(listvet)、丁寧語(alitvet)の3種が存在する。

・尊敬語

尊敬語は動詞の前に *mist* を付けて示す。

動詞は丁寧形になる。

代詞は敬体を使う。

ti ku tu a non→*halka mist rens tu a meid*.

名詞の前に *mi* を付けると尊敬語になる。

聞き手に対する丁寧さが後述する *an* で、相手に対する敬意が *mi* になる。

従って、*midyussou* と *andyussou* はニュアンスが違う。*midyussou* は話し相手に、*andyussou* は聞き手全体に対する敬意。

miveld と *anveld* も意味が違う。*anveld* は「お酒」という単なる丁寧表現。*miveld* は相手に対する敬意なので、その酒が相手の所有物や製造物であることを暗示する。

同様に *anhekka* は「お手紙」という柔らかな表現で、*mihekka* は相手からの手紙という意味。ちなみに *hekka* 自体がやや子供っぽいので、*mihekka* は妙。*anhekka* は問題ない。

なお、ここでいう相手とは目の前の二人称でなく、話題に上がっている三人称でもよい。

丁寧は対象が聞き手全般に渡るという違いがある。

・謙讓語

代詞の敬体が謙讓語となる。尊敬語と合わせて使う。謙讓語を使うのに尊敬語は使わないのは不自然。

謙讓表現は主に「～させてください」という句で表す。

mir yuus men rens tu で「申し上げる」。ここでは ku でなく rens を使う。

mir yuusat で過去依頼形にすると「～させていただきました」の意味になる。mir yuusat men axt est fiina sala で「代筆をさせていただきました」の意味。

・丁寧語

丁寧語は文末純詞を使う→an(7), aata

名詞の前に an を付けると丁寧語になる。anveld で「お酒」。andyussou で「あなた様」。anvik で「殿方」。

●相対敬語

アルカの敬語は相対敬語で、絶対敬語の韓国語などとは異なる。

家柄の良い娘は父親を尊敬語で freinoa と呼ぶが、人の前では kaan noan と呼ぶ。

アルバザード人は一般に自分でも他人でもそうだが、誰かを貶めることで誰かを持ち上げるというやり方を好まないため、豚児や愚妻などといった謙讓表現は「やりすぎ」と感じて避ける傾向にある。

●動詞

前述のとおり、動詞の前に副詞の mist を置く。

mist luna : いらっしゃる

mist tau : お求めになる

mist を伴う場合、ku は rens になるなど、動詞は丁寧形になる。

mist ku→mist ren : おっしゃる
mist kui→mist xen : 召し上がる
mist sab→mist lein : お召しになる
mist mok→mist xidia : お休みになる

●名詞

本来的に丁寧形を持つ名詞があり、それが丁寧語として使われる。

kaan (父) : freinoan (お父様)
esn (傘) : leeze (お傘)

an や mi を付けることもできるが、あらゆる名詞に付けるのは慥無礼な印象を与える。
単語単体で文を作る場合など、状況に応じて an や mi を使う。

×"halka mist xen anrei anmian?" (お酒を召し上がりますか?) : くだい感じがする

○"anrei?" (お酒で?) : 動詞が欠ける文なので名詞で丁寧さをフォロー

・形容詞

形容詞や副詞に mist や mi は付かない。

●丁寧語の an

・文末純詞

a, e には anna, anne。同様に au, eu は annau, anneu。
eyo は milia は anneyo で yunk は anxii。
na は anam。

それ以外は単に an を付け ansete, ansei, ankok, antisse, antisee のようにする。da, de 類には aata, aano があるので an を付けない。

20 年にクミールが造語。21 年大会議で採用。

an 系純詞の用例をここでまとめて掲載する。

・感動詞

estol 「よろしく」：普通

anestol 「よろしくお願いします」：丁寧語

miestol 「お見知り置きを」：尊敬語

mi を付けると尊敬語。an を付けると丁寧語。

ansoonoyun 「おはようございます」

ansentant 「ありがとうございます」

4:ねこにつき

アルカにはオリジナルの漫画やゲームも存在する。ここではインターネット上のアルカユーザーが制作した漫画『ねこにつき』を例示する。

転校生			魔女裁判
カチャ			
みゅっ？ ね、猫？			
みい			
はい、出席♪ す。座ったあゝあゝ！ しかもなにげに器用！			

四章：小説『夢織』

1:前書き

『夢織』（ゆめおり）は全文アルカで書かれたファンタジー小説である。

舞台は現代アルバザードで、死神の少女紗枝（さえ）が夢喰いと呼ばれる死神たちと戦うというストーリーである。

夢喰いとは、人を絶望に陥れ、その魂を食う死神のことである。

紗枝は夢織という種で、魂を奪う代わりに相手を幸せな夢の世界へ誘う能力を持つ。

2:本文

以下が本文となる。日本語どころか地球の文字や単語はひとつたりとも含まれない。

"հաքճ ֆեյժոն ֆեժն էյ շյ ւո"

ֆեյժոն աբաթոն աւելզ ԼԷ ԼԷՖ ԼԷ Էյ շյ աճոն ֆՅ ԼՅՖ ԻՄ ՇՈ ֆՅՈ. ԼԷ ՇԵյ ֆՅ յԵՇ. յՆՆԻ ԻԱԵՆ, յՈՒՆ ՕԷ ԻԼՇ.

"ԻՖ ԷՖ ԻԼԱԷԼՖ յԵՆ..."

ԼՅ ֆԵՆ ՕՁ Է ԼԷՖ Շ ԼՇԷ ֆԵժՆ. ԻԼՅՖԷԼ յՈԼ ԼԷ ԼԷ ֆԵՄ.

ԻԼՇ ԼՅՅՈՄ ԵՆ ՇՆԼԷԼ ՖԻԼ ԼԻԼԼԸ ԼԷ ՇԻԼ ՇՈ ֆՅ.

"ՆՑ ԼԻԼԷ Էյ ԼՅ ԻՄՅՈՄ ԼԷՖ ԼԷ ԵՆՆԻ ՇՈՒ ԵՄՅՈՑ ՆՇՈՆ ԼՄ ԼՅ ՇՆ ԱԸԼ յԵԼՇ յԻՆԷԼ"

ՇՈՇՈԼ, ֆՇԸ ՇՈ.

"հՅՇՇ... ԼՅ ԷՖ ՆԷ ԵՄՅՈՑ ԽՈՇՅ ՆՄԻ"

ԼԷ ԻՂԷ, ԼՅ ԼՅՅՈԼ յԻ ԵՆՆԷ. ԵՆՆԷ ֆՇԸ յՈԼՇՈՇ ՇՈՆ ֆՅ ԵՆՆԻ. ԷԼ ԼԷՖ ֆՇԸ ՇՈ ԼԵԱ ՄՖՅ. ԼԵՇՇ, ՇՈՇ Է ԵՆՆԷ ֆՇԸ ֆԵՅՅ Է ՌՇՈ ՇԻՇՇ ԼԵՇ ֆԵՅՅ ԵՆՇԻՇՇ ՇՈ ՌԵՄՅ ՄՅ. ՇԸ ԵՅՈ, յՈՆ ԷԼ ՇՆ ԱԸԼ ԵՆ ՇՈՖ Է ԵՆՆԷ.

ԻԼՇ ԽՈՇՇԸ ՇՈՇ ԵՆՆԷԸ Շ ԽԵՇԷԼ ԽՈՆՖ յԵՈՁ ԵՇԻ ԵՆՇԷԼ. ԼՅ ՇՆ ԱԸԼ ՇՈՖ Է ԵՆՆԷ ԱՄՄ ֆԵՅՅ ՇՈՆ ԷԼ ԽՈՇ ԼՇՄ ՇՈՇ ԱԵՇՆԷԼ ԼԻՌ ՇՅՄՅ ֆԵՅՅ Ի ՇԻՇՇ. ԻՂՅՈՆ ԼՅ ՇՆ ԼՇՖ ԱՄՄ ՏԵԼՇ.

ՄԻՆ ԼՅ ՇՅՅՈԸ ՇՈՒՆ ԽԵՆ ԼԷՖ. ԼՅ ԷՖ ԼՇԸ ԱԵԼՆ ֆԻՄՈՒՇՈՒՆ ֆԷԼ ԵՂԵՅ ԽԵՆ յԻԵՅ, ԱՇՆ ԼՅ ՏԵՅՅ յԵՆ ֆՅ ԵՆ ՇԵՄԷԼ ՇՈՆ ԻՖ ԷՖ ԻԼԱԷԼՖ.

ԼՅ ԷՖ ՕԷԼ ԱՌՇՈՆ յԵՇ. ԼՅ ԻԼՅՖ ֆՇԸ ՇԵԼԸ ԽԵՇՇԻ ԵՂՆՇՇ ԼԷ ԽԻԼՖԻԼ. ՖԻԼ ԼՅ յԵՆ ԱԸԼ ֆՅ ՇՖ ԻՖՅ. ԼՅ ՇՅՅՈԸ ԵԷԼ ԼԻՖ ԻՆՇ ԽԵՅ. ԼՅ ԼՅ ՆՅՅ ԵՆ ՇՆ յԵՇՇԻ ԼԷ.

"ԻՄՖԷ, ԼՅ ԷՖ ԻԼԷ Ի ԼԷՖ"

ՇՈ ԻԼՇ ԻՂՇԸ ԼԵՈ ՇԸ ՕՁ, ՇՈՒՆ ԼՆՈՇՇԸ յՈՇՇԷԼ. ԽԵՄ Է ԼԷՖ ՇԸ ՇՅ.

"ԻՓՖՖ ԼՅ ԼԻԼԼԸ ՆՇՈՆ յԵՆ"

ԻԼՇ ՇԸ յՈՇՇՈՒՓ. ԼՅ ԼՅ ԼԷ ԽՅՇԸ ԱՌՆ ԽԵՅ ԱՄՅ ֆՇՇ. յՈՆ ԼՅ ԽՈՂ ԼՇՖՖԼԵՅ ԻԼ. ՖԻԼ ԼՅ ՇՈՒՆ ԵԷԼԸ ԸԼ ԵՆ ԻԼՇ ֆԷԼ ԼԷ ՆՇՅԷԼ.

ԻԼՇ ՏԵՅՅ յԵՆ ֆԷԼ ԱԵՇՈ ԼՅՖ ԽՈՖ ֆՇՅ ՄՅՈԼ ԼՅ ՆԷ ՄԵՇ. ԼՅ ՇՈՒՆ ԵՄԵՅ ԽՅ Ի ԼԷՖ, ՆԻ ՆՇԸ ԵՆՆՈ ֆՇՇՇ յԻՖ յԵԼԵՅ.

"ֆԷ...ֆԵՈՖ"

ԼՅ ֆԵՆ ԼՇԱ Է ՇՈՒՆ, ՌՈՇՇԸ. ԼԷ ԻԼՖՖ ԼԷ ԻՖՅ ԼԷՑ

"ֆԷ ԼՅՌՆ ՄՅՈՒՖ"

ՇՈՒՆ ԱԷԼԸԸ ՖԻԼ ՇՈՒ ԱԸԼ ՇՈՆ ՆԷ ՄԵՇ ՇՆ.

իւլյ օւմբձ շոնք ֆել ուսք.

"օււււ... ֆ յոյ յոճճ"

ւո ֆ, սւո յի քոնոն արսւմ քի ոճ ի ար. սւո Ե իյ ձոյոյ ուոո.

"...I"

իւել, իւլյ ւոյձ ֆ ձել Ե Ե յիւել ֆեւե սք ձոյոյ ուոն Ենֆել, քի, Ենֆել.

ֆեւե ֆելյ ույն շոն իյ. քոն ֆ ույն իւոյ սւո յի քոնոն ւոսե իւսւմ Ե.

ուոն սւելք Եո Եւ. յե Ե Ե Ե յոսոն, Եոձ ֆեւե քքք. յոսոն քի ձմ Ե ֆի Ե ֆեւե,
քի քո Ե իյ, քի քք.

ֆեւե Եւձ ույն ի Ե Ե ուոն յեքել.

իւլյ ւո ֆ, ոն սւ, սւելք իւլյ, քոձ քոյն քոել յոն. ւո ֆ, ֆեւե ինք ֆ, Եելք ի իւլյ.

"ֆ—"

իւլյ Եքք ւոյ ոճել.

Ե ձել Եյ յիւել ֆեւե ու իո. քոն Ե ու իո, քմի ուոն, Ե ու ձոն ֆոյ. Ե քոն յեո... հիւոյ.

Ե յեո ֆել ւոք ոճ ք քո Եո Եել. քոն ֆել ւոք քոել Եոյ քոն քոն, Եո Եել Եյ քոյ քոն
սոյնոն. ֆ Ե Ե ուոնոն Ե ֆեւե ֆոյ.

"ֆ, ֆեւեւեւեւեւեւ"

իւլյ Եո Եք քի սւել յի.

"իւն Եեւե Ե ֆճճ Եո, իւլյ, ք Եո"

Ե Եո քի քոյն շոն Եյ ուն յոյ ու. Ե քոն ոյն Եո ձմ Ե իյոն Ե ուո ձոյել.

Եո Ենք, քոք ք Եելք. ֆի ֆոնքոյք ի ուո, քի ուք ի իւ Ե յե Եյ հոն ի.

Ե ինք Ենք, Եո Եք ք քոն Եոն. քոն քոք Եոել ք ուն Ե ուն ու.

Ե Եոն, իւլյ ձոն ձոնոն Ե ու Ե քի Եոն, քոն ձի իւել.

ֆ Ե Ե իւ Ել իւլյ ոն ու ֆոն քոն. Ե հի Եք իոն յոք Եո. հել սել քոն ոյն Եոն Ենք իւ
յո. ոն քոյն ոն Եոյ Եել. ֆել քոյն Եոն ուն ի սոն Ե իոնոն.

"Եեւե ի ֆ... Եեւե ի ֆ Եք..."

Ե ու իո. Ե յեյ սւո.

Եել... ուել ք... քոնոն. քի, ուել ուել քոն քոն

"սոնոն իո, ոն ձի Ե ուոն ֆեւե Եոն ուն ի Ե Ե ոն ոն"

cn jel lej, aelbec ləny aefli jləlel.

"hecjoo, ɪlcj"

aelbec le ocſcl ɪl ɪlcj jny hɔ ef lcui œl jcɔn fɪpɫef le jɔlj nci leſſe ʎəp ɪ sɪn yən
dcnɔɪɔɪ. jee el scny ucl fə ef ɲɪf ɪz yɔɪ leɪ lə ʎɔɪ ef dɪ ɪlfcɔn fɪlcj.

cn ɪlcj jlcncɪ, dcno cl ɔpɔɪ ɪ lə yən ɔɔɪ nɔə —dcn lə œ leſſebezn nɔɔ dɪzco acen
jcɔn. ɪlcj fəɪ lɔzuelo e fɔɔɪ ɔp cn dɪzco ləɪɪ, lɪllcl jɔɪl lə clɪn ləf nca ʎɔɪ ɔnen ɪul, nɪ
ʎcl nɪl.

"ɔd, jɔɔno, ɪlcj"

vɔɪ le ɪjɔɪɔɪɪ ɪl ɪlcj ʎɔɪ ɔp ɔpɔɪ ef ɔccnɪ œl ɪlfcj. jɔɪ lə sɔfɪf lcui ɪl ɪlcj.

"yoo, ɔccnɔɪ. beɔ ʎcl jcy yən ɔcɫcɫɪf cn ɔcy fɪn. ɔɔɪ nɔɪɔɪ lə jce ʎɔn cny ɪſ"

fɔɪ fə, ɔccnɪ ɔɔſcl ɔɪd fɪlcj ɔɪ nɪl.

"beelo, ɔcɫcɫɪf ef zɪco ɪ, lcca"

ɪlcj en hɪɪ jccɪ jcy ləɔf yənən bɪɔɪ vɔɪ nɪ flə. fɪl lə ləf nɔɪ fə. ʎclj, en jcy hɔf fɔf cny ɔ
jɔɪɔɪ ɔɪf ɪſef fɪn.

"hɔnſ hɪɪ ej fɪə jcy ɔɪfɔ"

"ɪ beɔel, jɪ ɔɔə lelf oeeze"

beɔel ef leɪɲɪ le ləə yɔɪ leɪfɔl.

"hɔɪ"

ɔccnɪ ɪjɔɪl nci ɔɪel œl lcczef. lə ef ɲecyə ɪɔɪ ʎɔɪ ef vɔɪɪ ɪɪɪ ɔɪfɪ ɪɪɪ enfɔ lə
ɪɪɪɪ nɪ delj ɔn fə. fɪcl fɔln fɪn. ɔccnɪ yənən dɪɲfɔ ɔɪɪ fɔln ɪlcj yənən lelf. ɪɪɪɪ ɪɪɪ
ɪlcj, fə ef jɔɪ jɪnse jc ɪjɪn ʎcy len ɔɪ vɔyə ɔɪɲ.

"ləco, fɔɪ ɪɪɪɪ jɔɪjɔz lc leſ"

cn ɪlcj deacl "yɪ" ɔnel, ɔccnɪ ɪɪɪɪ ɔɪɪɪ ɔyə ʎɔɪ cny lcui le ɔclcl deael.

"nee, ɲen cn fə"

ʎə jɔɪ, jɔɪɪɪɪ 1 ɪɲɔ œl ʎclɔ e ɔcy.

"le aelɪn ɪɔɪɪɪɪ ɪɪ leɔez fɔɪ. fɔɪ en cney ɪɪɪɪɪ"

"ed88"

ni ncl fcnli enfo alel cl nel.

"nijl jen ocj ni ncl joi. jol ocj lif fa lebez lui"

ipj jcnjey uepf e joi lif joi ni lebez cn. uapfin ef foip, ilac heln il ilcj oa 1 aelnea. fcj olfej ejf laef oel lcep ol jef feel. la ef ilaef li. jef e uapfin ef vpael fcni 1 uexo e li vni.

lonluapfco ef oape e fael. uapfin jcf ucl cn. yaa liliuf uapfvocn lif auj. lej jiluf uapfvocn luel ef euon. co la jiluf vni, li uapf vo.

hic uapfvocn ef jil. uil ij scnj ucl uapfvocn cn. vni jcf ucl, adl acf e aulifib fin if fca. od, la uapfiv vcl en hiecl. uapfvocn laef ef vpael fcni 1 uapfin le uapf cac cn. fil vni e if uapf jen pavel vpael cac lon 1 jef fcj jec8 vocn laef en enif enoi pavcl, hic. uapfvocn lili fca oiz vni. fil... la uapfiv cac.... fa elj fo jec.

"la vni if vcc e levjey cn i"

levjey vpael laf lebez j lonf iplef jo 1.

"fa ef lonj le la vpael lebez lenin e"

"dolon fel loulelj lonf licnf ef pjelej. fa ef pvelcp vpaoc8"

"h3o, jenlin ea"

uapfin oel lcep if aelcco lonf laej ef vcla. jee la ef vnci vep lif ilcj jca olfi la vpael lebez vod.

acn ilcj acol ela joi e fael, la ni hic ncl o uex 1 fa. yi, fa ef ilvni jol laej cnif hi joi —le oa joi fel ueco oi.

(ipfe, ncn olf il fo 1 laon eip.... ni, le fel uenool lin.... ilac, le uexo if lilj jefe. pe auj, ilcl)

"la en ipufe fejdio fey. nu, co ocj leeuif lebez co fael8"

"le uipainf uci"

"ncuel joi ol vpa8"

"fa if joi vcl fip lajif bepel lonf vccni ipif le vellib"

"—adl iljpc aelif lni alvniy ni pi fey. hui, accn ni nul vni ocj oa on 1 joi zil"

ilcj jcnjcl ijel lonf alvni vpael.

(fee, lcu, faebe fe joi fco fel ueco. ncn cnif lube le lecnej feebe, fclej vpi)

ԵՍ ԲՅՄՈՑ ՈՔԼ ԼԻԱՆՈՒՆ Ե ՏՅ յԵՐ ԼՈՒՆԻԼ. ԽԻԼԵՅ Ե ԱՍԻՐՈՒ. ՏՅՔ ԵՒ ԼԵԲ ԱՍԻՐԶՈՆ. ՅԵԵ ՏՅ ԵՒ յԼՈՒ.
ՄԵՆՈՑ ԵՒ ՍԼՈՒՄ Ծ ԼԵԼՈՒ. ԼՅ ՍԼՈՆ ԼԵՆ, ԵՒԼԵԼԻՆ ՏԻՔԼԵԲ. ԴՅԼՈՑ, ԼՅ ՏԻՆ ԵՒ ՆՈՑ Ե "ԱՐՐՈՒ" ՈՔԼ
ՈՒԼԵԲ ԼՅՏԵՅ ԵՐ ԽՈՒՄ ԻՔ ԼԵՆ ԴՈ ՓՈՏԵ.

(ՍԼԻ, ԼՅ ՏԻՆ ԵՒ ԴՅՅՅ ԵՆ. ՏԻԼ ԸԼ ԲԸԼ ՆՈՆ ՅԵՔ ՎՅՅ, ՅՈՆ ԸԼ ԼՅ ԼԵ ԵՒ ԲԸՅ ՅՈՒ Ի)

"ՅՈՒ, ՆՈՑ ՈՒ ԱԼԵՆԻ ԸԼ ՅԵՔ ՆՈՒ ՅՈՒ ԴԻԵՆ ԼԵՆԵԶ. ՎՅՆ ՆՈՑ ԼՅ ՅՈՆ ՏՅ ԵՐՔ. ԵՐ ՏՅԼԵԼ, ՆՈՑԱԵԼԻՆ Ե
ՏՈՒՔ ԼԵԵԱՄ ԻՆՅՈՅ ԴՈ ԼԵՆԵԶ. ՏԵԼ ՈՒՐՈՆ, ԼՅ ՅՈՒ ՄՅՈՒԵԼ, ՎՅՆ ՏՅ ՈՔ ԱԵՐՆ ՏԵԲ ՅՈՒ ՏԵՔ. ՅՈՆ ՈՒ ՈՒԼ,
ԱԼԵՆԻ ԸԼ. ՎՅՆ ՆՈՑ ԱՐՐ Ի ԱԼԵՆԻ ԱԵՐ ՎՅԼ ՆԵԼ ԼԵՆ ՈՔՐԻ Ծ ԽՈՐՈՒ ԱՐՐՈՒՆ ԼԵԵԱՄ"

ՍԵՅ ԻՔ ԽՈՐՈՒ.

(ՆՈՆՈՒ ԼԵԵԵ ԲԵ ՈՐԻ, ՅՈՆ ՆՈՆ ՅՈՒ ԱԼ ԱՐ ՈՒ...)

ԱՐՐՈՒՆ ԵՆՏ Ե ԽՈՐՈՒ.

(ԱՍՆԻՄ ՆԸԼ ՆՈՆ ԵԼԱՄ ԽՅՅ, ԵՆ ՍԼԻՄ ՏԻՔ. ԼԸԼԽԵ ՆՈՆ)

ԽԻՐՈՒՐՈՒ ՈՔԵՆ Դ ՆՈՒ ԼԸԼԵ ԼԸԼ ՏԵՔՈՒ. ՏՅ ԵՒ ՆԸԼ ԼԵՆ ԽԻՐԸ Ծ ԼՈՒՆ, ԱՅԼ ԼՈՒՆ. ԼԵՐՆ, ՍԵՅ ՅՈՒ
ԴՈՑ ԴՈ ՈՔԸ. ՏԻԼ ԼՅՅ ԴՈՑ ԸՈՒՄ ԱԵԼԵԶ ԵՐ ԱՅ ՆՈՆ ԱՐՆԻ Ե ՈՔԸ ԵՅ ԵՅՅ ԲՈՆ ՆԸԼ ՅԵ Ե ՏՅԼԵԼ.

ԵՐ ՍԵՅ ՈՐՔ ԸՈՒ, ԼՈՒ ՏԵՅԼԸԼ ԵՒ ԽԵԼԵԼ.

"ԼԵ ԻՒ ՅՈՒ ԼՈՒԼ ՅԵՐ Ի"

"ԼԵ ԵՒ ԲՅՏ"

"ԽԵԼ, ՅՈՒ ԵՐԵՆ ԱՍԻՔ. ԱՐՐՈՒՄ ԵՒ ՅԵՆԸՆ ՅԵՐ"

"ՏԵՅՅ ԱՐՐ Խ..."

ՍԵՅ ԸԼՆՈՒ Ի ԼՅ ԴՈՒՄ ԲԸԼ ԵԸ ԱՐՐ ԴՈՒ.

"ՏՅ ԵՒ ՅԵՆ ԸՆ ԼԸԼ ՈՔՐ ԼԵԼ ՅՈՆ ԵՒ ԽՈՒԼ ԵՒՆԻ"

ՏԻԼ ՍԵՅ ԸԼՆ ՅԵՆ ՎՅՅ ՆՈՆ ՈՒ ՆՈՒ.

"ՈՐՐՈՒ, ԼՈՒ, ԲԵ ԱԵՐ ԼՅ Ի. ԼՅ ՈՒ ՆՈՒ ԱԵՐ ՆԸԼ ԼԸԼ ԼԵՆԵԶ ԵՐ ՏՅԼԵԼ"

"ԱՍՄ, ԱՍՄ. ՏԻԼ ՏՅՅԵ ԵՒ ՅԼ ՎՅՆ ԼԸԼ ՆՈՐՐ ԴՈՒՆՏ ԼՅ ԲՈՆ ՏՅ, ՆՈՐՐՈՒՏ"

"ՅՈՆ ՏՅՏ ԸԼԱՐ ՅՈՆ ԵՒ ԽՈՒԼ ԼՈՒՆ ԻՅՏ ՆՈՆ ՅԵՔ ԱՐՐ ԻՐՐԻՄ ԵՆԵ ՅՆԵՆ ՏՅ. ՏԻԼ ԱՐՐ ԽՈՒԼ ԻՅ ԵՐԵՆ ՏՅ
ԱՐՐԵ"

"ՎՅՅ ՏԵՅՅ ՅԵՆ ՏՅ. ՆՈՆ ՅՐԱԵՆ ՈՔԼ ԵՐՈՆ Ե ՎՅՅՈՒ ԲՈՒԼԵՅ ԱՐՐ ԵՐ ՏՅՔ, ԱՅԼ ԸԼԵԼ ՅԵՆԻՄ ՈՐՐՈՒՆ
ԽՈՒԼ. ՏԻԼ ԽՅՅ ՅԵՆԻՄ ԵՆ ԸԼ. ԸՆՈՒ ԴՈՒՆՏ"

"ԽՈՒԼ ԼԵ ԱՍԼ... ԽՅՆ, ԼԸԼ ԵՐՈՒ, ԲՅ ԻՅ ԵՒ ՅԼ ԼԵԼ ԸՆ ԼՅԱՄ ՅԵՆ ՏԻՆ ՅՈ ԲՈՒՄ ԵՆԸ"

"հոռ. մյյո, ոռո սւյյ ԷԼԼ ԼԵԼԵԵ"

ԻԼԵ ԼՅ ԲԻ ԲԻ ԵԵԲԵԼ, ԼԻՈ ՖԵՐՆ ԷՖԷԼ. ԵԵ ԴՅԵՐ ԺՅԵ ԼԵՈ ԲԵՆԵ ԵԵԲ ԵՆ ՖԵԵ ԻԼԵ.

ԻԼԵ ԼՅ ԼԵԲԵԶ ԼԵ ԼԻԼ Ե ԵՈՒԹ. ՅՈՒ ԼԵՍԻ Ծ ԲԵԵՆՈՒ, ԼԻՅ ԼՅՈՒ ՍՈՒ ԼԵ ԱԷԼ ԴՈ ԼԵԺՈ ԼՈՒՈ ԱԼՅՈՒԵԵ ԼԵՐ.
ԵՈՒ ԻԼԵ, Ի ԲՈՒՈ ԼՅՈՒԵ ԵԵՆԵԶ. ԱԼԼՈՒՈ ՍԵՐ Ծ ԵԵԵ ԵՅԷԼ ԴՈՒԼԵ ԾՈՒԼ ԵՆԵ ԼԷԼՖԵ ՕՈՈՈ, ԱՅԼ ԲՈՒՈ
ԱԵԼԼԵԼԵՈ ԼԵ ՍԵԵ ԴԼԵԼ ԵՆ ԼԵԼ ԶԵԼԼԵԼ. ՈՒՓԵԵՈՒ ՕՈՒԼ ՕՈ.

"ԼԻՅԵ, ՖԻՓ ԼՅՈՒԵ ՍՈՈԷԼ Ե"

"...ԿԻ"

ԼԵԼ ԻԼԼԵՈՒ ՕՈՒԼ, ԼՅ ՈՒՓԵԵՈՒ ԺԵԱԺԻ ԲԵՆԵ ԱԵՆԵԼ. ՖԵԵ, ԻԼԼԵՈՒ ԻԼԼ ԿՈՒ ԻՐՈՒ ՍԵԵՆԵԼ. ԼՅ ԲԵԵԿՓՅ ԼՅԼ
ԼՅ ԴՈՒՅԼ ԻԼԵԼ.

ԵԼԵՅՈՒՈ ԻԼԵԵ, ԼԵՍՈՒ Ծ ԵԵՈՒ ԼԵՍԻ, ԻՆԶՅՈՒՈ Ծ ԲԵԵԼԵՈ ԲԵԵՆՈՒ, ԼԵՍՈՒՈ Ծ ԼԵԵԼՖԵԶՅՈՒՈՒՈ ԼԻՅԵ, ԱՅԼ
ԴԼԼԼԼԼԼ Ծ ԲՅՈՒՈՖԵԶՅՈՒՈՒՈ ԲԵՆՈՒՒ — ԼՅ ԷԼ ԺԻ ԱԵԵՆՈՒ ՕՈ. ՅՈՒ ? ԲԵԵ ՕԷԼ ԲԵՆԱԷԼԻՈՒ, ԼԵՆՈՒԼ, ԵՈՒ ԼԵԵՆԵԵ
ԴՅԼ — ԺԵՆ ԵՆ ԼԵՆՈՒ ԾՈՒ ՈՒԱԷ — ԵՆԼՅ ԼՅՅ ԼԵՐ ԵՆ ԼՈՒԼ ԼՅԺ ԴՈ ԵԶԷԼ.

"ԼՅԵԺ, ՖԻՓ ԻԼ ԺԻՅԵ ԾՈՒ ԼԵ ՍԵ—ԵՈՒՈՈՈ"

ԼԵՆԼ ԵԵՐ ԵՅԼԼԼ ԼԵՈ ԲԵՆԵ ԴՅՈՒՈ ԱՅԼՅՅ ԻՆԼԵ. ՖԻԼ ԼՅ ԷԼ ԵՈՒՅԼ. ԼՅ ՈՒՈՈ ԵՆ ԷԵԵ ԼՅ ԷԼ ՈՒԵԵ.
ՍԷԼԵԼ ԻԼԵԵ ԵՐ ԼՅ ԼԵԼ ԼԵԵՍԵՐ ԵԵԵԿՓՅ ԲՈՒՆԵԼ ԵՆՅ ԱՒԲՈՒՈՒՈՒՈ ԴՈՒՈ ԼԵՐՅՈՒ. ԵՆ ԲՅԼԵ ԻՅԼ, ԼԵ ԲԵԵԵՅԼ ԼՅՈՒ
ՍՈՒ ԼՅ ԼՈՒԵՈ.

ԻԼԵ ԴԻԺ ՖԵԷԼ ԴՅՅԵԼԵԵԵ ԼԵ ԼԵԵՐ ԼՍՍ ԱՅՐՖԻԼ ԴՈ. ՈՒՓ ԴՅԵ ԲՅԱԷԼ.

"ԵՆ ՈՒ... ՍԵԲՅ"

"...ԻԼԵԵ"

"ՅԼԼԻ ԴՅԵՆ, ԲԵՆ ԵՆՈ "ԵԵ" Ե ԼՅ Ե ԺՅԻ ԺԻՅԵ, ԼՅԼԼ ԼԵԼԼ Ե"

"ԼԵԿՓ. ԼՅՅ ԼԵԼԼ ԻՅԵԼ"

ԱՅԼ ԺԵՈՒ, ԼՅՅ Ե ԼՅԼԼԼԼ ԵԵԵԼ.

"ԻՐՅՅՅ"

ԼՅՈՒՈՈՈ ԱԷԼ ԼՅՈՒ ԼԵՐՅՅԵ, ԲԵՆՈՒՒ ԺԻ ԼՅՈՒ ԼԻԼ.

"ՈՒ ԿԻՅ ԾՈՒ ԱԷԼՅ ԼՈՒՈ"

"ԼՅՅԵ ԷԼ ԼԵԷ ԼԻԼԼՈՒ ԱԼԵՆԵԼ, ԻԼԵ ԼԵԵԵ"

"ԼԵՐ ԼՅՅԵ ԷԼ ԼԵԷ Ե ԼԻՈ ԼԵ ԼԵՐ ՍՍՍ Ե"

"dijji dijji. jon ney uin lefl i fol, ilcj"

lc ipej uec lefl lecn, ilcj lilcl ad noyjel huj ela hijfel, donal sc oicvel. jee la acly lef
loni jecn. don laej cn ilcj deael, fil ufa ipe uin jinse i la.

"hujin... noi fap dcdob nonni"

cl helej le jooi cn. leo peny, loni jecn oclic enfel.

"...loj lccf bepel uonoc8"

cl nuen ilcj oclic i peny e dccni. jee laej fclcl led, leeucl lebez. fil uip dea nua, ilcj
lilcl jc vejlelel.

"denf, lelej pen loj ji non"

"uu uii"

don ilcj fcl nuery on juu i lebez uejel vcl uecn e folcl, fel fa volj adnc lomi vejle fcl.
iljon ilcj nil ncl uipf co jilcl le li dal lebez. ui, le vomi ej lino aped le lefj li, co ilcj
hobcl odc.

"—i"

fil fa ae donci —jie oel uonl e lonjicv li. jinse el'nooy vep, fel lono la ovej lefj lon li
aea o acp.

jie eelcl i ad, cnjel ilcj lon cnj uep. ilcj cl hono vcl en li llaef hof fel olvi o lilfe fin.
oel ef puoj fid, la ef lmf pil oi. jcy oizen ejf laef, accl le ucl jecn jccni, eel ml o liaf...
cl ucl lonj noj ef vomi lmf. fil el jep fa jec, lel accne lmf pil volj el ni ued. jee fa flaa
cfen fevj ucenej lilfe laef.

"fya... loj ifa8 fa ef iplafen fcyje"

"3D..."

looacl, jie ni lef delj cn. jee leo volfi, la pil ilcj, leeucl ifa jcn.

"...if jenicv e lcep lccz eya8"

co la pulcl il edn, jie dc eb videl li. ilcj la lef filel, leclalal dccni jca.

"...lil lclle. injel ef la ne8"

fa ef yeu li e dccni co ilcj elil joo cben fap. lcuu fin fclcy dal lonf euej li j zco.

"hī ej hī hī ōpāunf ī. ʔn ī lēp hū ōunī"

"fē lēp. ōcū ʔn ī jōū ē"

fēp fā, hīpōc ʔacē fēp hīlējel.

"jōn fē jōū fēf—"

"—uecō alenzel, dcū uōēn. ōccū ʔccū, īp ōcū uellōū ē"

"fēf hīhī hīn acē hī ʔīlcīḡ"

ʔccū uunī fēl pēnōc dēlj. lēl hīlcīn hīpēf, lē jcn hīc ʔūfō ēnē. hīl hīl īlcj lē jēp fā ef ʔāf uecō, hīl ē jīe ef jūf fōhī ōī.

c hōcōfē vēl, lēj hōp ī hīlzy vclā lē bēpēl hī hōn hōd. dāf hīl hīlī hī. cō jōī vēlīl, hōd cōfēn lēp lēf hīlī ōī. hīcē fāp ef pāēs, hīpā ʔāē jīcēf ef jēpūpī. īlcj hīn hōnf nēī ōī ʔōc. lē hīd fēel jēlōf nōō nōj.

"dījōḡ nēī ī ōēp"

"ʔpāḡ dījū dījū, fāēbē ef lēf"

"pē nā ōēp ī"

jēe lēuī lēfāclēl āelēl fīlcj ēnfō lē cī pīe ʔn hūn.

"hō— dāf hōdī" dāf hōd fējēēēēl"

uēllēl fējēfēl. hīl lēuī jēl lē vēpēl.

"hūū, hīpōcn hīpōcn, lēnōn nū pēcī nūnnūḡ lēō īlcīn ē, lēō īlcīn ēēē. hīpā lēnōn āīl lēcēf īlēl nōnnōl"

"ōī fāē hīn ʔā hīlō īmōz, jclālēfō"

"fōī ḡḡ nūcō ḡḡ"

"āōī āōī, fē ēp lēf ʔn jēlīn lēl īpūnūmūn"

hānūn ʔōncēl āelīn hīffēl.

"dāddā, jōī hīcēf ef ōīz ī hījū hūā ʔāēlcī"

hōd hōcēl vclā. cōf īfā, bēpēl vōlj 10 āec ūcī. sīn ʔp uēllēl vēp. ūp hīnḡēlīn lē ʔān ūōlīn, lēj lēnūl lēpū ōēl bēpēl. cīl cāc ʔnf ēlēf ef lēcācl ōīz ējī. vēā nūā lēpō āc ʔp vēf c hīl hī, īlācī hīc ʔ dōd cī nōl jū lēj. jēe pīl fā, lēcz hīn hī.

"jīcclī pēnjīf fā ef lēlā vcl dōlēf īp ālēn J hēlī lē lējēf fēp"

"ocno ɔpaen if ɣuf ɪ. hɪjfel ɪlɪ jeɪɪ", feel sɪt lɔn lɪj.

"lɪt jen, fcl ɣcɪ bezef tɔen"

"fei ɣɔɪ, ɣɔn ɪl dæθ ɔcɔf hɪjfel ɪ, ɟ lɪjɔc, bɪz 'ɪ-ɟ', lɪlcl ɪlcj ocnf. "nɪ, clɔɪjɔ ɪɟ fɔɔɪcɟ"
"fe, feɔ. clɔɪjɔ e"

ɔt fə, ælnɔɪ ləni tɔe, ɪlcu ɪlcj. fɪl ɪlcj ɲəl "ɪ ɣɪ" fɔj deael. lɔnf neɣ jel, ælnɔɪ cl apɔt ɪ
jɔnɔc, lɔɔl lɔf cl ɪjel ɪnl. ɣəl lə, ɪlcj acɪj leɔ jelej.

ɲɪ zɔl e tɔleɔɣə le uel aɪlej, jɪe ɲɪlcj lɪnɔej cl le ɪlnɪf lɪnf le jɪbeɣ ɣɪn uɔɣ.

"lɔcɔe ɪn ləɔccnel lɪləlef nɪn. dɪæf, nee ɪ lɔccne ɣɔnɟ"

"e leɔɔɟɟ ɪlcj feə ɲɔɲɔɔ ɣəɔɔl e. ocno ɲɔlef dɔɔɲ nɪnnɪ ɣəl aɪn ɪɣɔɪlec, en fɔɪjɔn ɪfə
lɪnɪ ɔt nɔf ɪ fə ɲɔ lɔnɔɪ, ɟ lɪnɔɔ"

jee apelle deacl "ɪ, hel" lɔnf ɣəɣ nɔɪ acɪ ɔnf ɔɣac ɔɪn nɔj, lɔnf jɪen ef ɪɣɪncɪ uɔɣ
bɪlfɪl.

"hɪc, eɣ fɔ lef clɪl ɪ. ɪ ef ɔn ɪ le uɔcɟɟ"

"aɪfcn feə lɔɔɣ aɔɣɪfɪ ɲɪ ez fɪɣɪfɟjɔn acen lə ɪf tɔc e leɲjɔn. ɣəni ɲɪ ɪɣɪf ef ɲɔcl ɔn"

"ɪlac, le ef dɪ ɲuelɪnfɟ"

jɪe ɔclcl jeeɣel.

"ælnɔc ɔc ɔɔɪnɔ ɪl ɪtel ɣəl le fe ɣɔɔɪ fɪf uɔcɟ. ɪl, fə ef fɔɪ. fɪf uɔc fɔj ef fɪd ɔn ɣɔn ef en
ɲel fɪf ɲuelɪnf e"

fɔɣ fə, lɪnɔɔ hɪcɔcl.

"ɣɔɪ, tɪn ɲɪn ɲɪlɔ fɔj jɔɣ fɪln fɪuelɪnf enɪ ɔɣocn"

"lɪt tɔc. cl nɪ fɔɔ ɲuelɪnf dɔɔ jelej e aɔɣɪn ɪl ɪɣɔɪl e", ɲɪdl acɪ ɔ ɔɔɔ. "ocno, ɲɔlef acɪ ɪl
acno cɪn"

"ɣɔn ɪn fɪb ɪl ɔn ɪ aɔɣɪn, lɔɔɣ nɪ"

"ɣɪ... fɪf..."

eɪf ocnf uɔcɟ. jee lə ɔelacɪ lɪnɔɔ.

"fɟɟ"

"fəbe ef ɲɣəlɪlɪ aəɔ e, lel ɪlcj ɣɔɔ ef ɔn ɪ le uɔcɟ"

"հաքճ ֆի... ԵՆ յԵՐՈՍՆ ԴՆՃ"

յԵ ԻԼՈՒՈՒՈ ԵՆՖԵԼ.

"ԿՅՈՒ յՇՇՈՒ ԱՇՇՈՒ ՖԵՅ ՈՒԼԵՖ ԼԻՇՆԻ ԼՇՈՒՈ, Ե ՖԵՐՈՒՖ ԼԵՍ ՇՈ ԼԻՍՈՒՇՈՒ ԲՈՒ"

"յՈՒ Լ.....յՇՈ ՍԻ Եյ ՖԵ ԵՆ ՈՒՖ ԲՈՒ յԻ յՇԼԻՃ"

ՉԻ ԵԼԵՖ ԼՇՇՇ, յԵ ՉԻ ԾԿՅՈ ՇԻ ՄՈՒ Ե ԼԻՍՈՒՇՈ.

"ԾՇՃ ԿՅՈՒ ՈՒՖ ԲՈՒ յՈՒԵԼ ԼՇՈՒՈՃ"

"յՇ...յՇՈ ԼԻ"

"ԼԻՍՈՒՇՈ...Ճ ԾՇԵ—"

"ՉԻՈ ՉԻՈ..... յԻ, ԻՆ ՖԻԲ ԴԵ ՖԵԼ ՉՈՆԵՆ ՍԵՇՈ"

ԴՆՃ յՈՒ, ԼԻՍՈՒՇՈ ԻԼԵՂՉԻ ՈՅ Յ ԿԵԼՈ ՍԵՐյՈՐԵՖ, ԼԵՍՉԻ ԻՖՅ ԼՅՈՒ.

"nee, fup ləniŋ cf ɪɔ, 8 jɪe lccz. fup ɪf ælɪn e lɪzɪ ɪlf jefes"

"ɥɪ, ɔcl ɥəni ɪf ɔclɪn"

"len. ɥɪn cf ɪɔ8"

"ləfɪ..."

"ɪ len8 nɔn nɪf jɔɪ fɛl ɔɪɔ fəɪn e. fɛf fup ɛf ɪɪɪ fɛn ɪɪ ɪɥɔɪɛc fɛɥ. hɪc, nɔn nɪ nɔɔ ɪ fup. ləfɪ... fɛə ɔɔɥɪɪ e ɥɔɔɔɔ ləfɪ. nɔn ɪɔɥ lɪn ɔɪɛs..."

"jɔɪɛ el ɥɛɪɥ ɥəni fɛɪ ɔɪɛ e fɔɪɛc lɪɪɪɪ. jɛɛ lɛ ɪɔɪ ɔɥɔɛ ɔz ɔz ɔz lɛɔɔɔ. lɔɔ ɔɔɛ nɪ jɪɪ ɔɔɔɔɔ ɪ"

ləəɥ ləɪɪɪ ɔɔɔɔ e ɔɔɪ ɛɪnɛn ɥɛɛɥ. ɥɪn ləəɥ ləɪ ɛɪn ɥɛɛɥ. ɔɪnɪɪɪ lɛf hɪn ɔɥɔɪ ɪɥɔɪɔɪɔɪ fɛɪ ɥɛɛɥ ɔɪ ɛɥɛɛ.

ɪɪɥ hɛɪɔɔɪɪ jɪe ɔɪn ɛn ɔɪɥɥ jɔɔɪ lə. jɪe fɛɪ jɥɥ ɔɥɥ. ɪɪɪɪɪɪɪ ɥɪɔɪ, lə ɛf lɛɪn ɪɪɪ ɔn. lə ɪɪɔɪɔ jɥ ɛɪɪɪ, ɔɔɔɔɔ ləf fɛɪ ɛɪɪɪ ɥɛɪɪ. lə fɛɪ ɔɪɔɔɔ lɛs, ɛf lɛɪɪ. ɥɪ, lə ɛf lɛs ɪɪɪ fɔɪɥ ɔn.

lə ɛɪɥɥ jɪɪɪɪ, hɪɥfɛɥ fə. jɛɛ lə jɔɪɪɥɥ lɛɔɔɪ. ɪɥfɪɔɪ ɔɔɔɔɔ ɔɪ. ɪɥɔɔɔ e lɛɔɥɥ ɛf lɛɛɪ ɔɪz ɔɔɔ ɥəɪɪ. ɪɥɛɥ ɪɔɥɔɪɪ fɪɥɔɪɔɪɔɪ. fə ɛf ləɪ lɛɪ lə ɪɪɫɥɥ ɛn fɪɪɪɪɪɥɥ lɛɔɔ fɛf ɔɔɪɥɥ ɔɥɥə ɔɪ.

hɪc, ɪɪɪɪɪ ɔɪnɛɪ ɛɛɪ e jɪe, ɛɪ lə jɛn lə ɛf ɪɪɪɪ fɛn. jɪɪ, ɔɔɔɔɔ ɛf ɪɪɪɪ ɥəɪ ɔɪɥɥɥ, ɛf ɪɪɪɪ ɪɔɪɪɪ ɔ ɔɥɥɥɥ. ɔɪɪɪɪɪ ɥɪɔɪ, lə ɛf ɥɪɪɪɪ ɪɪ. ɪɪɪ, ɛɪ lə jɛn jɪe ɛf ɪɪɪɪ ɥəɪ fɛɥfɛɪɪ. lə ɛf ɪɪɪ ɔɪ ɪɪɪɪɪ lɛɪ ɥəɪɪɪ ɔɔɔɔɔ. lɛɪɪ, fəəɔɔ ɛɪɪɪ ɥəɪɪɪɪɪ ɥəɪɪɪɪɪ jɪe ɪɛɛɪɪɪ.

(fəəɔɔ ɛf ɪɥɪɪ lɛɪ nɔn ɛɪɪɪ lə fɛɪ ɪɪɪɪ jɔɪ...)

ɪɪɥɥ ɪɪɪɪɪɪ.

(lə nɪɔ ɔɥɥ ɪɪɪɪɪɪ ɛɪɪɪɪ ɔɥɥ ɔɔɔɔ ɪɪɪ. ɔɔɪ lə lɛɪɪ ɛn nɪɔ nɪɪ jɪɪ sɪɪ ɪɔɪɪɪ lɛn jɛɪɪɪ. nɔɔ nɔɔ...)

hɪc, jɪe lə ɥəə ɔɪ ɪɪɥɥ lə ɥəə. ɔɔ fəɥɥ, ɪɪɥɥ ɔɪɥɥɪɪ lɛɥ ɔɔɔɔɔ ɪəf. lə ɪɪɪ jɛn ɛɔɪ ɪɪ. ɔɔɔɔ fə ɛf ɪɪɪɪ lɛɪ ɛɪ ɪɪɪ ɪɪɪɪ ɪɪɪɪ jɪe. ɪɪɪ ɪɪɪɪɪ, ɪɪɥɥ ɛn nɪɪ ɔɪɪɪɥɥ ɪ fə.

"nee, fup lə fə ɔɪɪ ɪɛɔɔ e lɛɪɪɪ, jɪe lccz8"

ɪɪɥɥ fəɪɪ fɛɔɔ ɥɔɔɔɪ ɪɪɪɪ ɔɪɪɪɪ ɛɪɪɪ e jɪe. ɪɪɪ lə ɪɪɪɪɪ ɛɪɪɪ ɥəɪɪɪɪ nɪɥɥɥɪ.

"ɛn jɔɔɔɔ fɛɪ ɪɛɔɔɔ ɪɪɪɪ8"

"ɪ... ɥɪ ɔɪɪ, fup jɥɥ, ɔɔɔɔɔɥɥ fɥɥ ɛf... zɪɪ jɛfɛ8 ɪɪɪ ɔɔɔ ɥɛɪɪɪɪɪ lɛ ɛf lɛɪɪ ɪɛɔɔɔ ɥəɪ ɪɔɪɪ ɪɪ"

"ɪɔɪɪ... ɥəɪɪ ɔɪɪ e...", ɥɛfɪɪɪ ɔɥɥ.

"jɔɪ", ɪɪɥɥ ɔɥɥɪɪ ɥəɪɪɪ ɔɪɪ fɛɔɔ lɛ nɔɥ fəɪ ɔɔɔ. "ɛɥ fup ɪɪɪ lɪɪɪɪɪ ɔɔɔ ɪɪɪɪɪ8"

jee jne ləbcl ləo ləo lıj.
 "fə fe zil,8 lel en dɛc lənoɪ ɪfə, fɪcl ɸəl lɛɔɪ ıj"
 jne hclɛncɪ ılcj ɔɪ ɪnoɪ ɪno.
 "ɔno fə ef zil ɪɪf en dɛc fɛf... ɸəæf...8"
 "...ed8"
 ɸɛɸə əucl ɪj cə ı ɪnoɪ lənoɪ cɪn ɔɪ.
 "lɛɔɪ e ɪnoɪ cə jɛ jccɸə nɸı..."
 "ı...ıɪac, fɸə jccɪno ɪnoɪ8"
 "le ɪɪf fə "ænoɪ" le ælcɛ ıɸıf jɛ ɸıf fccɪno ɪcnoɪ".
 "ı...ı", noɪ jɛel ɪəucl əccɛf cə fə ənoɪ. "ɪnoɪ, noɪ nıjɪcl e. ıljɔn fɸə ɪɪf lɛɔɪ ɔ beɸel
 jɛfɛɪ"
 "ıɸ jcl nıɪɛf cə ɪcəno fɪnoɪɸ8"
 "ɸıɪ" ɸıɪ ɪı jɪnoɪclıɪ fccjɛ"
 "jccɸəɪ", ɔɪ ɔcɪ cə jı sɪɪ. "ɸəno fɛɸ le ıɪæfɛɪ e"
 fɛɸ fə, ılcj ɪıfcl ɸəno ɪɪɪɪɪ ɪno jɛɸcl ɪə əɛ ɔn ı le uɛɛɪ. ɪə jɛɸ əjɛ e ɪɪɪ ıj. ɔɪɪı ınoɪ, ɪə
 ef ɸəæf ɪnoɪ fɛɸ.
 "jee ləno ɪccɪɪɪɪɪ noɪ, jne. ɔɪf əno fɸə ıɪ cl e"
 "ɔɪɪ", ənoɪ cɪjɸɛɛɪ. "fɛf... noɪno ɛɪɪ fɛɸ nɸı"
 ılcj bclcl ɪj, ɪɪf ɪə ı ɪcɪɪɪɪɪ ɪnoɪɪə "clɪjɪjɪ. fə nıɪɪɪɪ ɸcɪ ɸəæf ɪnoɪ8".

 ɪccɪno nɛɪcl ənoɪcɪ cə ılcj ɪɪɪɪɪ jne ı jɛɪjɛz ɛnoɪ cɪ ınoɪɪ ɪcæɪ. jee ɪə cl əɸɪɪ ıɪ ılcj,
 fccɪɪɪɪ.
 "əɛɪ, ɪıı əj ɪıɪɪɪ ɪı ıfə e"
 "ɪnoɪ ıɸıf əuclɪɪɪɪ fccjɛ. fccɪ ɪı ef ɸəæf ɪnoɪno əɛ"
 "ɸəæf8"
 fɛɸ fə, ɪcɪı jccɪɪɪ ıjɪɪ ı jne.
 "jɔn ɔɸæno ɪɪɪɪɪ əno fccɪ ı, jne jno. ɪɪɪı, ɸɛno fɛɸ ɪɪɪ ɔɸænoɪ. ɪcɸə,8 ıjɪɪɪɪ"
 jee ıjɪɪɪ cclcl ɔɪ "əɪɪ ɪɪɪ8".
 "ɪə jccɪnoɪ ɛɪ "ænoɪ" cə ɪnoɪnoɪ fɛɸ"
 "ɪıɸə", ıɸcl ɪɪɪɪɪɪ ıno fəɪ. "ɪnoɪ ɪccɪ ænoɪcl ı, ənoɪɪ cl"

jee penoc dcól jicl i jie.

lc lefl, jie lrimól ól elef acpfe hlcj, lál "fá jej jccpá e" ól dromd.

"aelce lál ois i pæaf enfo væj læm fey lefls"

"en lál i. fil fe el'óljocó ópamf"

"lób leni ni nio æcni e"

"jrai jein hooó lefl jro alenzel"

"bæ fin jej oaf, lnlí"

"hóelci lóó e lianin pínlel8"

fey fá, jie pól jroó ól "uólél". olcj jca en acl en jie —fcl rccni en. læ jcnj ela elef nccf i læ lilel. le lil jnól lulf læ en.

"nee, ej lcin jccnif en nilef dólón8 on fo uól8"

læ jroól væn ocjil li. fil jie deacl jólfi ijlel.

"hijfel e. hio, æ bec ef il i vølen. fel fá fe cl. vøn jccni lulf lød ælcil"

fá ef lóó lel en rccni fel rli jroó jcnjcl elef nio i fá jólfi.

"vi, vøn hól pof elól ef røcporfc"

"jooónó, ljroccnif ocj fáj inl il"

lónf uepl, lcu bípino lcf alél læf. fel'ljroó fól lj læf'lon inóz ól "fæbe ef hcoijc lulf nøcji lcnól".

"iøf'ljroó, biz 'f'f"

"bunsc nioó jo lóbelc nijclá hulin oifá vøbc lili ocilí fio"

"æn aóna lon nioçle le øep lóle ucl øej joi hól Øø ii, vøc vøc, enfo øep alól ucl en zón i. jie cl, læc le lccf hæl ól lejvø i"

penoc hiczól ól lidl. "oec oec ælin, fe lilej alónfj lænup8"

"ælin icl lcp jroó inpooó, lnlí. jie fe fin le um'ól8 penoc"

"i, denf. roó fel ueno i"

"nijl, lnlí. lób lccí leeu um j jilí e. moóou"

"vi, leflí"

en leeu rcleeyvø, acin ólen ælj ilcucl il olcj jca.

"effiui"

fə ef aelnoi u. aelj felaccne fəp lcj hi 1 aelnoi oel lcep.

"lclcj ʎəp ɪbʂ", lillcl jie. "oiʎ ɔnɔci lɪn"

"ʌʌ, fəəbe ef lclle e. lə ef jie jɪfcj fəə ʎəjɔɔɔ lenɪn. jee lenɪ ɪʎ ʎe aɪn ʎi ʎɪʎɪɪ uci"

"nɔn fɪn ʎəp alenʂʂ" ɔɪ cɪɪ alcl.

"ɔɪ fɪə ɔɔ jɛn ɪʎf e"

"lccɔɔɔɔ" ɔɪ ɔɔɔɔɔ cɔɪ.

"hiɔ effi, ɔɔ... ɔɪ ɔɔɔɔɔ lɪnʂ"

"əəə, ʎi fəp ɔɔɔɔ"

"fee, ɛn əəə fɔjje. fɔɔ nɔn ɪɪɪɪf eɪ ʎe ɔɔc ɔc ɪfə ɪn"

"ɪɪ ɪɪ", ɔɔɔɔɔ nɔɪ ləəf nccfel.

ɔɔɔɔ ɔɔf ɔɔɔɔ ɔɔnɔɔ 1 aelnoi ʎɔnɔ ɪʎj.

"1 hel, lɔɔɪ, nɔn ɔɔf aɪn ʎɔɔɔ ɪɪɪ 1 fɪə cɔ fə ɔəɔɔe e"

"ɔɔ, ɔɔɔ ɔɔɔɔɔ fɔɔɔ 1. ɪɪ, lɔɔɔ"

leeu aefɪ, ɪʎj ɔɔə ləəɪf 1 aleə, ʎɪʎɪɪ ɔɔɔɔ. jee ləəɪ ɪʎɔɔɔ ʎi lɔɔɔɔɔ ɔɔɔ 1 ɔɔɔ uci. jee ʎe fə, ləəɪ ʎɔf ʎe ɪfə ɔɔɔ ɔɔɔ ʎɔɔ ʎɔɔɔ ʎɔɔ. ɪfə ef ɔɔcɔn ɔɔɔɔ ɔɔɔ aelɪn ɔɔcɔn cɔ fəə.

ɔɪ ɔɔɔɔ ɔɔɔn ɔɔɔ ɔɔɔɔɔ, ɪʎj ɔɔɔɔɔ ɔɔɔɔ ʎe ɔɔɔ ɔɔɔɔɔ ɪɪ. lə ɔɔɔɔɔ ɪʎj ɔɔə ɔɔɔɔɔ cɔ, ɔɔɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔɔ ʎe ʎɔɔ ɔɔɔɔ.

"hih, fɪə ʎɔn ʎɔf alen ɔɪ lenɪ e, ɔɔe"

"ɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔɔɔɔ... ɔɔɔɔ ɔɔ ʎɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔ ɔɔɔɔɔ e..."

fəp fə, ɪʎj ʎɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔ, ɔɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔ ʎə.

"ɔɔɔɔ ʎə, fɔɔ ɔɔɔ fɪɪ ɔɔɔ ɔɔɔ e. ɔɔɔ nɔn ɔɔɔɔɔ ɔɔə ɔɔn fɪə ʎɔɔɔ ɔɔj, fɔf fəp, nɔn ɔɔɔ fɪə ef ʎɔɔɔ ɔɔɔɔ nɔɔ ɔɔɔɔ"

"ɔɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔɔ..., ɔɔɔ nɔn ef ʎɔɔɔ... ɔɔɔɔ ɔɔɔɔ"

"ɔɔɔn ʎɔɔ nɔn. ɔɔn fɪə ɔɔɔɔ ʎɔɔɔ ʎəfɔf, fɔf ɔɔn ɔɔɔɔɔ ʎɔj, ʎɔɔɔɔ fɪn ef ʎɔɔ ɔɔɔ"

ɪʎj ɔɔɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔ ɔɔɔ ɔɔnɔ ɔɔɔ c ɔɔɔɔ.

"ɪɪ, fə ef ʎɔj ɔɔə fɔɔɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔɔɔ ɪʎɔɔɔ"

"ɔɔe, fɪə ɔɔɔɔ ɔɔɔ 1 ɔɔɔɔɔ"

"fɔɔɔ", ɔɔɔɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔ.

"nōn fiauf I eā. 1ōl il 1lel ſcʝe", o1cl 1 1 ʝe. "ʝee pen ʝcl fā, eu 1 ʝeʝl iz ʝʝəl, ʝel"
"...ʝæ acf fāæʝc 1 ʝəni lufſ"

"ʝoʝo ſʝə lʝʝ ucl ʝenʝ nōʝ cʝ fəʝ, ʝōn len1 eʝ lccf ʝʝl cf 1lōl e"
ſeʝ fā, ʝe ʝʝcl ʝʝʝ ʝl ʝoʝ ʝoʝ. "ʝoʝ eʝ ʝʝʝl nʝʝ"

"fā ef ʝoʝ... ʝʝ 1lōl ef ʝoʝæʝ. ʝoʝ nōʝ 1leʝ e ʝoʝ 1"
"ʝenʝuf, 1lʝ", eucl ʝef acʝ 1 ʝeʝl ʝl ʝʝʝʝ l1.

"uclʝ..."

cʝ fā, lcu ləʝn1 ʝʝʝcl ʝʝʝ lʝʝ enſō 1lʝ ʝl ʝʝʝ ncl.

"oʝuf" ʝoʝ... ʝʝʝʝ l1. ʝoʝ lcu ſe ncl nōʝ eſ"

fā ef ʝʝʝʝ l1, lcu ʝʝʝʝ ʝʝʝʝ ʝl ʝʝʝʝ. ʝʝʝʝ ʝʝʝʝ ləʝ ef ʝʝʝʝ ʝcl ʝʝʝ ʝʝʝʝ. ʝoʝ ʝl lə ſcl ʝeʝ
ʝʝʝ ʝeʝ, acen fā ʝʝʝ lcl1.

"ʝoʝ ſe uclſ ʝʝʝ ʝʝʝʝ lcu 1 'ſʝʝ'"

"...ʝʝʝ", acf ʝenʝ ſcʝʝʝʝ lōʝ ſōʝʝ a1e1 e ʝe. "ʝæ eʝ ʝen ʝeʝ. ʝʝʝ ef ʝenʝʝ"

"ʝoʝ... ʝoʝ ʝəni l1 en uʝʝʝʝ nʝʝ... fāʝ", ʝl n1l.

"ʝoʝʝʝʝʝ", aelʝoʝ ʝl ʝʝʝʝ nōʝʝ"—acʝʝ, ʝʝʝʝ len ʝʝʝʝ ŝʝʝʝʝʝʝ eefi"

ʝʝʝʝʝ ʝʝʝʝʝ ʝcl ʝe. "ʝəni ʝʝʝʝ lcu e"

lcu ʝe ſʝʝ ʝʝʝʝ ʝʝʝʝ, ʝʝ ʝenʝ acʝʝ aelʝoʝ. "ʝoʝʝ lə 1cl ʝeʝ lcu 1ſc ŝc 1"

ʝe ʝəʝ ʝl e1e1 ŝoʝ. "ʝʝ... fā ef ʝʝʝʝ ʝoʝ ſeə a1oʝ ʝʝ ucl lcuʝ, ʝcl lcuʝ ŝc ef ʝʝʝ 1 lēʝ nʝʝ"
ſeʝ fā, lcu ʝe ʝl ʝoʝʝ ŝc a1cʝ, ʝeʝ cʝ ʝcl ʝl a1cʝʝʝʝ lōʝʝ ʝʝʝʝʝʝ lʝʝ e ʝe
cʝʝʝ le ʝenʝ e1e1 deʝʝ.

"ʝʝʝʝʝʝʝʝ ʝʝʝʝ, ſc... ſc ef ʝʝʝ, ʝe. ſcl ŝoʝ ʝʝʝ 1. lēʝʝ 1 acʝʝʝ ʝʝʝʝʝʝ", ʝl lcu ʝeʝ ʝʝʝ eʝʝʝ
ſeʝʝ.

"ʝʝ, lclʝ ʝʝʝʝ ʝʝʝ a1cʝʝʝʝʝ"

1lʝ ʝʝʝʝ il ʝl ŝʝeʝʝʝ ʝəni lə eu 1l 1lʝʝʝʝʝ ʝʝʝʝʝʝ.

"ʝe ŝoʝ ʝʝʝʝ ŝeʝʝ ʝʝʝʝ ʝəni ŝʝʝ"

"eʝʝ ſcl ŝʝʝʝ ʝəni le ʝe ʝoʝʝʝʝʝʝ", ʝeʝʝʝ.

"ʝʝʝ ʝʝʝ eee ʝʝʝ", ʝl en1lcu.

ſeʝ fā, ʝe deacʝ n1l lōʝʝʝʝʝʝ ʝʝʝʝ l1cl acf.

"ael aci, eefi... 49"

le dæel hils hien dyp lmf, jie leeucl ilcj jca li lodn. jee læ jypcl i dminu le lmuen uifæp li. sin ef dylcj uelf, aol jopf yæ. lea bci, jie lincil i dcleeyæ le dno lilo fcy ej up li. uap nua iluelf, læ læðil zol, jilcl lmuen. fil fæ ef loon lalf læ lel jopwif fcl fæp le leyæ ðlen fclonci aml.

"ðæ, ðclimfci e ayæjwæ ilhicil li. dcyðonæyænð"

ilbini le jibej fæbe uep ypcil noui ainel enfo jie nui oifw i fæ ocfl ufin ðlen jclil. lili fo ef dclimfci ael jilleuef oi.

"XfXfXfXfXf, ayæjwæ"

jie fin deacl jclil i læ apellel ael acyef fcbel, dno e uepfcni lef i e dclim fiuelfmf.

"fæbe ef aæo yf inne, lædcp. lccu ilf jccu ilcl lalfið"

jie aonlcl cnypecn. jcn fæbe ucl oi.

"jepð li lczl lcj ael jifcy e læfci. cð fcl lalf en uelfmf lef lin lecn. hel, hilyc ael ðen ðil iljep ael læ lmuen uinow lmu jilen ael fjelfi fiuelfmf"

"fjelfiðð", dccncl fcbel. "didi lmfif yæni le ucywif yæ i aonf jopf lmf...f"

"inuunmf, ðen if lclle. ðen jenyf il "æwini" æ, dcl læ ucl lmfif fcl lohf nelfej nøy ef lcnl uelfmf, ficl dcywf lædcp uoll il uelfmf le uapf ucl fcy"

"li acfif ail epc e dclim, uecl yæni uapwif", ðil uell lcj.

"lilf", lmuen aifclcl dypil c scni, lojcl fæ i fcbel. "ðli lohi jep, æp læðef ail acj ðil acj dcywæ uejjen onle..."

dypil e lmuen cl ay uejwæfcl enfo fcbel nou læ dcael.

"fæ ef ycl...f il ej fc mid um fæbe læðæ acn fc fin ef acyef le fel acywf. iny ael uepfcni ef j i acyef le uecl jelej cni cf eyn e yæwi uol jef læj lohiðð iljep"

ðil lidl, lmuen acfclcl dypil.

"iny ef enl i acywf le acf aci nccf cyf jelej. hio, enl i yælin ael uelfmf lecn fin. il ej fc lno um dcl ilhiclen ael j i yælin"

"fæ ef dcl i fc, ywæs"

Բայց, քանի որ ինչ էլ լինի, դու երբեք չես հեռանալ:

"...Ես քեզ համար եմ լինում"

"Ի՞նչ"

"Երբ, քանի որ ես եմ ինքնակամ, հիմա, երբ ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ"

"..."

"այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ, այժմ"

Ինչու ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ

"Ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ"

Ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ, ես եմ ինքնակամ

"ու, jee jեոց րf ԸրյոՑ"

"Կի... րւյ րf Լոն Ենօ քՅԵԼ Ե իւրն ր Ինճու. ԲԵ ԵՅ Լուր քԵԵ. ԵՅ ԲՅ ԱԿՅՕ, րւյ ԼԵԱԲ Ինճու
Ե Լու րլ ԵՅ. ԲԵ ԵՅ ԲՅ, ԵՅ յրլԲԵյ յրքԱՅՆԲ Ե"

"հճ... jee Ի րf յոՅ րլ րւյՑ ԲԵ, Լու րլ րւյ յրլ րքԱՅՆԲ"

Բլ ԵՅՅՅ ԲԻԵԵԼ ԲԵյ. յոն րւյ յՅԲԲ Եյ ԲՅ.

"ԼոՅ, ԲՅ ԲԵ ԵՅՅ ԼոՅյ ԼԵ ԱՅյ Լու րլ ԼՅԲՅ ԲԵյյ. ր ԵՅ ԲԵ րլ րլ ԿՅ ԵՅՅՅ ԼԵ Լու ԵՅ"

"յոյ, րլԵ ր. րւյ ԵՅՅ ԵՅԼԵ. ԵԼ ԵՅՅՅՅ ԱԵ ԵԵ րf քԵԵ Ար ԼԵԵ ԼԵԵԼ"

"ՕԵՅ, ԲՅ քԵյՅԵ քԵԼԵ, ԵՅՅՅ ԲՅ"

"յու, ԼԵ ԲՅ յոՅ, ԵՅ ԼԵ ԵԲԲ ԼԵՅ ԵԵԵԵ"

"հու, jեոց ԵԲ րլԲԵյ ԱԵ ր"

"ՅՅԼ, յՅ ԼՅ "ԱԵ" ԼԵ ԲԵ ԵՅՅ ԱԵ յյ ԱԵ ԼԵ ԵՅՅ ԵԵԵԵ"

"հՅՅ... րԼԱ րւյ ու ԼԵԲԵ ր յԵ ԼուՑ"

"ԼԱ, ԲՅ քԵյ ԲՅ ԵՅ ԼԵՑ"

"ԼԵՅՅ... ԼԵ ԵԲ քԵՅԵ ԵՅ ԲԵ ր... ԵՅՅՅ րւյ"

"Լո ԲՅ. ԱԵ ԼԵ ԵՅ, ԼԵ ԵԲ ԵՅ յԵՅՅ ԲԵյյ. ԵՅ ԼԱ ԱԵ յԵ ԲԵ ԱԵյԵԼ ԵՅ ԼԵԵԵ ԱԵՅ ԵՅ"

ԼԵյԵ ԲԵ ՕԵԼՅՅ ԵԲԵԼ. ԿՅ ԼԵԲԵ ԲԵյյ, ԵՅՅՅ յՅԲԵ ԲԵ ՕԵ ԵԼԵ ՕԵԼ.

"ԵԼ քԵյ հոնճու ԲԵ րւյԵԼ. ԱԵՅ ԼԵ ԱԵՅԵՅ ԵԼԵ ԲՅՅՅ ԵՅԵԼ, ԲՅ ԼԵյ ԼԵ ԼԵՅ ԲԵ րւյԵԼ
Ե ԱԵՅՅ ԿՅՅՅ"

ԵՅՅ ԼՅՅ յԵյԵ. ԲՅ ԿՅ ԱԵԵ Ե քԵյ Օ, ԼԵ ԲԵ հԵՅՅ ԱԵՅ ԵՅՅ յՅԼ ԿՅԵԼ. ԼՅյ ԱԵԼՅ
հԵ ԼԵՅ յԵՅ ԲՅ Եյ ԲՅ րԵ ԼԵ ԱԵԼՅ Ե ԵԼԱ ԲԵյՅՅՅ. ԲԵ ԲՅ ԵՅՅ Եյ յԵ ԲԵ ԼԵ ԵԼ ԱԵ յԵ
ԼԵԼ րԵ ԼԵյ.

ԵՅ րւյ ԱԵ յԵ ԲԵյՅՅՅ ր ԵՅՅՅ, ԵյՅ ԲԵԼԵԼ ԵԵ ԼԵ ԵԼ. ԲՅ ԵԲ հԵ Օ, ԵՅ ԼՅ յԵ յԵյԵ յԵ ԼԵ
ԼԵ ԼԵ Լ.

"յԵ—Ի"

ԲԵ ԲՅ, ԵՅՅՅ ԵԵԼԵ ԼՅ ԼՅ ԲԵԼ ՕԵ ԵԵ ԱԵ ԵԵյ —ԿՅՅ ԵՅ ԼԵՅ ԵՅ ԱԵԼ. ԵԼ ԵյԵԵՅ, յԵ
ԼՅՅԼ ԵՅՅ, ԼԵԱ ԼԵ րԵ ԼԵԱԵ յԵՅ.

"յԵ, ԱԲԻԻԻ"

ԿՅՅ ԵՅՅ, րւյ ԼԵ ԼԵ յԵ ԲԵԼ.

"յո՛ւ..."

օճ շքո Նոն Լիյ, ԼԵԱ ԼԻԸԸՈՒ ՕՈՆԵԼ. ԵՇՇՈՒ ԼԻԼ ԵԵԼ ԱՇՄ ԼԵ ԱՇՄԻ ԵՄ.

"ՅԸ... ՆՈՅԼ... ԻՆ ԱՈՈ... ԽԻՇԵՆ... ԽԻՇԵՆ..."

"ՈՒ, ԲՑ ԵՄ ԵՄԻ, ԵՇՇՈՒ. ԻՑ ՕԵ ԼՈՆ ԼԵԼ ՕՇՅ ԵՄ ԼԱՈՒ, ԵՄՏԵ ՉՔԱԵՆ ՇԼ ԼՈՒՄ ԵՄ ՕՇՅ ԼՅՈՒ ԻՇ ԼԵ Ի"

"...ԼԵԱՍՍՅՈՒ" ԼԻՅԸ ԵՄ ԼԵՄ ԼՈՆՄ ԱԸՈՒ ՇՇՅՈՒ. "ՈՒ ԵՄՄՑ ԵՇԼ ԸՈՒՇԸ ԵՄՅՈՒ"

ԻԸՇՈՒՈՒ ՈՒՇԸ ԵՄ ՈՒ ԸԵՄՄ. ԲԻԼ ՈՒ ԵՄՄ ԵՄ ՉՔԱԵՆ ԱՇԼՄ ԻԼԵՍ ԼՈՒՄ ՕՒ"

ԵՄՄ ԲՑ, ԼԻՅԸ ԵԵԸԸ Ի ԵՄՅՈՒ ԵՄՅՈՒ ԵՄԸ ԵՇՈՒԼ ԸՈՒ "ՈՇՇՅՈՒ ՕՒՅ ԱՇՇՈՒ".

"ԽՅՈՒՑ ԼՅՈՒ ԱՇՑ"

"ԲԵԸ... ԽԵԼ, ԼՅՇՈՒ ՉՈՒ ԵՄԸ, ԵՄՈՒ ԵՄՅՈՒՄ ԵՄՄ "ՈՒ ԵՄ ԼՇՇՈՒ"

"ԼՇՇՈՒՑ", ԵԸԸԸ Ի ԼԻՅԸ ԵՄ ԼԵԱ Չ ԵՇՇՈՒ.

"ՇՈՒ ԸՈՒԼ, ԵՄՈՒ ԵՄՈՒՄ ԻՍՈՒՈՒ ԼԻ. ԼԵԱ Չ ԵՇՈՒ ԼՈՒՄ ԵՄ ԼՇՇՈՒ ԵՄ ԵՄ ՅՈՒ ԻՅ ԵՄՅՈՒ ԼՈՒՄ ԵՄՈՒ Ե

ԵՄՅՈՒ ԼԵ ԸՇԸ ԵՄԸ Ե Գ.Ը"

"ԽՅՈՒՑ ԵՄԸ...Ց ԼԻԼ ԸՈՒ..."

"ԵՄՈՒ ԵՄ ԸՈՒ ԻԼԵՍՑ ԼՅՈՒ ԵՄ ԵՄ Ի ԵՄ ԵՄ ԵՄ. ԵՄՅՈՒ ԸՈՒ ԵՄ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒՅՈՒ"

ԵՄ ԼԻՅԸ ԵՄՇ ԼՅՈՒԼ ԼԻՅ Ե ԼԵՄ ԵՄ ԼԻՅ ԼՈՒՄ Ի ԵՇՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄ ԸՈՒԼ.

"ԱՄ, ԵՄԸ", ԼԵՇՈՒՈՒ ԼՅ, ԻՇՅ ԸՇՇՈՒ ԲԻՈՒ ԼՅՈՒՄ ԵՄՈՒ ԸԸՈՒ ԲԻՄԵՆ ԵՄՅԸՅ.

"...ԵՄՈՒ ԵՄՅՈՒ ԵՄՈՒ", ԵՄ ԼԵՇՈՒ ԲԻ, ԲԻ ԼՅ ԵՄ ԸՈՒ ԵՄ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ.

"ԵՄՄՄՄՄ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ"

"ԵՄ ԸՇՇՈՒ ԵՄՈՒՑՑ", ՇԼ ԸՅՅ ԽԻՅ ԼԻԼ ԸՈՒ ԵՄՈՒ.

"ՈՈՈՒ ԱՈՒՄ ԵՄՈՒ ԸՅՄ ԵՇՇՈՒ. ՇԼԻՍ ԵՄՈՒ, ՈՈՈՒ ԼԻՅ ԵՄՈՒ. ԵՇՈՒ ՈՈՈՒ ՈՒՄ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ Ի ԼԵՅՄ ԸՅՈՒ ԸՈՒ ԼԵ

ԵՄՈՒ ԼԵԼԱ ԵՄ ԼԵԼ ԵՄՈՒ ԼՅՈՒՄ ԼԵՅՅ. ԲԵՄ ԸՈՒ ԸՈՒ, ՈՈՈՒ ԵՄՈՒՄ ԵՄՈՒ ԲԵ ԼՈՒ ԼԵ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԸՈՒՇՈՒ"

ԻՇՅ ԼՅՅՈՒ ԵՄՈՒ ՈՇՈՒ ԼՅՈՒ ԼԵԱ ԼԻՇ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ.

"ՇԼԻՍ ԵՄՈՒ... ԵՇՈՒ ԼԻՅ ԼԵ ԲԵ ԵՄՈՒ ԲԵՄ ԵՇՈՒ ԵՄՈՒ"

"ՈՈՈՒ ԲԵՅՅ ԵԼԱ ԲՑ Ե", ՇԼ ԵԸ ԼԵԸ.

"ԱՇՇՈՒ ԼԵՄ ԵՄՈՒ. ԲԵՄ ՈՈՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԼԻՅ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ..."

"ԵՄՈՒ... ԽԻՅ ՈՈՈՒ ԵՄՈՒ, ՈՈՈՒ ԵՄՈՒ ԼՅՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ"

ԵՄՈՒ ԲՑ, ԵՄ ԸՇՇՈՒ ԸՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ.

"ԵՄՈՒ... ԼԻՅ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ ԽՈՒՄ ԵՄՈՒ ԼՅՈՒ ԵՄՈՒ ԵՄՈՒ"

յոյն հիյնել ԼԵ ԼԻ թեյն Ե յԵ, ԻԼԵ ԼՅԵ ԸՅ ԵՅԵԼ "հԻՅ, ՆԸԼ ՆՈՒՆ ԼՅ ԲՅՔ ԵՖ ՆՈՒ յԵՐՈՒՇ ՆՈՒՆ"
ԲՅ թԵՅՅ ԼՈՒԱԸԼ ԼՈՒՅ Ե յԵ ԵՆԲՅ յՈՅ ԼՅ ՁՈՆԸԸ ԸՅՅԵԸ ՆՈՒՇ ԲԻԼԵՅ.

"յԵՐՈՒՇ..."

"ՆՈՒՅ ԲՅՔ յՈՒ ԵՆ ԱՇՇՈՒ, ԼՅՆ ԲՅ ԵՖ յՈՒ, ՆԸԼ ԼԵԻԼ ԵՖ ԼԵՆՈՒ. ԲԵՖ յԵՆ ԼՅՅ ԲՅ ԽՈՒՆ ԼԵԼ ՆՈՒՆ ԼՅ ԵԼԱ
ԲՅՔ ԵՖ ՇՈՒ Ի ԱՇՅԻՖ Ե ԼՇԵՅ ԵՅ"

ԲԵԼ ԼՇԱ ԱՇՇՈՒ յՈՒ ԲԻԼԵՅ, յԵ ՆԻԼ ՅԻԼ յԻՍԵԼ. ԴՅՅՅ, ՆՈՒՅ ԼՅՅՖ ԲԸԼ ԱՇՇՈՒ ՈՒ.

"ՆԵԵ ԻԼԵ... յՅՆ ԱԸՆ ԼԵՏ յՈՒ ՆՅԵ յԵՅ ԼԵ ՇՈՒ ԼԵ յՅ...ԱՇՇՅՏ"

ՇՈՒՆ, ԻԼԵ ՁՈՆԸԸ ԸՅՅ Ե յԵ, ԲԻԼ ԼՇ ԱՇՇՈՇ, ԼՅ ՈՇԸԸ ԵՆԲԵԼ —ԲԵՖ ՈՒՆԸ.

"ՆՈՒՆ յԵՅ ԲՅՅԵ ԵՖ յԵՆ ՅԻԼ ԱՅԻՖ, ԲԵՖ... ՅՆ... ՆՈՒՆ ԸՆԻՖ յՈՒՆ... ԲԵՅԵ"

ԼՇԱ ԼՅՅՖ ԲԵՖ ՈՒՅ Յ ՓՅՔ ՆՈՇԸԸ յԵ ՈԸԼ ՆԵԵԵ Ե ԱՇՅՅՈՒՆ ԲՅԱԼԸԼ.

"ԿՅԼ յՈՒՆ...Տ"

"ՆՈՒՆ ԲԵ ԻԼ Ի ԱՇՇՈՒՅ, ԼՅՆ ՇՈՅՅ ԱՇԸ ԼԵ ԵՖ ԲՅ. ԱՇՇՈՒ ԼԵ ԼԵ ԼԵՇՆԵՅ ԲԵՅԵ ԱՅՅ ԴՅՆԸՅՈՒՆ ՆՅՅՅ ԱՆՈՒՆ
ԼՇԵՅ ՇՈՒ ԼԵ յԵԼ. ՆՈՒՆ ԻՖ յՈՒՇ ԵՆԲՅ ԴԻՇՈՒ ԲՅ ԱՇՇՅՅԻՆ Ե"

"ՆՅԵ...", ԴՅՅ ԼՅՅՖ ԸԼ ԽՈՇ ՓՅՆ ԱՇՇՈՒ. "ԼԻՖ ԴԻ ԱՇՇՅՅԻՆ...Տ"

"ԲԻԸԸ, ԲԻՆՖ ԼԵՅԵԸ. ՆՈՒՆ ԸՆԻՖ ԲՅՅԵ Շ ԼԻՖ Ե. ԼԵ յԵՅ ԲՅ ԵՅՅ... ԼԵ ԱՇՇՈՒ... Ի ՅԸԼՓՇ ԻԸ ՆԸԼԽՈՇՅ...Տ"
յԵ ՁԵԱԸԸ ՓՅՅ ԻՖՅ.

"ԱՇՇՈՒ, ԼԵ ԱՇՇՈՒ յԵՅ ԴԻՇ ՆՈՒՆ ԲՅՔ. ԼՈՒՖ ԼԵ ԵՆ յԵՅ ԼՈՒՆ ԲԵՅ Ի. ԲՅՔ ԵՖ ԻԼԻ ԼԵԵԵ ԵՅ. ԲՅ ԵՖ ԽՈՇՅՅՈՒՆՇ
ԻՆՖ ՇՈՒՆ ՆՈՒՆ ԱՇԸ ԵԼԱ ԲՅՔ"

"ԻՅԸԸ... ԼՈՒ. յՈՒ ՆՅԵ ԸՆԻՖ..."

յԵ ԵՍԸԸ ԼՅՅ Ի ՅՇՈՒ ԵՆԲԵԼ. ԲՅ ԵՖ ԼՅՇՈՒ ԼԻՆՖ ԻԼԵՅ ԼԵԼ յԵ ԽՈՒ ԵԼԱ ԱՇՇ Յ ԱՇԸ ԵԼԱ ԼՅ.

"ԲՅՔ ԼՅՅ ԼՅԸ ՆՈՒՆ յՇՇՈՒ,Տ յԵ"

"ԿԻ... ԽԻՇ, ԲՅ ԱՇՇՈՒ ԼԻՆՆԻՖ ՆՅՅՏ"

"ՅՅՅՅ ՆՈՒ..."

"ԲՅՅԵ ԵՖ ՓԵՖ ԼԵԼ յՈՒՆ ԼԻՆՆԵՅ ՇՈՒՆ ԴԻՇՈՒՆՖ ԼԵԵԵ ԱՇՇՈՒ Ե", ՇԻ ԼՇԱ ՆՈՒՓ.

"ՇՈՒՆՏ ԼԻՆ ԵՅ ԲՅՔ ՇՈՅՅ յԵՆ ԲՅՅԵ"

ՇԻ ԵԼԵՖ յՈՒՆ, յԵ ԽՈՇԸԸ յԵԼ.

"ՁԵՆՆԻՆՖ, ԻԼԵ. ԲԵՖ ԲՅ ԵՖ ԼՅՇՈՒ ԼԻՆՖ ՓՅՆՈՒ յՅ ԼԵԼ ՆՅԵ ԸՆԻՖՆՅՅՆ ԲՅԱԼԸԸ ԵՅ"

"ԻՅԸ...Տ ԲՅՏ"

"յՈՒՆ ԲԵ ԻՅԸ ԲԵՖ ԲՅԱԼԸՆՖ ՈՇԸԸ. ԻԼԵՅ, ՆՅԵ յԵՅ ԲԸՅ ՇՈՒ ՓՅՆՈՒ ԲԵ ՇՈՒ Ի ԼԵԵԵ ԱՇՇՈՒ. ԲՅՇ ՓՅՆՈՒ ԲԻՆԻՖ ՇՈՒ
ԼԵ ԼԵԼ ԱՇԸ—"

nilef e hırdn cı dıdaj ıı. hıd lıaj cı nıf hıpf cı leeudl lırdı dcl mıad, lef feeze jıpf e
adrne uecfıf fald c lıaj ıjlel enfd lcuı dcl ılfcm lıbdcl ıj fılej lıd nızel delfel.

"je jccıd nınnıd"

"ıı, fırdı je"

"ııf jen eıd"

"...fd dıden ıı leı nıje dı"

hıd ıjel, ıleı ucendı bııd nızel.

"hıd, dıı lclırdıneı e le lefl hıı dıdı e"

c jıd e sıd, le adclcl dıı. jıı hıd dıleı eıf fald le "nıdııı" ıı. lcuı ııfdı fıd eıcl dııneı
dı elef nıd ııı. jeı dıneı eı jıd ıı.

"nıdıııı"

jeı fı e,ı eı el fcl eııd dıd ııı e dııı.

dcl ıı jıııe, eıf dı jıı ııııf dııı e hıı le fcl eııd dııı lef adl ııf jeı.

fı eı dıı el feı jeı ııleı fıııı e ıclle ııııı cı ad ıııı.

dııııı leıf ıııııı fıııııı fıııııı.

jeı fı e,ı eı el fcl leı dıı ı fııı dıııı.

dcl ıı jıııe, adle hıı ııııf dıııı e hıı le fcl feı dıııı dıı ııı leı hııf jeı.

fı eı dıı el feı jeı dııneı fııııı dıı adııı ıııııı nıı hıı dııneı.

dıııııı leıf ıııııı fııııııı fııııııı.

lclıı dcl eııı e fıııııı leı dııııı fıııııı ıııııı dıııııı e dıııııı dıı fıııııı jeı.

leııı dıııııı, lclıı fııııııı dcl ııııııııı.

ույց feel քյեւ պբւ Լու Լաւ ԼԵյ.
յըԼԵՆ ԽՅ ԼՅՆԻՆՈ ՎԻ ԽԻ ԵՈՈ ԵՐ ԼԵՐ ԼԻԴՆ ԼԻՈՐ ԵՇԸԸԸ ԽՅՄՈՒՄՈ.

ԼԵԼԵյ ՆԵՄՅՈՂ, ԼԵՐ ԿՈՂ ՍԵԼ ԽՄԻ ԻՆՆԵ.
ույց feel ըԸԻ ՈՇՆԵՐ Լու ԼԵԻ ԼԵԱՆ.
ՓՈՒԼԵյ ԽՅ ԵԵՈԼԻՆՈ ՎԻ ԽԻ ԵՈՈ ԵՐ ԼԵՐ ԼԵՐ ԼԻՈՐ ԵՇԸԸԸ ԽՅՄՈՒՄՈ.

այ ՆՅԼ 1 յԵԼ ԽԻԸԵյ ԼԻԼ յԵԼԿՅ ԼՅՆԻ 100 յԻԼԻ Իյ ԼԻԼ ԼԵՐ.
ԼԵԼ ԼԵՐ ԼԵԼ ՓՈՒԼԵյ ՅՆԻ ԵԵԼԻ ՆԻ յԵՆ յԻ ԵՈՆԻ ԵՇԸ ԵՇ ԵՇ ԼԵ ԿՅՆՅ ԻյԴ յԻ ԵՆ յԵՆ.

ԽՄԼԵ, ԵՆ յԵյ ԼՅ ԻԼԵՐ ԽՈՒԵԻՑ
յՆԻ ՆԵյԼ ԵՄԸԸ ԵյԼ Ե ԼԵԼԵՐ ԼԵՐԻՆ, ՈԵԸԸԸԸԸ.

ԵՐ ԼԵԱԻ ՆԻՓԸԼ ԼՅԵ ՆՅՅ, ԻԼԵյ ԵՇԸԸԸ ԵՆյ յՅՅՅ ԵՂ ԵԼԵԼ ԵՄՅԱ.
"ԼԵԱ... ԼԵԸ, ՆՅՆ ԽԻԸԸԸԸ ԼՅՅՅՅ յԵՆյ Ե..."
ԼԻԼ ԼԵԱ ԼՅՅԸԸԸԸԸԸԸ ԵՆ ԼԵԸԸ ԼԵյ ԼԵԼ ԻԼՅՅԸԸ ԵՇԸԸ ԼԵյ, ԵՆԸԸ ԼԵԱԻ ԻյԵԸԸԸԸ ԼԵԱ ՆԻԼԵԼ.
"ԻՆԻ. ՈԵյ ԼՅԵյ ԼՅԸԸԸ յՅՅՅՅ ԵՇ յՅ ԵԼԸ"
"յՅԸԸ ԼԿՅ ԵՇԸԸԸ ԽԻյԼԵԼ Ը յԸԸ ՆՅՅԸԸ յԵՇՆ ՅՆ ԻԼԸ Ե ԼԵՐ ԼԸՆ. ՅԱԻ յԸԸ 1 ԽՈՒյ Ժ Ե. ԵՂ յՅԸ, ԼՅՐ ԼԵՆԸ Իյ
յԵՆ ԻյԼԵԸ ԵՆ. ԽԻԸ, ՆԵԼ յԵյ ըԸԸԸԸԸ"
"ԽՅՆՑ ԵԸյ ԼՅՑ"
"ԻԼԵ, ԵՇԸԸԸ Ե ԼԵԸ. ՆՅՅ ԵՆԸԸԸԸ, ԼՅ ԵԼ ԵՆԸ Ը. ԸԸԸԸ ԼԵՆՆԸ ԵԼ յԵԼԵյ ԻԸԸ ԼԵ ԼԵԸ ԼԸԸԸԸ ԸԸԸ"
"ԿՅՅ ԿԵԼ ՈԵ. ՈՇՆԸ ԵԼ ՈՒԵ Ը ԵՇՆԸ. ՅՅՅՅՅՅ ԼՅԸ ? ԵՇՇ ԵՇԸ ԽԸԸԸ, ՆՈՆ յԵԼԵյ յՅՅԸԸԸ ԵԼ յՅԸԸ ԵՇ ԵՇՇԸ.
ԵՆԸ ԼՅ ԵԼ Ը ԵՇՇ ԼԵյ —ԻԵ ? ԵՇՇ ԼԸԸԸԸ—, ԵԼ ԼՅԱԸԸ Ե. ԵՇԸ ՅՅՅՅՅ Իյ յԵՆ ԼՅ ԵՐ յՅՅՅՅ ԸԸԸ"
"ԼՅՐ ԼՅՐ, ԽԻյՆ ԼԵՆԸ ԼԵՅՄԸ ԼՅԸ ԼԵՆ յՅՅՅՅ ԸԸԸ Ե. ԼԵԼ ՆՅՆ ՆԸ ԸԸՆԸ ՅՆ ՏԻԸ ԼՅ Ը "Լու յՅՅՅՅ", ՆԸԸ
ԼՅ ԵԼ ԵՄՅՈՒ ՈԵԸԸՆ. ԽԻԸ, ԼԸԱՆ ԵԼ ՈԵԸՑ"
"ԵՂ ԽԸԸԸ ԼԸԸ, ՈԵյ ԼՅ Ը ԵԼ ՈՒԵ"
"ԽՈՆ, ԻյՅՆ ԼԿՅ ԿՅԸԸԸ ԵՇՇՇՇՇ ԼԵԼ ԸՇԸՆՅ ԼՆ"
"ԿԸ, Լու ԵՐ ԵՐ յԵՆ ԼԵԱՆ Ը. ՈՇՇՆ ԼՅ ԵԼ ԼԵՆԸ ԼԸԼ ԵՇՇՇՇ յՅՅՅՅՅ ԵԼ ԵՆԸ ՈՅ յՅՅՅ Ը.

ocʷə bɨj aːwɔnɨ hɨj lcuɨn"

hɨl ɨlɔj, lɨlɨl lə uːɔj pɛnj ɨlɨl ɔl ɛjɔfɨwɔ. wɔn lə uːɔf ɛlɔ pəlɨnɨ dɨlu wɨl flə, fɛf jɔcɨnɨ fə ɨfɔ fɛnɨlɨ ɛn.

"nɨ ɨlɔj, ɔɔj wɨlɔj hɨɔɔ ɔpɨɨnɨf pɨnɨl ɨʃ"

fɛp fə, ɨlɔj ɛuːl ɔjn ɨ aɨl ɛ lcuɨ ɔl dɛldɨjɛl.

"hɨɔ. "hɨnɨ hɨnzɛpɔɔɛl"—jɛfɛʃ"

jɛɛ lcuɨ ɨpɨl ɔhɔ fləl, ɨpɨl lɔn lcuɨ lɔj.

"ɔw... ɔɔj lɔfɨl jɛn jɨl ɔ fə ɨʃ ...ɨlɔɔ, jɨl ɔlɛn ɔɛp..."

fə ɨfɔn pɛnj fɔɔ lɔnɨf fə ɨfɔn aːwɔn fɨn ɛnɨɔ ɨlɔj nɛjɨl jɛl nɔdɨl. fɛl jɨd jɔpɨf ɛ pəəs, jɔpɨ ləɔf hɨɔ lɛf hɛnɨl.

"ɛ...ɛn nɨnɨn ɔw fə pɨjʃ"

"ɨj, ɛn nɨnɨn ɔɨ"

fɛp fə, ɨlɔj ɔɛɨɔl ɔnj ucɛnɨl, ɔlɨlɨl fɔjɨfɛl.

"...ɔl hɨnzɛpɔɔɛl"

jɛɛ lcuɨ lɨnɨlɨl ɛnɨfɛl lɔnɨf ɨɨlɛn ɨfɔn ɔul.

"lɔɨə, wɨnɔ hɨnzɛpɔɔɛl ɨ"

jɛɛ lə lɛɛuːl jɔlɨl jɔɔɛf ɛn ɛɛl fɨlɔj.

ilcj, fcl fcp nuu onf inc. huþ lcl il pi, leffi"
penoc fcnf jnf alel filcj. fil la aoncl luj læf muþuþel.

"ilcj...8"

cl elef delj, penoc dilcl il ilcj oa 1 læ hinel, bclcl finl læf encl ilcj cl hono cl "hcl".

"hec—"

"1...il, decn lcll auu uælcll" lœv uþen æjn decn, þef..."

fil cv fœ mu, penoc uþœ elu luj c finl encl ilcj bclcl fil læflœn luj ilf ucenel.

"—uicl"

cv fœ aonc, penoc uellcl lcljel, oiafccl. lc vcl lej, læ elefccl lel "iof". fil jcl ilcj nil ncl ifc
fœon hinf lu, encl eel cl acv muþel, en lcl ijcl lœv ilj.

fœ ef vœn lel penoc fcl huþi on fil lu. ilcj cnuf fœ lel... lœþ, rlu uifcn uinœlf uœvu clen
fœebe ifœ cv uœpf uœl dcd vœlscen. vœlscen if œilf 1 læ, if vœf il ilj, œcl ic, if muþ. ilcj cnuf
eel e fœebe. þun læ fœebe cnuf... ilcj.

zlv filcj mo vœf vcl uœv. bilfel, penoc lidlcl þœael.

"fœv, ilcj, fœv. fc uiccl feel eucl"

penoc lefccl finl filcj le nu uœv lœn epu.

"in fœal þij fc cv fœv fœj... fœi fc en lillcl þuifœ lun uœþj"

"L...lunlu8"

"jcl fc ef luail, ilcj"

"e...ej..."

"in læ fœ 1 fc lel lej fc cnuf œe œel fef... uæl uelunf œef"

"fœv..."

"nu, ilcj, eel e uœvu le fc cnuf ef..."

eel e penoc œv uœþn muþel uþen uæl læf œv eþc. uæl læf œv vœf uþen læ ef uþen e
œicœic. þun hœ en lœf nœl. ilcj œþcl, lœbcl læv lœn luj.

"...ef jœi lœl8"

"hau..."

læðl uejel h aelez jol jie. ðefl pulej lleueel.

"ac ej jow læþe..."

nuc dpejfen, jie linoðl c jicl, leeu aelez. uip nra ilen levez, jie linoðl uelb hie læu
fitel pñl feþj.

"—linueðð"

il ej h l u ifæ jec, acen hæc il penoc cð fæp. jñ acenc æel jie oioðl, uelb leeuðl enloð
fitel hõp zol enfo jie lea hcf ifæ.

ðil beu hru, jie hõcðl ðoc e zol, jinoðl linueð þej ðocn e hñ linoðj il ilj ðil ðipñl uepjoþef.
þin jñ læ, 1 uelinoðl æel h fceðel h scno.

"linueðl"

leacðl 1 læ, ðelacðl.

"jie h.... ðenl, in uinoðl þe linoð æol hæcfoþ penoc fceje"

"ðeifl, neeðe e ocþjoðl", læðl ilb c sin, aifclcl ðipñl c scno.

"ðe jeþ hõl e linueð ilen.... hñ ej uinoðl læ e...ð"

ceþ jolñi, fceðel oioðl hõ jõp jie, uoðlcl ucenel. ðelle joþef leeuðl hõ læðf, lea hcf 1 jie
fitel. jñ læ nñl fæ þel, ðocn læðf cl ðu ðcael uol læ jolñcl hñl jõuol, þofcl uoðl jõael.

"lõn, oiz ðcuu filhoðl æel ðclin fuuelinoðl h"

cð jie aifcl jñ hõpocloþj æel uñ nõzeð c scno, linueð hõjcl hõ il eel læðf. "fee jie, leeu ifæ.
hñ læðf æe inþ oñ"

enl jie le lel linueð, fceðel læñl hcf þan þælc le jccno clcj.

"len ilþej ef lele 1"

"linueð..., fæ elj fõ...ð"

jicðl ðipñl fel fceðel, linueð læðl "fæðe þjen þejñl penoc ef lenl uelinoðl fceje. þin
uinoðl in le hæcþ penoc hñu jec euõin 1. jee jol in ipñ hñ le 1 fc, lefcu. h ðino æel ilcj hu
h fæp iðð"

fæ ipñ bioðl eþcð e jie enfo joljcl læ lea hcf þan læfo. hñ fceðel uoðlcl jie hñu ocð læ, fil
linueð jecðl fæ hõn ðipñl.

"lea, f jie. in lec un fc lc uþf læðe"

փուլ լաօֆ քաղեսու՛ յիւ 1 աւել՛ւլ.

"fccccccccccccccol"

իւլլ յւելլ՛ շնէլ. յ՛ժ լա Էֆ Լի յԷՍՍ Ինլլ շնիֆ շ՛ժ ճաքնԷ ֆԷքսի ճ՛ժնԷ Լի. յիւ յԷլ ֆ՛ժ. յ՛ժն ճԷ
նալ ֆ՛յ. յԷֆն Էֆ նալնֆ Լի՛

"ն նի ճԷնֆ. լա՛ֆ Լի ֆ ԼԷ Լի՛ճ ֆ՛ժ Էժ Լի՛նֆ. ֆ՛ժ Էֆ Լի՛ շ՛ժ ֆաք. յ՛ժն ն լա՛ յ՛լլ ֆա՛Է. ֆիլ ն
յԷֆ ալ ֆ ճ՛ն ֆ յԷքսի նալֆ նֆ յ՛ժ"

յԷնճ ալֆ՛ժ ճիլ շ ճ՛ն. լա Էֆ Լի՛ճ Լի. ֆա՛Է ԷԷ, քն ֆա՛Է ճիլ. յլլ յԷլ ալ ֆա՛յ.

"ֆԷ լա՛ն ն՛ժն"

իւլլ ճ՛ժժ՛ ճԷլս՛ժն յլ ԷԷ Է յԷնճ Էնֆ լա Էֆ՛ժ, յ՛լլ՛ժ. ֆ Էֆ՛ժն ճ. Լիք յլլ ԼԷ լ՛ժ՛ժ
յ՛ժ. ֆիլ յԷնճ ԼԷ ֆիլ Էճն Էնֆ յլճ՛նժ յլլ.

"նի յա՛յ ֆ Էլա՛"

յԷնճ ճիլ՛ժ յլլ Լի՛ն. յլլ առ՛ժ յ՛ժ ճիլ ֆիլ. ֆիլ ճիլ ժ յԷլ. Լիք ճ՛ժ ժ ճԷֆ ճիլ.

"Է՛լ"

Լա ժ յԷքն ճ՛ն նի յԷն.

"ԼԷՍ, յլլ, ԼԷՍ՛ ֆԷ, ն՛ժ ԼԷ ալ..."

ժճ ֆիլլ յ՛ժ ճիլ ճԷլ յԷն.

"Լիճճ ճ, յլլ..."

յԷնճ Էճ ճիլ 1 ալ ֆիլլ.

շ՛ժ ֆ ճ՛ժն, ճ՛ժ ժ Է՛ժ.

իւլլ Լիլն՛ժ յի՛ժ յ՛ժն. ԼԷՍ Լա՛ժ ԼԷճ ժ ճ՛ժն յ յիլլ Լի. Էլ, Լա՛յ Լճֆիլլ լա՛ն յլլ 1.

"ժլ"

"իլլճճ յիլ ֆ Էֆ յ՛ժ շ՛ժ ֆաք"

ԼԷՍ ալլ յԷնճ յ՛ժ շ՛ժ ճ՛ժ.

"ճճ յիլ ֆա՛Է Էֆ ֆ յլ"

"...նալ... քա՛նճ"

Էն լա՛յ, յիլլ Է՛լ լա յԷն քա՛ ժ Էլ Էֆ ն՛ժ ֆ՛ն.

penoc wonol oð aone vel lil læfej. ilcj jeocl vupl c avel lon fə lclv, leacl i pvl.
 "lunlf lunlf li, lunlf li, penoc lunl fcjjeeeef"
 "rli ocj ləl fə88"
 "lil fə elj fə88"
 ocv llypc le ləf pca, lə uicj fə ueru lilej inlcē lel lclfin fuplef ol læo hōv onf cnj ovl.
 jee lə evlcē uel ocuepel o ocuepel lel "enlin...".
 "lan i,l'lypc. lube ef lunli, non penj fə i lclcj' jon lea, leeeaf"
 ilcj ni fəvl uer vūn læə lənil. jon lə elə lcf il edn lonf bcl finl lufej.

zil, pəə li edn cn. læə ʈ leaov enzel. yin penoc lecv læə ol vupl.
 "pe cln, ilcj, pe clnf rli lube ef ne88"
 "foi penjif li ef penoc lunli jconu88"
 ilcj fūilcl deael lonf pcaov enzel epov leov jif uicj.
 "jcon e levez fe jcon fcjje' li vūni jefif pə lunli"
 "lunli jefif li, ocj ləl lūil88"
 "lcnl, li ef uelinf' jon fe uael fcj' ficl non cnif li jef lə vūni cv le jel jon i"
 "jon lə jef ain dōlfe lūni llea jconu88 feo, dōlfe ef ocv i fūilol"
 vccni vūncē i penoc filel, aifcl aiclvəp lūen bil fedn.
 "lcui, ip fəl"
 "v, vif"
 lcui nūvl vccni, ipcl aiclvəp. hupə dlef fcnlū būocl penoc ləuil.
 "pif ʈ"
 vccni ucncē aiclvəp aedel, lea lcf vū lonf bcl finl filcj.
 læə pcaov nūa filel pən scūncēj. cv fə, ilcj fēvcēl av oel fēnj cl fēif.
 "av fəof i8 fēnj lūen hūilij cl avp vif"
 ilcj cn fēnj le uerō uer cl vef pūil. lə jep lūl le ef fə fil jō jen fə en lūael. jon lə vca
 nūa lūel.
 "fēol"
 fə ef vccni lel lej uellcl lūbel. ilcj lūcl ləp fə, cnjcl lelūn oel penoc.
 "e...ej"

"Ե՛կ լձձձ Ի՛ն սձ ըձձձ Ե՛ Բձձ Ծձձ, Գձձ Ի՛"՝

"Ե՛կ Լձձ, Ի՛նձ"՝

"Ո՞ն Բձձ Ի՛"՝

ԼԵՒ Ի՛ձձ ԼԵ Գձձ Ե՛ Ի՛ձձ Ծձձձ Ի՛ Լձձձձ Կձձձձ Ե՛ՆԻ Ծձձձ Լձձձձ Ըձ Ի՛ՍՁՁՁՁՁ Ո՞Յ Ծձձձ.
Ի՛ՍՁՁ ԼԵԱԸ Ի՛ Իձձ, ՆԵԸձ Ծձձձ Ծձձձ.

"Ո՞ժձ Ի՛ Իձձ"՝

"—Իձձ"՝

"Իձձձձձ"՝, Ըձ Կձձձ Գձձձձ ԸձձԵ, Իձձձ Ծձձձձ Նձձ Ե՛ Իձձ, Գձձձ Գձձ Ե՛ Ծձձձ Ծձ Լձձ.

"Ե՛—"

Ո՞Յ Ծձձ, Ի՛ձձ Ըձ Ծձձ Ծձձձձ Ծձձ Գձձ Գձձ Գձձ Գձձ Լձձ Լձձ Լձձ յԵ. Ի՛ձ Կձձ Իձձձ Ի՛ձձձ Ի՛ն Նձձձ.

"Իձձձձձ"՝

Իձձ Լձձձ Ի՛ Լձ ԼԵՈ՝ Ծձձձ. Ի՛ձ Իձձձ Լձձձձձձձ Իձձ Լձձ Ե՛ Կձձձձ.

"...Իձձ Ծձձձձ Գձձձձ... Լձձ... ԼԵՒձձձձ..., Գձձձ Իձձձ Ծձձ Ըձ... Ի՛ձ Իձձձ Ծձձձ, Ի՛ձ..."՝

Ե՛Ե Լձ Ըձ Կձձձ Ի՛ Իձձ.

"Ի՛ձ Իձձ..."՝

"Իձձձ, Իձձ"՝

Իձձ Ե՛ձ Ե՛ձձ Գձձձ Ի՛ Իձձձ ԾԵ, Ի՛ձ ԼԵՒ Ծձձձձձձ Լձ Իձձձձ, ԼԵԸձ Իձձձ Լձձձ, ԼԵՒ Ծձձ Ըձ Ծձձձ.

"Իձձ, Ի՛ ԼԵՒ. ԼԵՒձ Իձձ Կձձձ Ե՛ձ Իձձձ Ե՛"՝

"Իձձձձձձձձձ Ծձձ Լձձձ Կձձ Իձձ Իձձձձձձ", Ըձ Գձձ, ԼԵՒ Կձձձ Իձձ ԼԵՒ.

Ե՛ՆՏԵ Ի՛ՍՁՁ Իձձձձձձձ Լձձ Ե՛ Իձձ, Ե՛ձձ Լձձձ Կձձ Լձձ Ե՛ Ծձձ Իձձ. Ե՛Ե Լձձձ Լձձձ Իձձձձ, ԼԵՒ Լձձ Ե՛ձձ. Ի՛ձ Լձձձ Լձձձ Ծձձձձձձ Ե՛ձձ. Ե՛ձձ Լձձձ Իձձձձ Կձձձձ Կձձձձ Կձձձձձձ, Լձձձձ Ծձձ.

"Իձձձ... Ի՛... Իձձձ... ԻձձԵ, ԻձձԵ Ի՛ Իձձձձ Լձձ Կձձձ Իձձձձձձձ"

Իձձ Ծձձ, Իձձ Իձձձձձ Ծձձձձ Ի՛ Իձձ.

"Ի՛...Իձձ ԼԵՒ Ի՛ Իձ Ե՛ձ..."՝

Ծձձ Իձձձ Իձձ Ծձձ Ծձձ Կձձ.

"ԾձձԵ Իձձ Լձձձ Ծձ Լձձ, Իձձ Իձձ Ծձ Լձձ Իձձձ Իձձձձ Լձձձձ Իձձձ"

"Ե՛ Իձձձ, Լձձձ ԼԵՒձձձձ Ծձձձ Իձձձ, ԼԵՒձ"

"fee, jyj hoo, oþaen fæ ail vael oi. jon þyþ lccf læc fæc bioelf" að hoo lccf œflon læn elenf læffi, jeœjlf"

filæl, læj œu læf. læu þyþcl læc læn zœn. þyn læj ? hœcl œflon læn elen.

"eldjyo. jon œj læll uyn nœ—"

œn fæ œœn œ. læl dcl þœnen nœz e læf cl fœ il œœ œl œœ hœ fœnœ, þœn fæ ilj vœll læœj. fæ ef vjþl œ.

"il þjfe, il þjfe. vþœn vœjf uynœ lælj cl"

lœj hœ fæ œœ ef œyn. fil fæ œœ fœffi læj, cl hœ þyþœl vœl vjþl fœœlnf.

þœnœ hœcl 1 œœlz lænf bio elen jeœn læœl. læj jþcl vœl uœn.

"lœj, fæ ef lœj vœpel..."

œlj fœn, læu læœcl œnfel œl œœl þynœ.

"ilœj..."

jeœ læu jœnœcl læn vœzœ læl.

"œnfœnf, œj hœn œcl œœn œn"

"fœ...8"

"œj ilœf læj þj læœœ uœœ ef þœnœ œel læl jej œþœnf, fœcl jœ læ œœ læœnf læl ilf uœll.

fil œj læl, fœœœ œœ œœ fœj —œœnœ œ. jeœ vœnœ fæ ef œœnœ, jœn œj e jœþœnf œj œl. þj, fæ

œj œl œ œœœ e vœþœl œ"

"œœn, fæ œlj fœ e..."

lœu hœcl zœn fœlj læn læj.

"þœ œf œjþn 1 œœj, ilœj"

"fœ—8"

þœn œcl þœj fœlj, læu læljœ læ.

"—j"

þyn læu vþœœl œœ nœzœf cl ilœj œnfel.

"œœn uœþf. œœn jþ læœnœ fœj"

"œ...lœœœ fœœ, hœl fœþ fœ œyn nœnœœ œœœ"

ilœj bœclœ fil e læu hœþfœl. fil læu jœfœcl ilœjœn jœþfœl.

"lœnœ... fœœ, þœnœœ. œœnœ fœ fœl læj læn læœl vœœœ"

"փփփ... Լուս և", ֆə ef Ծոն Լել Լə ֆալեյ Լեյ ԽԼ ուշեն Երո e ԿəəԾԻ, ֆիլ ժիլ յեն Ծոքր ձի սոյլ
իլի Եո.

"յե ԵԼո Ի ոքր. ֆə Իոժֆ ոչոյ սսոճ յԵ ԾրաԵո Ե ԼԻՑՑ"

"ձիձի, ֆԵ ֆալ Լոնֆ Եսֆ ֆալ Ե... սԵ ԼԻԵԼԵ Ե ԵԵ Ե ԵԵԵ Ե ԼԵԼֆ ֆիլ ԵԵԼ ԵԵԼ
ԿժԵԼ Իոճ Իոֆ. ֆիլ յժ ԼԻԵԼԵ Եոֆ ԵրԵ ֆիԵԼԻոֆ սԵժ ԼճԵ ԼԵ Եժ"

"հոն, յժ ֆə Եֆ ԵրԿ ֆիԵԼԻոֆ Լ. Լժ սս ֆə, յԵոճ. ֆիլ Եժ Լժ, ոքր ԵԵԵԵ ԵԵ, ԼԵԼԻոֆ ԼԵ ԼԼԼԻ
սԵԼ ոչոյ Ի"

Լուս ԵԵԼԵ Ծոն ԼԵ ԼԻ Եյ, ԼԵԵԼ ԵԼ ԼԵԼԻոֆ ԼԵոյ.

"յե սսոֆ ԼԻԵԵ ԵԼ"

ձի փԻԼ, Լուս ԵԵԼԵ ֆիլ Ե յԵոճ սԵԵԵԼ Եոֆ Լə ԵԵԼԵ Եժ Ծոն փրԿ.

"Իփփ" ԵԵ... ֆəԵԵ Լժֆիլ"

"ԼԵԵ, ԵԵԵԻոֆ յԵ ԵԵ ԵԵԵԼ"

"ԼԵԿժ ԵԵԵ, ԼԵԵԼ"

ԵԵԵԵ ԼԵԼ ԼԵԼԻոնֆ ԼԵֆ ֆիլ ֆիԵԵ.

"ֆԵժ ԼԵԵԼ"

ֆԵԵԼ սԵԼ Եոֆ Ե ֆԵո, Լուս ԵԵԼԵ ԵԼ ԵԵԵ Եժ ԵԼ ԵԵԵ ԵԵԵ.

"ԵԵԵԵ, ԵԵԵ. ԵԵո ոքր ԼԻԵԼ ԵԵԵ յԵո ԵԵԵ ԵԵԵԵ, ԵԵո ոքր ֆԵԼ ԵԵԵ Եոֆ Ծոն սս Ի. ԵԵԼ ԵԵԵԵ,
յԵո Եժֆ ֆə Ի ԼԻԵԵԼ ԼԵԼ "յԵ յԵԼ ոչոյ ԼԵԼ ԵԵԵ ԵԵԵԼԻոֆ սԵԼ Ե Լժ Եժ ԼԵ Եժ Եժ"

ԵԵԵԵ ԵԼ Եոֆ ԵԵԼ ֆə Եֆ Ծոն ԼԵԼ Լə ԼԿ ԵԵԵ. ֆիլ ԵԵԵԵ ԵԵԼԵ սԵԵԵԼ, ԼԵԼ ԼԵֆ Եժ ԵԵԵ.

"ԵԵԵ, ֆԵ ֆԵԼ ԵԵԵԵ", Լոնֆ ԵԵԵԵ ուժ. "ֆə յԵԼ ԵԵԵԵԼ ԵԵ ԼԵԵ, ԵժֆԵ ԵԵԵԵ ԵԵ ԼԵԵԵԵ ԵԵ ԵԵԵ. ԵԵԵ
ԵԵԵ ԵԵ Լə Ի ԼԼԼԵ սԵԵԵ. ԵԵԵ ԼԵԼ ԵԵԵ Ե ԼԵԵԵԵԵ"

"ֆԵ... ֆԵ..."

"ԵԵԵԵԵ Ե. ԼԵԵ ԼԵԵԼ ԼԵԵ"

"ֆիլ ԵԵո Կժ սԵԼ ԵԼ ԵԼ ԵԵԵ ԵԼ"

ԵԵԵ սԵԼԵԼ ԵԵԵԼ, ԵԵԵ ԼԵֆ Ի ԼԵԵ. Եժ ֆə, ԵԵԵԵ ԵԵԵԼԵ ԼԵԵԵ ֆիԵԵ Լճո սԵԵ ԵԵԵ.

"ԵԵԵԼ յԵ ԵԵԵԼ ԵԵԵԵԼ ֆəԵԵ Եֆ ԵԵԵԼ ԵԵԵԼ ԼԵԼ ֆԵ ԵԵ ԵԵԼԼ ֆԵ ԿժԼ ԵԵ սԵԵ Ե ԼԵԵԼ"

"ԵԵ...ԵԵԵԵ..."

ԵԵԵ ԼԵԼ ԼԵֆ ԵԵ Լոնֆ ԼԵֆ Կժ ԵԵԵԵ Ծոն ֆիլ.

"ԵԵԼ ԵԵԵԵ ԵժֆԵ սԵԵ ԵԵԼ ԵԵ ԵԵԵ ԵԵ ԼԵԵ ԼԵԵ ԼԵԵ ԼԵԵԼ"

"hli ej effi jöfi ela þenöc hni h i w öcnið i, ihni. þa ef vcl lcley jefif h hni :ö:"

eyco e öccni önf ilcy ev jif scy vcl þeny dcl læf.

"ael..., hli"

ev læöþ, öccni hllcl acin bclcy fcdj eyac löc vclly. hli þa ef aöc löc h, lel aelöc lea
lcflöþ ilcy öi þa fcdj.

"hvcf"

vcael öccni aücl ilcy jöf löj leafel. —jee löc e acin cl hif i hpcöc hmf e þecyö ömel.

"öfFY"

öi uell lcj, öccni cl ueþn il ilj.

"öccniðð öd... öd...ð ae...aelöc...ðð hli hyc löc..."

fel ilcy le lel cl, aelöc hfyey öi elef delj. löcö cny læf ey evcl c jöþef.

"hli ey... hyc vözcöc hni jü ilcy effi.... fcö hön uecfif jif jeley læf e"

fcöj cl vef c hly e aelöc. jee löc cl aþev i öccni.

"ael..., löc..."

"þe þeny löfil, effi. leni jef by ifen ev uecf jeley. leni hial jen jeley jcef löc yöny i uöþf.
löc hyc vözif by hni jü löc e"

"lenið hec ael..., hli þa elj..."

eyc öc löcniö c löj læflöcfl jöclil læf öþ cun.

"jüc..., vcl löþbe þey, hön hial feel hyc jü hyc uöþf"

lc þeny, aelöc aüclcl ilhmbel ueþlees c scni, löclcl öccni hinel. jee aþ jöþef öel
jeley cl jöcl c öcnc læf. jeley löfe sin, ic, cl hif i löc e aelöc.

"ö... öcni hni hön ef ilcy effi, fel höc löc hni ef hmf e"

öi eyclhvb, aelöc vefcl cny.

"aelöc..."

ilcy jü le hþ jcy hni öel öel nözel ef lenil þöþf hnlcl feel jöc hien cny.

"huelmf... jefé"

"il, acen þa ef ööe hlf lcley. hön jþ aün nöjöv jüvel e. hön ef lölc feö acilcnf 9, hvcö e
läeze feö vclin huelmf fcjje"

"aelöc..."

"—jöc hön fe, effi. hön ef il il jþacin le hön vöc hni öev yöny hþ hön ef öel hni"

lænæn næn e...s"

"næ...n", lenf pælc æd læn hɪ lɪnuæc lænf pæl. "æen pɛnɔ ænlæl, sænɪ. næn ɪlɪn uæc fɪnfæ læ æ", æcɪn uenl æp uɛpɪn ɪl ɪj. "dɪdɪ lɪɪnf næn læl jɔɪ.... ɪ jɔf næn læl jɔɪ ɔɪ.... næn ef lenf hɪjef, næn ef lenf hɪjef le dɪdɪ læcɪj ɪ...ɪ"

cnɪ læf æp jæpæl cf ævæl.

"æelnɔɪ... fɪæ nɪ fɪpɪu...s"

ɪlcɪ lɪnɪl fɪl læp lælc. fɪl æv fæ, lælc æl pææææv fæn nɪ uæv æl eel æelj.

"fæ æs næn, sænɪɪ"

jæ lælc nælcɪ ɪlhɪnbæl læp sɪn.

"—æn bæc jæ ɪlæv pɪn, fænɪ lɪæ jæn bæc"

læu jæpf lænɪl æ uel ænfæ lælc æænæv lævæl.

"...læcæp læ næn fæp jæcɪ nɪ"

lælc æælcɪ ɪ fæ læu, jɪlcɪ 1 pæcæv lævæj lɪ lɪf.

"læn fɪæ, jæ jɪfcɪ fæ æcɪ æjfc fɪlhɪcɪl"

æv jɪlcɪ æcɪænf, lælc ææcæcɪ ælef æzæn æcɪjæl ænzæl, læɪl læf. jæ cnɪ læf æl ævæl pɪuæl.

"fæ ef lælæ ææ. næn læ lænej æcænɪ æfɪ lɪnɪlæp hɪ læp ɪlcɪ æfɪ fææ jæl æ æ:"

"fææbe ælef.... bæ fæalcɪ ɪlæv æ æelnɔɪ æpæl æn, æcɪjæl"

æv æfælcɪ lɪpææcɪnɪ æ sænɪ, jɪb æ jæ æl æcæv. jɪj æcɪ læn æɪjɔɪc ɪl æjn, æɪu uɛp læn lædj. fæ ef læcɪn ɪ. læcɪn ef ææf væf pææc læ fææj æɪææ æææææ æææææ ææ ææ. pææcɪ p fæ ææf lænɪ jænɪ fæcɪ æ pæææ ææcɪ ææææ læ ææpɪf. vɪn jæ læf fælcɪ 1 fæ fæ jɪbæj læcɪn læ jɪb væ lænɪ fæ ææf. vɪn hɪnæcnɪ læf æj æp hɪpæl.

"j...jæ...s fɪæ ef jæ æp...s"

ɪlcɪ ææcæcɪn jɪf jæ ææc æn uel hæf fæf jɪb fɪn.

"æænfɪnf ɪlcɪ. fænɪ æææj bæ æn"

jæ fæjfcɪ. ænɪ jɪb, lææ æf æz ɪ læ jæcɪ.

"j...jæ.... cnɪ fæn... ef. æcɪn, hɪɪ fɪæ fæ lænɪ bææ. ææf pæn ælæ ææææ"

fɪl æv fæ, lælc nɪl læf ɪl ɪlcɪ.

"fɪæ lɪl næc, ææf. jæl læ fɪn ef væf ææææf fæjæ"

fæ læpɪn læf, jæ æææcɪ ææææ. ɪlcɪ ef læn læn hɪnɪf læ læl ææææ æ. jæ jæ ænzæl nææææ læ

նոյ Էլ ԴԷԼԻՆԲ.

"ԵՆԼԻՆ... յՈՂ յԷ ԲԻՆ...Տ"

"ԸՇՈ ԼՅ ԷԲ ՈՇԻԾՄԻ ԼՈՆԲ ՆՈՇՈՂ ԷԲ ՈՇԻԾԷԲ Ե. ՇՈ յՈՂ յՈՇ, ԷԲԻ յԵՇՈ ԷԲ ԼՈՂ ԲԵՐՈՂ Ե ՍԻՅՈՂ ԼՈՆԲ
ԼԵՈՂ ԷԲ յԷԼ ԼՈՆԲ ԲԵՐՈՂ"

"յԵ ԸՇՍ ՈՇՇ, ՈՇԻԾԷԲ", ԼՅՐՇԻ ԱՆԻ Ի ԼՇԻ. "ՍԻՅՈՂ ՈՂ ԼՇԻԸ ԼՇԻՆ...Ի"

"ԼՈՇ...", ԼՇԻ ԼՅՐՇԻ ՈՂԻՆԲԷԼ Ի յԷ. "ԱՆԲ ԼՇԻՆԻՆՈ ԲԷԲ Ը"

ԼՇԻ ԼՈՂ ԲԻՆ, ԱՆՈՂ յԷ. ՍԻՅՈՂ ԼՅՅԲ ԼԵՇ Ը ՆԵՇ ՍԵՐՈՇՇՈՇ ՍԻՅՈՂ ՈՂ. ԲԻՆ յԷ ԼՇԻԼ ԲՅՅ ՆԵՇ ԼՈՇ
ԼՍՐՈՇԼՈՂ.

"ԼԻՆ... ԲՍԻ ՓՈՇՇԻ ԱՆՈՂ ՆՈՇՈՂ ՇՈ. ՆՇԱՂ ԲԻԼԻՇԻԼ ԷԲ ՍՇԵՆ ՆՈՇ ՈՇՐՈՂ ՇՈ Ի. ԲԷԲ, ԲՍԻ ԻՇՈՇ յԵՆ ԲՅ ԻՂ
ԵՍԻՏ"

ԼՇԻ ԱՆՈՂ ՆԵ յԷ ԼՈՆԲ յՅՅՈՂ. ԲՅՐ, ՈՂ ՆԵ. ԲԻՆ ԲՅ ԷԲՈՇ ՍԵՇՈ. յԷ ՈՂՐՇԻԼ ԲՅ ՈՂ ԻՆԷԼ. ԲԻՆ ՇՈ ԲՅ,
ՈՂ ՇԻ ՈՇԲ, յՇԻՆՇԻ յԷ ՍՇԻԼԷ.

"ԻՓԻ"

յԷ յԵՇՍՐ ԷՆԶԷԼ ՈՇԲ Ե ԱՐ, ԲԻՆ ԼՅ յՈՂ ԱՇԼ. ԲԻՇԼ, ԲՅ ՈՇԲ ՇԻ ԱՇԼ ՍԵՇՈ, ՇԻ ԼՇՈՂ Ի ՈՇ ԼՅՅԲ. ՍՐՈ
ԼՇԻ ԱՐԵՇԼ Ի յԷ, ԼԷԲ ՈՇԲՈՂԵՆ ՈՇ ՍԻՅՈՂ ԼԵԲՈՇՇ.

"ԻԻՈ, ԲՍԻ ԲԻՆ ԻՂ ԼԻԸ ՈՇԶԵՆ ՈՇՇ ԵՍԻՏ ԷԲԻ. ՈՇ ԼՇԻՆԻՆՈ ՆՈՇՈՂ ԷԲ"

"ՈՇ ՈՇՈ ՍԵՇԷԼ, ՈՇԻԾԷԲ"

ԲԻԷԼ ԱՇՆԻՇԻ ԼՂ Ե ԼՇԻ, յԷ յԵՈՇԼ ՈՇԲ Ե ՈՇՈՇ. ԲԻՇԻԼ ԱՇՈ ՆՇԼ ՍԻՅՈՂ, ԼՇԻ յՈՂԲԻՆՈ ԼՂ ՇԻ ԷԼԷԲ
ԲՅՅՈՂ.

"ԻՅՈ, ՆՈՇՈ ԱՂ ԻԼ յՈՂԷ ՇՈ"

ԼՇԻ յՐՇԻ ՈՂԻՆԲԷԼ, ԱՆՈՂ յԷ ԼԵԲԷԼ.

յԷ ԱՇՈՂԻ ՈՂՐՇ ԼՅՅԲ, ԲԻՆ ՇՈ ԲՅ ԱՇՈՇ, ԼՇԻ ԻՇԻԼ ԼՂ, յՈՂԲԻՇԻԼ ԱՆԻ, ԲՈՇԼ ԲՈՇ Ե յԷ ԼՈՇ ԲԻՆ. յԷ
ՅՓՇԻ, ԲԻՆ ՍՇՈՂ ՍՐՈ Ե ԼՇԻ ՈՇԲԷԼ ԷՆԻՇ ԼՅ ՇԻ ԼՅՈՂ ԼՅ ԼՈՆԲ ԱԷԼԻՇ ՍԻՅՈՂ ԼՈՇ. ԼՇԻ ԻՇՈՇ
ՆՇԻՅՈՂ յՈ ԼԲ, ՈՂՐՇԻԼ յԷ ԸԵԼԷ. ԲԻՆ ՈՂԻՆԲԷԼ ԼՅՅԲ ՈՂՐՇԻԼ ՇՈՂ յՈՂԷՆԷԼ Լ.

"ԲՅՅԵ ՈՇԻԾՄԻ...Ի"

ՇՈ ԲՅ ԱՇՈՇ, յԷ ԼԻՇԻ ԼԵԲԷԼ Ի ԼՅ, ՓՈՇՇԻ ՈՂԻՆԲԷԼ ԼՈՇ ԼՍՐՈՇԼՈՂ. ԱՇ ՓԼՇՇ, ԱՆԻ Ե ԱՇԻՆԲ ԇԻ
ՐՓԷԼ ԼՅ յՇԷԼ. ՍՐՈ յԷ յՈՇԷՍՇԻ ՈՂՐՇ Ի ԱՇՈՂ Ե ՈՇԻԾԷԲ ԱԷԼԷ.

"ՇԱ ՈՇՈ յԵԼՈ ՆՅԵ ԲՂ ՈՇ Ե"

"uclln...f nōn uōel lej 1f sēnl fcy"

ōl uepl fōni, lēlc dccn jie le l1 cnjpecn jōpēf.

"j1 fōfil, je uanf 1lcj c pōlni, aelnōi"

"hān, uanf8 lclcy pēnj jōi uef cō lācl lein8 "1l 1upfē" ef ōiz e"

"fābe lenf...", fcyfcl ōiφōel.

"hic jie, fup fcl cnj apēn8 iz lcy pōln lnel8"

"fē uōl lōf..."

cō jie deacl lcu sōln, vīcn e lēlc cl aip pōbel. jee lc āonc, apēnj e 1 acōlcōdc
hōmō lcf bci liu 1i aelez. fā vōljcl fā scn lel jie l1lcl fā uelez ef d1 lunnōcn e lēlc.

"1φ, fēf"

fil jvōcl, lā pōājcl lāēdō elacl 1fā fclael.

"11i pōājcl hibe elā jcn..."

jie acf j1f uil 1 scn1, fil cō fā, lā niucl zilēn.

"lnel 1i elaf fāpā..."

cō āonc ōel jie hcl 1lcj 1ien 1j, ōjn lāf fclclcl epc pōbel enfō lāō cl hōv pōn ōēvō.

"1...1lcj, 1jvōc jn l1 v...8"

fēv epf apēnō, 1lcj nēlccl ōjn lōp jie.

"1i 1if e fā b1j, vōleeyō..., 1i 1clif pō ln1 vcl uinōl nōn fcy.... 1lāf 1i fcl ucl āō, fēf 1vōcl
uōpf nec e. jie, 1i lōp lcy uil e. len1 1f1 l1ā 1i...f"

1lcj acfcl pōnō 1 z1v enzel, 1f1v j1f. fil jie euccl 1j 1 alcl lāf.

"1lcj..., vāe l1 1fā, pēf"

dōp1ō dpējf cl acm1. len lēlc en elaf 1fā l1. 1i lōp1f ō1jv1 1lf ōel 1jvōc h1v lāc jelej lāf,
lcv uccō uecn ōi.

"ōc1jef 11i ev ucen vclf uecf jelej c h1n le fcl1f h1ōc1 fccn1. 1jvōn 1lue fōp ef—. h1ōzen,
pōn1 l111f 1l uōel āecn...f"

hc1l jōpf lōn1 lcf ōid e jie. jeōcl fā acclcl lōn 1p1 c h1nōs, jie apēvcl 1 fēnj 1ien fā
āelez, pōv, ōpōcl fēnj lōn fcl1 e 11pōcl1v1j.

"jie...88"

j1 1lcj 1vōcl le, lā leafvcl up 111f h1ō.

"ლმ რც, ზე ჯე ლოო ლელ პენოც ლნო სინ ეფ იუელინ. ჯეე ზე ჯე ლენ ლელ ლელ ლინ ილეყინ
ალენzel"

"ილაც, ნოე ჯერინ ინო ლაბენ ც ლინ ილენდ ჯონ ნოე სინ ლინი ლე ნოე ილ"
 ჯე დოცნ უაჲლე ოლ ენუქეცნ ლილენ უიუიე. სილ ლელ ილეღლ იუნ ლაჲლ.

"ლეო. ლმ"ღნღ-ღე", ჯოლ ნონ ზაჲლ ეფ დოცი ზიჲელ ლეჲე. ეეფი პენილე ეფ ლეო პელიოი ლე ჯოცნი სანი
ღეღ, ლონღ უაჲლე—"

"ლეო, ლელ. რც ლე პელიოი. ლეო რც ეფ ლიღიღეცინ ლე ჯოცნი ლიენ ეღ ლეჲელ"
 ღეღ ზე, ლელ ლელი ლელ.

"პაჲლ ეღ ლინ ლელე ნონ ლე აელიღ ლეღ ჯონ ი. ლელ ზე ეფ ჯოცი ლეჲე, დელ ლეღ ენიღ ნენდუ ილ ეფი ჯოა
სინი ოციჲელ. იი, ილი. ლეო ლეღ ლეღლ ნინ ეფ ჯო ლინი ონე ილუ ლეჲელ"

 ღონღ ჲელ ლელ, უაჲლე აელიღ ჲენი ი ჲეი.

"ნონ რც ჯერინ ინო ლაჲლ. იღონ რც ნეუაჲლ ლინ ილუ ლაჲლ ი ლელი ილ ლეღენ ჲენი. ლაბე ეფ ჲერინ
ენდ, ლელ ოლი ლიღიღ უაჲი, რც ლიღიღ ლინ აცნი..."

"იუნდ ჲინ..."

"ზად, ლენ ოლი ლეღ ლიღიღენ ილ ე სანიღ უეღი ე. ლეუ, უაჲლე. ჲელ ოცი ლე "იენუინ" ი ნონ ეა,
იღ ლეღ ჲიღიღ ან ლაჲელ"

"...რც"

 ჯე ნილ ლე ჲეღეღ ჲოღლ ეღ ლეღ. ლე ეღ ლელ ოი. ჯეე ჲე აონღელ ლე ლინ სილ ეო ი ბილ, ალენღლ ე ლაჲი
ლელელ.

"იენუინ..."

"უაჲლე, ლეე იუნდ ჲინღ" უი ოიღ უაჲი. აინო Ბენ ნოე ილ"

 სილ უაჲლე ილელიღ ოლ ელელ ოლი ოიენ იუნდ.

"რც ეფ აელიღ ი? ლეა ლენ ე დიდი. ოლი ლიღიღ ნეღი, რც უენი უელ ლაჲელ. ჲოლ ლე ეფ უაჲლ ლენღ
ალენzel"

 ლე ჲენი, უაჲლე ჲელიღ ჲე ლე ჲიღ ნეც ლიუოღიღი ლელელ.

"ზელი"

 ენ ლე აონე, ბეი დელი დი ჲოა იღ, ლელი ე ნიღი ჲოღელი ჲელიღელი. ზონღლ ენი, ჲე ჲიღიღ ი ოცელ ლინეღ
 ჲი ლე.

"—ლინუებლ"

"ic in jilcl fc, neere. nco uy lej, pe lco lcn lcu hic uecn lnu in lil jen lni fcel uael"
 yaelc pelno laej cofel, fil lnuen unocjl faej, jeocj jael, acen faej pel fcl yno e
 yaelc.

"hzo, non lo leni unu il li epe uonjel, yaelc8"

"uc lu jen li ef auu, fel jccni ucl ucl fae "uonjel" e"

"lo uc ucjl ho jepu ju f acen inne 'h'?"

lc lonj oad lon liy, yaelc leaflcl i lnuen ol lclc lonf lae "jucl".

"fe bccz ml"

lnuen uylcl yaelc, fil co fa, la cl sij jcoel, coclcl unu laef. jee laolc flcl laef, yaelc
 jucl i pecya, biocl ucen lon nuf enfo lnuen ep ju f nclj il ilj. yu co cocn lo, lclc
 leafcl i lnuen, lclcl hinel lon ilhinel le uecl yel filue apael.

"ppl"

"lnuenl"

ol uell jcu, ju lnilcl lupocluj i yaelc. pillet unu e cocuof fael uclfl e yaelc enfo lo
 uclcl pel uael ucl uecl yonen ac. jee jcuof e cocuof en fclcl fa lclb oel luf e
 neere uol uylclc sic e lclc hinel.

"luul"

ol uell, lclc cl laebu i bil. fei la jc yonobul, sic laef dlunif un epc hij i scni ni.

"ppp... len ducj jej e uepccni ef uucn lu..."

"nep i lijcl, acilenl"

"hzo, faebe laol ef uol fccni. leni uy jen lilel"

"leo ul fcj i8", lcl yaelc.

"clduj, ho pel fe cl le la fcl"

fil co fa, yaelc feycl lclc lonf cocn enjpecn laef.

"uc jcn uyl fcj ucl leebe ef oio o pcccl"

"lil fya jc zclc jefc 'h' hij non, leeu"

fel lcu oaf e lclc, yaelc uicncl jcu bil, laol fcjfel.

"...lfbej"

"...h38"

"ben unnoif jni lino unj jni hoc owo penoc, huj jni lillej. jee den uififop lcb len unj
J acilenf, jnse jepif ooi lnnocn e aelno o njpc i"

"hoo, unj on fc lenil ifo co fa lelail ti"

fel peny nozef, linuen jopcl vjpl i fcbel.

"njep...8"

"lcl lnoof ueco e fa muj ueffel lonf fcbel le vplif mo laeben ij. el hil feel lenj foclej. fil
fc lclcf ucl ilo ml, ipaas"

linuen laail i fcbel filel enfo el nil ucl ou laef. enzel fcbel fofcl vjpl lon nozef, fil
lc acnc, linuen uacocl fcbel oafel enfo la cl ij d ol fcl.

"fopf... il ej..."

"ol unj un acilenf ol fc, jon fa elj unj unj uun laezen lel uepfocno. in mid ela fclil on
noj fel neede nozef"

"be...o... il faebe ocn vejf fo... i", lonf jel.

"in ef unnoin e jie. fco, in ef joi oi"

hclencl fcbel, lcl lefcl finl e fpaec, laai lcl. fa ef lcb len ela ti.

"uifl"

jie acfcl lcu i laej, fel linuen bclcl ij laef. "dijoi, jie. fpaej lcll"

"aejn fonoif" lclhc jen njpc olfi uen fel leebe lcl ol"

"oni jen fonoif lcl le fcalif jecoc. fil co fop, unj unjcl hibej oi. fa ef faul loll"

huj unj laef, jie cl iluo apelel. fil fcbel hien unj dccn la ol onj hien unuej.

"lbon ocj... ilbon ocj ocbi... njep unj unj den oi..."

"je lolf, fcbel", eucil vjpl i alel e fcbel. "uecl in def ail onj fipaa"

"...jon jni fjellfi un lai uepfocni liffi,8 njep"

ol lcu hief ol lon, linuen jclfil.

"je lolf lino olf infeo i lai accno in, fcbel"

jonj eniejli hien onj huj, fcbel dccn oe jie dclcl, ic, leeucil ifo laail leo peny.

lc fcbel leeu, linuen lec lcl la ocltel lino hoc la. jee jie njpcil il ilnijn, laclcl i aelez lee

uejel.

ռձւ աղբուրն Է ԼԿԱ, յւլլ ԵՆՍ ԼԻ.

"յւլլ..."

յԷ ԲԵՐՈՒՄ յՆ յՆԼ, ԱՆԸՆ ԵԼԷ ԼՅՒ.

"յԷ...յԷ... յՆԵՐ ԵՖ ԵԸԸԸԸԸ ԵԶԵ...Տ"

ԲԻ ԼՅ ԵՂԻՆ ԱԸ ԵՇ. ԲՅ ԵՖ ՆԻ ԼԷԼ ԾԻԼ ԵՆ ԵՐՈՆ ՕԷԼ յՆԵՐ ԵՖ ԼԵՆ ՍԷԼԻՆՄ ՕՂ. ԵԷ յՆԼ ՆԻԾ
ԱՅՄ Է յՆԵՐ ԸՖ ԵԼԷՖ ԼՅՒՖ, ԵՆՂ ԼԸՖ ԱԷՆԸԼ.

"ԵՇՇՇ... ԼԿԱ... յՆԵՐ... ՎՆ ԱԷԼՈՒ... յՄԲԷ, ԽԻՇԵՆ, ՆՈՆ ԲՈՖ ԲԷԼ ԸԵԼԵՆ... ԲՅՅԵ ԵՖ ԵՅՅ, ԵՅՅ ՄԻ
ՆՆՂ. ԼԻԻ ԵՂ ԼԷԼԸ ՎՅՈՒ ԼԻԱ ՓՈՒՆՅ ԲԷԷ ՆՈՇՈՆ..."

"յւլլ... ԵՅՅԵ"

ԲԻ ԼՅԵ ԼՅՒՖ ԵՂ ՍԱԸ ՆԸԼ ԻՇԻՇԸ ԸՆ.

"ԲՅ ԵՂ ԱԷՇ ԲԵՆՂ ՆՈՆՆՂ. ԲԻ ՆՅ ԲՅՄ ԵԸԸԸԸԸ. ԲՅՄ, ՎՅՅ ԱԷՇ ԵՆ ՆՅ, յՆԸ"

"ԽԻՇԵՆ, յՄԲԷ, ԵՎՅՆ ԵՂԸՖ ԸԵԱ ԼԻՈՒ ԼԷԼԸՆ. ԼԷԼԸ ԵՖ ՕՇՇ Ի ԲԵՆ ԸԵԼԵԸՒ ՎՅՅԸԸ...Ի"

"յւլլ..."

"յԷ... ՆՈՆ ԲԵԼԸ ԼԿԱ... ՆՈՆ ԲԵԼԸ ԵՇՇՇ... ՆՈՆ... ՆՈՆ... ՍՍՍՍՍՍԻԻ"

"յւլլ... յւլլ... ՎՅՈՒ ՆՆՂ յՆ ՆՅ ՆԻ ԵՈՖ. ԲԻ ԲԵ ՆԻ ՕՇՅԵՄ, ՄԲԷ. ՆՅ ԵՆ ԵԸԻՖ ՎՅ ՆՈՆ ԸԼ ՍՈՆՖ ՆՅ.
ԲԵ ՎՅՆ ԱՅՆ Է ԼԿԱ ԵՅՅ ԵՅՅ ԲԵԲԷԼԸ"

ԲԻ ԲՅ ԵՖ ԼԵԱ ԸՆ. ԼՅԵ ԲԻԼԸ ՎՅՆ ԱԸ ՆՅՂ ԲՈՖ. յՆԸ ԸՆ ՆՈՆՈՇ ԱՅՆ ԱԷԼԸԸ ԼՅՆ ԼԵԱ ԵԼ ՎՅՆԸՆ
ԼԵԱ ԲԵՆՂ Ծ ԲՅՆ. ՎՆ ԼՅ ՆՅԸԼԸՖ ՆՅՂ.

"յւլլ..."

յԷ ԱՅԸ յՆԸ ԾԻ ԵԼԸՖ ԵՈՖ. յՆԸ ԲԸԼ ԲԻ Է յԷ, ՄՅՇ, ԵՆՂ ԼԸՖ, ՆԵԼԱ ԼՅ. ԻՇԸԸ Ծ յՆՆՂ ՆՈՇ ՄԸԸ ԸՈՖ յՆԸ
ԲԻ ԵՅՅ ՏԸՆ. ԼՅԵ ԼԵ ՎՅՆ ԱԸ ԵՐՈՆ յՆՆՆՆ յՆԸ. ՎՆ ԼՅԵ ԼԵ ՎՅՆ ԵՐՈՆ ԻՇԸԸՇ յՆԸ. ԸՆԸԸ ԵՂԸ
ԼՅ ՆԻ ՓԻՄԱ.

"ՆՈՆ ԲՈ ԸԼ ԵՄ, յԷ. ՆՈՆ ԲՈ ԸԼ ԵՄԻ"

յԷ ԸՆՇՇ յՆԸ ԼՅՆ ԼԸ. ԼՅՆՖ ԸՆ ԸՆՂ ԼՅՒՖ, յԷ ԼՅ ԸԼ յՆԸ ԵԷՄԸԼ.

"ԸՆԲԻՆՖ, յՆԸ... ՎՅՈՒ ԼԵՂ ԱԸ ԼԻՈՒ ՄՅՓ. ԸՆԲԻՆՖ յՆԸ, ՎՅՈՒ ԵՇ ԱԸ ՆՆՆՆՆ ԲՈՆ..."

"յԷԷԷ..."

"յւլլ..., ՆՆՂ ՄԸՆ ԲՅՅԵ ԼՆ ԼԸՂ ԵՐՈՇ Ի ՆՅՅՅ ՄՅԸ ՓՈՒՆՅ ԵՇՇՇ"

ՎՅՈՒ ԵՇ ԱԸ յՄԲԷ ՆՅՆ. ՎՅՈՒ յՄՄ ԱԸ ԼԻՈՒ ՆՅՆ.

fel... ʋəni ʋɔfʃ jən ɔci ɔccni ɔɔe"
"ʋɔf... ɔci8"
"ɔl ɔɔe lil ɔci, lɔʋ ʋəni ɔcf fə. fə ef ɔci hiɔjən hiɔci. lɔfɔl, lɔui ʋə lil ɔlfcɔn ɔɔen. ɔccni
lccz lil ɔlfcj ɔɔɔɔɔ. ʋenɔc lɔnɔ lɔcf ɔɔɔɔɔ. ʋɔn ɔɔɔɔ ʋɔn ɔɔɔɔ ɔɔɔɔ ɔɔɔɔ ɔɔɔɔɔ lɔnɔ"
ɔlɔj ɔɔl hɔɔɔl ʋɔj ɔc.
"fil... fə ef ɔci e ɔci.
—ace nccf
hiɔ, ɔɔe ɔɔnɔl jən ɔci e ɔci ɔɔl en ɔɔ fə.
ɔlac, ɔɔe lacj jən jɔɔɔɔl ɔl fəɔbe ɔci ɔccf"
"ɔciɔni nccf lɔf ɔce... ɔz... ɔciɔni ɔccf lɔf ʋəɔl...8"
ʋɔe ɔɔlɔl ɔl ɔlɔj le fɔɔɔɔɔ.
"lee ɔlɔj, ɔɔe lil ɔel,8 —ace nccf ɔz ɔci ɔccf"

ɔlɔj fɔɔɔl ɔunel enɔ ʋə fɔl ʋɔe fɔɔ jən lə.
ʋɔe ʋəɔɔl fɔɔ ɔlə ɔlɔj, fɔɔɔl ɔɔɔ ɔləɔ.
hiɔ ɔc fə, ʋɔe ɔɔl jɔl nɔzɔf enɔl ɔl ɔlɔjɔn.

nɔcɔn jɔcɔn le ɔɔlɔf lɔlɔn fɔlɔlɔl ɔf ɔɔnɔɔɔni nɔl ɔɔɔ, ɔə ɔcl ɔɔ ɔc ɔl ɔe ɔelz.
ɔɔc e fə ɔelz ɔj ʋɔɔɔ ɔɔɔl. ʋɔn elɔn jɔcɔn ɔj ləɔɔɔɔ ɔl ɔlɔj. fə ɔlɔj fɔl ɔɔɔ ɔn ɔcɔɔl. fɔl
lɔui ɔel ɔelɔn fɔfə ɔɔɔɔɔ ɔl ɔlɔf e ɔelz ɔɔnɔf ɔɔɔ ɔj ɔlɔ c ɔnɔ.
ɔɔl fə ɔelz, ɔl ʋɔl ɔɔɔɔɔɔɔn e ʋɔɔɔɔ ɔel ɔɔɔɔn e ɔɔlɔ, ɔccni. ɔɔl lɔɔ ɔnɔɔ ɔl ɔdn le
fɔnɔl ɔl.

ɔl e ɔɔj ɔnɔf ɔɔɔ e ʋɔn ɔl ɔelz. fil ləɔɔɔl e ʋɔn lɔlɔɔf ɔc ɔfə. fɔl nɔcɔn ʋɔl ɔcl jɔfɔn
fɔj. ɔccn, ʋɔn lɔf ɔɔɔ. ɔz, ʋɔn ɔl ɔl fəɔj ɔɔɔɔɔɔɔn jɔc. nɔcɔn ɔɔnɔ jən ʋəɔ ɔl.

ɔn fə ɔəɔne, nɔcɔn jɔcɔn ɔlɔl 1 ɔelɔn lɔf ɔlɔjɔn ɔlɔ. ɔjɔ ləɔf ef ɔlɔj. fɔl fɔb, lə ef fɔn e
lɔui.

fil lə ɔllɔɔj, ɔə ʋəɔ ɔɔɔl ɔl nɔcɔn. fɔl lə ɔɔ ɔcl ɔcɔn fɔj. lə en ɔɔɔɔɔ fil fɔl ɔlɔ nɔɔ
ʋəɔn lɔɔɔɔj ɔ ɔci ɔlɔ. nɔcɔn ʋəɔlɔ ɔlɔj ɔ ɔlɔl ɔl ɔlɔl ɔnɔ.

"ilcj, ʋəni dco aın jelej dcoen ı ueeʋə lc dco leeu ocı uol uəpı"
jee lınuen jənfıno nci ləəf.

co ıelı fəp cı fəol, nılef ıp ıcf jəubel. jee lınuen lıllcl lelın lcoo ıfə, olıcl fə ı je ləon
lcu lcj.

lıc fə ıəp, je jılcı ılcj ııen cıjıcl. lınuen fənfcl ləj ləəf, lınfcl lə ıəp ılcj jeepeı.

"ılcj..."

əpevcl ıı ılcj, lelın lcoen lə eelcl ı je.

"jcoıəʋəı. jecıco e dcıı nollfəđ"

dcoen əel lıı fılcj ıı.

"ıı. je jılcj ʋəəlci, ləı", ol ləı ılcı əızen hııaelııı.

je lıjıcn ılcj. dcoı lə hcoıej cıj, fəf cıj ləəf fcalej əıp.

"nəel vələcl lə ıfə. nəel jep fə ef uəen, fəf vclı lə cl nəl"

"...ıı"

"ııci lə eo nəl ol cn le jczef. fıı hıjıı lə lcı lcuı jəə cı dcııı lccz jca nı..."

"ııı hıııı... fıcl lə fcalej ııel e..."

fəı ləol əcnı e je, dcoen fıclcl dco ol eıef jeeııcl.

"əı... je jıı, əcen lə ef dcıı cııı lccıı...đ"

"ı...ı, ııı" fə ef ııəııı ıııııııı cıı eucıııııı dcıııııı, ləı"

"hıı, lcıı fııı ıf vcc e nılef ʋəııııđ"

"fəe", ıııcl ııııı vclcn ılcj olcn cıj nıı. "dcıı ıf fca ııəəf e accııı ııııı"

"ı ıı... ləı nəel denı lcıı cıj ılcj, vcl lcıı fəıııf ucl ləı ləıııf ıfə co əcj"

fıı je cıjııııı cıjı lcjcl cııf əııfcl, ləol dcıııel ı jıclen.

"ılcj, fə ef lcıı fııııəıı le əelce ıııııf e.

ʋəıı jep ııııel lcıııı, ılcj.

co fə jəubel, əelce lıııııı ıelı jıı fəə nııııııı accııı cl ııəəıııı le jczef ıııııđ

lee, ılcj. ıı ocı dcoen, ʋəıı ıı ıı dcıııđ ıı oel jıııı, ʋəıı lıııı jıel ı accıııđ"

参考文献・推薦図書

- Arika Okrent(2010) "In the Land of Invented Languages: Esperanto Rock Stars, Klingon Poets, Loglan Lovers, and the Mad Dreamers Who Tried to Build A Perfect Language" Spiegel & Grau
- Langacker, R. W.(1985) "Observations and Speculations on Subjectivity" Haiman (ed) "Iconicity in Syntax" John Benjamins Publishing Company
- (2008) "The relevance of Cognitive Grammar for language pedagogy" Sabine De Knop (ed) "Cognitive Approaches to Pedagogical Grammar: A Volume in Honour of Rene Dirven (Applications of Cognitive Linguistics)" Mouton De Gruyter
- Mark Rosenfelder(2010) "The Language Construction Kit" Yonagu Books
- (2010b) "The Planet Construction Kit" Yonagu Books
- Benjamin Lee Whorf(1964) "Language, Thought, and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf" John B. Carroll (ed) The MIT Press
- アンナ ヴィエルジュビツカ(2009)『キーワードによる異文化理解』而立書房
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門—ことばのしくみを考える』スリーエーネットワーク
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- (2004)「言語における〈主観性〉と〈客観性〉の言語的指標 (1)」『認知言語学論考』No.3 ひつじ書房
- (2005)「言語における〈主観性〉と〈客観性〉の言語的指標 (2)」『認知言語学論考』No.4 ひつじ書房
- (2006)「日本語は〈悪魔の言語〉か?—個別言語の類型論の可能性」
- (2007)『日本語と日本語論』筑摩書房
- ウンベルト＝エーコ(1995)『完全言語の探求』平凡社
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- (2007)『役割語研究の地平』くろしお出版
- 亀井孝 et al.(1995)『言語学大辞典〈第6巻〉術語編』三省堂
- 河原清志(2009)「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論—」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会(編)『翻訳研究への招待』第3号

- 金田一春彦(1988)『日本語〈下〉』岩波新書
- 金両基(1984)『ハングルの世界』中公新書
- 國廣哲彌(1982)『日英語比較講座第4巻』大修館書店
- 近藤健二(2006)『言語類型の起源と系譜』松柏社
- 中村芳久(2004)「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」 中村芳久（編）『認知文法論Ⅱ』大修館書店
- ジェイムズ＝ノウルソン(1993)『英仏普遍言語計画』工作舎
- スティープン ピンカー(1995)『言語を生みだす本能〈上〉』日本放送出版協会
- 松瀬育子(2007)「ネワール語における WAYE（くる）のスキーマと意味拡張」神戸言語学論叢 Kobe papers in linguistics, 5
- 松本克己(2006)『世界言語への視座』三省堂
- (2007)『世界言語のなかの日本語』三省堂
- (2010)『世界言語の人称代名詞とその系譜』三省堂
- 水野義明(1997)『国際共通語の思想』新泉社
- 森山新(2007)「認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究—連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に—」日本学報 72
- (2009)「日本語の言語類型論的特徴がモダリティに及ぼす影響：グローバル時代に求められる総合的日本語教育のために」比較日本学教育研究センター研究年報, 5
- マリナ＝ヤグェーロ(1990)『言語の夢想者』工作舎